

柏原市

大県郡条里遺跡 11・山ノ井遺跡 5

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024年9月

公益財団法人 大阪府文化財センター

柏原市

大県郡条里遺跡 11・山ノ井遺跡 5

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1.1区6号墓検出状況（南から）



1.2区7号墓検出状況（南から）

序 文

今回の発掘調査は寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴うものです。公益財団法人大阪府文化財センターでは平成 23 年度から 13 年に渡って、発掘調査を実施してきました。

調査範囲は大県郡条里遺跡と山ノ井遺跡に跨っており、発掘調査では縄文時代晩期から室町時代にかけての遺構・遺物が確認されるとともに、大量の土器が出土しました。中でも、弥生時代中期後葉から後期初頭の方形周溝墓の発見は、当地における弥生時代の墓制の変遷を考える上で重要な調査成果です。

また、今回の発掘調査では縄文時代晩期末の土偶の頭部が出土しました。この土偶頭部は過去の発掘調査で出土した土偶の胴部と接合することが確認できました。土偶の頭部と胴部は 80 m 以上離れた地点から出土しており、当時の生活や祭祀を考える上で貴重な事例と言えます。これらの新たに得られた知見が今後、柏原市の歴史を繙く一助となれば幸いです。

最後になりましたが、大阪府都市整備部八尾土木事務所をはじめ、御指導と御協力を賜った大阪府教育庁、柏原市教育委員会、並びに地元関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターの事業につきまして、より一層の御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和 6 年 9 月 30 日

公益財団法人 大阪府文化財センター
理 事 長 坂 井 秀 弥

例 言

1. 本書は、柏原市法善寺4丁目地内に所在する大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡の発掘調査報告書である。公益財団法人大阪府文化財センターの調査名は、「大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡 22-2」である。
2. 発掘調査は、大阪府都市整備部八尾土木事務所の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。遺物整理及び本書の編集は公益財団法人大阪府文化財センターが行い、令和6年9月30日をもって一連の事業を完了した。

【発掘調査】

受託契約名： 寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水池）に伴う大県郡条里遺跡（その11）発掘調査

受託契約期間： 令和5年1月4日～令和6年1月31日

調査体制： 事務局次長 市本芳三（1～3月）、事務局次長 亀井 聡（4月～）、
総務企画課長 亀井 聡（1～3月）、総務企画課長 島谷美穂（4月～）、
調査課長 佐伯博光、調査課長補佐 後藤信義、副主査 奥村茂輝、
副主査 後川恵太郎

【遺物整理】

受託契約名： 寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水池）に伴う大県郡条里遺跡（その11）遺物整理

受託契約期間： 令和6年1月4日～令和6年9月30日

整理体制： 事務局次長 亀井 聡、総務企画課長 島谷美穂（1～6月）、
総務企画課長 永野 仁（7～9月）、総務企画課長補佐 新田康博（7～9月）
調査課長 佐伯博光、調査課長補佐 後藤信義、副主査 奥村茂輝（1～3月）、
副主査 後川恵太郎（4～9月）

3. 本書に掲載した写真は、遺構を調査担当者が、遺物を当センター写真室が撮影した。
4. 遺物整理では、委託分析として以下の自然科学分析を実施した。
令和6年度大県郡条里遺跡11遺物整理に伴う大型植物遺体同定分析業務委託
一般社団法人文化財科学研究センター
5. 本書の執筆・編集は後川が行った。
6. 現地調査・遺物整理に際し、個人より御指導、御教示をいただいた（五十音順、敬称略）。
浅野裕実、池田保信、大庭重信、大野薫、河原秋桜、桑原久男、小谷利明、岡田清一、國下多美樹、
澤藤りかい、高瀬裕太、田邊佳紀、永山愛、長友朋子、初宿成彦、濱田延充、樋口薫、樋口めぐみ、
本間寛史、松井菜穂子、三好玄、三好孝一、森岡秀人、米田敏幸、渡邊正巳

凡 例

1. 基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用する。単位はm（メートル）で表記する。図中の標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値で、T.P. +は省略する。
2. 平面図の使用測地系は、世界測地系（測地成果 2011）に準拠する平面直角座標系第VI系を使用する。単位はm（メートル）で、図中の表記は省略する。
3. 遺構図の方位は、平面直角座標系に基づく座標北とする。
4. 発掘調査及び整理作業は、財団法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して実施した。
5. 土色表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に基づく。
6. 遺構名は、通し番号を付け、遺構の種類を加えた（例：1 畦畔）。複数の遺構の集合である畠は、遺構番号とは別に検出順に番号を付けた（例：畠 1）。周溝墓の遺構番号は、大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡の既往調査で確認されたものが5基あり、今回の調査では1区の方形周溝墓を6号墓、2区の方形周溝墓を7号墓とした。
7. 遺構図縮尺は、40分の1を基本とし、内容に合わせて適宜変更した。
8. 遺構図における断面図の位置は、平面図上に「┌─┐」で示した。
9. 遺物図面の縮尺は4分の1を基本とする。遺物図面の断面は須恵器・陶磁器を黒塗りした。生駒西麓産の胎土の土器は遺物番号の横に「生」を表記した。弥生土器で底面にヘラミガキ調整するものは模式的に底面を図示した。
10. 本書を作成するに当たって使用した土器編年は、以下の文献を引用及び参照した。
 - 大川清・鈴木公雄・工楽善通編 1996『日本土器事典』
 - 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさしー陶邑の須恵器ー』
 - 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
 - 小森俊寛・上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号
 - 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究』
 - 財団法人大阪市文化財協会 1982『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』
 - 田辺昭三 1981『須恵器大成』
 - 中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』
 - 寺沢薫・森井貞雄 1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅰ』
 - 日本中世土器研究会編 2022『新設概説中世の土器・陶磁器』
 - 森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅱ』
 - 橋本久和 2018『概論瓦器椀と中世社会』
 - 平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号
 - 平安学園考古学クラブ 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』

目次

巻頭図版

序文、例言、凡例

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 現地調査の経過	2
第2章 遺跡周辺環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 既往の調査成果	6
第3章 調査・整理の方法	7
第4章 調査成果	9
第1節 基本層序	9
第2節 遺構・遺物	11
第5章 自然科学分析	91
第1節 分析の概要と目的	91
第2節 大型植物遺体同定	91
第6章 総括	93
第1節 出土遺物	93
第2節 遺構の変遷	96

遺物観察表

原色図版、図版

報告書抄録、奥付

挿 図 目 次

図 1	調査地位置	1	図 41	202・203 埋葬施設平・断面	57
図 2	調査区位置	2	図 42	204・205 埋葬施設平・断面	58
図 3	遺跡の立地	3	図 43	206・207 埋葬施設平・断面	59
図 4	遺跡分布	5	図 44	211・213 埋葬施設平・断面	60
図 5	地区割	8	図 45	6号墓平面(4)	61
図 6	5トレンチ断面	10	図 46	6号墓出土遺物(1)	62
図 7	1・2区平面(1)	13・14	図 47	6号墓出土遺物(2)	63
図 8	6・9トレンチ断面	15	図 48	6号墓出土遺物(3)	64
図 9	20トレンチ断面	16	図 49	6号墓出土遺物(4)	65
図 10	22トレンチ断面	16	図 50	6号墓出土遺物(5)	66
図 11	1・2区平面(2)	17・18	図 51	6号墓出土遺物(6)	67
図 12	21土坑他断面	20	図 52	6号墓出土遺物(7)	68
図 13	1・2区平面(3)	21・22	図 53	6号墓出土遺物(8)	69
図 14	16井戸他出土遺物	24	図 54	6号墓出土遺物(9)	70
図 15	1・2区平面(4)	25・26	図 55	6号墓出土遺物(10)	71
図 16	第11 a層出土遺物	28	図 56	1区出土石器	72
図 17	1・2区平面(5)	29・30	図 57	1区出土石製品	73
図 18	畠1・2・4・5断面	32	図 58	6号墓平面(4)	74
図 19	349土坑他平・断面	33	図 59	7号墓平面	76
図 20	第12 a層他出土遺物	34	図 60	7号墓東西(27・28トレンチ)断面	77
図 21	1・2区平面(6)	35・36	図 61	7号墓遺物出土状況平面	78
図 22	第13-2 a面調査区西側平面	38	図 62	7号墓出土遺物接合関係	79
図 23	13トレンチ断面	39	図 63	7号墓出土遺物(1)	80
図 24	第13-2 a面調査区東側平面	40	図 64	7号墓出土遺物(2)	81
図 25	384溝他断面	41	図 65	7号墓出土遺物(3)	82
図 26	421土坑他断面	42	図 66	335溝断面	83
図 27	98溝他出土遺物	43	図 67	97土坑他平・断面、出土遺物	84
図 28	407落ち込み他出土遺物	44	図 68	222土坑他平・断面、出土遺物	85
図 29	2号墓平・断面、出土遺物	46	図 69	1・2区弥生時代前期出土遺物	86
図 30	10-1号墓平・断面、出土遺物	47	図 70	1・2区縄文時代出土遺物	87
図 31	6号墓平面(1)	48	図 71	土偶出土地点	89
図 32	6号墓平面(2)	49	図 72	同定資料採集位置	91
図 33	6号墓東西(11トレンチ)断面	50	図 73	6・7号墓出土遺物集計	94
図 34	6号墓南北(12トレンチ)断面	51	図 74	弥生時代前期から縄文時代晩期の出土遺物集計	95
図 35	14・15トレンチ断面	52	図 75	1・2区石器集計	96
図 36	6号墓遺物出土状況平面(1)	53	図 76	大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡 既往調査区平面	97
図 37	6号墓遺物出土状況平面(2)	54			
図 38	6号墓遺物出土状況平面(3)	54			
図 39	6号墓出土遺物接合関係	55			
図 40	6号墓平面(3)	56			

目 次

表1 現地調査期間・大阪府教育庁最終立会 …… 2	表3 大県郡条里遺跡出土木材 …… 92
表2 大県郡条里遺跡出土種実 …… 92	表4 大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡墳墓一覧 …… 98

巻頭図版目次

巻頭図版1

1.1区6号墓検出状況（南から）

巻頭図版2

1.2区7号墓検出状況（南から）

原色図版目次

扉 2区調査地遠景（西から）

原色図版1 遺構

1.1区6号墓遺物出土状況1（南東から）

2.1区6号墓遺物出土状況2（北西から）

原色図版2 遺構

1.1区6号墓遺物出土状況3（西から）

2.1区6号墓遺物出土状況4（南から）

3.1区6号墓遺物出土状況5（南から）

4.1区6号墓周溝断面（南西から）

5.1区6号墓周溝断面（南東から）

原色図版3 遺構

1.2区7号墓検出状況（東から）

2.2区7号墓土器出土状況1（南から）

原色図版4 遺構

1.2区7号墓土器出土状況2（南から）

2.2区7号墓土器出土状況3（東から）

3.2区7号墓土器出土状況4（南東から）

4.2区7号墓344周溝断面（東から）

5.2区7号墓墳丘直下基盤層断面（南西から）

図 版 目 次

図版1 遺構

1.1区第4a面全景（東から）

2.1区第5a面全景（東から）

3.1区第6a面坪境周辺（北西から）

4.1区第7a面坪境周辺（南から）

5.1区40土坑（東から）

6.1区40土坑断面（南東から）

7.1区第8a面46畦畔検出状況（北から）

8.1区第9a面坪境周辺（南から）

図版2 遺構

1.1区第10a面坪境周辺（南から）

2.1区第11a面検出状況（北西から）

3.2区第12a面全景（東から）

4.2区畠4検出状況（南から）

5.2区359耕作痕完掘状況（北東から）

6.1区畠1・2検出状況（北から）

7.2区第13-2a面検出状況（東から）

8.2区425～429溝検出状況（南から）

図版3 遺構

1.2区448土坑断面（北から）

2.2区437土坑断面（南から）

3.2区421土坑断面（南から）

4.2区404溝遺物出土状況（南東から）

5.2区425溝他検出状況（南西から）

図版4 遺構

1.1区6号墓検出状況（北東から）

2.1区6号墓周溝断面（南東から）

図版5 遺構

1.1区6号墓135溝完掘状況（南から）

2.1区6号墓埋葬施設検出状況（南西から）

図版6 遺構

1.1区202埋葬施設断面（南東から）

2.1区203埋葬施設断面（南東から）

3.1区203埋葬施設断面（南から）

4.1区204埋葬施設断面（南東から）

5.1区204埋葬施設断面（南から）

6.1区205埋葬施設断面（北西から）

7.1区206埋葬施設断面（南東から）

8.1区207埋葬施設断面（南東から）

図版7 遺構

1. 1区 211 埋葬施設断面（北西から）
2. 1区 213 埋葬施設断面（北西から）
3. 1区 6号墓土手状盛土検出状況（南東から）
4. 1区 6号墓土手状盛土断面（南から）
5. 1区 6号墓墳丘直下基盤層断面（南西から）
6. 162 溝断面（南西から）
7. 1区 162 溝遺物出土状況（南東から）
8. 1区 162 溝完掘状況（南東から）

図版8 遺構

1. 1区 170 谷地形検出状況（北から）
2. 1区 97 土坑遺物出土状況（東から）
3. 1区 164 土坑遺物出土状況（南から）
4. 1区 222 土坑遺物出土状況（東から）
5. 1区 171 土坑遺物出土状況（南から）

図版9 遺物

- 図版10 遺物
- 図版11 遺物
- 図版12 遺物
- 図版13 遺物
- 図版14 遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯 (図1・2)

大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡における今回の発掘調査は、大阪府都市整備部が実施している寝屋川水系改良事業（一般河川恩智川法善寺多目的遊水地）に先立つものである。法善寺多目的遊水地は柏原市法善寺4丁目地内に計画されたもので、遺跡の西側を北流する恩智川増水時に河川水を一時的に貯めるとともに、平時には緑地公園として活用することを目的としたものである。

平成14・15年度、法善寺多目的遊水地事業に先立ち、大阪府教育委員会（現大阪府教育庁）文化財保護課は予定地東部を中心とした確認調査を行った。確認調査では弥生時代から中世に至る遺物が出土し、事業予定地全域に遺跡が広がっていることが確かめられた。この結果を受けて、大阪府都市整備部、大阪府教育委員会文化財保護課と公益財団法人大阪府文化財センター（以下、センター）の3者は、寝屋川水系改良事業（一般河川恩智川法善寺多目的遊水地）予定地内の発掘調査の覚書を結んだ。これに基づいて、センターでは、平成23（2011）年から大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡の発掘調査を行った。今回の調査では令和5（2023）年1月4日付で、「寝屋川水系改良事業（一般河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡（その11）発掘調査」として、大阪府都市整備部八尾土木事務所とセン

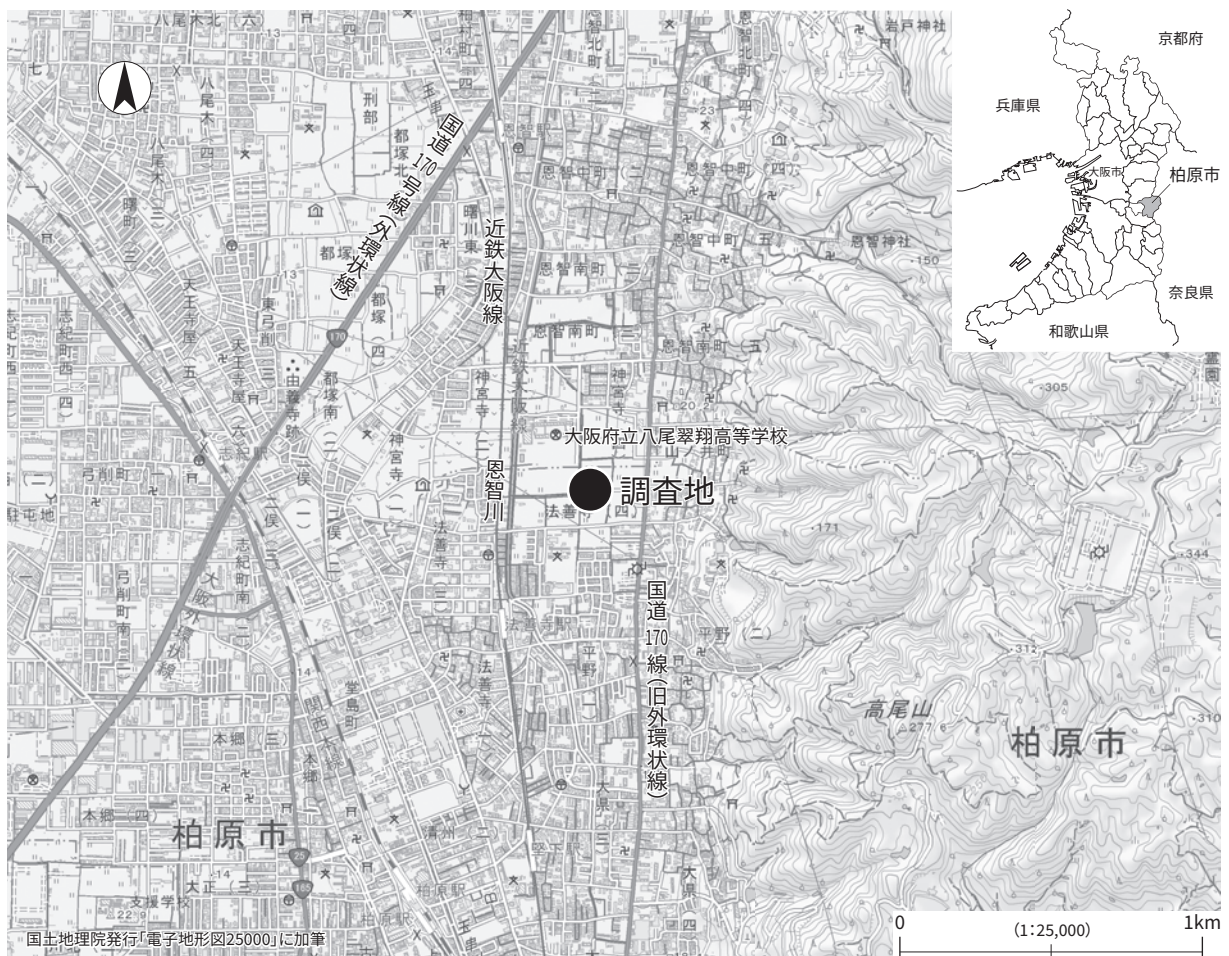
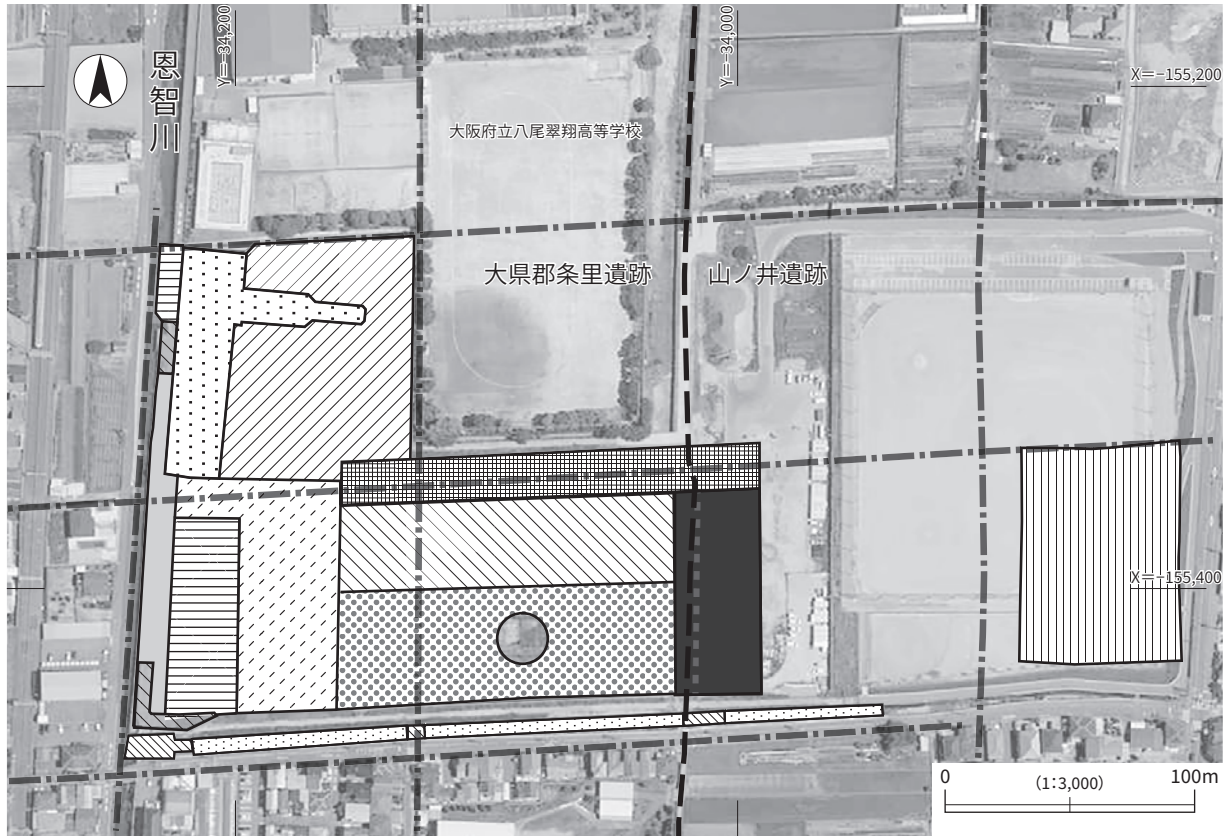


図1 調査地位置

ターで発掘調査の委託契約を締結し、センターは大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと今回の発掘調査を実施した。遺物整理は、令和6（2024）年1月4日～6月30日まで実施した。遺物整理を進めていく中で、大型植物遺体（種実）は一般社団法人文化財科学研究センターに同定を委託している。令和6（2024）年9月30日、本書の刊行をもって整理作業を終了した。



- | | | | |
|-------------------------------------|------------------|--------------------------------------|--------------|
| 大県郡条里 11-1 (その1) | 大県郡条里 18-1 (その5) | 大県郡条里 21-1 (その9) | 坪境ライン (遺跡境界) |
| 大県郡条里 12-1 (その2) | 大県郡条里 19-1 (その6) | 山ノ井 17-1 (その3) | 坪境ライン |
| 大県郡条里 15-1 (その3)・
山ノ井 15-1 (その1) | 大県郡条里 20-1 (その7) | 大県郡条里 22-1 (その10)・
山ノ井 22-1 (その4) | |
| 大県郡条里 16-1 (その4)・
山ノ井 16-1 (その2) | 大県郡条里 20-2 (その8) | 大県郡条里 22-2 (その11)・
山ノ井 22-2 (その5) | |

図2 調査区位置

第2節 現地調査の経過（表1）

1・2区の現地調査期間、大阪府教育庁文化財保護課の最終立会日は、表1に示した。調査期間中に現地公開を2回行い、1回目の現地公開は弥生時代中期後葉の6号墓を対象として、令和5年（2023）7月15日に実施した。参加人数は126名である。2回目の現地公開は弥生時代中期末から後期初頭の7号墓を対象として、令和5（2023）年12月9日に実施した。参加人数は74名である。

表1 現地調査期間・大阪府教育庁最終立会

	現地調査期間	大阪府教育庁立会
1区	令和5年1月4日～令和5年8月30日	令和5年8月28日
2区	令和5年6月20日～令和5年12月22日	令和5年12月15日

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境 (図3)

大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡は河内平野の南東部の平野部に位置する。宝永元（1704）年の大和川付け替え前、旧大和川は船橋遺跡等が所在する柏原市南部で石川と合流した後、河内平野で分岐し、旧大和川水系の河川（玉櫛川、楠根川、長瀬川等）として平野部を北方向ないし北西方向に流れた。これらの河川は洪水と氾濫を繰り返して周辺に土砂を供給し、河内地域の平野部の形成に密接に関わってきた。今回の調査区はその河川の一つである玉櫛川が形成した自然堤防と生駒山地の間に広がる後背湿地に位置する。このような立地にあるため、現地調査では縄文時代晩期から近世まで主として泥層が重層的に堆積している状況が確認された。生駒山地西麓に近い平野部に今回の調査区は位置するが、今回の調査区では生駒山地が供給源の可能性がある砂礫は一部の遺構面に認められたが、その影響は限定的である。



図3 遺跡の立地

第2節 歴史的環境 (図4)

大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡周辺の縄文時代から中世の遺跡について以下で概観する。

縄文時代

当地における人々の活動が活発になるのは縄文時代に入ってからである。大県遺跡では早期の押型文土器、後期から晩期の土器が出土しており、後期には炉跡になる可能性がある集石遺構が検出されている。恩智遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構・遺物が確認されている。

弥生時代

大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡に近接する弥生時代の代表的な遺跡としては、恩智遺跡が北側約400～500mに立地する。恩智遺跡では中期前葉から遺構が増加し、遺物量は後期に至るまで周辺の諸遺跡に卓越し、拠点的な集落であったと考えられている。また、恩智遺跡では、溝に挟まれるような状態で木棺墓が確認されている。埋葬施設内から完形品の壺類が多数出土しており、河内地域の木棺墓としては稀有な事例が確認されている。弥生時代中期から後期の集落としては、大県遺跡で竪穴建物、サヌカイトの原石や剥片が出土した土坑等が検出されている。弥生時代中期から後期の集落・墓域としては、郡川遺跡で弥生時代後期の方形周溝墓が複数確認されており、大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡の墳墓群と同じ時期に形成された墓域として注目される。弥生時代後期の集落には、生駒山地に位置する高尾山山頂遺跡がある。高尾山山頂遺跡は高地性集落と考えられており、遺跡の範囲内で多紐細文鏡が出土している。

古墳時代

古墳時代後期には大県遺跡・大県南遺跡・太平寺遺跡で鍛冶関連遺構・遺物が多数確認されている。河内地域の鍛冶関連遺跡では質量ともに突出しており、中核的な鍛冶工房が展開していたと考えられる。古墳時代後期以降、生駒山地南部の山麓には高安古墳群、平尾山古墳群等、合わせて1400基以上の群集墳が築造される。平尾山古墳群大県支群では渡来人と関わりのある釵子やミニチュア炊飯具が出土した他、鉾澤が出土している。大県遺跡・大県南遺跡・太平寺遺跡では韓式系土器が出土しており、生駒山地の山麓に築造された古墳群の被葬者と大県遺跡・大県南遺跡・太平寺遺跡で鍛冶を生業としていた人々との関係が注目される。

古代

飛鳥時代後半、当地域には三宅寺跡(平野廃寺)、大里寺跡(大県廃寺)、山下寺跡(大県南廃寺)、智識寺跡(太平寺廃寺)、家原寺跡(安堂廃寺)、鳥坂寺跡(高井田廃寺)が建立される。河内六寺と呼ばれ、智識寺跡は東塔基壇、鳥坂寺跡では塔心礎や金堂基壇が発掘調査されている。生駒山麓に南北に並ぶように建立されており、河内六寺の西側には京都と高野山を結ぶ東高野街道が南北に走る。東高野街道は現在も生活用道路として使用されており、これまで工事立会等による部分的な確認・発掘調査に留まっている。今回の調査地周辺における東高野街道の実態は不明な点が残されているが、河内六寺が建立された頃には東高野街道の起源となるような南北道が整備されていた可能性が高い。

中世

平安時代中期から中世以降、今回の調査区周辺は条里型地割の耕作地として土地利用されていたことが大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡の既往調査で明らかになっている。法善寺の名前の由来になった法禅寺は、建立が平安時代に遡ると伝承されているが、その実態は今までのところ明らかになっていない。

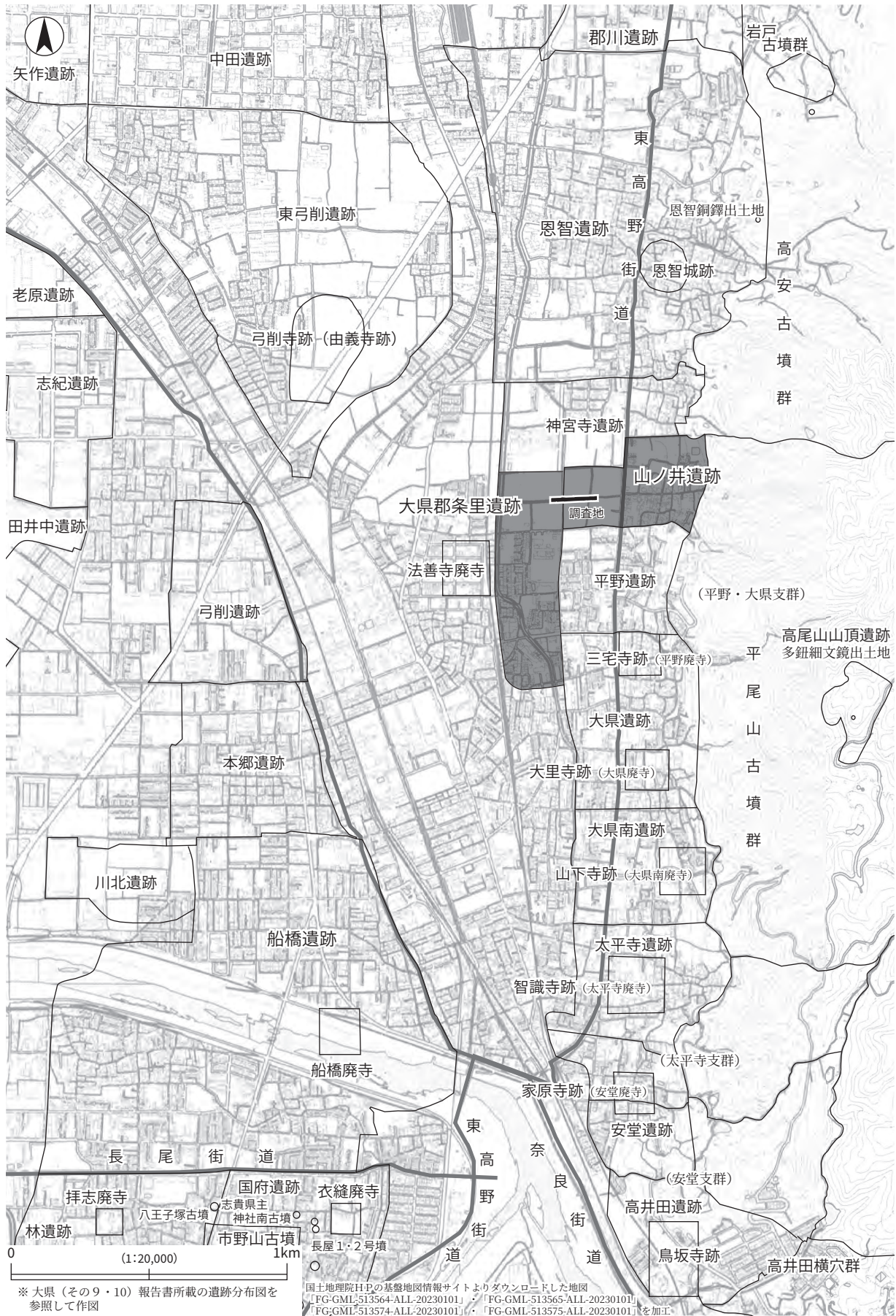


図4 遺跡分布

第3節 既往の調査成果

大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡では法善寺多目的遊水地事業に先立ち、平成23(2011)年から発掘調査を実施した。調査面積は約4万㎡に及ぶ。これまでの発掘調査では、縄文時代から中世に至る、多種多様な遺構・遺物が確認されている。大県郡条里遺跡と山ノ井遺跡で行われたそれぞれの調査では調査の順番に通し番号〔例：大県郡条里遺跡22-2の場合、大県(その11)〕が付いており、以下で各調査成果を引用する場合、図2に対応関係を示した各調査の略称を用いる。

近年の発掘調査では、弥生時代中期から後期の方形周溝墓を検出しており、墓域が東西の2単位に分かれることが明らかになってきた。西側の墓域では大県(その8・9)の調査で弥生時代中期後葉の方形周溝墓(2号墓)を検出した。2号墓は墳丘の再構築が行われており、古段階の墳丘規模は長軸22.4m×短軸14.8mを測り、河内地域では大形に分類される方形周溝墓である。2号墓は後世の攪乱により墳丘内の埋葬施設を確認できなかったが、南側の周溝で木棺底板が残存する周溝内埋葬を確認した。

一方、東側の墓域では大県(その8)の調査で方形周溝墓(1号墓)、大県(その9)の調査で方形周溝墓(3・4号墓)、大県(その10)の調査で円形周溝墓(10-1号墓)を検出した。時期は弥生時代後期を中心とする。東側の墓域の墳墓は後世の削平が顕著で、埋葬施設は確認されていない。

大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡参考文献

- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2013 『大県郡条里遺跡』第241集
- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2015 『大県郡条里遺跡2』第258集
- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2016 『大県郡条里遺跡3・山ノ井遺跡』第268集
- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2017 『大県郡条里遺跡4・山ノ井遺跡2』第283集
- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2017 『山ノ井遺跡3』第289集
- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2020 『大県郡条里遺跡5』第299集
- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2021 『大県郡条里遺跡6』第314集
- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2021 『大県郡条里遺跡7』第311集
- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2022 『大県郡条里遺跡8』第322集
- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2023 『大県郡条里遺跡9』第325集
- 公益財団法人 大阪府文化財センター 2023 『大県郡条里遺跡10・山ノ井遺跡4』第327集

第3章 調査・整理の方法

発掘調査及び遺物整理は、財団法人大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠した。

1. 発掘調査

調査名・調査区名・地区割（図5）

調査名は「大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡 22－2」である。発掘調査は調査区を2分割し、西側を1区、東側を2区とした。

地区割は世界測地系（測地成果 2011）の平面直角座標系第VI系を、第I～IV区画に区画した。第I区画は「G6」、第II区画は「3・4」、第III区画は100 m、第IV区画は第III区画を10 m単位に区画した。遺物は、第IV区画を基準として取り上げた。

遺構名

遺構名は、通し番号を付け、遺構の種類を加えた（例：1畦畔）。畝と畝間溝の集合である畠は、遺構番号とは別に検出順に番号を付けた（例：畠1）。周溝墓の墳墓名は、大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡の既往調査で確認されたものが5基あるため、1区の方形周溝墓を6号墓、2区の方形周溝墓を7号墓とした。6・7号墓から出土した遺物は、遺構番号の連番で回収しており、現場では遺構番号と「土器」（例：115土器）として取り上げたが、本報告では遺物番号と混同しないよう、「取上」（例：115取上）と表記した。

掘削方法

現代の造成土と近・現代の作土（第1層から第3層）を機械掘削によって除去した後、人力によって地層の掘削作業及び遺構・遺物の検出作業を行った。

遺構図

現地での平面図と断面図の作成は、縮尺10分の1、20分の1を基準に作成した。全体図は空中写真測量を実施して作成した。調査区の壁断面は、断面図を縮尺20分の1で作成した。

現場の写真撮影は、6×7フィルムカメラ（白黒・カラーリバーサル）、デジタル一眼レフカメラ（APS-C）を用いた。デジタル一眼レフカメラの画像データは、JPEGとRAWの2種類を作成した。写真のフィルム及びデータは、現場作業と併行して、収納・台帳の作成を行った。

2. 整理作業

注記、洗浄

出土遺物は、遺物登録を行って台帳を作成し、洗浄・注記の基礎整理を行った。注記の記載内容は「オオガタグンジョ 22－2－登録番号」である。

遺物整理と発掘調査報告書の作成

遺物整理では、出土遺物の抽出・接合作業を行った後、実測・拓本作業等を実施した。報告書の挿図は、Adobe社製Illustratorを用いてデジタルトレースを行って作成した。発掘調査報告書はAdobe社製InDesignを用いて本文と挿図を編集し完成させた。

遺物整理を終了した後、出土遺物は掲載遺物と未掲載の遺物に分けて収納を行い、それぞれの収納台帳を作成した。

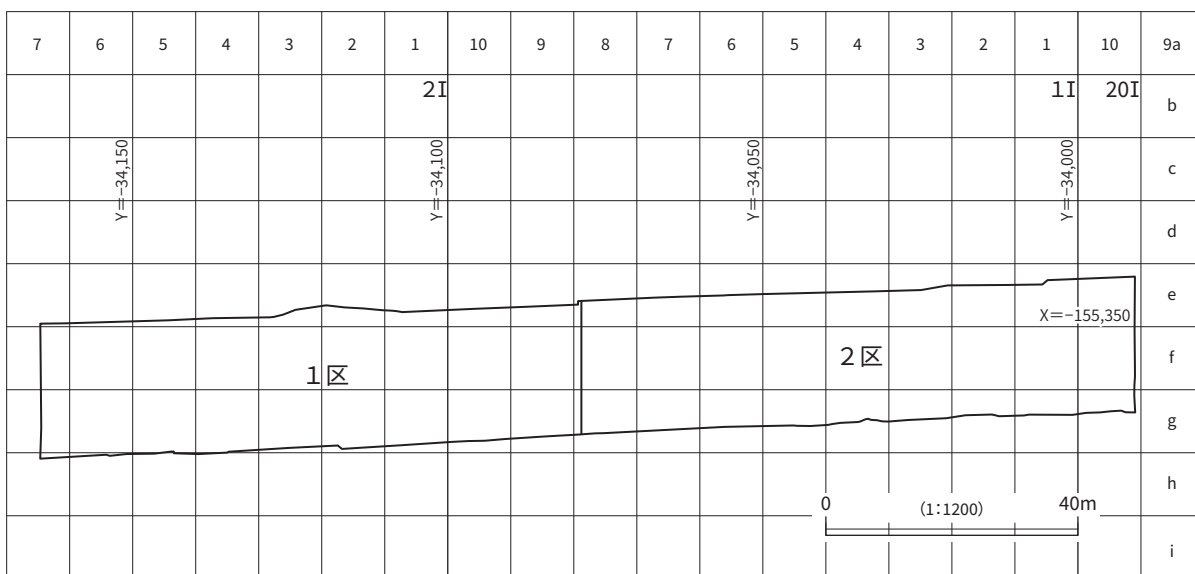
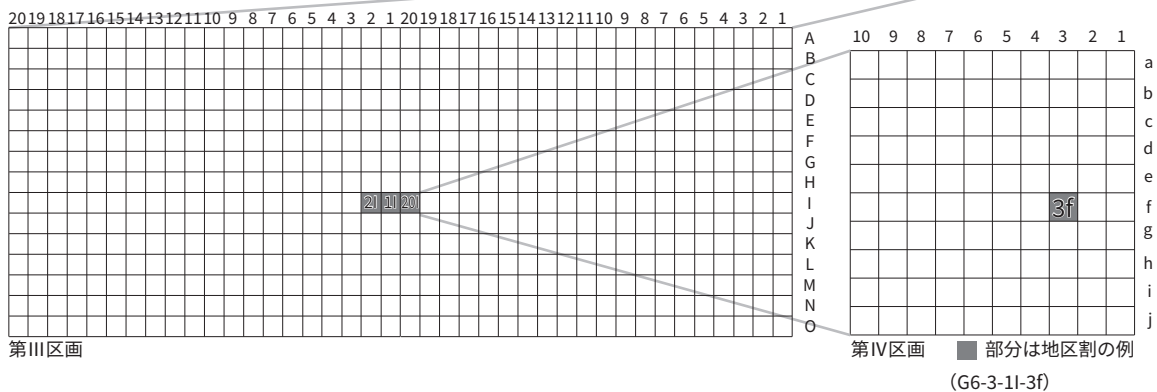
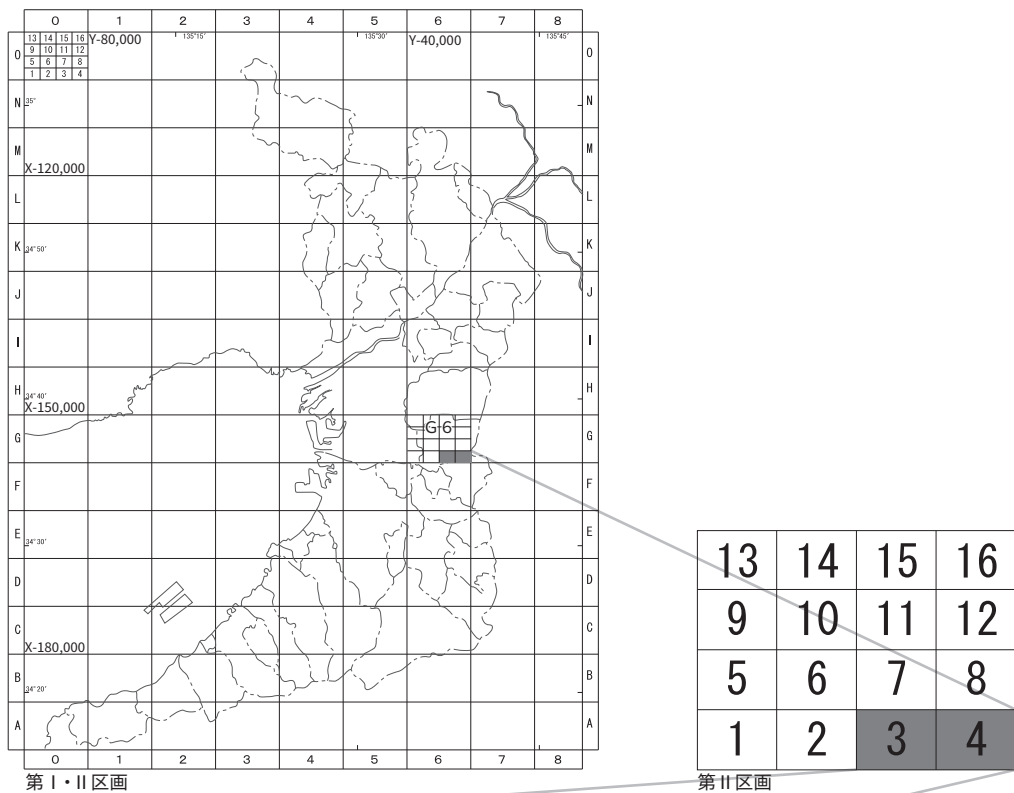


図5 地区割

第4章 調査成果

第1節 基本層序 (図6)

地層は14層に大別した。隣接する調査区の大泉（その8・10）の調査成果と対比させて調査を行った。土壌層は「a層」、土壌層の母材となる自然堆積層は「b層」として区別した。各遺構面の名称は第4a層上面を第4a面などと呼称し、地層名と遺構面を対応させて調査した。第5a層から第12a層は地震による変形が顕著であったことや、後背湿地の環境下で層相が類似した泥層が重層的に堆積していたことで、各地層の層境が不明瞭な場合が多く、本書に掲載した断面図では地層の境界が不明瞭な部分は分層線を連続させていない。

第1層 第1a層はにぶい黄橙色粗砂質シルトで、現代作土である。1区の南北方向の坪境周辺と2区北東側に部分的に残存する。直上は現代に造成され、層厚0.5～1.0m以上の盛土が行われている。

第2層 第2層は1区の南北方向の坪境周辺と2区東側に残存する。第2a層は灰白色極細砂質シルトで、近世から近代の作土である。第2b層は灰黄色極細砂から細砂で、水成層である。2区東部に残存する。層厚0.05～0.1mで、第2b層の上面から災害復旧土坑と考えられる平面長方形の土坑（以下、2b土坑）を確認した。

第3層 第3a層は灰色粗砂質シルトで、近世の作土である。部分的に3層から4層に細分が可能である。調査区全体に堆積する。第3b層は灰黄色細砂から中砂で、1区の東西方向の坪境周辺に部分的に残存した。

第4層 第4a層は灰黄褐色細砂質シルトで、中世末から近世初頭の作土である。部分的に3層に細分が可能である。2区東側は2b土坑によって攪乱を受けるが、調査区全域に堆積する。第4b層は灰白色粗砂から極粗砂である。2区西側から以西で堆積する。

第5層 第5a層は黄灰色粘土質シルトで、中世後半の作土である。部分的に2層以上に細分が可能である。調査区全域に堆積する。第5b層は灰色粘土質シルトで、極細砂をラミナ状に含む。主として1区で堆積が認められた。

第6層 第6a層は灰色粘土質シルトで、14世紀後半から15世紀の作土である。調査区全体に堆積する。第6層は第7層との層境に自然堆積層を挟在しない。

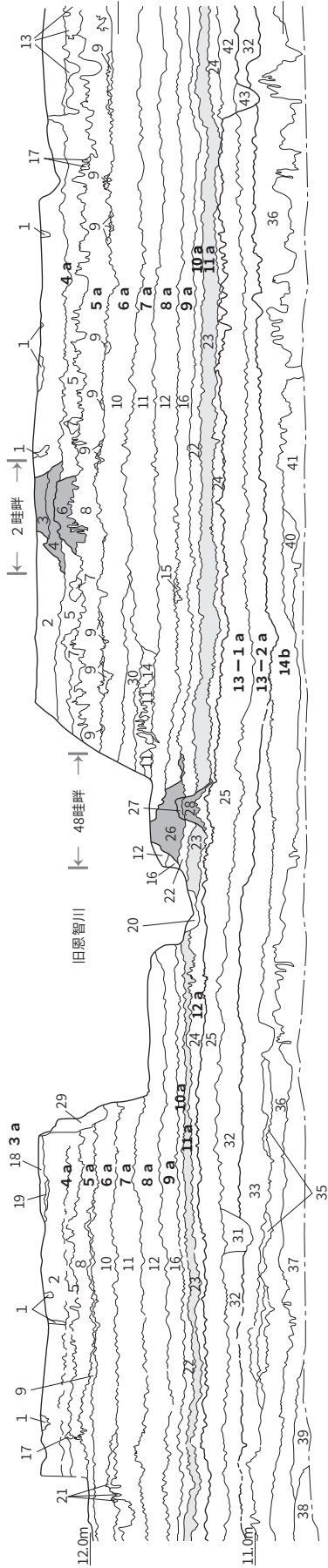
第7層 第7a層は青灰色粘土質シルトで、14世紀前葉から中葉頃の作土である。調査区全体に堆積する。第7層は第8層との層境に自然堆積層を挟在しない。

第8層 第8a層は暗青灰色シルトで、13世紀後葉から14世紀前葉の作土である。調査区全体に堆積する。第8b層は灰白色極細砂から細砂で、第9面の人と偶蹄類の足跡集中部周辺に堆積する。

第9層 第9a層は黄灰粘土質シルトで、12世紀後葉から13世紀中葉の作土である。調査区全体に堆積する。第9b層は灰白色極細砂から細砂で、水成層である。1区東側から2区西側、東西方向の坪境の北側に堆積する。

第10層 第10a層は緑灰色粘土質シルトで、12世紀代の作土である。2区中央部から東側では第9a層の区別が困難になる。第10層は第11層との層境に自然堆積層を挟在しない。

第11層 第11a層は緑灰色粘土質シルトで、10世紀から11世紀の作土である。2区中央から以東は



- 1. 2.5Y6/2 灰黄 細砂～中砂 第3 b層
- 2. 10YR6/2 灰黄褐 細砂質シルト 粗砂～極粗砂を多量含む 第4 a層
- 3. 10YR6/2 灰黄褐 細砂質シルト 畦畔の芯
- 4. 2.5Y6/1 黄灰 細砂質シルト 細砂～中砂をブロック状に少量含む部分あり 第4 a層の細分
- 5. 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂質シルト 細砂を少量含む 第4 a層の細分
- 6. 2.5Y8/1 灰白 粗砂～極粗砂 シルトを少量含む 第5 a層
- 7. 2.5Y8/1 灰白 粗砂～極粗砂 シルトを少量含む 第5 b層
- 8. 2.5Y5/1 黄灰 粘土質シルト 極細砂を少量含む 第6 a層
- 9. 5Y6/1 灰 粘土質シルト 極細砂を少量含む 第6 a層
- 10. N6/ 灰 粘土質シルト 極細砂を少量含む 第6 a層
- 11. 5R5/1 青灰 粘土質シルト 粘土質シルトブロック (第8 a層由来) を少量含む 第7 a層
- 12. 10B6/1 暗青灰 粘土質シルト 暗色を帯びる 第8 a層
- 13. 10Y8/1 灰白 粗砂～極粗砂 第4 b層
- 14. 10YR6/1 褐灰 極細砂質シルト 極細砂～細砂をブロック状に少量含む 遺構埋土か
- 15. 10YR5/1 褐灰 粘土質シルト 炭化物を微量含む 第8 a層の細分
- 16. 2.5Y6/1 黄灰 粘土質シルト 炭化物を微に含む 第9 a層
- 17. 10YR8/1 灰白 極細砂～細砂 第5 b層
- 18. 5Y6/1 灰 粘土質シルト 極細砂を多量含む 第3 a層
- 19. 5Y5/1 灰 粘土質シルト 極細砂を少量含む 第3 b層
- 20. N5/ 灰 極細砂質シルト 旧恩智川埋土
- 21. 7.5Y6/1 灰 シルト 極細砂をブロック状に少量含む 第6 a層の細分
- 22. 7.5Y6/1 緑灰 粘土質シルト 粗砂を微量含む 第10 a層
- 23. 10Y6/2 オリーブ灰 粘土質シルト 炭化物を微量に含む 粗砂を微量含む 第11 a層
- 24. 10Y5/2 オリーブ灰 粘土質シルト 粗砂を微量含む 第12 a層
- 25. 10Y4/1 灰 粘土質シルト 極細砂～細砂を微量含む 84高まりの盛土の可能性あり 第13-1 a層

- 26. 10G6/1 緑灰 粘土質シルト 極粗砂を多量含む 畦畔の芯
- 27. 10B6/1 青灰 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を多量含む 畦畔の芯
- 28. 5G5/1 緑灰 粘土質シルト 畦畔の芯
- 29. 10YR8/1 灰白 極粗砂～粗砂 旧恩智川埋土か
- 30. 10B6/1 青灰 粘土質シルト 極細砂～細砂を微量含む 第6 a層の細分
- 31. 10Y5/1 灰 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を微量含む 遺構埋土
- 32. 5G5/1 オリーブ灰 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を少量含む 第13-2 a層
- 33. 10Y5/1 灰 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を微量含む 第13-2 a層の細分
- 34. 10GY5/1 緑灰 粘土質シルト 還元 第14 b層
- 35. 2.5Y8/1 灰白 粗砂～極粗砂 粘土質シルトを多量含む 第14 b層
- 36. 2.5Y5/1 黄灰 粘土質シルト 暗色を帯びる 第14 b層
- 37. 5Y7/3 浅黄橙 シルト 上方細粒化 第14 b層
- 38. 10YR8/3 浅黄橙 粗砂～極粗砂 第14 b層
- 39. 10G7/1 明緑灰 シルト質極細砂 第14 b層
- 40. 10Y4/1 灰 シルト質粘土 第14 b層
- 41. 5B7/1 明青灰 極細砂～細砂 シルトを少量含む 第14 b層
- 42. 2.5Y7/2 灰黄 シルト 遺構埋土
- 43. 2.5Y6/1 灰黄 シルト 粗砂～極粗砂を含む 遺構埋土

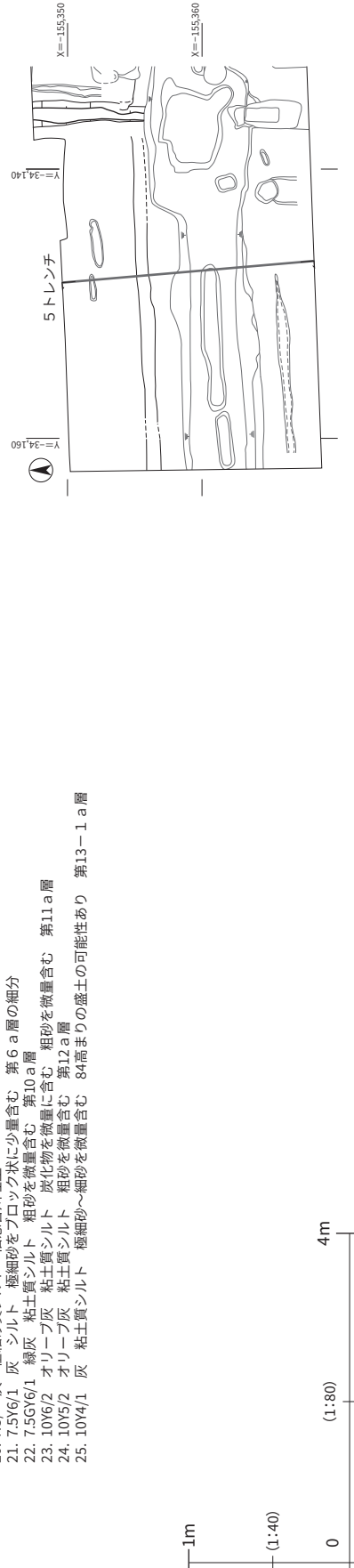


図6 5 トレンチ断面

第10 a層によって削平され、遺存状況が悪い。場所によって含有量が異なるが、粗砂を含んでおり、2層以上に細分が可能である。第4 a層から第10 a層には中世の土師器・瓦器碗が含まれるが、第11 a層からは出土していない。1区坪境周辺では第11 a層が細分でき、下位の第11 a層は擾乱をほとんど受けていない部分もあった。

第12層 第12 a層はオリーブ灰色粘土質シルトで、6世紀から8世紀の土壌層である。調査区全体に堆積し、2区西側から坪境周辺にかけて遺存状況が悪い。

第13層 第13-1 a層と第13-2 a層に分かれる。第13-1 a層は灰色粘土質シルトで、古墳時代前期（庄内式から布留式）の土壌層である。暗色を帯び、部分的に2層以上に分かれる。2区西側から中央を除いて、調査区全体に堆積する。第13-2 a層はオリーブ灰色粘土質シルトである。大県（その8）の調査では縄文時代晩期から弥生時代中期後葉に位置付けられている地層である。主として1区に堆積する。1区170谷地形周辺などで部分的に2層に分かれ、弥生時代中期後葉を下限とする第13-2 a層と明確に区別できた場合は細分して調査を行った。

第14層 第14 a層は灰色粘土シルトで、縄文時代晩期末から弥生時代前期に形成された土壌層である。第14 b層は黄灰色粘土質シルトや明青灰色極細砂から細砂、浅黄橙色粗砂から極粗砂等で形成される基盤層である。縄文時代晩期中葉以前に堆積した砂礫層と粘土層で、縄文時代晩期中葉以前、旧大和川の河道域が固定される前の氾濫原の堆積物である。

第2節 遺構・遺物

1. 概要

発掘調査では第1層から第3層までを機械掘削により除去した後、第4 a面から調査を行い、第14 b面まで合計12面の調査を行った。2区では第4 a面、第6 a面の遺存状況が悪く、平面的な調査は部分的なものに留まる。第4 a面、第6～12 a面（第10 a面の一部を除く）は遺構面の直上に自然堆積層を挟んでいない場所が多く、各遺構面で検出した遺構は直上に堆積する地層の土地利用の痕跡を示すもの（下面遺構）が多数検出されている。

遺構は、第4 a面から第12 a面では条里地割型の水田・畠等の耕作に関する遺構（平安時代中期から近世初頭）、第13-1 a面では畠・溝・土坑（古墳時代中期から飛鳥時代）、第13-2 a面では方形周溝墓・溝・土坑（弥生時代中期後葉から古墳時代前期）、第14 b面では土坑（縄文時代晩期から弥生時代前期）を検出した。第13-2 a面の方形周溝墓は、弥生時代中期後葉の6号墓と弥生時代中期末から後期初頭の7号墓の計2基を検出した。既往の調査成果を合わせて考えると、6号墓は弥生時代中期後葉の墓域（以下、大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡西部墓域）、7号墓は弥生時代中期末から後期の墓域（以下、大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡東部墓域）に含まれる（図76）。なお、現在の恩智川は今回の調査区より西側で北方向に直線的に流れているが、元来、1・2区の東西方向の坪境の位置と、2区の南北方向坪境の位置で屈折して北方向に流れていた（以下、旧恩智川）。現代まで水路として機能しており、水路設置時の攪乱は第4 a面から第12 a面に及ぶ（「旧恩智川」は平面図に攪乱として図示した）。1・2区ではこの旧恩智川に取り付く南北方向の水路（図7-水路A・B）が設置されていた。旧恩智川と水路は坪境の位置で重なっているため、第5 a面から第10 a面までは坪境に関する遺構が失われているか、一部遺存している状況を確認している。今回の調査区周辺で旧恩智川が開削された時期は確定されていないが、旧恩智川内では近世段階の旧恩智川の埋土が部分的に遺存していた（308溝等）。

2. 各遺構面の調査成果

(1) 第4 a面〔中世末～近世初頭〕(図7、図版1)

第3 a層を除去して検出した遺構面である。第4 a面では1・2・302 畦畔(坪境)、島畠を検出した。1・2 畦畔は第3 a層下面に帰属する。2区では第2 b面に帰属する、平面が長方形で、等間隔に並んだ土坑を検出した。ブロック状の砂で埋没する。洪水砂で埋没した耕作土を掘り起こした災害復旧土坑と考えており、埋土から近世の磁器が出土した。なお、2区で検出した島畠は主として断面で確認したもので、部分的な検出に留まる。

1・2・302 畦畔(坪境)(図7・8)

1 畦畔は幅1.4～2.1 m、高さ0.06 mである。2 畦畔より以南は旧恩智川に取り付く水路によって攪乱されているため遺存していない。第5 a面の27 畦畔より東側に位置する。図8は1 畦畔に直交するトレンチの断面である。第7 a面で検出された22 土坑により、6-2 トレンチ断面では第7 a層以下の坪境畦畔の断面が記録できなかったため、第7 a層上面段階で9 トレンチを新設して断面図を作成している。2 畦畔は幅1.8 mで擬似畦畔として検出した。第5 a面の東西方向の畦畔は旧恩智川によって攪乱されているため検出されていないが、旧恩智川内にあった東西の地割が北側に移動した可能性が高いと考えている。302 畦畔は幅1.4 m、擬似畦畔として検出した。第4 a層と土質の違いが不明瞭であったため、図7では点線で表記した。第5 a面の310 畦畔は断面の所見から平面を復元したもののだが、2 畦畔と同様、302 畦畔の位置は北側に移動したものと考えている。

第4 a層他出土遺物(図14)

第4 a層の遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦等が出土した。中世の遺物が細片で出土しているが、他の調査区の調査成果と下位の地層の時期を考慮すると、第4 a層の時期を直接示す遺物は今回の調査では出土しておらず、周辺の既往調査の所見に依拠して時期を想定している。なお、第4 a面精査時に16 井戸(現代)から土師器杯1・2が2点出土した。2点とも半分以上残っており、地層から出土した遺物と比較すると遺存状態は良好である。時期は飛鳥時代中葉頃のものである。

(2) 第5 a面〔中世後半〕(図7、図版1)

第4 b層を除去して検出した面である。遺構は畠、畦畔(坪境)を検出した。

27 畦畔・301 溝(坪境)(図7・8)

27 畦畔は幅0.9～1.8 m、高さ0.1～0.2 m、擬似畦畔として検出した。第6 a面の27 畦畔の位置を踏襲する。畦畔の位置は第5 a面から第4 a面で北側に移動しており、条里型地割の区画が大きく変更しているため、別の遺構番号を付与している。301 溝は幅0.55～1.0 m、深さ0.25 mである。埋土は極細砂質シルト主体で、粗砂から極粗砂を少量含む。調査当初、畦畔と考えていた遺構で、調査の過程で溝と判明した。溝周辺で畦畔は確認できなかった。なお、第4 a面での301 溝に後続する坪境関連の遺構は周辺を掘り過ぎたため不明である。

畠7・畠8(図7)

畠は畝と畝間溝を検出しており、第4 b層の遺存した範囲で畠の畝間溝を確認した。畝は幅0.4～0.5 m、畝間溝は幅0.5～0.6 m、畝頂部からの深さ0.07～0.09 mである。畝間溝は廃絶時に泥層ないし砂層によって埋没する。畝間溝は検出長が40 mを超えるものがある。2区では調査時の精度の問題もあるが、西側の一部で1区に連続する畝間溝を検出したのみである。301 溝以東は2 b土坑による攪乱のため畠等は確認されなかった。

八尾市 HP よりダウンロードした都市計画図 14-1・14-3 を使用

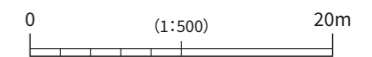
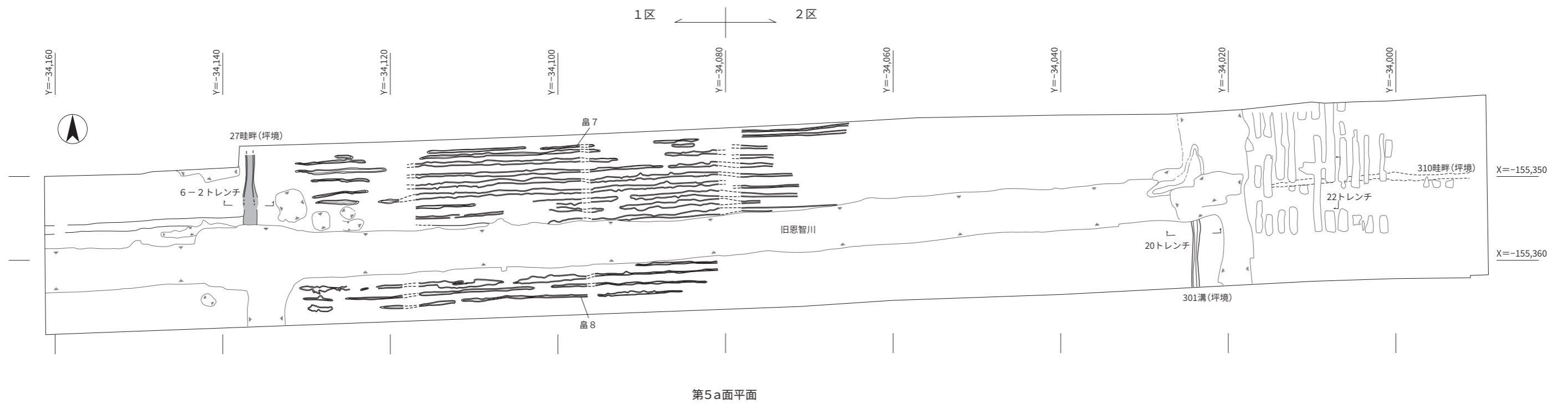
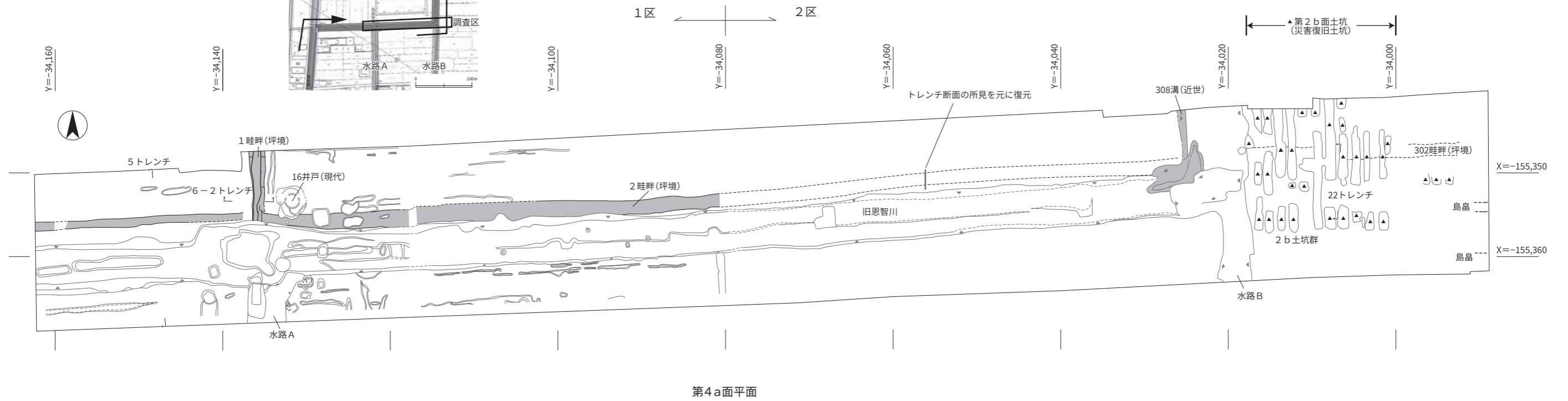
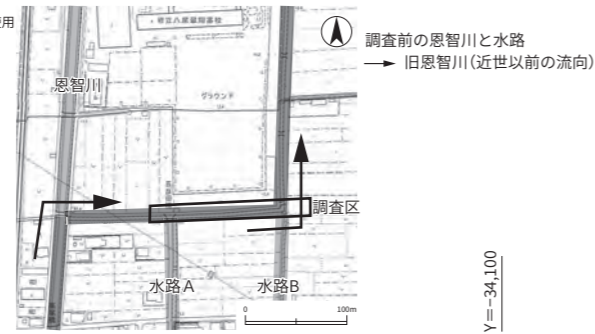
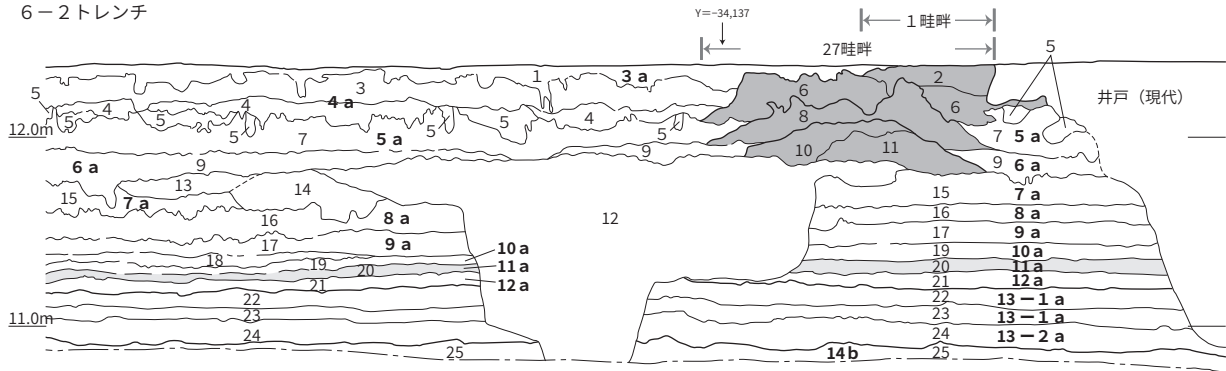


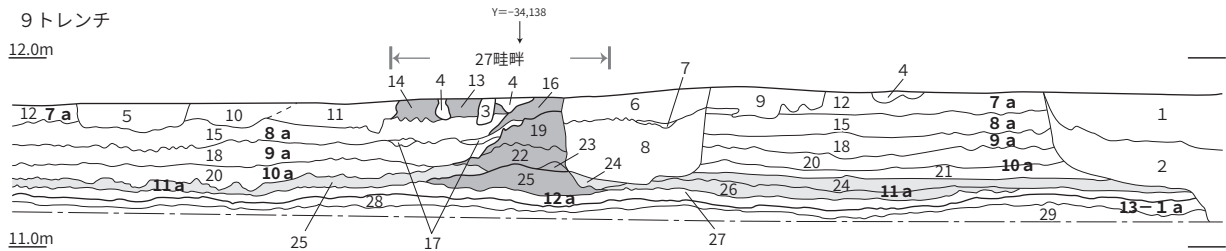
図7 1・2区平面(1)

6-2トレンチ



- | | |
|---|---|
| 1. N8/ 灰白 粗砂～極粗砂 第3 a層 | 14. 10YR8/1 灰白 極細砂～細砂 シルトを多量含む 26溝埋土 |
| 2. 5Y6/2 灰オリブ 極細砂～細砂 畦畔の芯 | 15. 10YR6/1 褐灰 シルト 極細砂～細砂を多量含む 第7 a層 |
| 3. 5Y6/1 灰 極細砂質シルト 第4 a層 | 16. 10YR4/1 褐灰 粘土質シルト 暗色を帯びる 第8 a層 |
| 4. 7.5Y7/1 灰白 極細砂質シルト 第4 a層の細分 | 17. 10Y6/1 灰 粘土質シルト 極細砂～細砂を少量含む 第9 a層 |
| 5. 2.5Y8/3 淡黄 極細砂～細砂 弱い土壌化 第4 b層 | 18. 10G6/1 緑灰 粘土質シルト 極細砂～細砂を微量含む 第9 a層の細分 |
| 6. 2.5Y6/2 灰黄 シルト 極細砂～細砂を多量含む 畦畔の芯 | 19. 5B6/1 青灰 粘土質シルト 第10 a層 |
| 7. 2.5Y7/1 灰白 粘土質シルト 極細砂～細砂を微量含む 第5 a層 | 20. 5Y7/1 灰白 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を少量含む 第11 a層 |
| 8. 2.5Y6/1 灰黄 シルト質極細砂 畦畔の芯 | 21. 5G5/1 緑灰 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を微量含む 第12 a層 |
| 9. 5Y7/1 灰白 極細砂質シルト 第6 a層 | 22. 5G3/1 暗緑灰 シルト 暗色を帯びる 土壌化顕著 第13-1 a層 |
| 10. 5Y7/2 灰白 シルト ブロック土 畦畔の芯 | 23. 5GY6/1 オリブ灰 粘土質シルト 第13-1 a層の細分 |
| 11. 5Y6/2 灰オリブ シルト 極細砂～細砂 ブロック状に含む 畦畔の芯 | 24. N4/ 灰 粘土質シルト 第13-2 a層 |
| 12. 5G6/1 緑灰 シルト ブロック土 22土坑埋土 | 25. 10Y6/2 オリブ灰 シルト質極細砂 第14 b層 |
| 13. 2.5Y6/1 黄灰 シルト 26溝埋土 | |

9トレンチ



- | | |
|---|--|
| 1. 10Y7/2 灰白 シルト ブロック土 埋め戻し土 23土坑埋土 | 16. 5G5/1 緑灰 粘土質シルト ブロック土 |
| 2. 2.5GY6/1 オリブ灰 シルト ブロック土 埋め戻し土 23土坑埋土 | 17. 5G4/1 暗緑灰 シルト 極細砂のラミナあり 湿性 第8 b層 |
| 3. 5B5/1 青灰 極細砂質シルト 第4 a層ないし第5 a層か | 18. 10G4/1 暗緑灰 粘土質シルト 第9 a層 |
| 4. 5B4/1 暗青灰 極細砂～細砂 シルトをラミナ状に含む 水成層 | 19. 5BG5/1 青灰 シルト ブロック土 (第11 a層由来) を多量含む 畦畔の芯 |
| 5. 10G5/1 緑灰 シルト ブロック土 25土坑埋土 | 20. 10G4/1 暗緑灰 細砂～中砂質シルト 第10 a層 |
| 6. 2.5GY8/1 灰白 極細砂～細砂 ブロック状 シルトブロックを少量含む 24土坑埋土 | 21. 10G4/1 暗緑灰 細砂～中砂質シルト 粗砂～極粗砂 (第11 a層由来) を多量含む 第10 a層の細分 |
| 7. 5GY7/1 明オリブ灰 シルト 24土坑埋土 | 22. 5GY7/1 明オリブ灰 粗砂質シルト ブロック土 畦畔の芯 |
| 8. 2.5GY7/1 明オリブ灰 シルト ブロック土 24土坑埋土 | 23. 10GY7/1 明緑灰 粘土質シルト ブロック土 畦畔の芯 |
| 9. 10Y8/1 灰白 細砂～中砂 シルト・粗砂～極粗砂を少量含む 28溝埋土 | 24. 2.5GY6/1 オリブ灰 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を多量に含む 第11 a層 |
| 10. 2.5GY5/1 オリブ灰 シルト 細砂～極細砂を多量含む 26溝埋土 | 25. 10GY8/1 明緑灰 粗砂質シルト 畦畔の芯 |
| 11. 10Y8/2 灰白 細砂～中砂 シルト 粗砂～極粗砂を少量含む 26溝埋土 | 26. 5GY8/1 灰白 シルト質粗砂～極粗砂 第11 a層の細分 |
| 12. 10G5/1 緑灰 粘土質シルト 極細砂～細砂を微量に含む 第7 a層 | 27. N5/ 灰 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を微量含む 第12 a層 |
| 13. 10Y5/1 灰 シルト ブロック土 畦畔の芯 | 28. 7.5Y5/1 灰 粘土質シルト 暗色を帯びる 第13-1 a層 |
| 14. 10Y8/1 灰白 シルト 畦畔の芯 | 29. 5G5/1 緑灰 粘土質シルト 100溝埋土 |
| 15. 5BG5/1 青灰 粘土質シルト 第8 a層 | |

※ 6-2・9トレンチは南北に2m離れており、Y座標は坪境畦畔(南北方向)の位置関係を示すために表記。

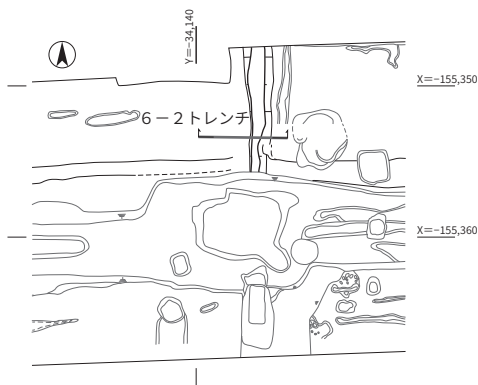
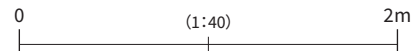
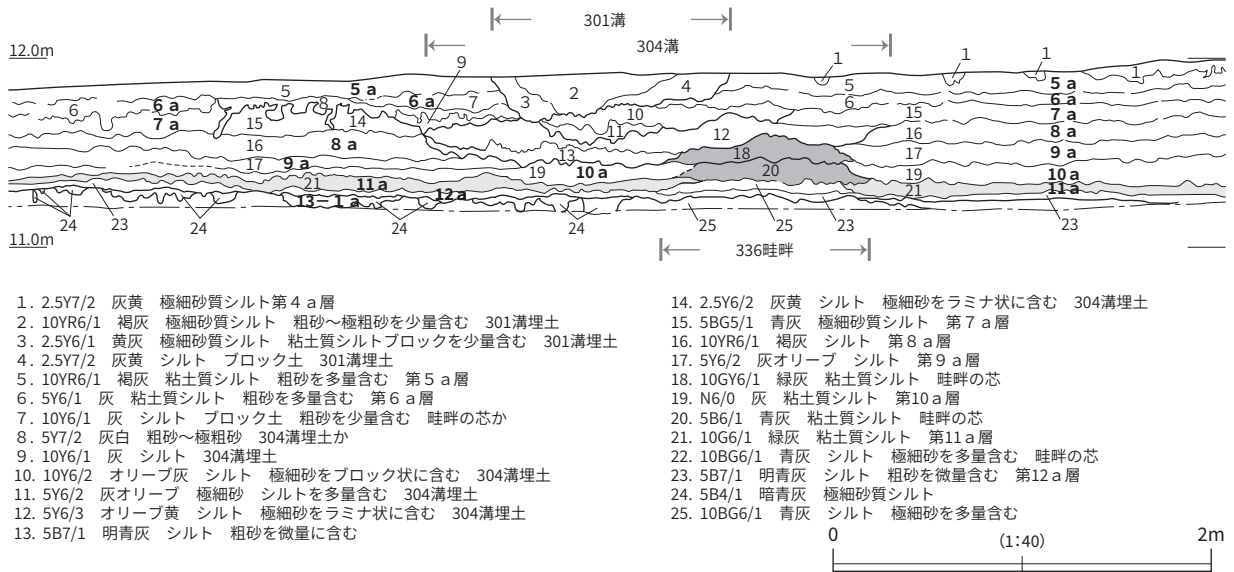
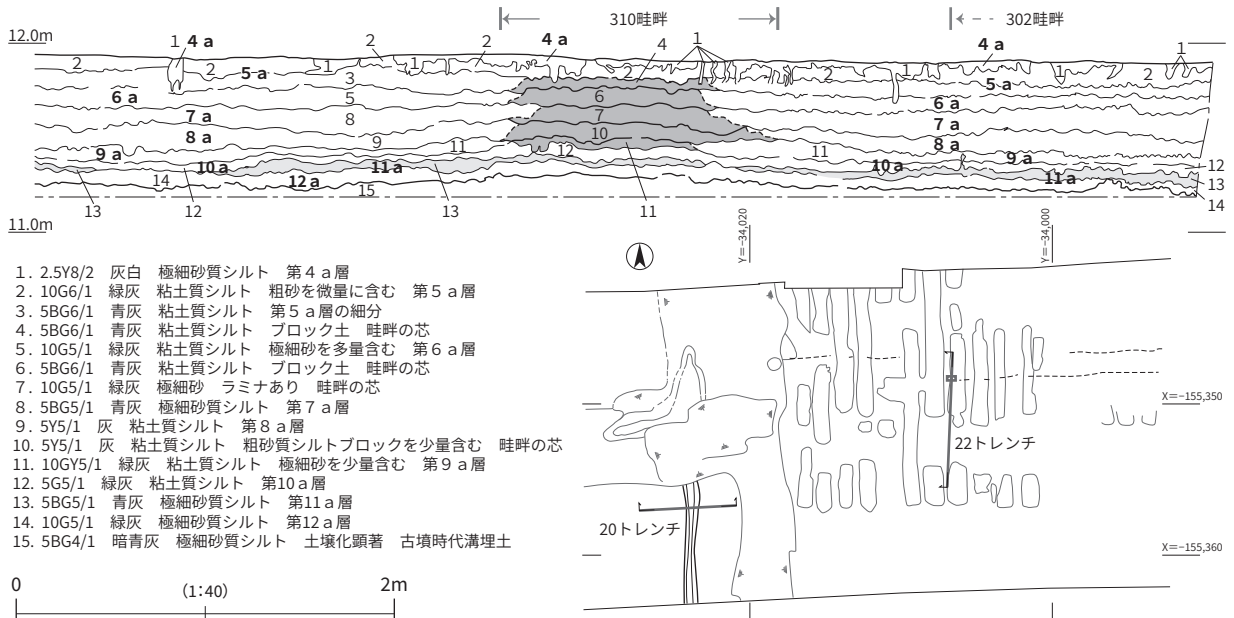


図8 6・9トレンチ断面



- | | |
|--|---------------------------------------|
| 1. 2.5Y7/2 灰黄 極細砂質シルト 第4 a層 | 14. 2.5Y6/2 灰黄 シルト 極細砂をラミナ状に含む 304溝埋土 |
| 2. 10YR6/1 褐灰 極細砂質シルト 粗砂～極粗砂を少量含む 301溝埋土 | 15. 5BG5/1 青灰 極細砂質シルト 第7 a層 |
| 3. 2.5Y6/1 黄灰 極細砂質シルト 粘土質シルトブロックを少量含む 301溝埋土 | 16. 10YR6/1 褐灰 シルト 第8 a層 |
| 4. 2.5Y7/2 灰黄 シルト ブロック土 301溝埋土 | 17. 5Y6/2 灰オリーブ シルト 第9 a層 |
| 5. 10YR6/1 褐灰 粘土質シルト 粗砂を多量含む 第5 a層 | 18. 10GY6/1 緑灰 粘土質シルト 畦畔の芯 |
| 6. 5Y6/1 灰 粘土質シルト 粗砂を多量含む 第6 a層 | 19. N6/0 灰 粘土質シルト 第10 a層 |
| 7. 10Y6/1 灰 シルト ブロック土 粗砂を少量含む 畦畔の芯 | 20. 5B6/1 青灰 粘土質シルト 畦畔の芯 |
| 8. 5Y7/2 灰白 粗砂～極粗砂 304溝埋土 | 21. 10G6/1 緑灰 粘土質シルト 第11 a層 |
| 9. 10Y6/1 灰 シルト 304溝埋土 | 22. 10BG6/1 青灰 シルト 極細砂を多量含む 畦畔の芯 |
| 10. 10Y6/2 オリーブ灰 シルト 極細砂をブロック状に含む 304溝埋土 | 23. 5B7/1 明青灰 シルト 粗砂を微量含む 第12 a層 |
| 11. 5Y6/2 灰オリーブ 極細砂 シルトを多量含む 304溝埋土 | 24. 5B4/1 暗青灰 極細砂質シルト |
| 12. 5Y6/3 オリーブ黄 シルト 極細砂をラミナ状に含む 304溝埋土 | 25. 10BG6/1 青灰 シルト 極細砂を多量含む |
| 13. 5B7/1 明青灰 シルト 粗砂を微量に含む | |

図9 20トレンチ断面



- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1. 2.5Y8/2 灰白 極細砂質シルト 第4 a層 | 14. 10G5/1 緑灰 極細砂質シルト 第12 a層 |
| 2. 10G6/1 緑灰 粘土質シルト 粗砂を微量に含む 第5 a層 | 15. 5BG4/1 暗青灰 極細砂質シルト 土壌化顕著 古墳時代溝埋土 |
| 3. 5BG6/1 青灰 粘土質シルト 第5 a層の細分 | |
| 4. 5BG6/1 青灰 粘土質シルト ブロック土 畦畔の芯 | |
| 5. 10G5/1 緑灰 粘土質シルト 極細砂を多量含む 第6 a層 | |
| 6. 5BG6/1 青灰 粘土質シルト ブロック土 畦畔の芯 | |
| 7. 10G5/1 緑灰 極細砂 ラミナあり 畦畔の芯 | |
| 8. 5BG5/1 青灰 極細砂質シルト 第7 a層 | |
| 9. 5Y5/1 灰 粘土質シルト 第8 a層 | |
| 10. 5Y5/1 灰 粘土質シルト 粗砂質シルトブロックを少量含む 畦畔の芯 | |
| 11. 10GY5/1 緑灰 粘土質シルト 極細砂を少量含む 第9 a層 | |
| 12. 5G5/1 緑灰 粘土質シルト 第10 a層 | |
| 13. 5BG5/1 青灰 極細砂質シルト 第11 a層 | |

図10 22トレンチ断面

第5 a層出土遺物 (図14)

遺物は土師器、須恵器、瓦器、陶器が出土した。土師器皿3は口縁部を二段にヨコナデする。時期は12世紀である。瓦器挿鉢4は今回第5 a層から出土した土器では最も新しいもので、時期は15世紀である。内面には摺目が残る。広口壺5は垂下する端部に刻目が施される。茶色系の胎土を用いるが、角閃石等がふくまれておらず、生駒西麓産ではないと判断した。図28-119は同様の形状のものだが、119は白色系の胎土である。

(3) 第6 a面 [14世紀後半～15世紀] (図11、図版1)

第5 a層を除去して検出した面である。第5 b層は踏み込み状に一部に残存するのみで、遺構面を覆うような状況では堆積していなかった。遺構は畦畔(坪境)、溝を検出した。坪境の310畦畔は断面の所見を元に第8 a面と同じ位置関係にあったと考えており、図11では点線で表記した。310畦畔の復元位置に近接して30cm大の風化した花崗岩が第6 a層中から出土している。

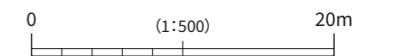
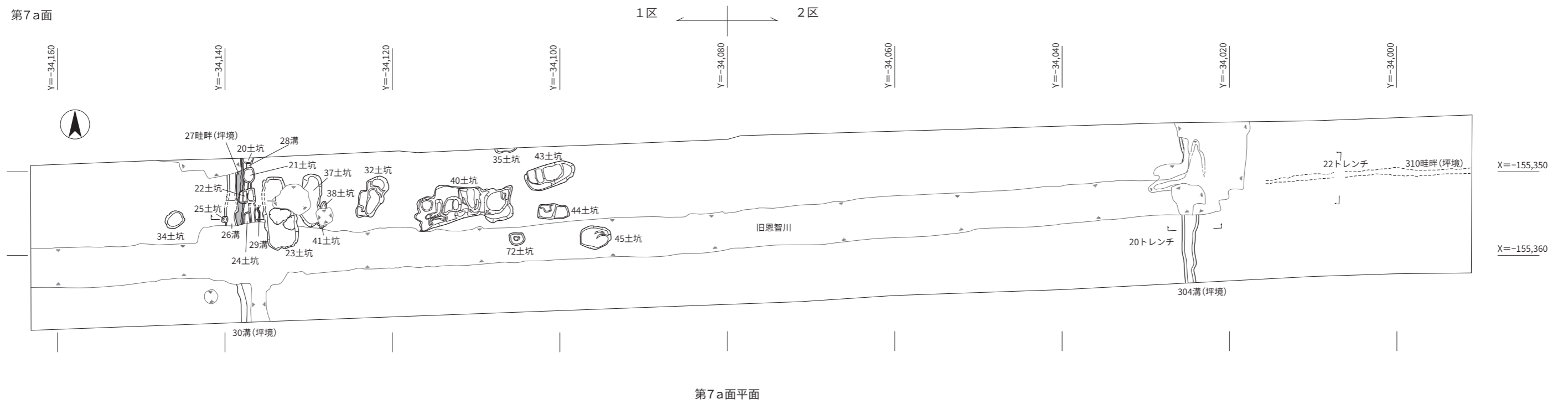
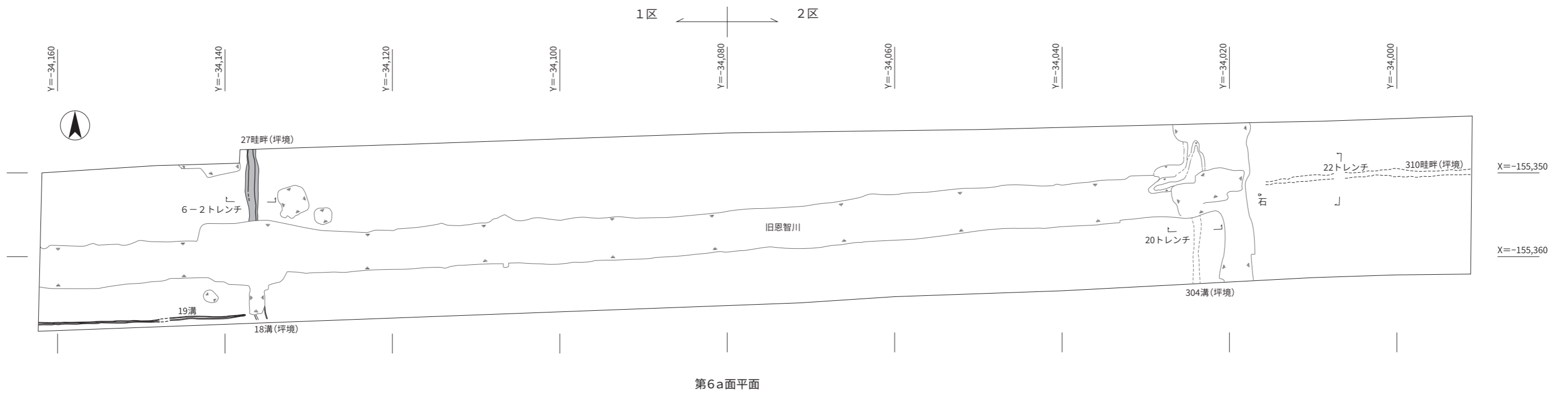


図 11 1・2区平面 (2)

27 畦畔・18 溝（坪境）（図 8）

27 畦畔は幅 1.0～1.5 m、高さ 0.2 m である。27 畦畔西側は第 6 a 層の基底面が高くなっており、機能時の畦畔の幅は検出したものより広い可能性がある。

27 畦畔の南側では旧恩智川を挟んで 18 溝を検出した。18 溝は幅 1.4～1.5 m、深さ 0.3 m で、埋土は極細砂から細砂である。18 溝の直上は水路（現代）で攪乱されており、溝の掘り込み面は不明だが断面の検討により、第 6 a 面以降に機能したと考えている。18 溝は大泉（その 8）で検出された第 6 a 面 333 落ち込みにつながる溝である。

19 溝（図 11）

幅 0.3 m、深さ 0.03 m、埋土はシルト質極細砂から細砂である。遺物は出土しなかった。大泉（その 8）第 6 a 面でも東西方向の溝が間隔を空けて検出されており、畝の畝間溝か耕作痕の可能性が指摘されている。19 溝は大泉（その 8）から広がる東西方向の溝群の中で最も北側に当たっている。

第 6 a 層出土遺物（図 14、図版 9）

遺物は土師器、須恵器、瓦器等が出土した。上下の地層の所見と既往調査区の所見から第 6 a 層は 14 世紀後半から 15 世紀と考えているが、今回の調査区内で当該期の遺物は出土しなかった。下層からの巻き上げと考えられる遺物が出土している。土師器皿 6 はての字形皿で、時期は 11 世紀代のものである。瓦器皿 7 は見込みの暗文が平行線状である。時期は 13 世紀前葉から中葉頃である。8 は弥生時代後期から庄内式期の壺で、上下に拡張した口縁部外面に竹管文を 3～4 段施す。

（4）第 7 a 面〔14 世紀前葉～14 世紀中葉〕（図 11）

第 6 a 層を除去して検出した遺構面である。遺構は畦畔（坪境）、溝、土坑を検出した。土坑は 27 畦畔（坪境）の東側を中心に検出しており、一部の土坑は 27 畦畔（坪境）を破壊して掘削されている。310 畦畔は 22 トレンチ等の断面の所見によって位置を復元した。

27 畦畔・30 溝・304 溝（坪境）（図 8・9・11）

27 畦畔は幅 1.0 m、高さ 0.1 m である。26 溝や 22 土坑等に切られていたことや、第 5 b 層を埋土とする踏み込みがあったことから、検出時の形状は不明瞭であった。30 溝は幅 1.2～1.6 m、深さ 0.2 m、埋土は極細砂～細砂である。遺物は 12 世紀代と 13～14 世紀の瓦器碗の細片が出土した。304 溝は幅 2.0 m、深さ 0.2 m、埋土は上層がシルト、下層が極細砂である。遺物は土師器皿、丸瓦が出土した。調査当初、304 溝と考えていた砂礫の堆積範囲が、近世の 308 溝（図 7）の埋土であることが判明したため、304 溝の北側は 308 溝の開削によって失われており部分的な検出に留まる。

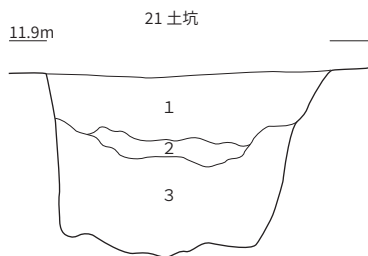
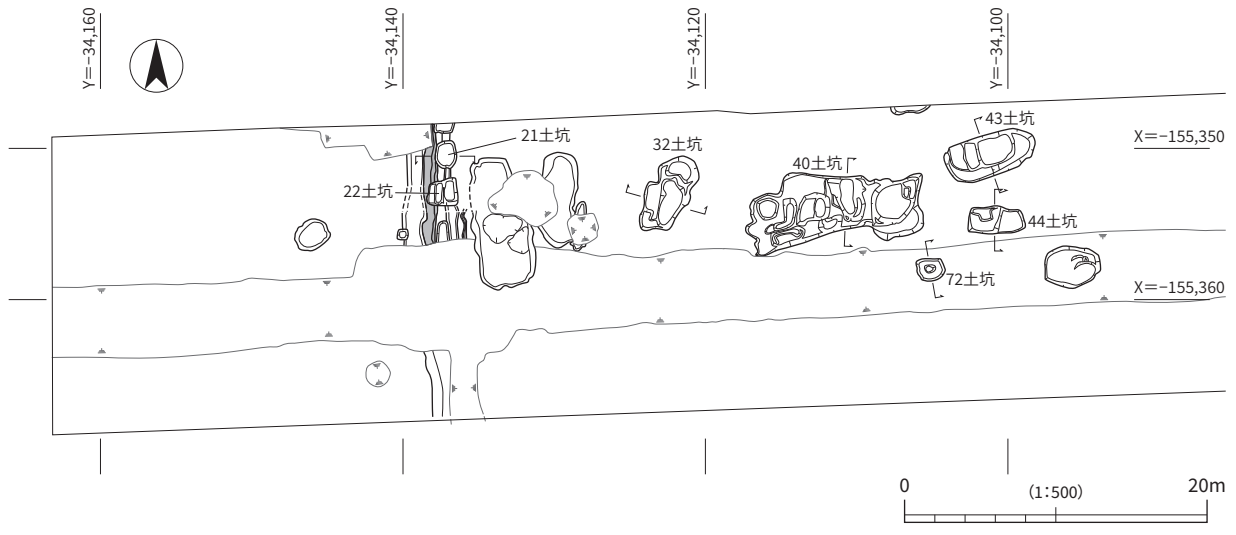
26・28・29 溝（図 11）

26 溝は幅 1.5 m、深さ 0.15 m、埋土は細砂～中砂である。遺物は土師器皿、瓦器碗が出土しており、時期は 13 世紀後葉から 14 世紀前葉頃である。28 溝は幅 0.7 m、深さ 0.16 m、埋土は細砂～中砂である。遺物は出土しなかった。26・28 溝の埋土には極細砂から細砂が多量に混じるが、ラミナがみられる水成層は認められなかった。29 溝は幅 0.25 m、深さ 0.06 m、埋土は極細砂から細砂である。遺物は出土しなかった。

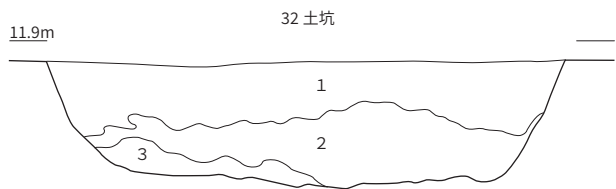
21・22・32・40・43 土坑（図 11・12、図版 1）

21 土坑は平面が楕円形、長軸 1.8 m、短軸 1.5 m、深さ 0.9 m、埋土はシルトブロック土である。遺物は土師器皿、瓦器碗が出土した。瓦器碗は 13 世紀後葉から 14 世紀前葉頃のものである。

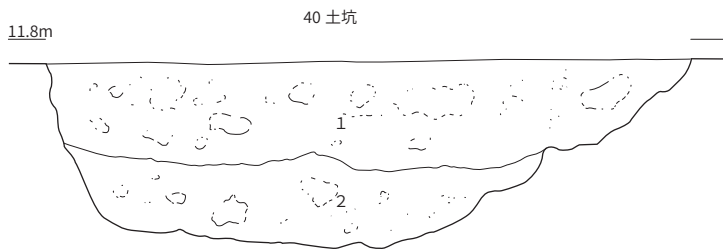
22 土坑は平面が長方形、長辺 2 m、短辺 1.5 m 以上、深さ 1 m、埋土はシルトブロック土である。遺



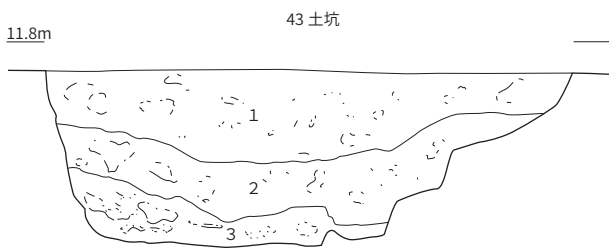
- 1. 10Y6/2 オリーブ灰 シルト ブロック土
- 2. 2GY7/1 明オリーブ灰 シルト ブロック土
- 3. 7.5Y5/3 灰オリーブ シルト ブロック土



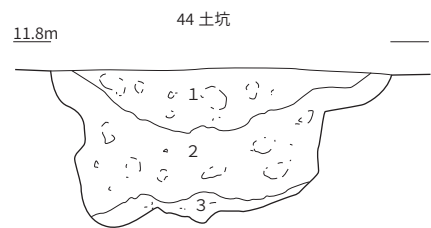
- 1. 10Y6/2 オリーブ灰 シルト ブロック土
- 2. 5GY7/1 明オリーブ灰 シルト ブロック土
- 3. 7.5Y5/3 灰オリーブ シルト ブロック土



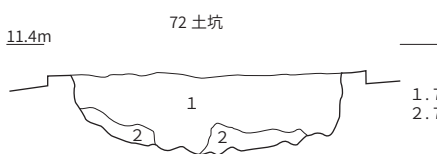
- 1. 10Y6/2 オリーブ灰 シルト 極細砂～細砂を多量含む ブロック土
- 2. 5GY4/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト ブロック土



- 1. 10Y6/1 灰 極細砂質シルト ブロック土
- 2. 5GY4/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト ブロック土
- 3. 5B4/1 暗青灰 シルト



- 1. 10Y6/1 灰 極細砂質シルト ブロック土
- 2. 5GY4/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト ブロック土
- 3. 5B4/1 暗青灰 シルト



- 1. 7.5Y5/2 灰オリーブ 極細砂 ブロック状 シルトブロックを多量含む
- 2. 7.5Y4/1 灰 細砂 粗砂を微量含む

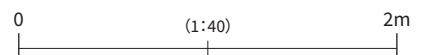


図 12 21 土坑他断面

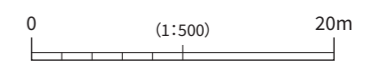
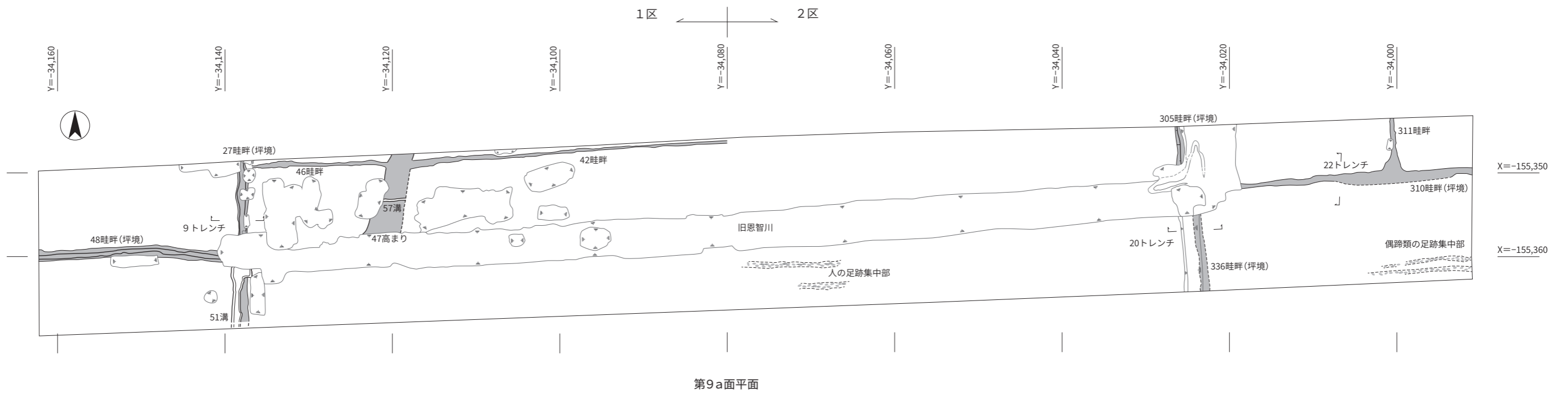
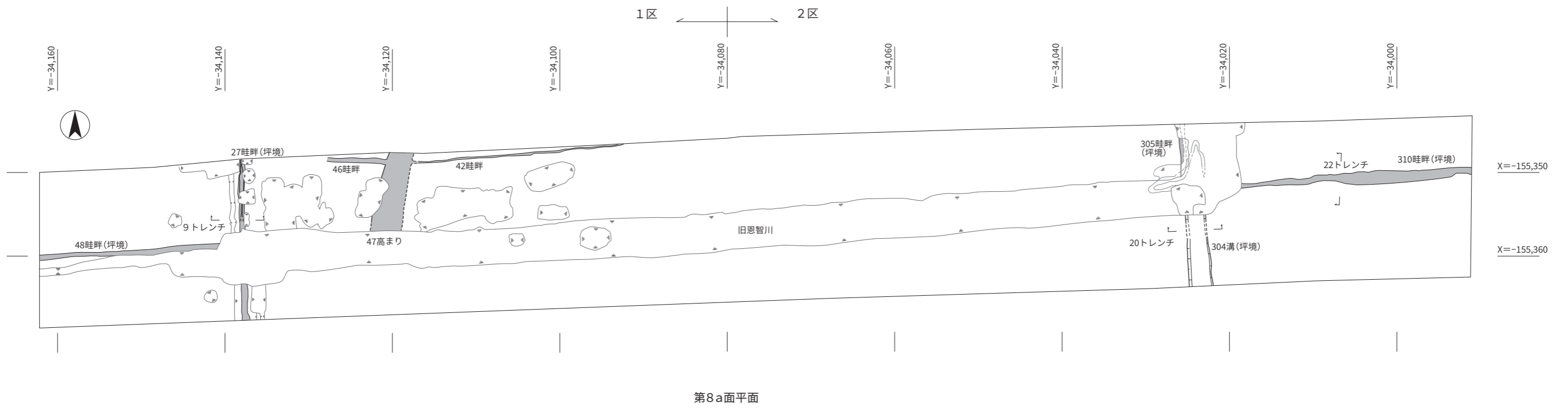


図13 1・2区平面(3)

物は出土しなかった。底面には東西に2分割した位置に仕切り状の掘り残しがある。

32 土坑は平面が不整形、長軸 5.6 m、短軸 3.0 m、深さ 0.6 m、埋土はシルトブロック土である。遺物は瓦器椀、弥生土器が出土した。瓦器椀は 13 世紀後葉頃のものである。

40 土坑は平面が不整形、長軸 12 m、短軸 3.4 m、深さ 1 m、埋土はシルトブロック土である。底面は平面長方形の複数の土坑を連続して掘削したような高低差がある。遺物は土師器皿、瓦器椀が出土した。土師器皿 9 は器壁が薄く、口縁端部は両側からのヨコナデによってつまみ上げられたような形状である。時期は 14 世紀中葉頃のものである。

43 土坑は平面が楕円形状、長軸 6.1 m、短軸 2.8 m、深さ 0.9 m、埋土はシルトブロック土である。底面は 40 土坑と同様に高低差があり、中央部が最も低い。遺物は瓦器皿・椀が出土した。44 土坑は平面が長方形、長辺 3.8 m、短辺 1.8 m、深さ 0.8 m、埋土はシルトブロック土である。遺物は土師器皿、製塩土器が出土した。底面は 40 土坑と同様に高低差があり、西側が低い。

72 土坑は平面が方形に近い形状を示し、一辺 1.5 m、埋土はシルトから極細砂である。遺物は出土しなかった。

6 号墓の墳丘上に当たる部分で検出された 32 土坑は 6 号墓の砂質の盛土を掘削して下位の粘土層(第 13 - 2 a 層～第 14 b 層)まで掘削している。それ以外の土坑は、概ね粘土層(第 7 a 層から第 14 b 層)を掘削し、底面は下位の砂礫層(第 14 b 層)の直上か、砂礫層(第 14 b 層)に到達しない粘土層中で掘削が終わっている。埋土はブロック土である点で共通し、短期間で掘削から埋め戻しの作業が行われている状況が想定できる。粘土採掘を目的とした土取り穴と考えており、連続的に掘削された可能性が高いと考えられる。

第 7 a 層出土遺物(図 14)

遺物は土師器皿、須恵器、瓦器椀・皿、銭貨が出土した。土師器皿 10 は器壁が厚く、器形に歪みがある。時期は 13 世紀代のものか。瓦器皿 11 は和泉型、見込みの暗文はジグザグ状、時期は 12 世紀後葉から 13 世紀前葉頃である。瓦器椀 12 は口径が小さく、底部は失われている。時期は 14 世紀前葉である。白磁碗 13 は内外面にハケを用いた文様を施す。時期は 12 世紀頃である。銭貨 14 は嘉祐通寶、北宋銭で、初鑄年は 1056 年である。

(5) 第 8 a 面〔13 世紀後葉～14 世紀前葉〕(図 13、図版 1)

第 7 a 層を除去して検出した遺構面である。遺構は畦畔、溝を検出した。第 8 a 面では、第 13 - 2 a 面で検出された 6 号墓の墳丘(47 高まり、第 13 - 2 a 面では遺構属性を変更し 47 墳丘として調査)が南北方向の高まりとして検出された。47 高まりは正方位ではなく、6 号墓の墳丘の方位を踏襲して東側に角度を振る。幅 3～4 m で、6 号墓周辺の地形の平坦化に伴い、第 9 a 面より東西の幅は狭くなっている。

27 畦畔・304 溝(坪境)(図 13)

27 畦畔は幅 0.7 m、高さ 0.04 m である。擬似畦畔として検出しており、平面形が不明瞭な部分があった。304 溝は幅 2.5～3.0 m、深さ 0.16 m、埋土は砂を含むシルトである。第 7 a 面で 304 溝を検出した時点で、埋土の堀り分けを行わずに完掘しており、断面の検討で第 8 a 面に帰属する溝と判断した。

42・46 畦畔(図 13)

42 畦畔は幅 0.2 m、46 畦畔は幅 0.5～0.6 m で擬似畦畔として検出した。42・46 畦畔は 47 高まりに接続しており、第 9 a 面の位置を踏襲する。

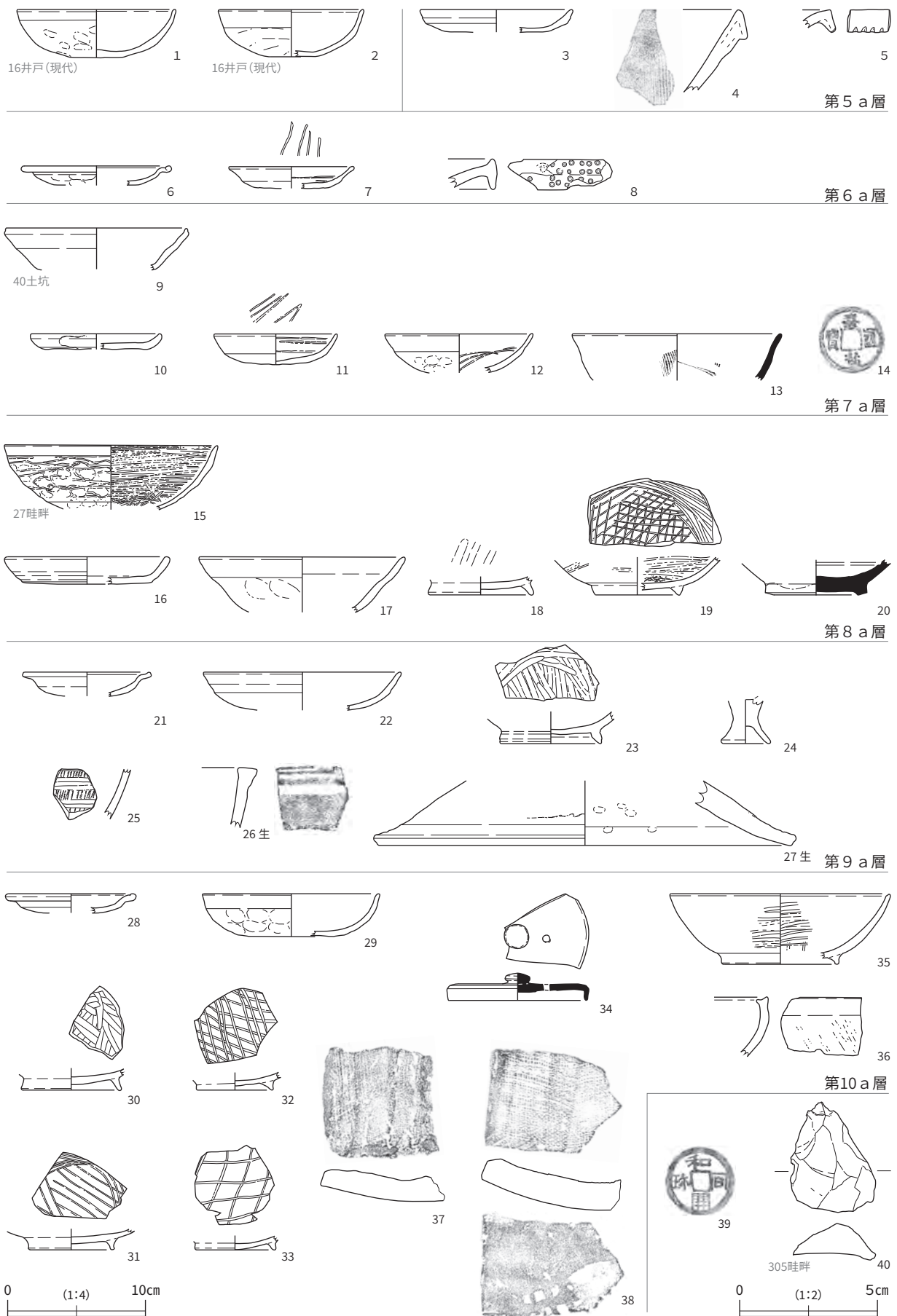
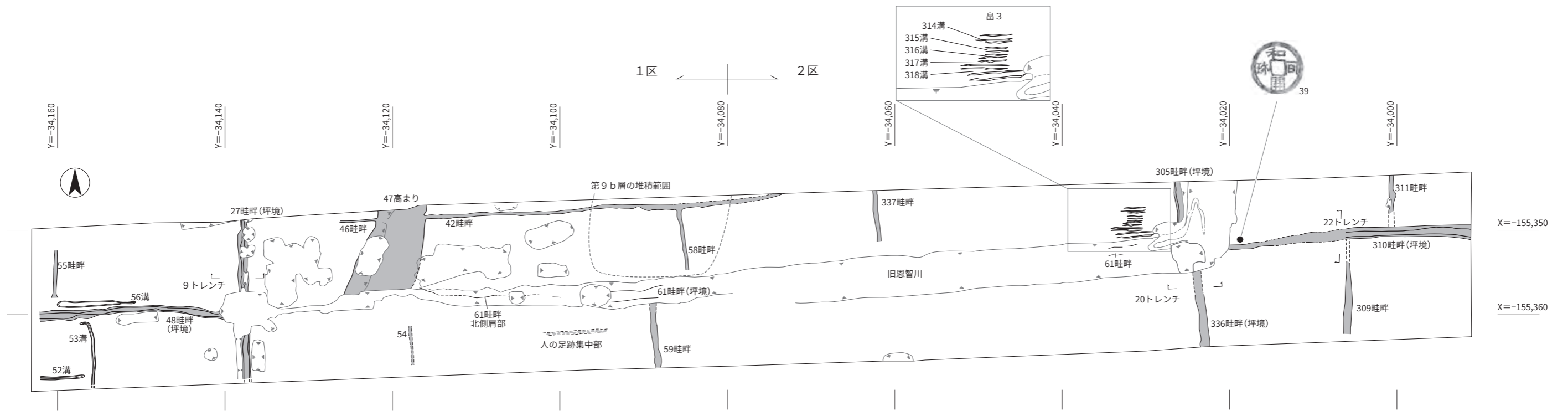
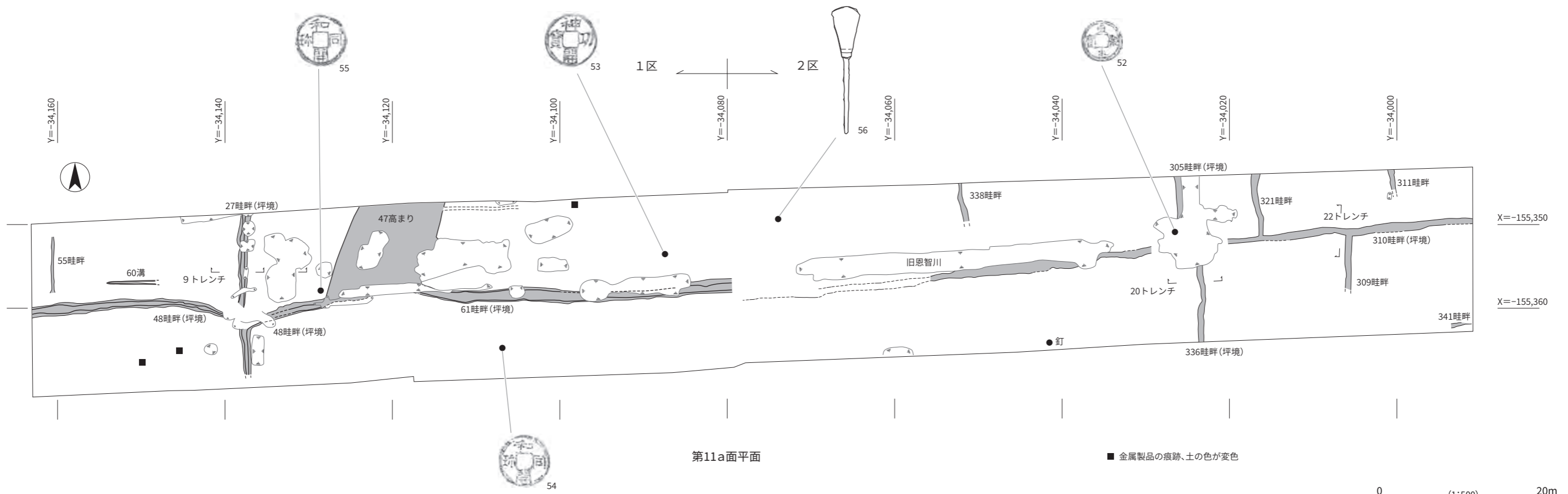


图 14 16 井戸他出土遺物



第10a面平面



第11a面平面

図15 1・2区平面(4)

48 畦畔 (図 13)

幅 0.6 m、高さ 0.02 m である。調査区西側の、旧恩智川の攪乱が第 8 a 面に達していない範囲で検出した。旧恩智川の前身となるような溝は伴っておらず、第 8 a 面より下位においても東西方向の溝の痕跡は確認されなかった。

27 畦畔他出土遺物 (図 14)

27 畦畔の芯を構成する盛土から半個体分の瓦器椀 15 が出土した。和泉型で、見込みの暗文は平行線状、時期は 13 世紀前葉から中葉頃である。第 8 a 層の遺物は土師器皿、須恵器、瓦器椀、灰釉陶器、磁器が出土した。土師器皿 17 は口縁部と体部の境界に屈曲部を持ち、口縁部が外方向に広がる。時期は 14 世紀前葉から中葉である。瓦器椀 18 は見込みの暗文が平行線状で太いヘラミガキ、時期は 11 世紀後葉から 12 世紀前葉である。瓦器椀 19 は見込みの暗文は斜格子状、時期は 12 世紀中葉から後葉である。磁器は白磁椀 20 以外に青白磁合子が出土している。

(6) 第 9 a 面 [12 世紀後葉～13 世紀中葉] (図 13、図版 1)

第 8 a 層を除去して検出した遺構面で、遺構は畦畔、高まり、溝を検出した。2 区では人と牛の足跡が東西方向に集中する部分を確認している。

27 畦畔・51 溝 (坪境) (図 13)

27 畦畔は幅 1.3 m、高さ 0.15 m で、第 10 a 面の位置を踏襲する。51 溝は第 8 a 面の坪境畦畔を除去して検出しており、27 畦畔の一部を破壊して掘削する。幅 1.0～1.4 m、深さ 0.1 m、埋土は極粗砂シルトである。遺物は出土しなかった。

57 溝 (図 13)

幅 0.25 m、深さ 0.1 m、埋土はシルトである。47 高まり上面で検出された。土師器、瓦器椀 (13 世紀後葉から 14 世紀前葉頃) の細片が出土した。57 溝は 47 高まりの東西の耕作地をつなぐ水口である。

305・336 畦畔 (坪境) (図 13)

305 畦畔は幅 0.7 m、高さ 0.04 m である。305 畦畔と 336 畦畔は一直線状ではなく、東西方向にあったと考えられる坪境を挟んで、305 畦畔が 1 m 程度西側に設置されている。336 畦畔は第 8 a 面で検出した 304 溝により攪乱を受けていたため平面的には確認できておらず、トレンチ断面の所見から、図 13 では点線で復元的に表記した。

第 9 a 層出土遺物 (図 14)

遺物は土師器皿、須恵器、瓦器椀、黒色土器、石器等が出土した。土師器皿 21 はての字形皿で、時期は 11 世紀頃である。土師器皿 22 は口径が大きく、口縁部に二段ナデを施す。器壁は薄く、時期は 12 世紀中葉から後葉頃か。黒色土器 A 類椀 23 は内面に太いヘラミガキを施す。時期は 11 世紀後葉までに収まるものである。24 は脚台部で、器種は鉢か。25 から 27 は弥生土器で、25 は台付鉢の鉢体部片、26 は外面に凹線を施した鉢、27 は器台脚部である。

(7) 第 10 a 面 [12 世紀] (図 15、図版 2)

第 9 a 層・第 9 b 層を除去して検出した遺構面である。平面的に坪境以外の畦畔検出の確度が上がるのは 1・2 区ともに層境が明瞭になる第 10 a 面からである。第 9 b 層は 58 畦畔周辺に層厚 10 cm 前後で堆積しており、北側に向かって層厚は厚くなる。第 10 a 面まで 27 畦畔 (坪境) と 47 高まりの間に設置されていた 46 畦畔は第 11 a 面では検出されておらず、第 10 a 層の形成により地形が平坦化し、47 高まりに向かって耕地が拡張されて、新たに設置された畦畔の可能性がある。

27・48・61 畦畔（坪境）（図 15）

27 畦畔は幅 1.0 m、高さ 0.1 m である。48 畦畔は幅 0.7 ～ 1.3 m、高さ 0.05 m で、27 畦畔の交点に向かって南側に屈曲する。61 畦畔は幅 1.0 m、上部は旧恩智川の攪乱で遺存状況が悪い。第 11 a 面の位置を踏襲していると想定され、西側で 47 高まりにつながっていた可能性が高い。47 高まりと 42・58 畦畔で囲まれる区画の面積は 270 m² である。

310 畦畔（坪境）（図 15）

幅 1.0 m、高さ 0.04 m である。畦畔の頂部は地震により変形しており、平面的には東西方向の筋状の高まりが密集するような状態で検出している。

畝 3（図 15）

擬似の状態で検出しており、畝は確認されなかった。畝 3 周辺は第 10 ～ 12 a 層の遺存状況が悪く、第 9 a 層を除去した段階で基盤層が一部露出しており、また、第 9 a 層から第 12 a 層の堆積が薄い場所であったことから、遺構面の帰属は第 10 a 面より古くなる可能性がある。畝間溝は幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.01 m である。畝間溝埋土の一部を洗浄したが、種子等は出土しなかった。

第 10 a 層他出土遺物（図 14、図版 14）

第 10 a 層の遺物は土師器皿・甕、須恵器杯、黒色土器、瓦器碗等が出土した。土師器皿 28 はての字形皿で、時期は 11 世紀代である。土師器皿 29 は口縁部が外反気味で、体部外面は指押えの痕跡が残る。時期は 12 世紀代のものか。

瓦器碗 30 ～ 33 は高台径が広く、高台の断面は三角形状、時期は 11 世紀後葉から 12 世紀代のものである。第 10 a 層には薄く、粗略なヘラミガキの瓦器碗は細片でも出土しなくなる。須恵器短頸壺蓋 34 は円形の孔が穿たれている。時期は奈良時代後半頃である。黒色土器 A 類碗 35 は断面三角形の高台が

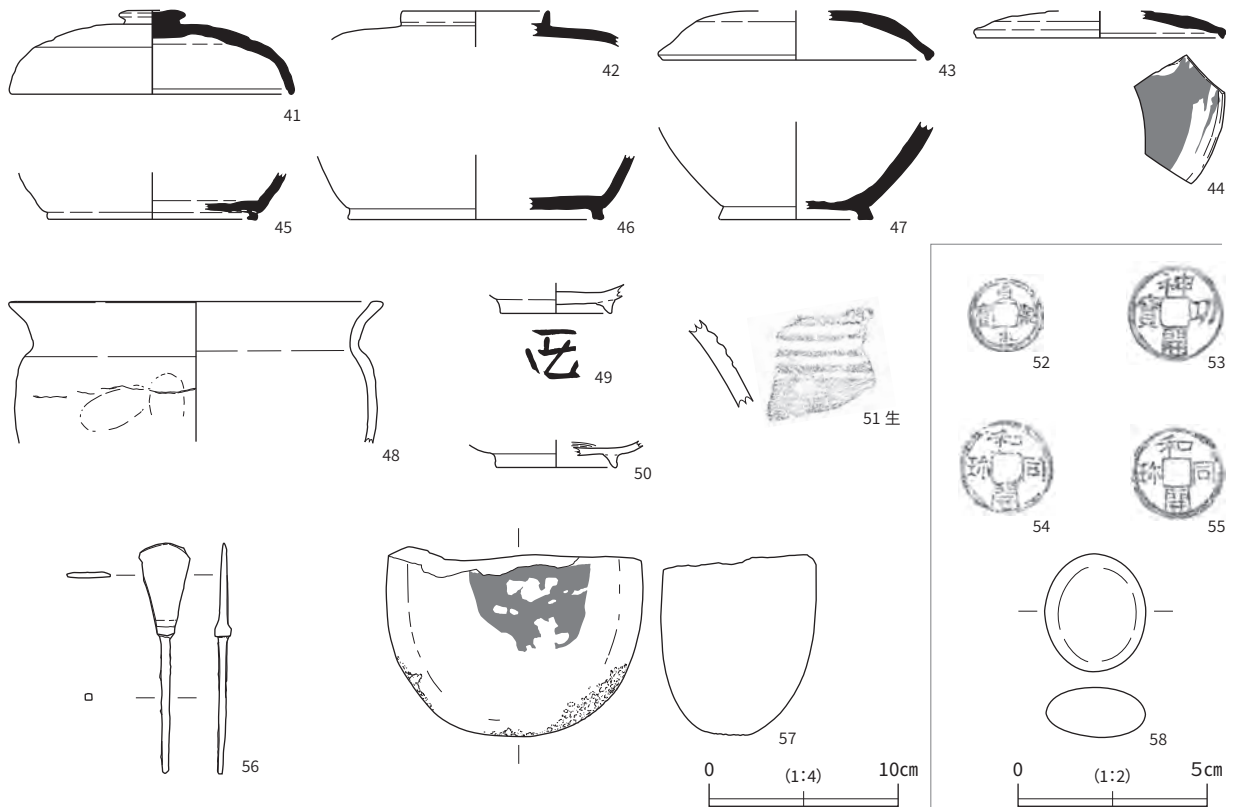
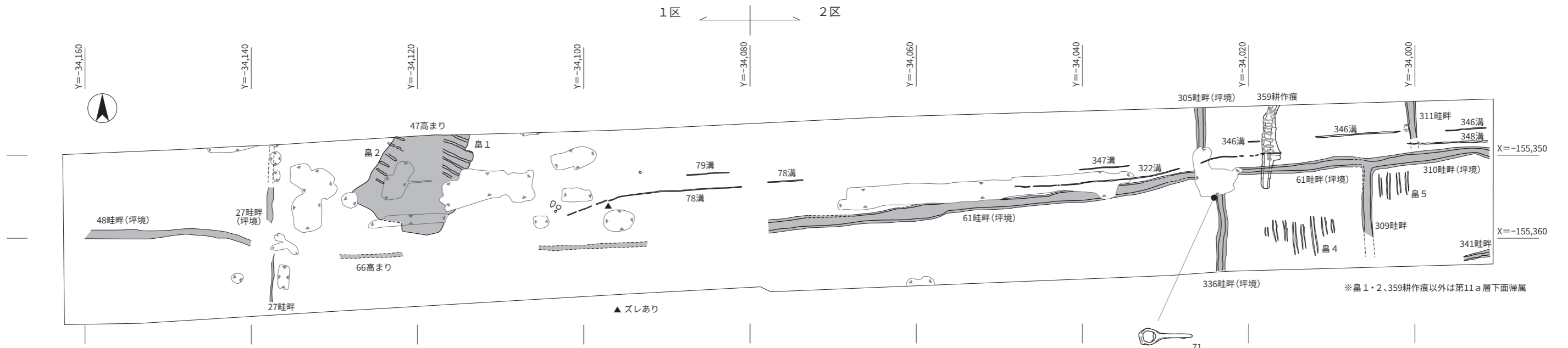
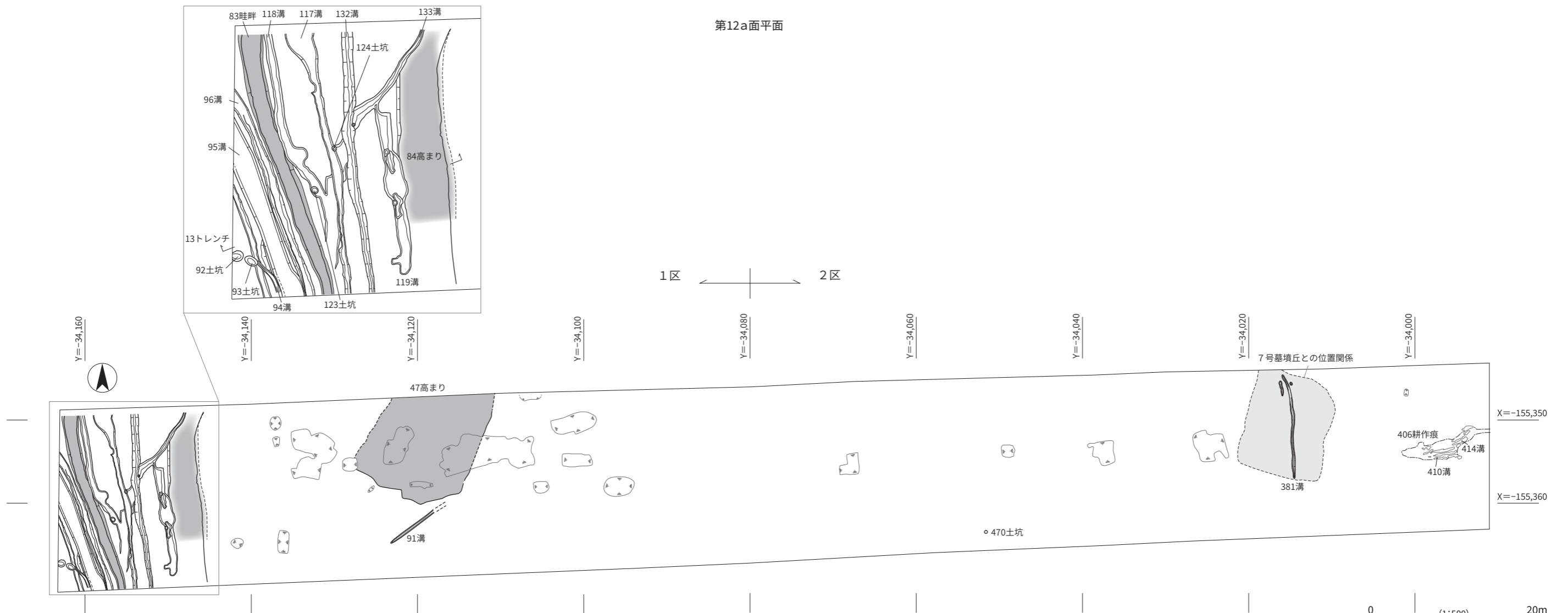


図 16 第 11 a 層出土遺物



第12a面平面



第13-1a面平面

図17 1・2区平面(5)

付くもので、時期は10世紀から11世紀前葉頃である。黒色土器は第10 a層より下位で破片が大きいものが増加する。弥生土器高杯36は、口縁端部の内・外面を挟みながらヨコナデするため端部中央部に凹みをもつ。平瓦37・38は内面に模骨痕が残り、38は外面に斜格子タタキを施す。37は硬質、38は軟質に焼成されている。時期は飛鳥時代後半から奈良時代前半である。銭貨39は和同開珎で、310畦畔北側で出土した。出土地点周辺の第10～11 a層は変形が著しく、第10 a層掘削時に第11 a層の遺物が混じるような状況があったことから、本来第11 a層に帰属する可能性がある。玉髓剥片40は305畦畔の芯から出土したものである。マットな質感で半透明の岩質である。

(8) 第11 a面〔10～11世紀〕(図15、図版2)

第10 a層を除去して検出した遺構面である。第11 a層は砂礫を含んでいることや灰白色を呈していることから第10 a層との層境が明瞭である。第11 a面では調査区全体で畦畔が検出された。

27・48・61畦畔(坪境)(図15)

27畦畔は幅1.3 m、高さ0.04 mである。48畦畔は幅1.0 m、高さ0.08 mである。61畦畔は幅1.1～1.7 m、高さ0.01～0.04 mである。3条の畦畔交点は旧恩智川の攪乱により消失している。また、48・61畦畔は47高まりに向かって北側に屈曲してつながる。47高まりは6号墓の墳丘が高まりとして残存したもので、第11 a面で47高まりは北側に規模を縮小しており、改変が加えられている。

305・310・336畦畔(坪境)(図15)

305畦畔は幅0.7 m、高さ0.1 m、310畦畔は幅0.5～1.0 m、高さ0.02～0.04 m、336畦畔は幅0.8 m、高さ0.01～0.04 mである。341畦畔は調査区境にあるため部分的な検出に留まっているが、隣接する大泉(その10)の調査成果から西側に伸びていた可能性が高く、309・310・336畦畔に囲まれた水田区画は216㎡に復元できる。

第11 a層出土遺物(図15・16、図版14)

遺物は土師器、須恵器、黒色土器等が出土した。金属製品が上下の地層と比較して多く出土した。金属製品は銭貨の割合が高い。金属製品の周辺は直径10 cm前後で金属の成分が溶出して青紫色に変色していたが、第11 a層掘削中に不時に確認したものが多く、金属製品は回収されなかったものの土が変色していた箇所を図15で図示した。

須恵器杯蓋41は扁平なつまみが付くもので、時期は奈良時代前葉頃のものである。須恵器蓋42は稜腕の蓋で、輪状のつまみが付く。時期は奈良時代後半から平安時代前期のものである。須恵器杯蓋44は硯に転用されており、内面には墨痕が残る。須恵器杯蓋43は奈良時代前半、須恵器杯蓋44、須恵器杯身45・46、壺47は奈良時代後期のものである。土師器甕48は外面のナデの痕跡が明瞭なもので、時期は奈良時代のものである。土師器碗49は高台の内側に「西」と墨書されたものである。時期は10世紀代のものである。黒色土器碗50は内面にヘラミガキが一部残るもので、A類碗を指向して製作したものと考えられるが、内面の黒化は認められない。弥生土器壺ないし鉢51は外面に凹線を施す。時期は弥生時代中期後葉。

銭貨52は貞観永寶、皇朝十二銭の一つで、初鑄年は貞観12(870)年である。銭貨53は神功開寶、皇朝十二銭の一つで、初鑄年は天平神護元(765)年である。第12 a層に陥入するような状況で出土した。銭貨54・55は和同開珎、初鑄年は和同元(708)年である。鉄鏃56は平根方頭式で、時期は古代以降のものである。台石57は表面に煤が付着したもので、敲打痕がある。円礫58は岩質が石英、加工痕や使用痕は認められない。

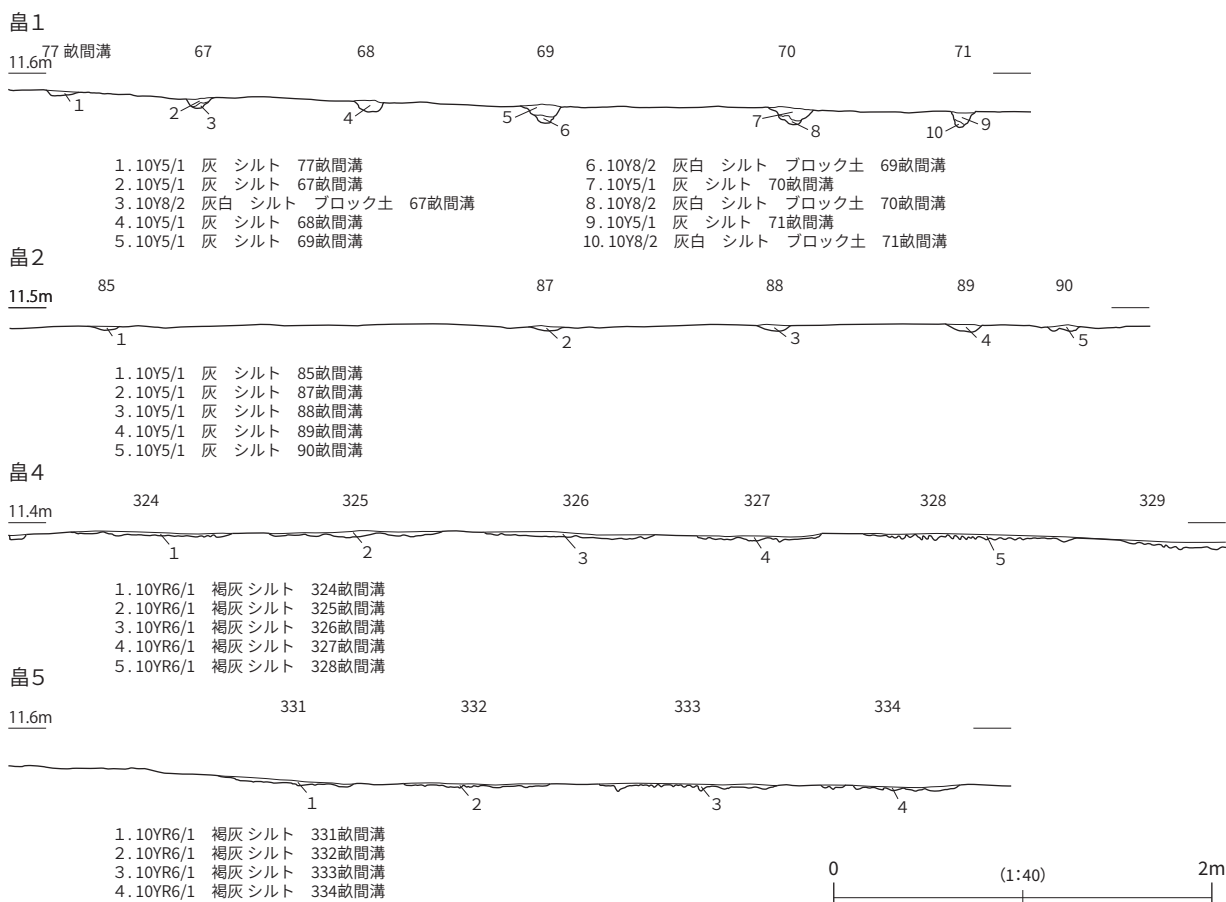
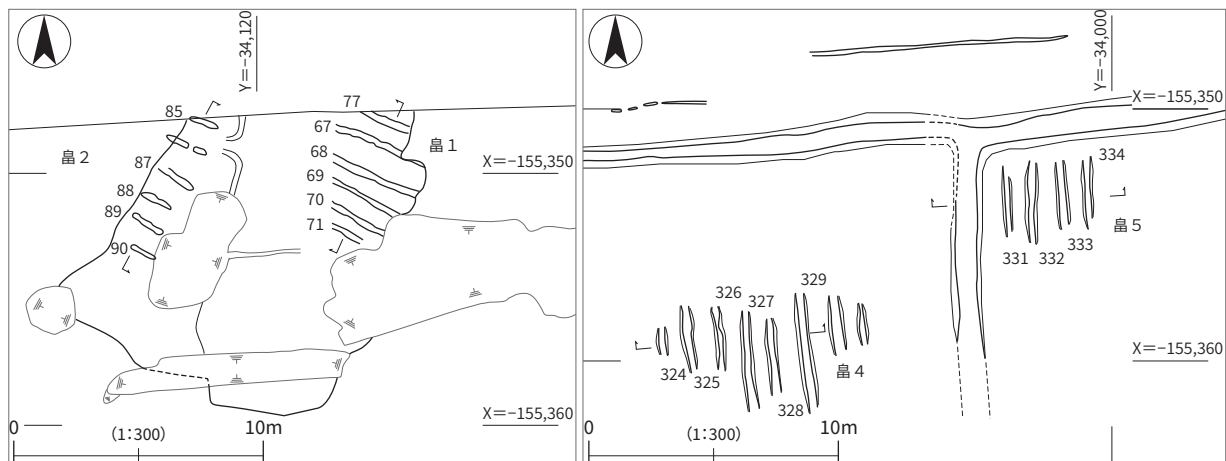


図18 畠1・2・4・5断面

(9) 第12 a面〔6～8世紀〕(図17、図版2)

第11 a層を除去して検出した遺構面である。2区では調査区中央から東側にかけて第11 a層を除去した段階で第14 b層が露出する部分があった。遺構は畦畔(坪境)、畠、溝、土坑を検出した。畠1・2、359耕作痕を除いて、第11 a層下面に帰属する。66高まりは調査時に畦畔の可能性のある遺構として掘り進めたが、最終的に畦畔と断定できず、図17では点線で図示した。

畠1・2(図17・18、図版2)

47高まりの東西で検出した畠で、畝間溝を検出した。畝間溝は幅0.06～0.32m、深さ0.02～0.1m、埋土はシルトブロック土である。遺物は土師器の細片が出土した。時期の下限は畝間溝の直上に第

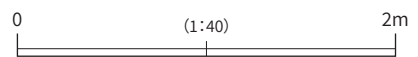
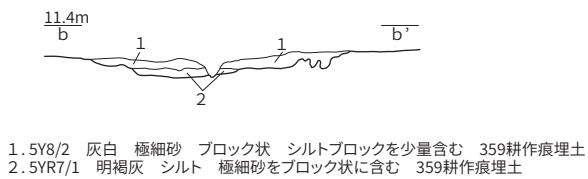
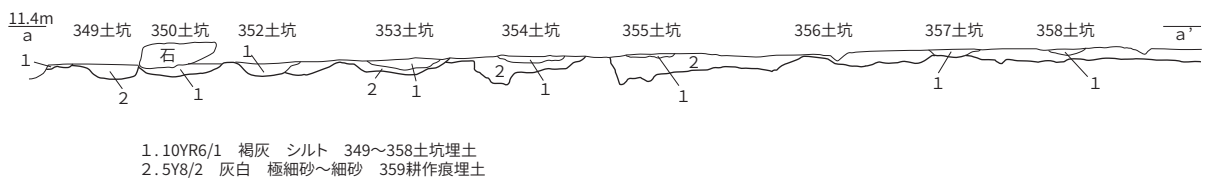
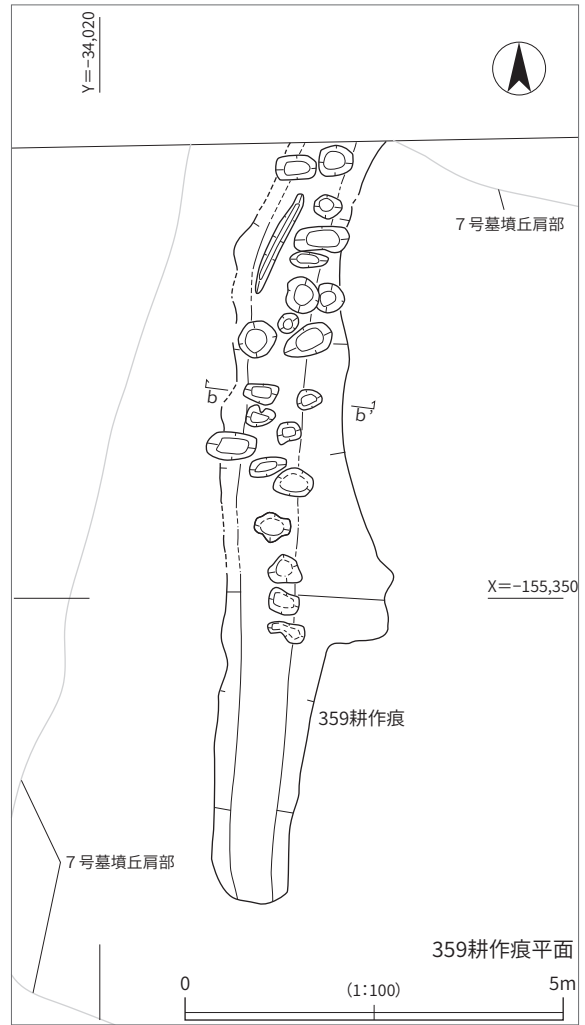
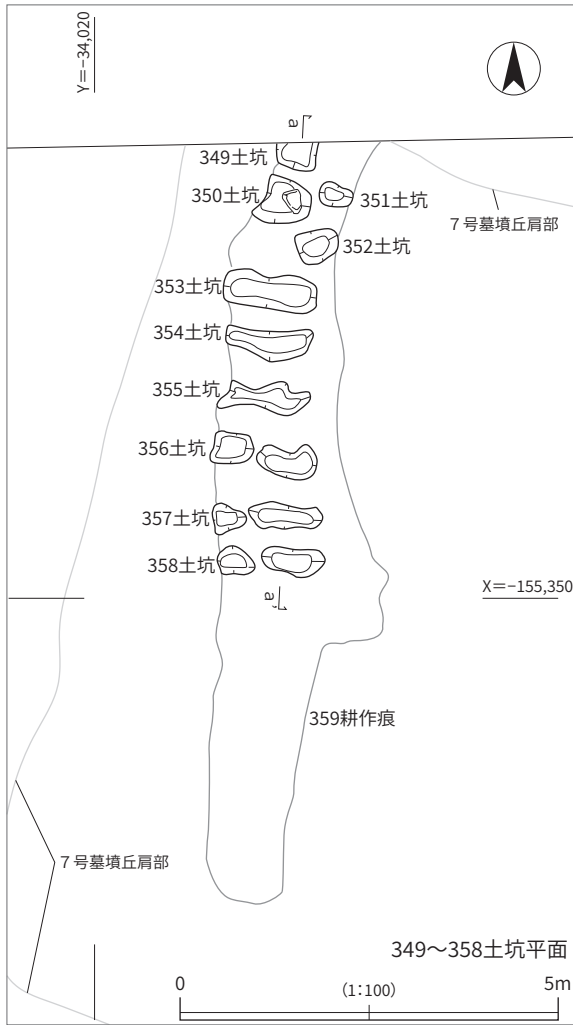


図 19 349 土坑他平・断面

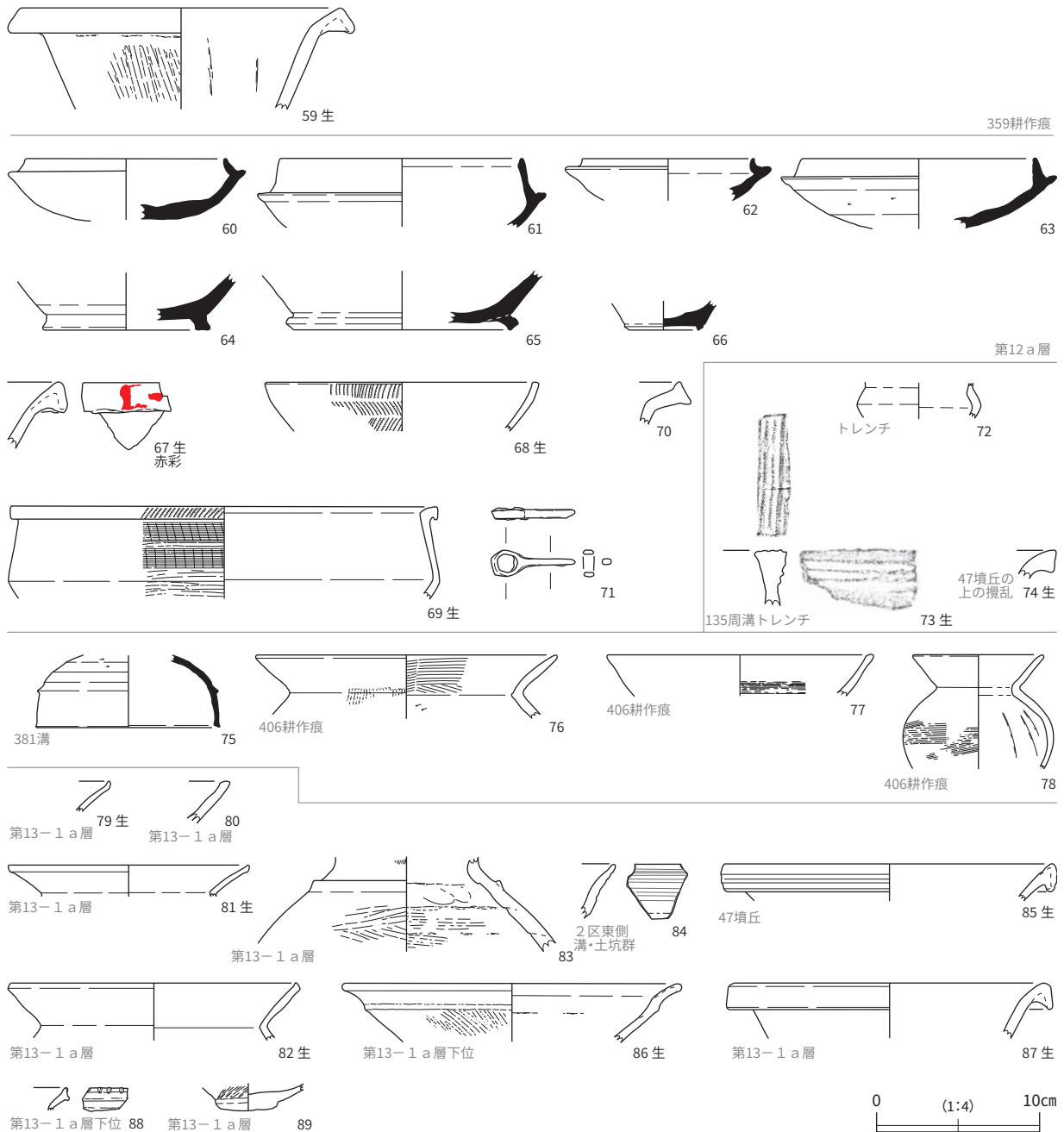


図20 第12a層他出土遺物

11 a層が堆積していることから平安時代前期以前、上限は47高まり周辺に堆積する第12 a層が第12 a層下位に対比できる可能性が高いことから、古墳時代中期以降を想定している。

畠4・5 (図17・18、図版2)

61畦畔の南側で、畝間溝を検出した。第11 a層下面に帰属し、畠4・5を検出した区画内は畠として土地利用されていたと考えている。畝間溝は幅0.65～1.0 m、深さ0.02～0.04 mである。畝間溝埋土は各溝埋土を一部抽出して、洗浄を行ったが、種子等の植物遺体は出土しなかった。

78・79・322・346・347・348 溝 (図17)

断面はV字形、幅0.05 m、深さ0.7 m、埋土下層には粘土質シルトの堆積が認められる場合があった。粘土質シルトは溝内が水浸かりして堆積したものである。東西方向の2条の溝を1区から2区にかけて検出しており、溝と溝の間隔は1.8 m前後である。轍痕か、鋤等を用いた耕作痕と考えている。

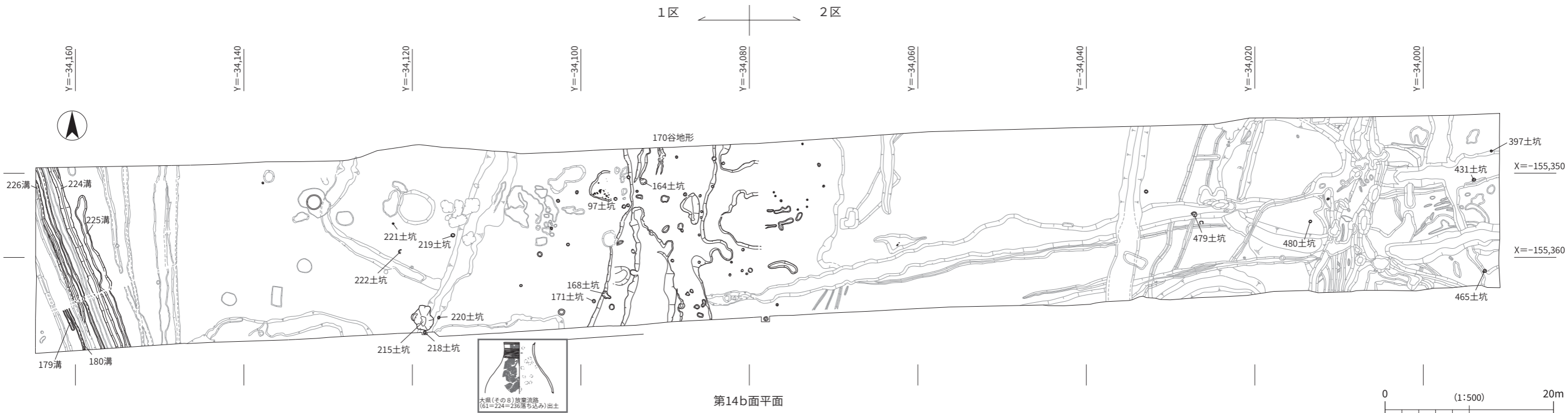
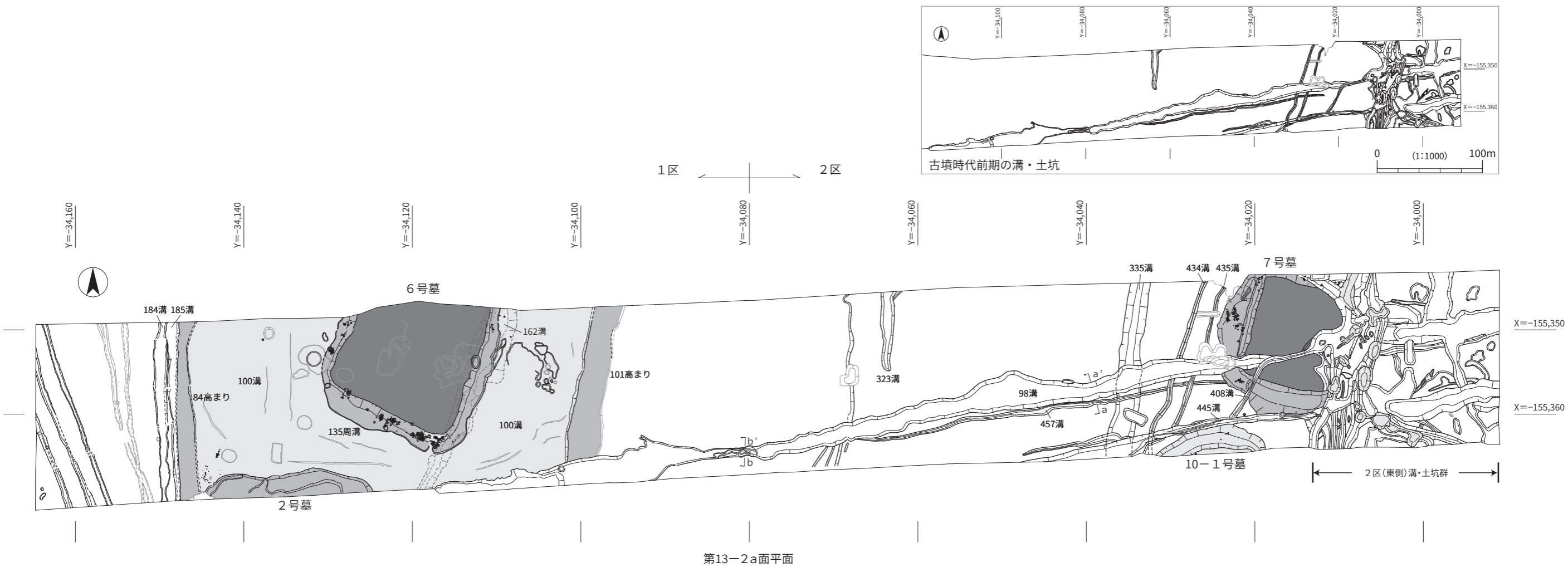


図21 1・2区平面(6)

349～358 土坑、359 耕作痕（図 17・19・20、図版 2）

349～358 土坑と 359 耕作痕は切り合い関係があり、349～358 土坑が新しい。349～358 土坑は短軸 0.2～0.5 m、深さ 0.8 m、埋土は泥質のシルトである。遺物は土師器、須恵器杯蓋・甕が出土した。いずれも細片で、須恵器甕は平安時代以前のものである。359 耕作痕は幅 1～2 m、深さ 0.1 m、埋土はブロック状の細砂～細砂である。加工面では 349～358 土坑のように平面が南北に長い楕円形状の凹みが列状に並んでいる状況を検出している。359 耕作痕の加工面で検出した列状の凹みは 349～358 土坑と重なるものもあるが、349～358 土坑の掘り残しを検出したものではなく、359 耕作痕の加工面に伴うものである。土坑と耕作痕の埋土の一部は小割と洗浄を行ったが、種子等の植物遺体は出土しなかった。遺物は弥生土器広口壺 59 が出土した。直下にある 7 号墓に関係する遺物である。349～358 土坑、359 耕作痕の廃絶後には近接して第 11 a 面で 321 畦畔（第 10 a 層下面帰属）を検出しており、349～358 土坑、359 耕作痕は地割に関係する場所に掘削された可能性がある。

大県（その 9）の調査においても 349～358 土坑と 359 耕作痕と同様の土坑が検出されており、牛馬の歩行痕の可能性が指摘されているが、今回検出した 349～358 土坑、359 耕作痕は平面形の加工形状が明瞭で人為的に掘削された可能性が高い。359 耕作痕ではブロック状の土で短期間に埋め戻されている状況を確認しており、育苗等を目的とした植栽痕を遺構の性格の一つとして想定している。

第 12 a 層他出土遺物（図 20、図版 9）

遺物は弥生土器広口壺 67・台付鉢 68・69・甕 70、土師器、須恵器杯身 60・61・62・有蓋高杯 63、金属製品が出土した。時期は古墳時代後期から奈良時代のものが多い。第 12 a 層から出土した遺物は調査区内の地点によって時期が偏っており、1 区西側は古墳時代後期の遺物、1 区中央から 2 区西側は古墳時代の遺物と少量の奈良時代の遺物（第 12 a 層上位）、2 区東側は奈良時代の遺物が出土している。71 は先端を環状に加工した金具で、軸部は欠損する。2 区坪境の交点付近で出土したものである。土師器小型丸底壺 72 は体部に強い屈曲部を持ち、中・四国系の土器と考えている。2 区南側法面のトレンチ掘削時に出土したもので、第 13 - 2 a 面の古墳時代前期の溝に帰属する資料である。弥生土器鉢 73 は口縁端部と外面に凹線文を施し、6 号墓に関係する遺物である。弥生土器 74 は 6 号墓上の攪乱から出土したもので、器種は器台か。

(10) 第 13 - 1 a 面〔古墳時代前期～中期〕（図 17）

第 12 a 層を除去して検出した遺構面である。遺構は高まり、畦畔、溝、土坑を検出した。47 高まりとした 6 号墓の墳丘は墳丘上部が露出した状態になる。

83 畦畔（図 17・23）

幅 1.0 m、擬似畦畔として検出した。83 畦畔の西側には第 13 - 1 a 層が堆積しており、第 13 - 1 a 層形成時（古墳時代前期）には畦畔として機能していたと考えている。96・118 溝等を掘削した際に生じた排土を 83 畦畔に盛土していた可能性があるものの、後世に土壌化しており検証しえなかった。なお、83 畦畔より西側で基盤層が高くなっている状況を確認しており、平面的に検証できなかったが古い段階から区画が存在した可能性がある。

84 高まり（図 17・22・23）

幅 3.0 m で、擬似状に検出した。上部は削平を受ける。84 高まり東側は第 13 - 1 a 層、西側は 117～119・132 溝廃絶後の落ち込みの埋土が堆積しており、時期は古墳時代中期後葉以前と考えている。西側に堆積する第 13 - 1 a 層は層厚が薄く、弥生時代中期後葉の 6 号墓構築時に 84 高まりが伴っていた

か検証性に乏しいが、84 高まりの基底面を構成する第 13 - 2 a 層上面は 84 高まり直下で高くなっており、周辺より高い場所であったことまでは確認できた。遺物は縄文時代晩期の土器と弥生時代前期の土器が出土しているが、下層からの混入と考えられる。

95・117～119・132 溝 (図 17・22・23)

95 溝は幅 0.7～0.8 m、深さ 0.35 m、埋土は粘土質シルトである。遺物は布留式以降のものと考えられる土師器甕体部片が出土した。117 溝は幅 0.7 m、深さ 0.3 m、埋土は粘土質シルトである。118 溝は幅 0.4～1.0 m、深さ 0.13 m、埋土は粘土質シルトである。119 溝は幅 1.2 m、深さ 0.06 m、埋土はシルトである。132 溝は幅 0.8 m、深さ 0.3 m、埋土は粘土質シルトである。117・118・119 溝から遺物は出土しなかった。117～119・132 溝廃絶後、溝の直上は周辺より低くなって落ち込み (83 畦畔から 84 高まりの範囲) になっており、泥質の土で埋没していた。落ち込みからは須恵器杯蓋と須恵器体部片が出土した。須恵器杯蓋は天井部から稜の部位が出土しており、TK23～47 型式に位置付けられるものである。また、弥生土器甕 (図 22 - 155 取上) の口縁部が 119 溝肩部から出土している。

381 溝 (図 17・20)

幅 0.3 m、深さ 0.1 m、埋土は極細砂質シルトである。遺物は須恵器杯 75 が出土した。TK23～47 型式に位置付けられるものである。7 号墓の直上で検出しており、381 溝の存在が、墳丘の改変が古墳時代中期中葉から後葉以降には始まっていたことを示すと考えている。

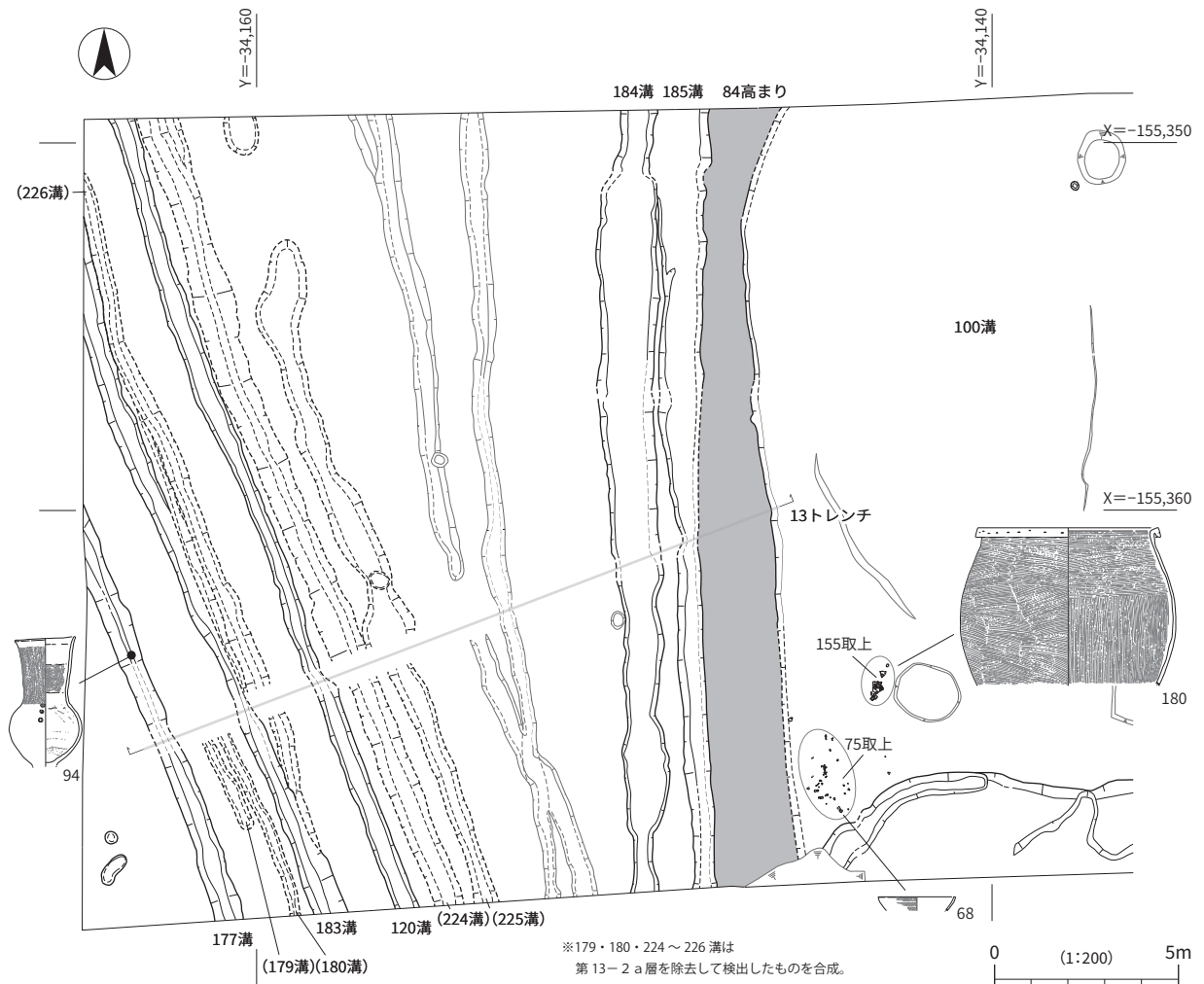


図 22 第 13 - 2 a 面調査区西側平面

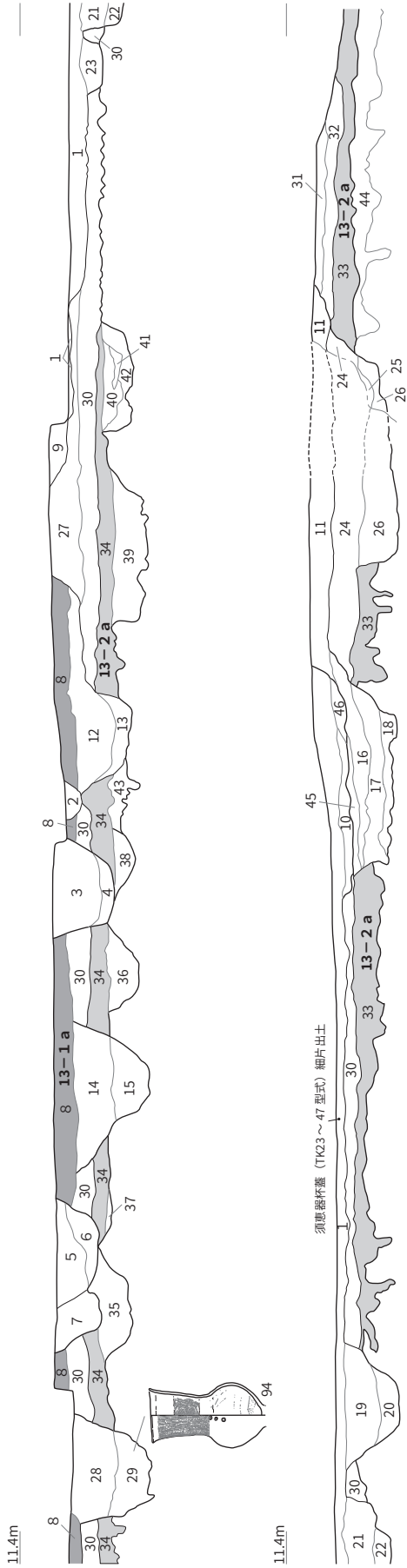
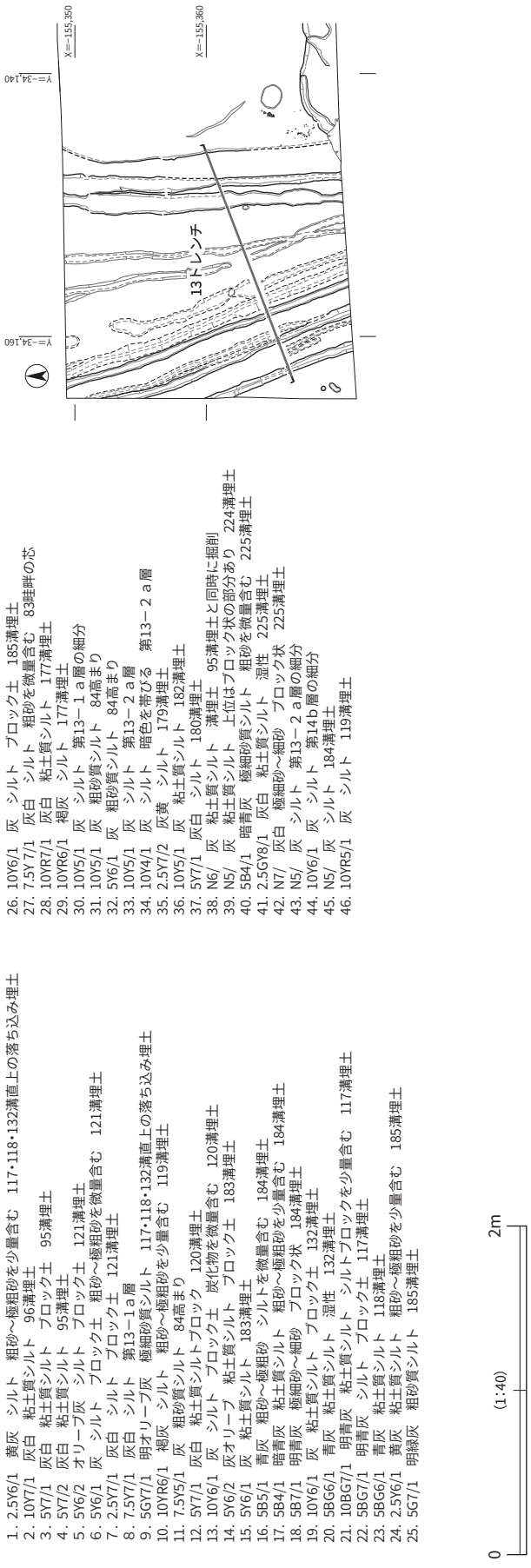


図 23 13 トレンチ断面



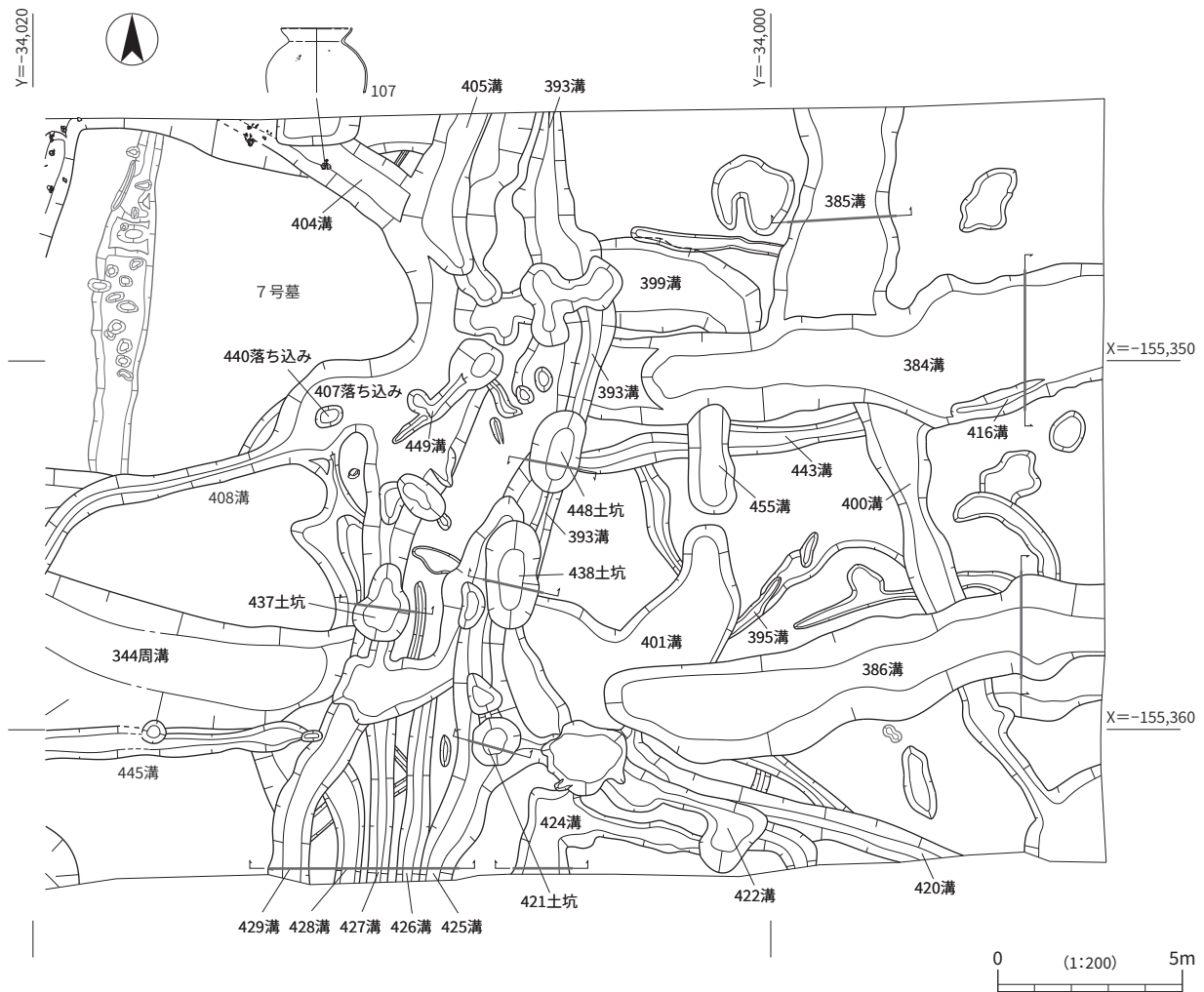


図24 第13-2 a面調査区東側平面

406 耕作痕、410 溝 (図17・20)

砂礫(粗砂から極粗砂主体)の堆積範囲を406耕作痕とした。検出長11.0m、幅2.5mである。調査当初、溝と考えていたが、砂礫は自然堆積の構造を保った部分が無く、全体的に擾乱される。砂礫の下面で耕作に関連すると考えられる溝を検出しており、砂礫の堆積範囲を耕作痕として遺物を取り上げている。生駒山地側から供給された砂礫を畠作土として用いたものと考えている。今回の調査で、生駒山地側から供給された砂礫の可能性のあるのは、409耕作痕の範囲に堆積した砂礫のみである。

遺物は土師器甕76・77、小型丸底壺78が出土しており、庄内式後半から布留式を中心としたものが出土している。土師器甕76は410・414溝から出土したものと接合している。410溝は406耕作痕を除去して検出しており、幅0.3m、深さ0.03～0.05mである。

第13-1 a層他出土遺物 (図20・27、図版9)

土師器甕79・80は2区東側、土師器甕81は6号墓の墳丘際、土師器甕82は2区西側から中央にかけて地形が高くなっていく部分にそれぞれ堆積する第13-1 a層から出土した。79・81・82の時期は庄内式後半。壺83はパレススタイルの壺で、頸部より下がった位置に断面が三角形状の突帯がめぐる。胎土は白褐色を呈する。東海系。6号墓の墳丘南西辺から南東隅にかけて細片となって散らばり、一部は6号墓の弥生土器に混じって出土した(図39)。土師器甕84は7号墓の東側調査時に出土したものである。口縁部外面に擬凹線を施す。北陸系。弥生土器広口壺85は6号墓墳丘斜面に堆積する13-1 a

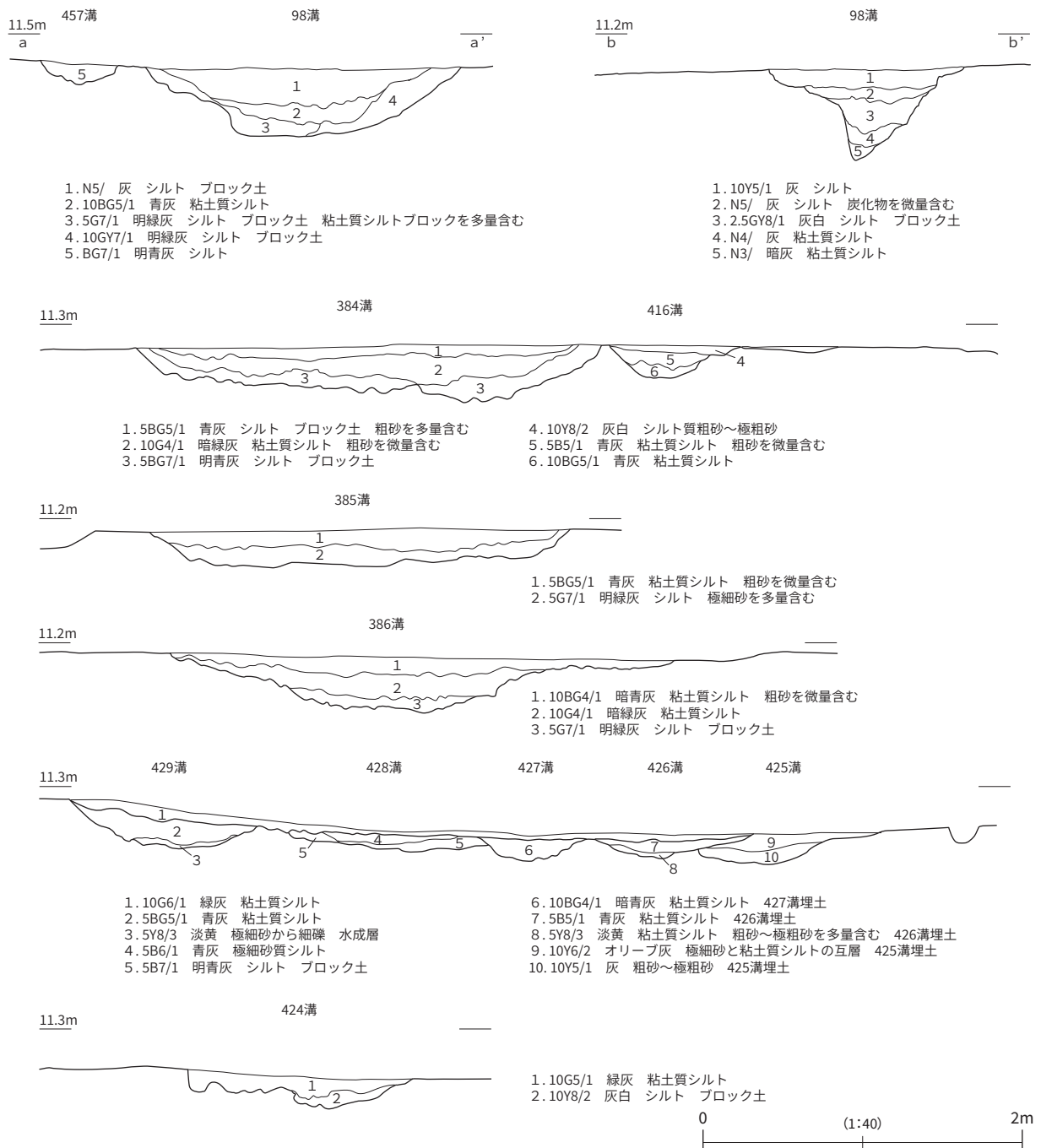


図 25 384 溝他断面

層下位から出土したもので、口縁部外面に擬凹線をめぐらす。有段口縁の高杯 86 は 2 区東側の溝が多数検出された範囲の直上に堆積する第 13 - 1 a 層下位から出土した。時期は弥生時代中期後葉。広口壺 87 は 7 号墓周辺の第 13 - 1 a 層から出土した。口縁部は端部を折り返して内側に粘土を貼り足して成形したものである。甕 88 は高杯 86 とともに第 13 - 1 a 層から出土したものである。口縁端部に刻目を施し、台付鉢 177 と胎土が似る。甕 89 は 323 溝 (図 21) 周辺の第 13 - 1 a 層から出土した。時期は弥生時代後期のものである。鉢 95 は 308 溝 (近世) から出土した (図 7)。大形鉢で、口縁部と体部は欠損する。図示していないが、別個体の大形の鉢が出土しており、今回出土した大形の鉢の個体数は 2 点である。他に、6 号墓 135 周溝直上に堆積する第 13 - 1 a 層からクロヒメゴモクムシ *Tachycellus anchomenoides* Bates の前胸背板が出土した。^(註1) 平地から低山地に生息する昆虫である。

(11) 第13-2 a面〔弥生時代中期後葉～古墳時代前期〕(図21、図版2)

第13-1 a層を除去して検出した遺構面である。調査区の西側と第14 b面170谷地形周辺を除いて、基盤層の第14 b層が露出している。6号墓周辺では、第13-1 a層は2層以上に細分することが可能で、細分できた範囲は層毎に掘り下げを行っている。第13-2 a面調査時に基盤層が露出している範囲が広がったこともあり、6号墓周辺と98溝を除いて、弥生時代と古墳時代の大半の遺構を同時に検出した。

1区西側で検出した複数の溝〔以下、1区(西側)溝群〕は、弥生時代から古墳時代にかけて掘削された溝である。地形は、6号墓100溝西側で一旦高くなった後、西側に向かって緩やかに下がっており、傾斜が変わっていく場所に溝は開削される。当該範囲に溝が最初に開削された時期は遺物が出土していない溝が含まれているため想定の出ないが、層位的な検討や埋土の状況、周辺から出土した遺物を検討すると弥生時代中期後葉頃まで遡ると考えている。最も新しい溝の時期は、第13-1 a面で検出した溝の遺物から古墳時代中期後葉頃を想定している。古墳時代前期の溝は抽出できていない。

2区で検出した複数の溝・土坑〔以下、2区(東側)溝・土坑群〕は、7号墓東側の地形が低い場所を改変して掘削した溝・土坑群である。溝・土坑は埋没しきらない内に掘削が繰り返されて形成されており、切り合い関係がないか、切り合い関係が把握できなかつたものが多く含まれる。溝の連続性についても複数の溝が同時に埋没するような状況の中、溝の掘削が繰り返される範囲に当たるため、把握できないものがあった。

120・177・184・185溝(図22・23、図版9)

120溝は幅0.7m、深さ0.4m、埋土はシルトブロック土である。遺物は土師質の土器細片が出土した。177溝は幅0.7m、深さ0.48m、埋土は粘土質シルトである。遺物は弥生土器長頸壺94が出土した。長頸壺94は口縁から頸部外面にヘラミガキを施す。体部外面は平滑に仕上げられており、ナデによるものと考えられる。口縁から頸部内面はハケ、体部内面はナデを施す。肩部に竹管文を縦方向に3箇所施す。時期は弥生時代後期中葉頃のものである。184溝は幅1.2m、深さ0.3m、機能時の埋土は

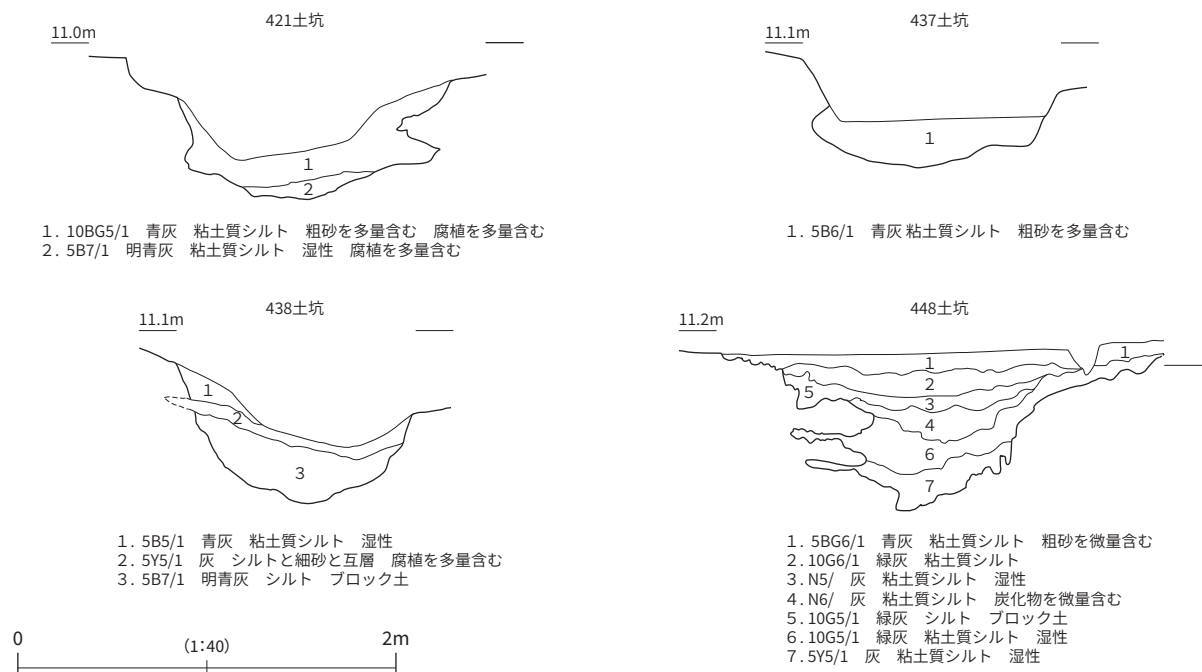


図26 421土坑他断面

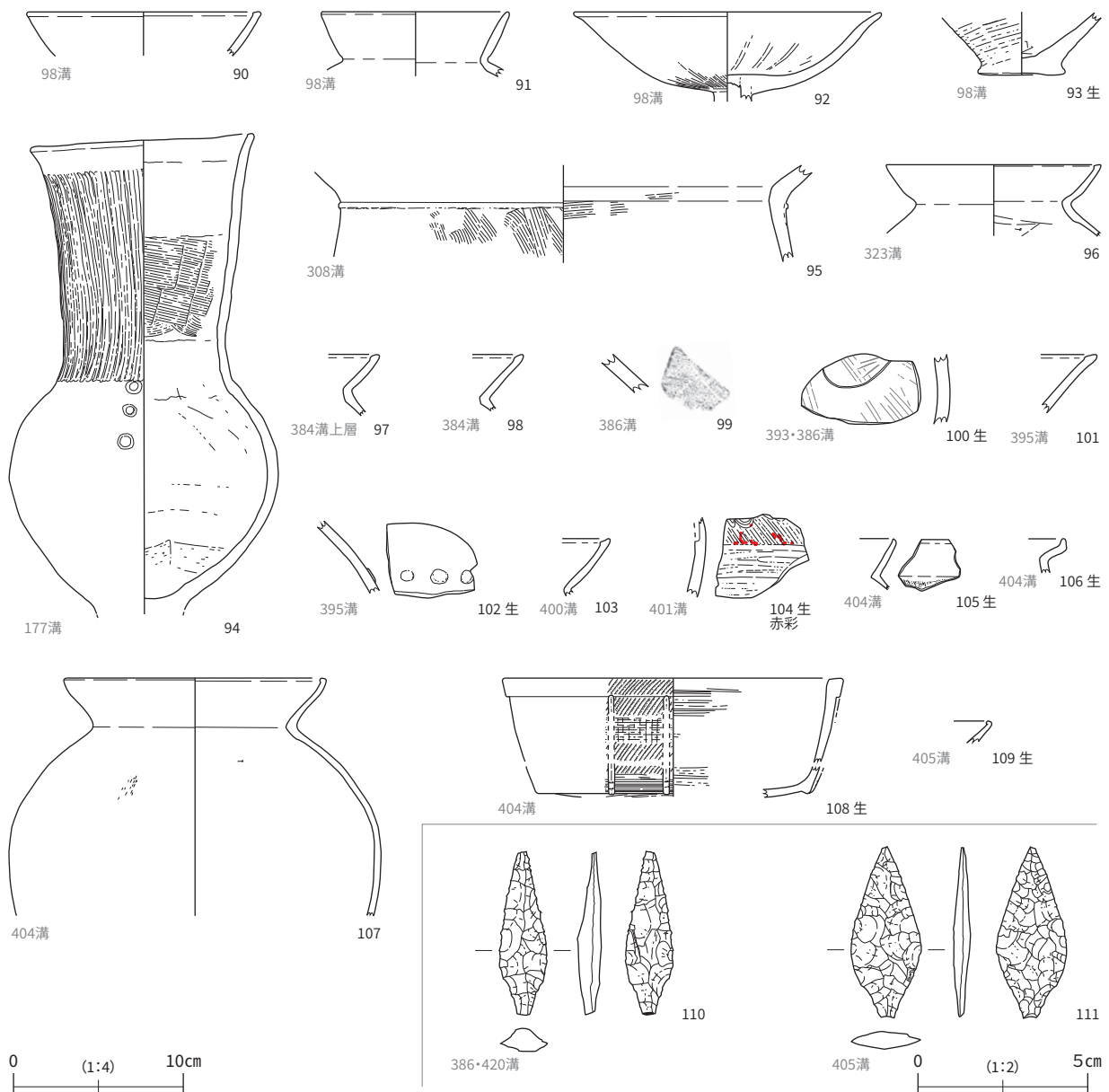


図 27 98 溝他出土遺物

粘土質シルトである。遺物は縄文時代から弥生時代のものと考えられる土器片が出土した。185 溝は幅 0.4～1.7 m、深さ 0.2 m、埋土は粘土質シルトである。遺物は出土しなかった。

98・445 溝 (図 25・27・30)

98 溝は幅 0.9～4.5 m、深さ 0.6 m である。埋土は溝底面が高い東側がブロック土、溝底面が低い西側が湿性の堆積物である。東側で 2 区 (東側) 溝・土坑群とつながっている。流向は西方向である。遺物は、弥生土器、土師器甕・高杯が出土した。弥生土器甕 93 は外面にタタキを施す。土師器甕 90 は口縁部が肥厚し、内外面をヨコナデする。土師器高杯 92 は内面に放射状にヘラミガキを施したものである。布留式後半頃に位置付けられるもので、出土遺物に須恵器は含まれなかった。

445 溝は掘り直しが行われており、古・新段階に分けて掘削した。ただし、445 溝の古段階と新段階の溝埋土が分かれていたのは 10-1 号墓周辺のみである。10-1 号墓の周溝と切り合い関係があり、10-1 号墓の周溝埋没後に掘削されている。新段階の規模で幅 0.7 m、深さ 0.4 m、埋土は古・新段階ともに粘土質シルトである。遺物は土師器甕・小型丸底壺等が出土した。土師器甕は布留式後半に位置

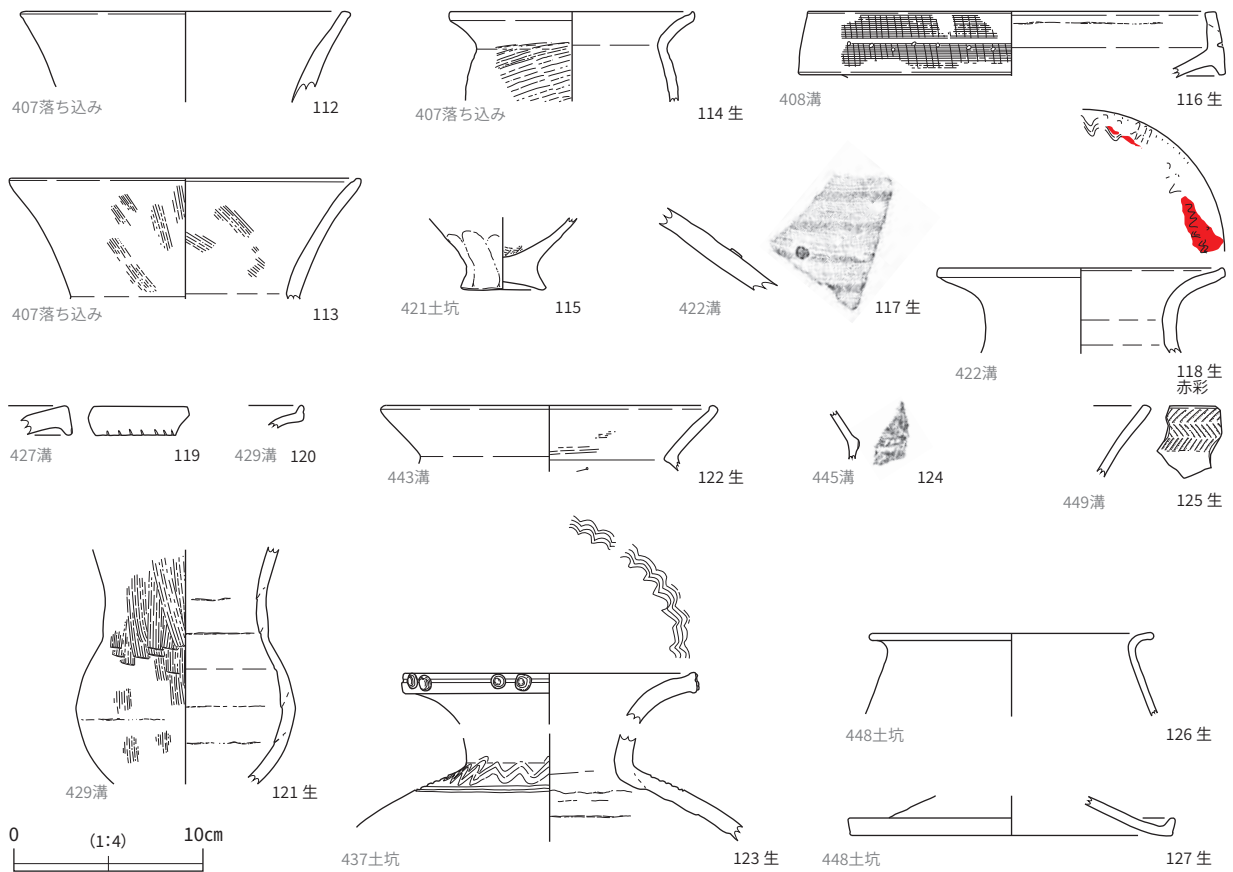


図 28 407 落ち込み他出土遺物

付けられるものが出土している。また、弥生土器壺ないし手焙形土器かと思われる 124 が出土した。胎土は灰白色を呈し、搬入品と考えられる。

323 溝 (図 21・27)

幅 1.5 m、深さ 0.3 m、埋土は粘土質シルトである。遺物は弥生土器、土師器甕が出土した。土師器甕 96 は摩滅が顕著で、体部内面はヘラケズリを施している。時期は布留式前半のもので、他に庄内式後半のものが出土している。

384・385・386 溝 (図 24・25・27、図版 9)

384 溝は幅 2.2 ~ 3.7 m、深さ 0.36 m、埋土は機能時のもので粘土質シルトである。遺物は土師器甕・高杯が出土した。土師器甕 97・98 は布留式後半のものである。385 溝は 384 溝に連続する溝である。南北で高低差は無く、流向は不明であるが、全体的な地形を考慮すると北方向に流れたと想定しており、384 溝が一定程度埋没した段階に機能したのか、溝内の水位が上昇した際に機能したと考えている。遺物は土師質の土器細片が出土した。386 溝は幅 1.94 ~ 3.2 m、深さ 0.35 m、埋土は粘土質シルトである。遺物は弥生土器、縄文土器、石鏃 110 が出土した他、弥生土器壺 99・100 が出土した。壺 100 は外面に楕円形状の線刻を施す。時期は弥生時代後期のものである。石鏃 110 はサヌカイト製で、裏面右側縁部が一部階段状の剥離になっている。

395 溝 (図 27)

幅 0.6 m、深さ 0.07 m、埋土はシルトである。遺物は土師器甕 101 が出土した。土師器甕 101 は布留式後半のもので、庄内式の甕の破片も出土している。また、弥生土器壺 102 も出土しており、102 は外面に円形浮文を貼り付けたものである。

400 溝 (図 24・27)

幅 0.5 ～ 1.6 m、深さ 0.1 m、埋土は粘土質シルトである。遺物は土師器甕が出土した。土師器甕 103 は肥厚気味の口縁部で、口縁端部のヨコナデにより端面が凹む。時期は布留式中段階頃のものである。

404・405 溝 (図 24・27、図版 3・9)

404 溝は幅 1.5 m、深さ 0.6 m、埋土は粘土質シルトである。遺物は弥生土器、土師器甕が出土した。土師器甕 105・107 は口縁端部をつまみ上げる。107 は器壁が薄く体部が球胴化したものである。弥生土器高杯 236 の破片が出土しており、7号墓 344 周溝内から出土したものと接合している。弥生土器甕 106 は上方に先細る口縁端部で、時期は弥生時代後期中葉以前のものである。台付鉢 108 は外面に棒状浮文を貼り付けたもので、時期は弥生時代中期後葉である。

405 溝は幅 2.3 m、深さ 0.6 ～ 0.7 m、埋土は粘土質シルトである。404 溝との切り合い関係は無い。遺物は弥生土器、土師器甕、石器が出土した。土師器甕 109 は口縁端部をつまみ上げたもので、端部先端はやや丸味を帯びる。時期は庄内式後半のものである。石鏃 111 はサヌカイト製、側縁に形状を整えるための微小な剥離調整を行う。

424 ～ 429 溝 (図 24・25・28、図版 2・3)

424 溝は幅 1.4 m、深さ 0.2 m、埋土は湿性の粘土質シルトである。425 溝は幅 1.2 m、深さ 0.2 m、埋土下層は粗砂から極粗砂で水成層である。426 溝は幅 0.7 m、深さ 0.15 m、埋土は粘土質シルトである。427 溝は幅 0.6 m、深さ 0.15 m、機能時の埋土は粘土質シルトである。428 溝は幅 0.7 ～ 1.0 m、深さ 0.1 m、機能時の埋土は極細砂シルトである。429 溝は幅 1.1 m、深さ 0.2 m、機能時の埋土は極細砂質シルトである。424 ～ 429 溝の上部は、最終的に同時に埋没している。

遺物は 426・427・429 溝から庄内式の甕細片、425 溝から布留式後半の甕口縁部の細片が出土した他、弥生土器、縄文土器が出土した。弥生土器は弥生時代の東側の墓域に関わると考えられるもので、広口壺 119、甕 120、直口壺 121 が出土した。121 は同一個体の可能性がある、垂下する口縁部が出土しているが、頸部と直接接合しておらず図示していない。

421・437・438・448 土坑 (図 24・26・28、図版 3・9)

7号墓東側で検出した溝底では土坑を複数検出した。それぞれ離れた位置で掘削しているため、切り合い関係のある土坑は皆無に近く、新旧関係は不明なもの多い。土坑と溝に切り合い関係は無く、完全に埋まりきらない内に新たに掘削された土坑も含まれている。断面形は側方浸食によって外側に広がるものが多数あった。

421 土坑は平面が不整な円形、直径 1.4 m、深さ 0.7 m、埋土は湿性の粘土質シルトである。遺物は弥生土器・土師器の細片が出土しており、庄内式から布留式のものである。115 は鉢の底部か。

437 土坑は平面が不整形、長軸 2.0 m、短軸 1.5 m、深さ 0.5 m、埋土は粘土質シルトである。遺物は広口壺 123 が出土しており、広口壺 123 は他の遺構から出土したものと接合している。

438 土坑は平面が南北に長い楕円形状、長軸 3.0 m、短軸 1.5 m、深さ 0.73 m、埋土は下層がブロック土、中層が水成層の細砂とシルトの互層である。遺物は弥生土器細片が出土した。

448 土坑は平面が南北に長い楕円形状、長軸 2.2 m、短軸 1.4 m、深さ 0.8 m、埋土は湿性の粘土質シルトである。側方浸食により大きく抉れている部分がある。遺物は土師器甕、弥生土器甕 126・高杯 127、縄文土器が出土した。土師器甕は口縁部の細片が出土しており、布留式後半に位置付けられるものである。弥生土器甕 126 はくの字形の口縁部で小型のものである。

2号墓 (図 21・29、図版 11)

大泉 (その 8・9) で検出された 2号墓の北東側の周溝を検出した。2号墓の墳形は長方形である。墳丘の再構築が行われており、古段階の墳丘の規模は長辺 22.4 m、短辺 14.8 m、高さ 0.8 ~ 1.0 m である。2号墓は 6号墓と同様に、大形に分類される方形周溝墓である。墳丘内で埋葬施設は確認されなかったが、2号墓南東側では周溝内埋葬が確認されている。周溝内埋葬では木棺の底板が検出されたが、人骨や副葬品は確認されなかった。

115周溝は検出幅 3.0 m、深さ 0.2 m、埋土下層はシルトブロック土である。肩部は掘り込みが鋭角ではないため不明瞭である。遺物は弥生土器広口壺 128 が出土した。広口壺 128 は口縁から体部上半に櫛描簾状文、体部下半にヘラミガキを施す。時期は弥生時代中期後葉のものである。広口壺 128 周辺で採取した土を洗浄したところ、草本のコムギ、ホタルイ属に同定される種子が出土した。種子は土器内に納められていたか、周辺で生育していたものが流入した可能性がある。

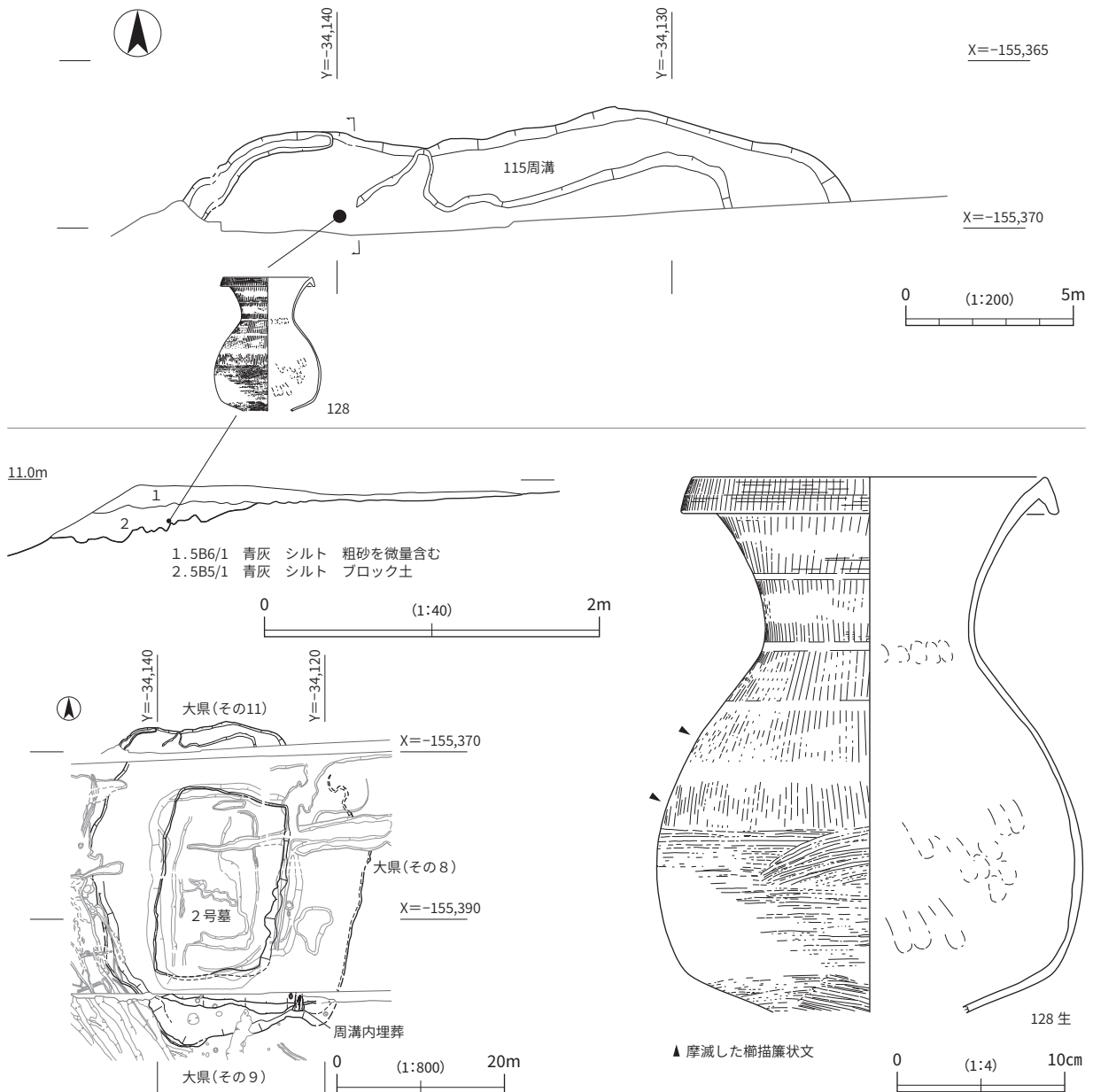


図 29 2号墓平・断面、出土遺物

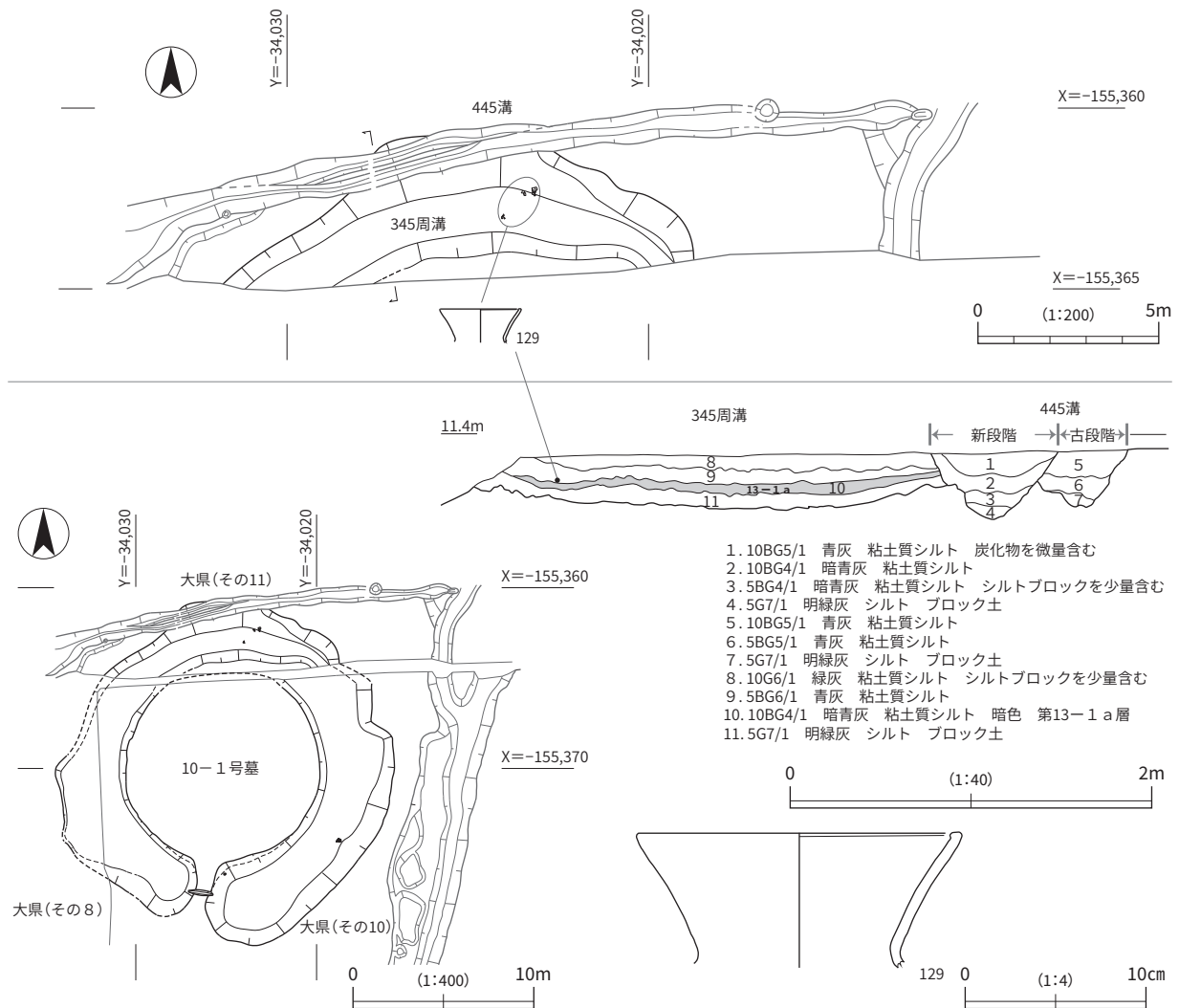


図30 10-1号墓平・断面、出土遺物

10-1号墓 (図21・30、図版9)

10-1号墓は大県(その10)で検出された円形の周溝墓で、直径11.5mである。後世の削平が顕著で、埋葬施設は確認されていない。墳丘の南側で陸橋が確認されている。

今回の調査では10-1号墓の北側周溝を検出した。検出幅4.0m、深さ0.3m、埋土は底面直上がブロック土で、直上に土壌化が顕著な粘土質シルト(図30-10層)が堆積しており、7号墓の344周溝埋土の図60-6層(28トレンチ)に対比できる。調査区内で周溝埋土が墳丘の南側肩部にすり付く状況は確認されておらず、墳丘の南側肩部は今回と大県(その10)の調査区の間にあったと考えている。

遺物は図30-9層から土師器壺129が出土した。時期は布留式後半のものである。大県(その10)の10-1号墓の調査では、弥生土器壺が出土しており、時期は弥生時代後期が想定されている。345周溝の北端で検出された445溝は345周溝埋土を切って掘削されている。7号墓東側で検出した古墳時代前期の溝は7号墓周溝の凹みを加工して掘削されていることから、当時の地表面が遺構検出面より高かった場合、周溝が凹みとして残っていたことが想定でき、445溝は10-1号墓の周溝肩部を意識して掘削されている可能性がある。なお、周溝からの出土遺物は少なく、弥生時代から古墳時代の遺物が出土しており、時期の特定が難しい状況にあったが、古墳時代前期の遺物が墳墓廃絶以降の資料に位置付けられることが今回の調査でも確かめられた。

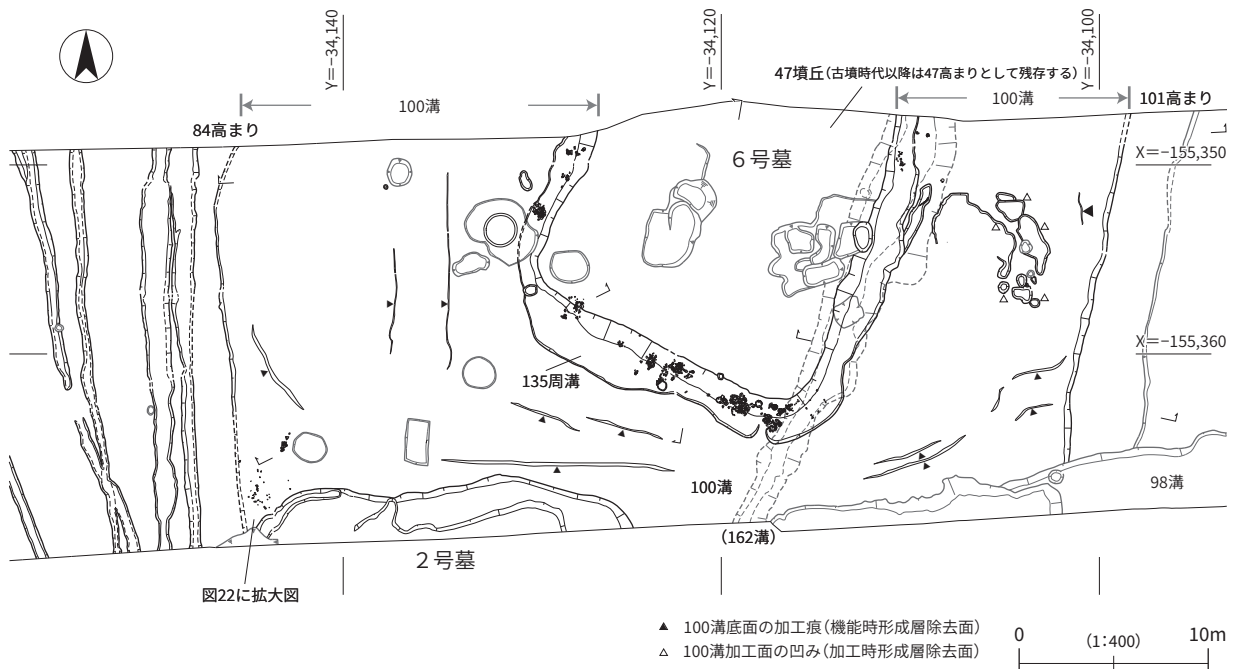


図 31 6号墓平面 (1)

6号墓 (図 31 ~ 58、巻頭図版 1、原色図版 1・2、図版 4 ~ 7)

墳形は長方形、長辺 17.0 m 以上、短辺 16.0 m、墳丘基底面からの高さ 0.5 m である。墳丘の北東側は調査区外にあり、全容は不明である。6号墓では墳丘、埋葬施設、135周溝、100溝、162溝、223陸橋、100溝の外側で 84・101高まりを検出しており、各遺構の変遷を第 1面から第 5面に分けて調査した。

調査は、第 1面 (6号墓廃絶面)、第 2面 (135周溝加工面)、第 3面 [埋葬施設検出面 (墳丘盛土中の任意面)]、第 4面 (墳丘盛土中の任意面)、第 5面 (6号墓加工面) として行った。以下では面毎に 6号墓の調査成果をまとめる。

なお、出土遺物は遺構番号と連番で取り上げており (例: 138 土器)、本報告では遺物番号と重複しないように土器を取上に変更して記載している (例: 138 取上)。

a. 第 1面 [6号墓廃絶面] (図 31・32・36 ~ 39)

100溝の泥質の埋土を除去した段階で、墳丘周辺を中心に多量の弥生土器が出土した。

6号墓周辺から出土した弥生土器は墳丘北西辺、墳丘南西辺、墳丘南東辺、100溝と 2号墓 115周溝 (北西側) 周辺 (図 22 - 75・115 取上) から集中的に出土した。墳丘南西辺と北西辺では墳丘斜面から 135周溝底面にかけて弥生土器が出土している。

弥生土器の出土量は墳丘南西辺が多く、墳丘上から転落しているような出土状況を示しており、墳丘周辺から出土した弥生土器は墳丘上に並べられていた可能性がある (図 37)。墳丘南西隅から出土した甕 178 は周溝内の埋土中に含まれるもので、後世の作土により上部を削平されており、第 9・10・12 a 層から出土した破片と接合している (図 35・36)。

墳丘南東辺から出土した弥生土器は北東隅に近い部分から主として出土した (図 38)。遺物量は北西辺及び南西辺と比較すると少なく、143 取上の土器は溝底面からやや浮いた状態から出土しており、二次的に移動しているものと考えている。台付鉢脚部 165 も底面から 0.2 m 浮いた状態で出土したものである。100溝南西部出土土器は、近接する 2号墓の 115周溝内から広口壺のまとまった個体 128 が出土

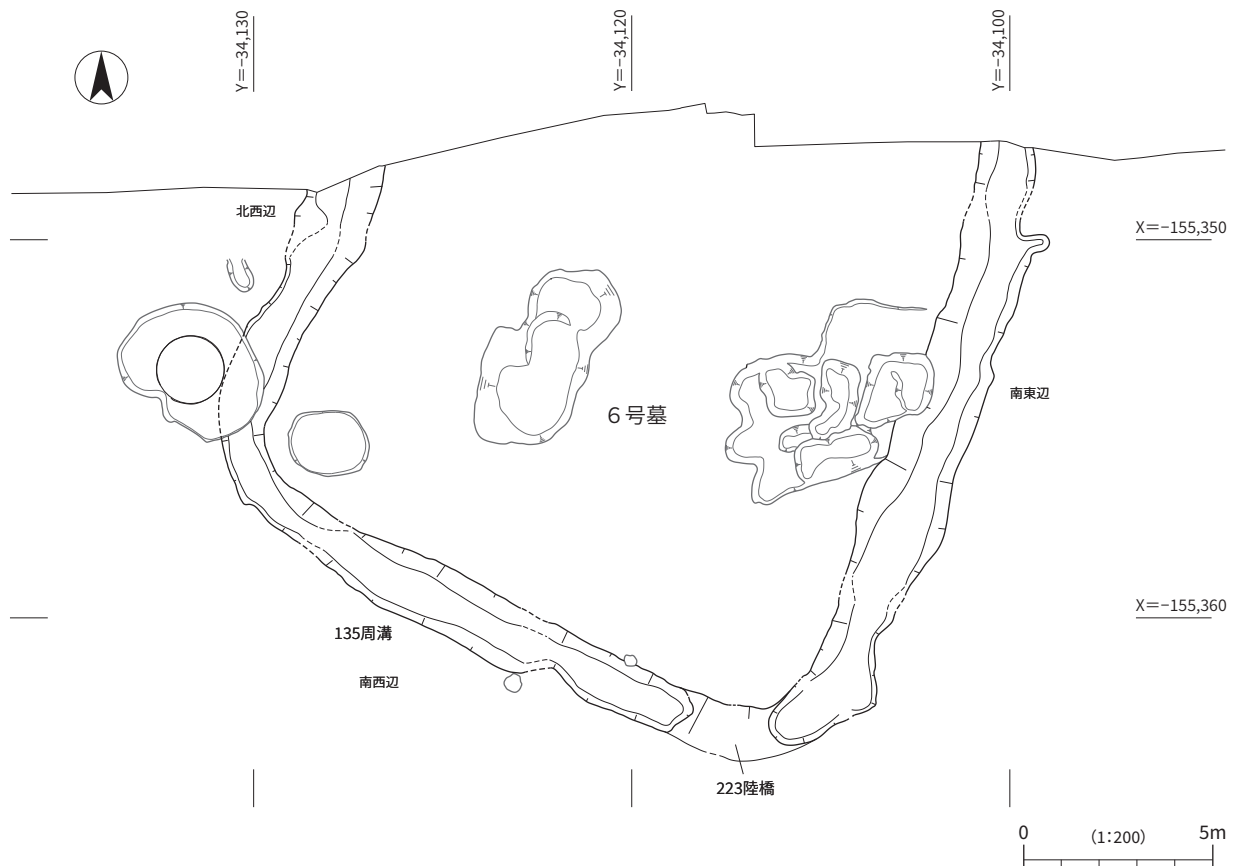


図 32 6号墓平面(2)

しており、2号墓にも関係する可能性がある(図22)。

墳丘周辺から出土した土器は、完形品ないし完形に近い個体が多く、離れた地点から出土したものと接合するものがある(図39)。広口壺・長頸壺・無頸壺等の壺は墳丘南西辺に集中して出土した。取上の単位内で接合するか、取上が近接するものが接合している。長頸壺144は出土した弥生土器の内、古い特徴をもつもので、この土器は離れた位置にあるものが接合することが確かめられた。また、162溝から出土したものと接合した広口壺152も墳丘南西辺に散らばるような状況で細片として出土している。なお、105・110・111・137・138取上内の壺埋土を洗浄したところ、カジノキ、アカメガシワ、クマノミズキ、草本のハギ属の種子が出土した。二次林種のアカメガシワが多く、土器内に流入した可能性が高いと判断され、弥生土器は長期間に渡って露出していた可能性がある。

大形の鉢・台付鉢は墳丘南西隅周辺から出土した。鉢173・174、台付鉢177は局所的に集中して出土した。大形の甕178・181・187も大形の鉢・台付鉢と同様に局所的に集中した状態で出土しており、大形品は土器の移動が少ない傾向にある。一方、高杯157・158・163は離れた位置で出土したものが接合している。小形品は重量が軽く、破片となった場合に移動しやすいことを反映しているかもしれないが、土器を用いた祭祀を行った際の使用状況が異なっている可能性もあると考えている。

223陸橋(図32)

墳丘南東隅では135周溝の掘り残し部分があり、墳丘上と135周溝外を結ぶ223陸橋(ブリッジ)を検出した。幅2mで、135周溝底面からの高さは0.1mである。盛土は行われておらず、周溝の掘り残し部分を陸橋として利用する。墳丘南西辺から出土した弥生土器は223陸橋上からも出土しており、6号墓廃絶時は陸橋として機能していなかったものと考えられる。

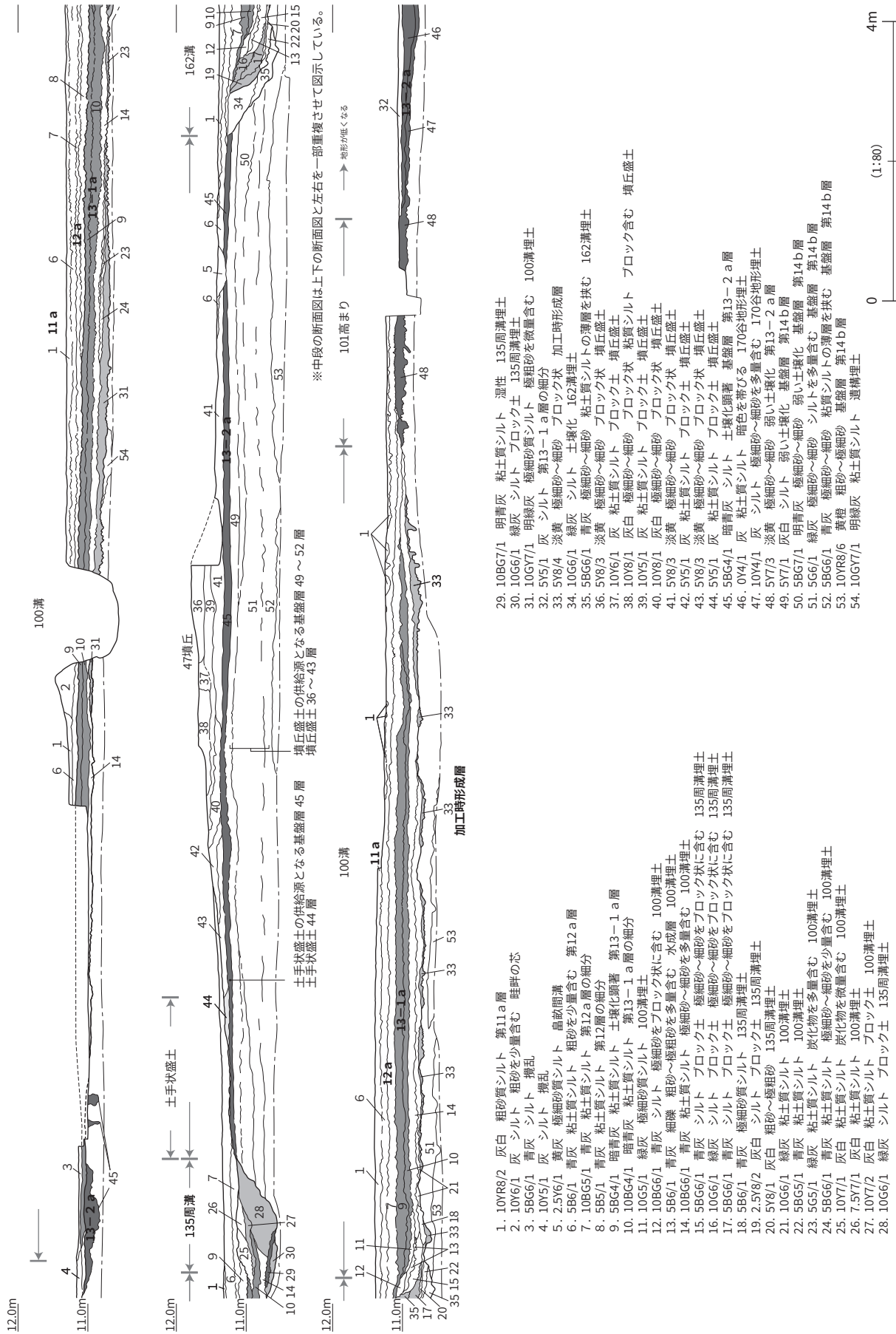
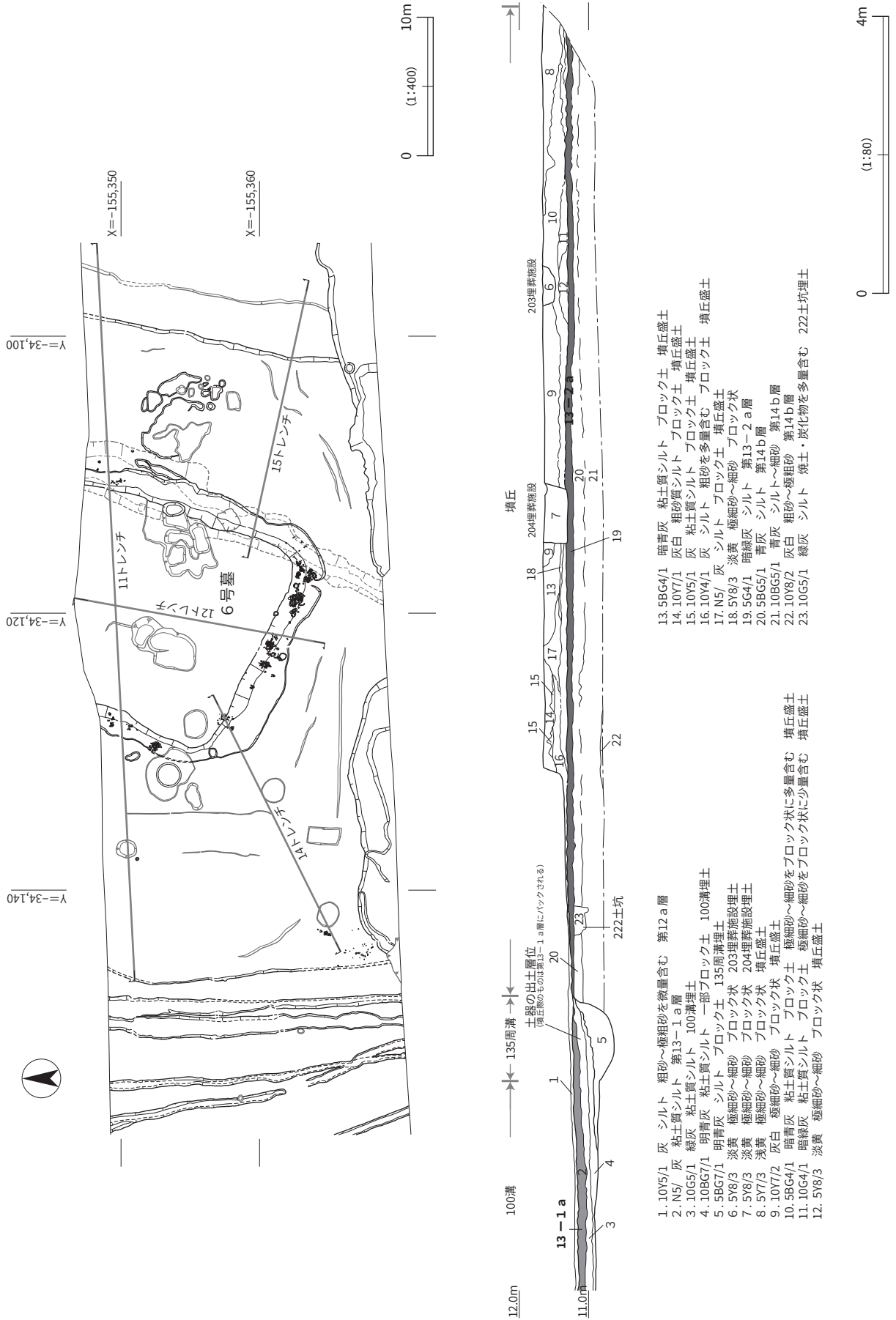
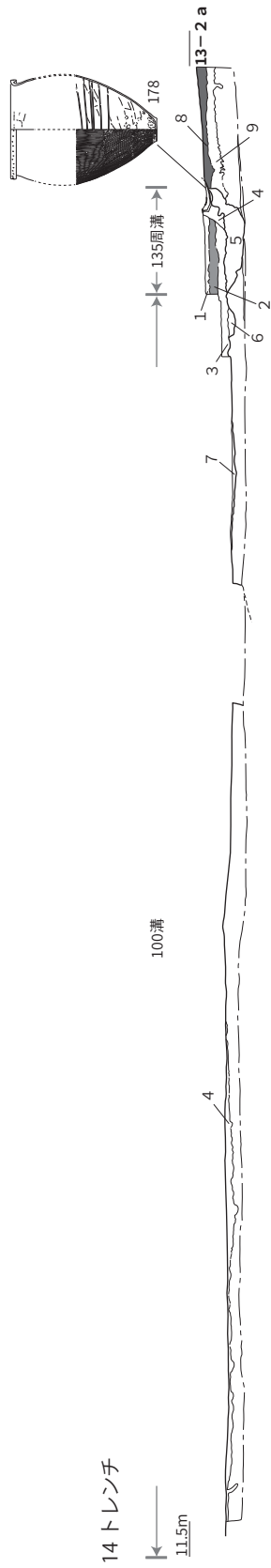


図 33 6号溝東西(11トレンチ)断面



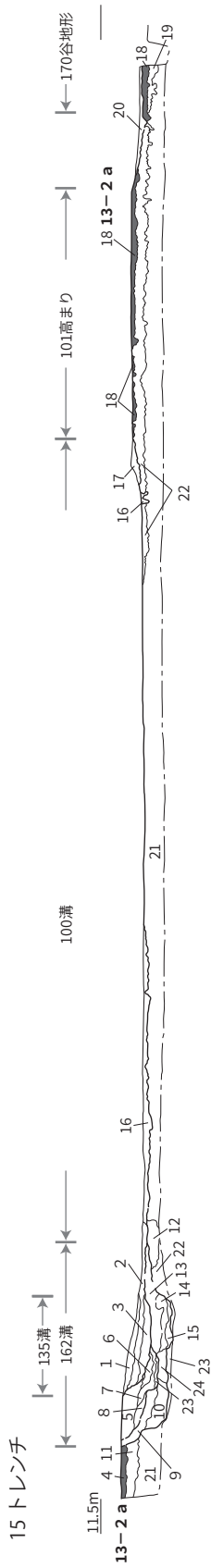
- 1. 10V5/1 灰 シルト 粗砂～極粗砂を微量含む 第12 a層
- 2. N5/ 灰 粘土質シルト 第13-1 a層
- 3. 10G5/1 緑灰 粘土質シルト 100溝埋土
- 4. 10BG7/1 明青灰 粘土質シルト 一部ブロック土 100溝埋土
- 5. 5BG7/1 明青灰 シルト ブロック土 135周溝埋土
- 6. 5Y8/3 淡黄 極細砂～細砂 ブロック状 203埋葬施設埋土
- 7. 5Y8/3 淡黄 極細砂～細砂 ブロック状 204埋葬施設埋土
- 8. 5V7/3 淡黄 極細砂～細砂 ブロック状 墳丘盛土
- 9. 10V7/2 灰白 極細砂～細砂 ブロック状 墳丘盛土
- 10. 5BG4/1 明青灰 粘土質シルト ブロック土 極細砂～細砂に多量含む 墳丘盛土
- 11. 10G4/1 暗緑灰 粘土質シルト ブロック土 極細砂～細砂に少量含む 墳丘盛土
- 12. 5Y8/3 淡黄 極細砂～細砂 ブロック状 墳丘盛土
- 13. 5BG4/1 暗青灰 粘土質シルト ブロック土 墳丘盛土
- 14. 10V7/1 灰白 粗砂質シルト ブロック土 墳丘盛土
- 15. 10V5/1 灰 粘土質シルト ブロック土 墳丘盛土
- 16. 10V4/1 灰 シルト 粗砂を多量含む ブロック土 墳丘盛土
- 17. N5/ 灰 シルト ブロック土 墳丘盛土
- 18. 5Y8/3 淡黄 極細砂～細砂 ブロック状
- 19. 5G4/1 暗緑灰 シルト 第13-2 a層
- 20. 5BG5/1 青灰 シルト 第14b層
- 21. 10BG5/1 青灰 シルト 第14b層
- 22. 10V8/2 灰白 粗砂～極粗砂 第14b層
- 23. 10G5/1 緑灰 シルト 灰土・灰化物を多量含む 222土坑埋土

図 34 6号墓南北 (12 トレンチ) 断面



1. 10V6/1 灰 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を微量に含む 第12 a 層
2. 10G5/1 緑灰 粘土質シルト 第13-1 a 層
3. 10BG7/1 明青灰 粘土質シルト 粗砂を微量に含む 135周溝埋土
4. 5BG7/1 明青灰 シルト プロック土 135周溝埋土
5. 10V5/1 灰 シルト プロック土 135周溝埋土

6. 5G5/1 オリブ灰 シルト プロック土 100溝埋土
7. 5G5/1 オリブ灰 シルト プロック土 加工時形成層 100溝埋土
8. 10G5/1 緑灰 粘土質シルト 粗砂を微量に含む 泥質 第13-2 a 層
9. 5G5/1 緑灰 極細砂質シルト 第14b 層



1. 10V5/1 灰 シルト 粗砂～極粗砂を微量含む 第13-1 a 層
2. 2.5G5/1 オリブ灰 シルト 第13-1 a 層の細分
3. 10G4/1 暗緑灰 シルト 暗色を帯びる 極細砂～細砂を少量含む 周溝埋土
4. 10V5/1 灰 シルト 暗色を帯びる 第13-2 a 層
5. 5V5/1 灰 シルト プロック土 162溝埋土
6. 10G4/1 暗緑灰 粗砂質シルト プロック土 162溝埋土
7. 10G5/1 緑灰 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を少量含む 162溝埋土
8. 10G4/1 暗緑灰 粘土質シルト 162溝埋土
9. 10BG5/1 青灰 粘土質シルト プロック土 極細砂をブロック状に含む 162溝埋土
10. 5BG5/1 青灰 シルト プロック土 162溝埋土
11. 10G6/1 緑灰 粘土質シルト 暗色を帯びる 第14b 層
12. 2.5GV7/1 明オリブ灰 シルト プロック土 遺構埋土

13. 5B7/1 明青灰 シルト プロック土 162溝埋土
14. 5G5/1 青灰 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を少量含む 162溝埋土
15. 2.5GV8/1 灰白 粗砂～極粗砂 シルトを少量含む 162溝埋土
16. 5GV7/1 明オリブ灰 粗砂～極粗砂 プロック状 100溝埋土
17. 10G5/1 緑灰 シルト 極細砂～細砂を少量含む 100溝埋土
18. 7.5G5/1 緑灰 シルト 土壌化顕著 第13-2 a 層
19. N4/ 灰 粘土質シルト 土壌化顕著 I70谷地形埋土
20. 10BG5/1 青灰 シルト 第13-1 a 層
21. 5G7/1 明緑灰 極細砂～細砂 第14b 層
22. 10V6/1 灰 極細砂～細砂 第14b 層
23. 10G4/1 暗緑灰 粘土質シルト 162溝埋土
24. 10V6/1 灰 極細砂～細砂 162溝埋土



図 35 14・15 トレンチ断面

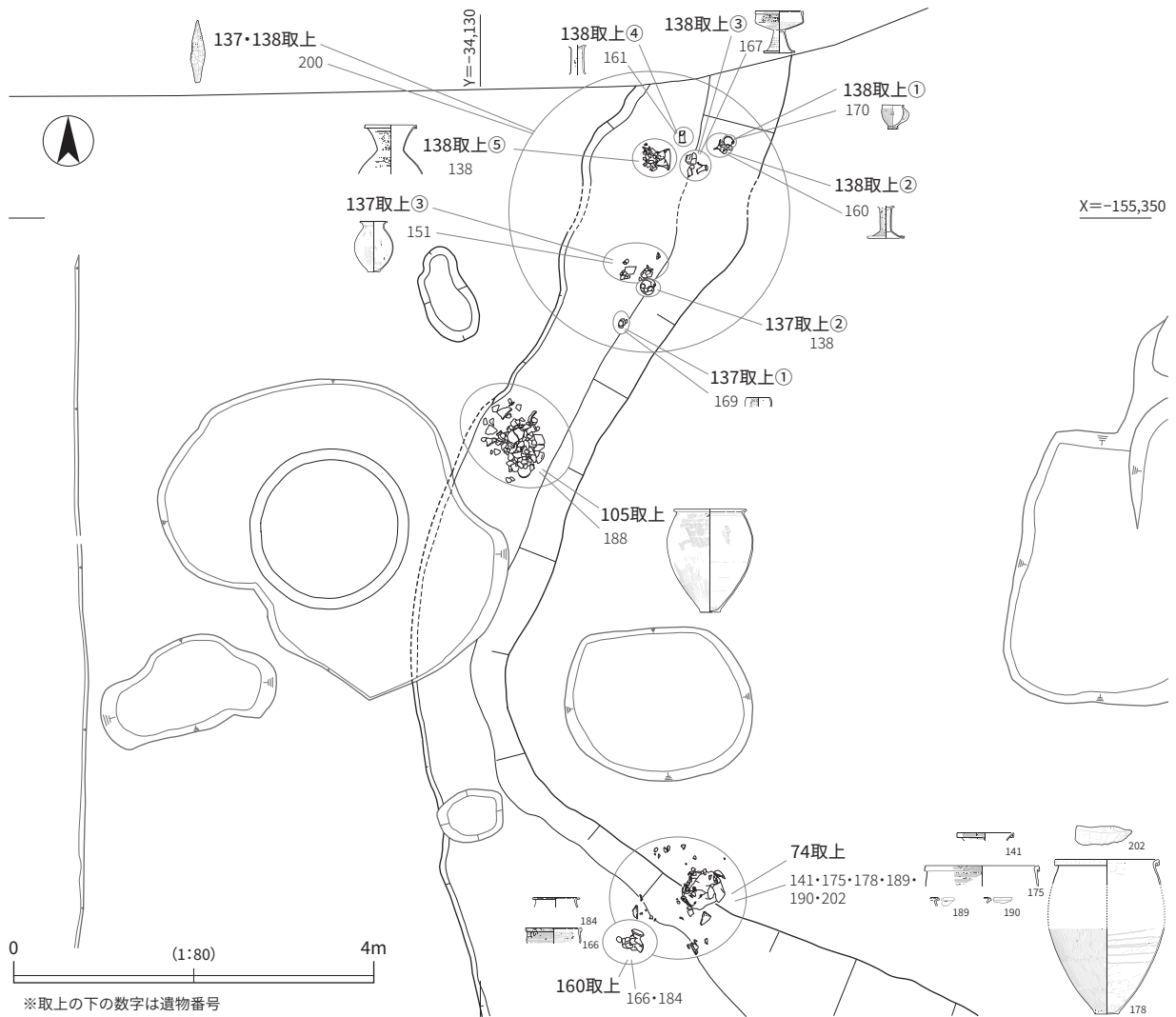


図 36 6号墓遺物出土状況平面(1)

100 溝 (図 31・33～35)

135 周溝の外側に掘削された溝である。幅 11～16.5 m、溝肩部からの深さ 0.4 m、泥質の堆積物で埋没する。底面は墳丘に向かって緩やかに低くなっており、凹凸が顕著、溝肩部は不明瞭である。底面の凹凸には掘削時の作業単位を示す段状の加工痕が墳丘から漣痕状に検出された (図 31)。

墳丘盛土を獲得するために外側に向かって掘削範囲を広げられていった結果、底面に残された痕跡と考えられる。加工痕の直上には加工時形成層ではなく、機能時堆積層の泥質堆積物が認められており、周溝の漣痕状の加工痕は 6 号墓構築直後の状況を示すと考えられる。段状の加工痕が残されていることから、100 溝底面の仕上げが粗雑であったか、周溝墓の構成要素の一つとして重視されなかった可能性がある。

101 高まり (図 31)

幅 3～4 m、擬似状に第 13 - 2 a 層の高まりを検出した。直上は第 12 a 層により削平されており、盛土の有無は不明である。

b. 第 2 面 (135 周溝加工面) (図 32)

6 号墓周辺の弥生土器を取り上げた後、墳丘周辺の掘り下げと墳丘周辺の断ち割りを行って、135 周溝を検出した。墳丘の構築当初の形状を示すと考えている。

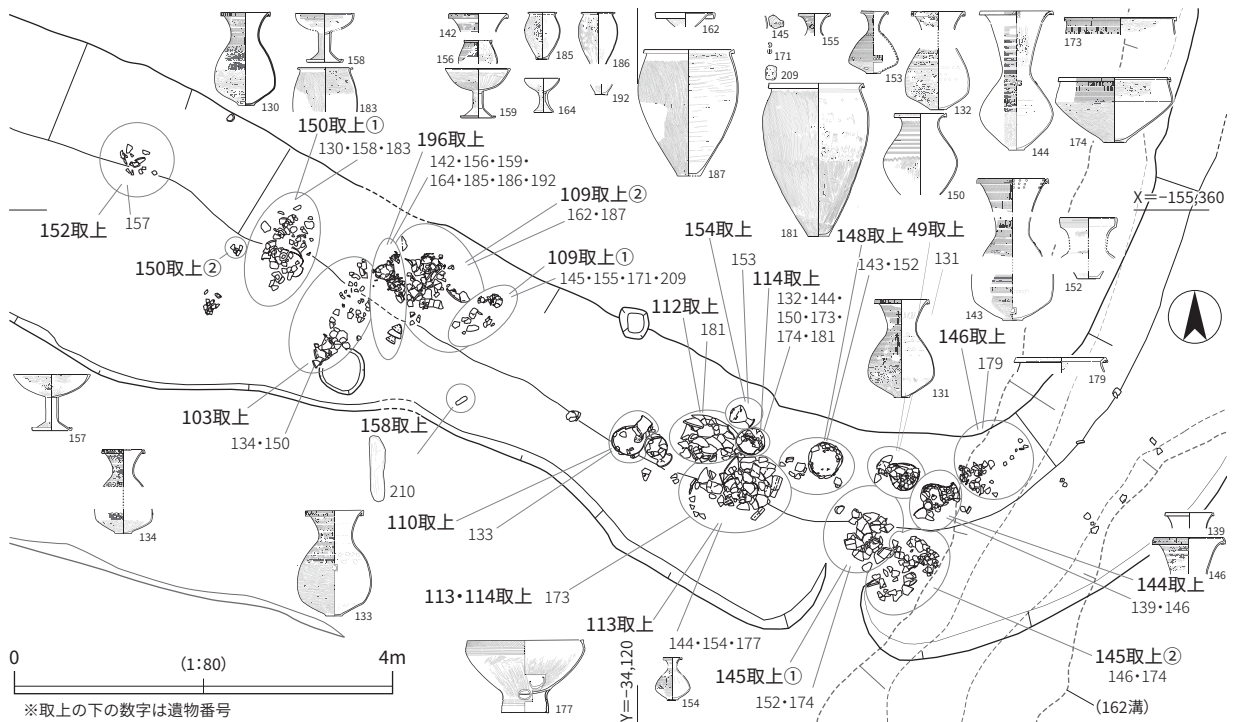


図 37 6号墓遺物出土状況平面 (2)

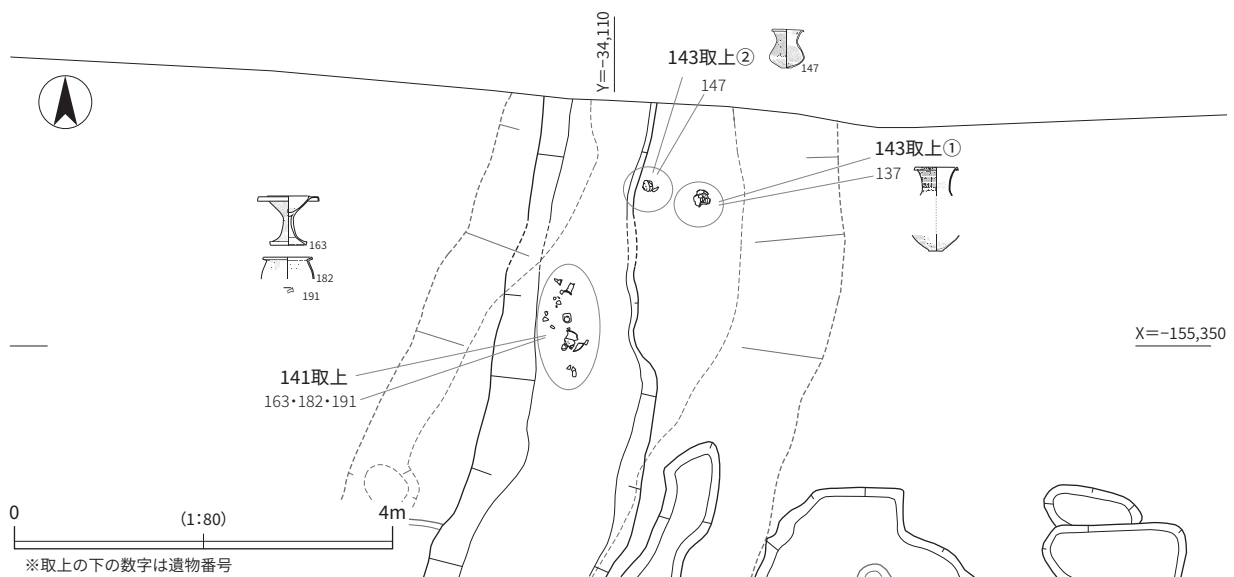


図 38 6号墓遺物出土状況平面 (3)

135 周溝 (図 31 ~ 35)

幅 1.5 m、深さ 0.1 ~ 0.15 m、埋土はシルトブロック土で、南西隅の周溝底面の一部では泥の薄層が認められた。遺物は無頸壺の細片 1 点以外に土器は出土しておらず、第 1 面と比較すると皆無といってもよい状況である。埋土や出土遺物の状況から、135 溝は掘削後に短時間で埋め戻され可能性が高いと考えている。埋め戻しに使用した土は 100 溝か、162 溝の掘削によって生じた排土を給源とする可能性がある。また、墳丘完成時に 135 溝の埋め戻しを行い、墳丘墓のような外観に整えた可能性がある。

c. 第 3 面 (埋葬施設検出面 (墳丘盛土中の任意面)) (図 40、図版 5)

埋葬施設は 8 基検出した。墳丘は埋葬施設の検出を目的として数 mm ずつ水平に掘り下げて、任意面で平面的な精査を繰り返し行った。墳丘の検出面から 2 ~ 3 cm 掘り下げた段階で埋葬施設を 7 基検出し、

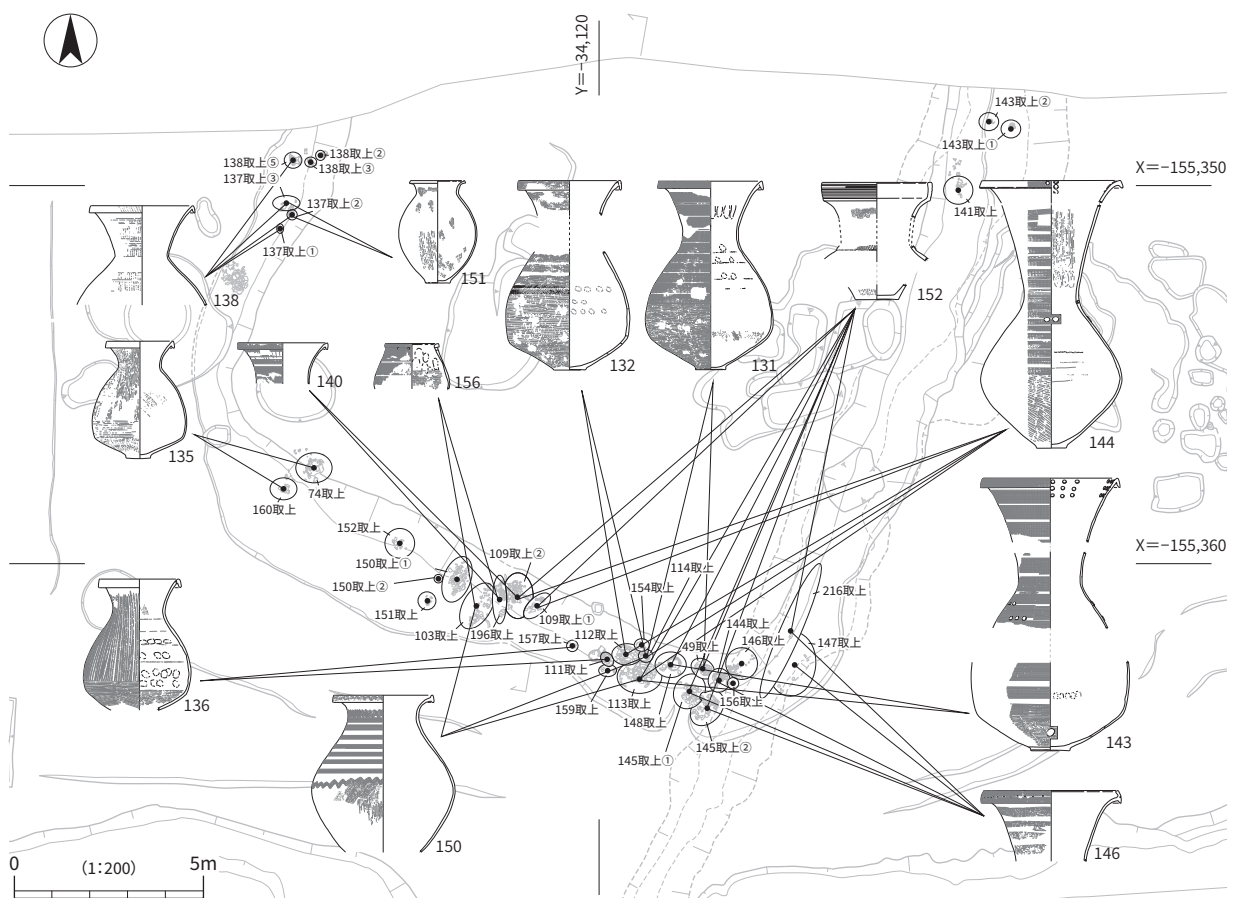
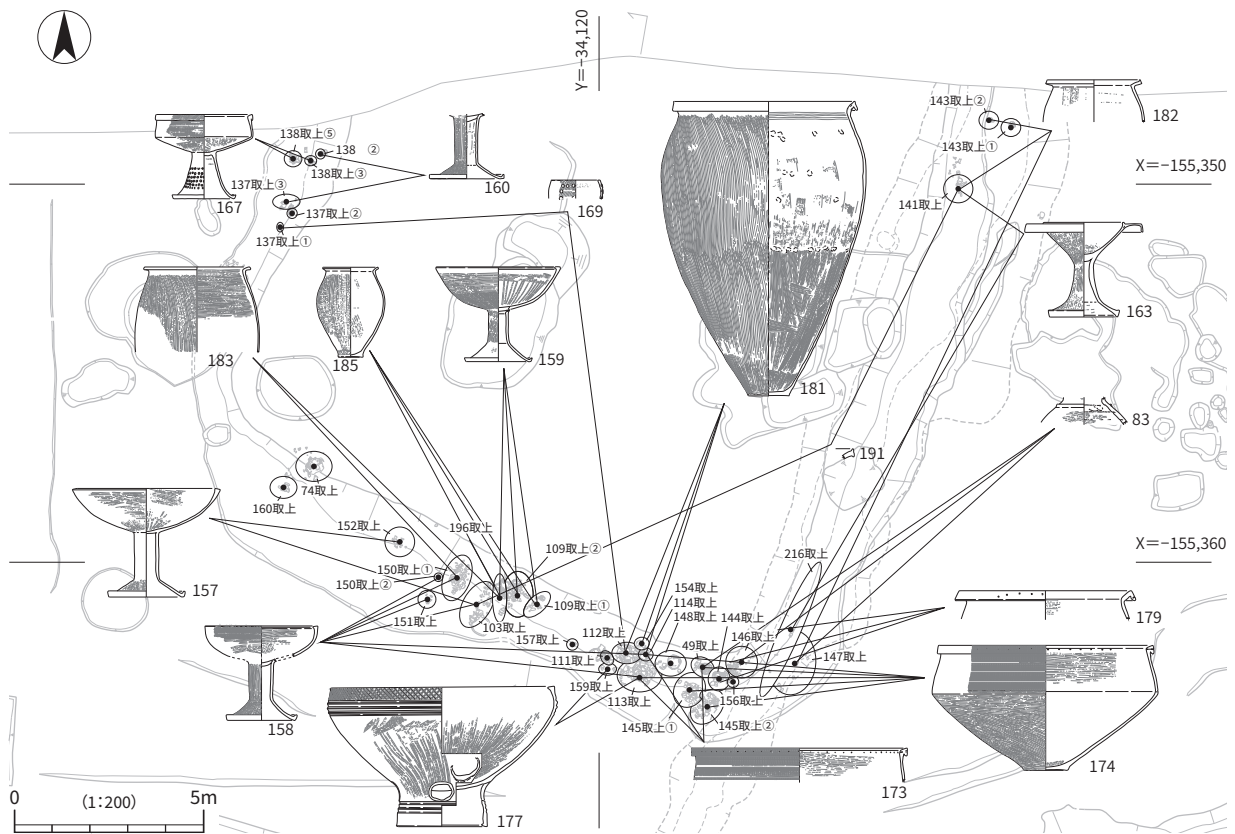


图 39 6号墓出土遗物接合關係

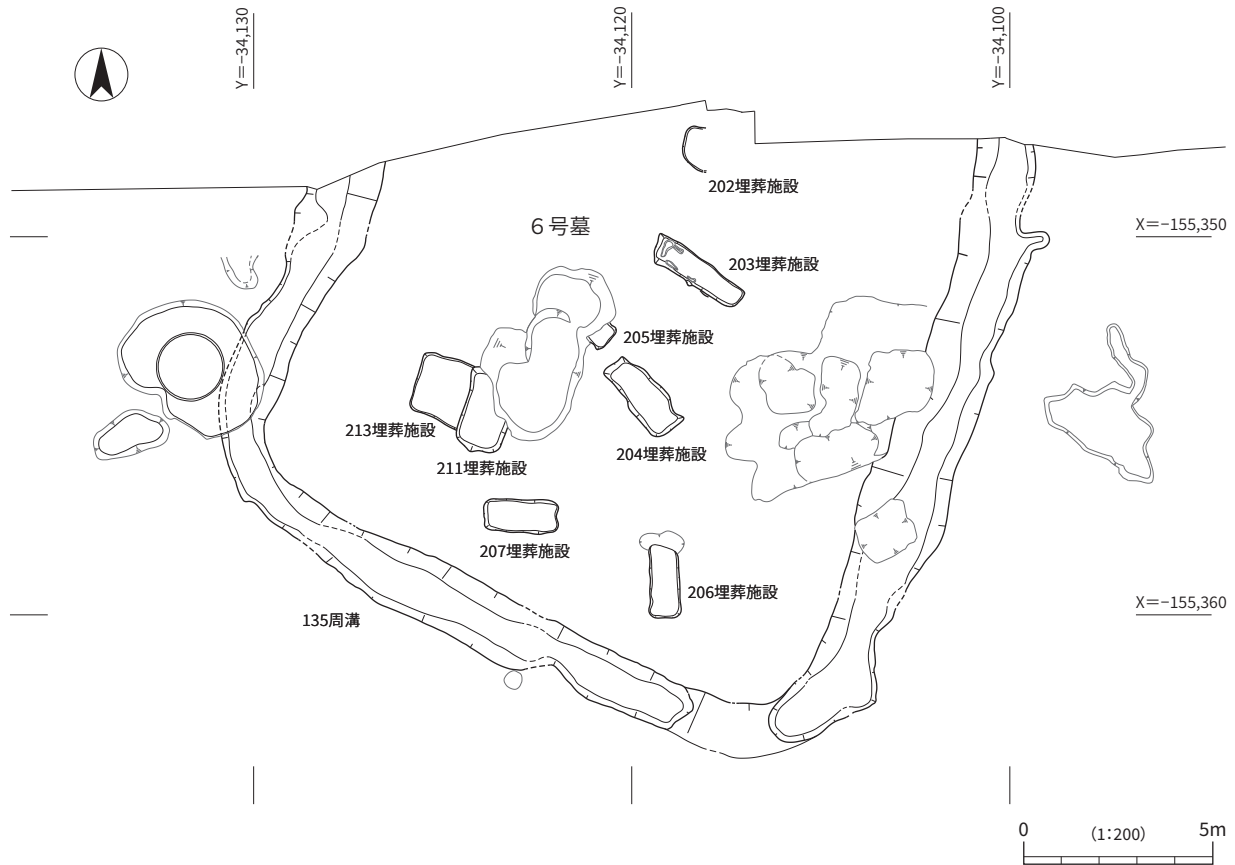


図40 6号墓平面(3)

213 埋葬施設のみ墳丘基底面に近いところ(第4面)まで下げた段階で確認している。8基の埋葬施設では人骨や木棺は遺存していなかった。埋葬施設の埋土はすべて篩にかけて洗浄した。副葬品・装身具等は出土しなかったが、サヌカイト製剥片やチップが出土した。サヌカイト製剥片やチップは6号墳周辺からも石器や石核とともに多数出土しており、旧表土(第13-2a層)に含まれていたと考えられるもので、6号墓築造前後に行われた石器製作に関係するものと考えている。206 埋葬施設では6号墓周辺の基盤層に含まれない円礫207が出土しており、図57に図示した。

202 埋葬施設(図40・41、図版6)

平面形は方形を指向したもので、長軸0.9m以上、短軸0.97m、深さ0.06mである。埋土はブロック土主体で、上層のブロック状の極細砂から細砂(図41-202埋葬施設断面図1層)は墳丘盛土が落ち込んだものと考えられる。トレンチを設定した場所に当たること、後世の削平により全容は不明である。遺物はサヌカイト製チップが5点(1.16g)出土した。

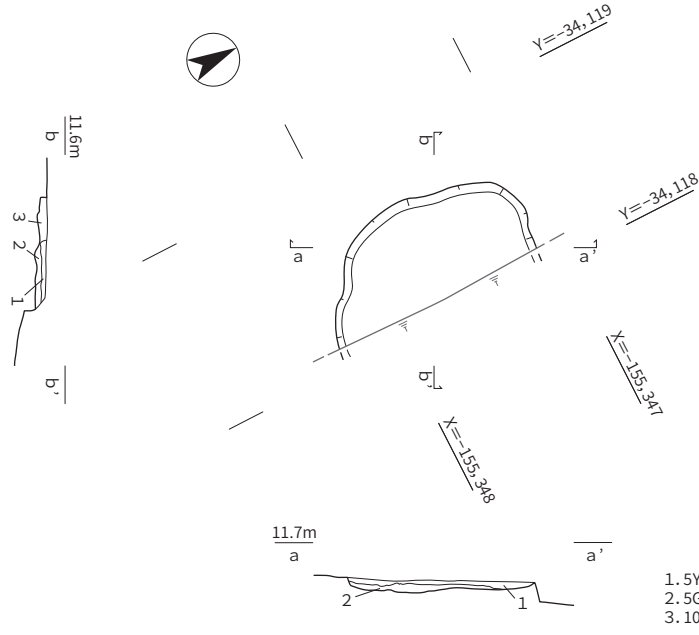
203 埋葬施設(図40・41、図版6)

平面が長方形、長辺2.7m、短辺0.6~0.7m、深さ0.25mである。埋土はブロック土で、調査時には埋葬施設内に20cm大のブロック土が落ち込んでいる状況を確認した。底面は北西側が高くなっており、北西側で長辺と短辺の形状に沿って凹みを確認した。この凹み部分の埋土もブロック土である。遺物は下層資料の混入を除いて、サヌカイト製剥片・チップ3点(6.72g)が出土した。

204 埋葬施設(図40・42、図版6)

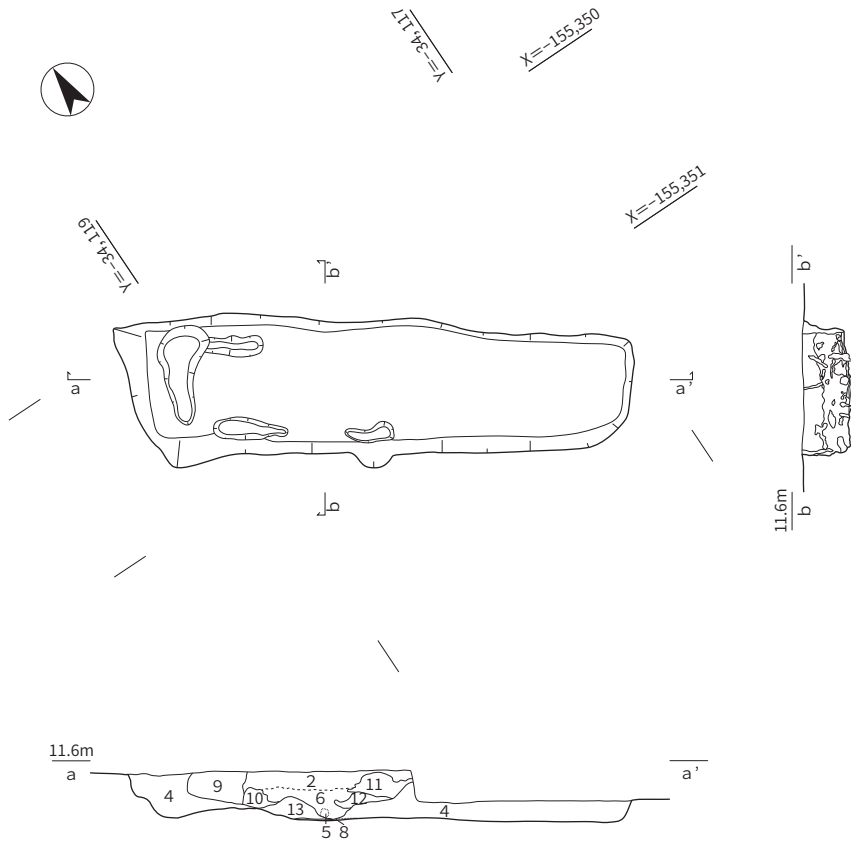
平面が長方形、長辺2.32m、短辺0.7~1.04m、深さ0.25mである。埋土はブロック土で、203埋葬施設と同様に20cm大のブロック土が落ち込んでいる状況を確認した。底面は北西側が高い。断面で

202埋葬施設



- 1. 5Y8/3 淡黄 極細砂～細砂 ブロック状
- 2. 5G6/1 緑灰 粘土質シルト ブロック土
- 3. 10Y7/1 灰白 粘土質シルト ブロック土

203埋葬施設



- 1. 10Y7/1 灰白 粘土質シルト
- 2. 10Y8/2 灰白 極細砂 ブロック状 シルトブロック少量含む
- 3. 5Y7/1 灰白 粘土質シルト
- 4. 2.5Y5/1 黄灰 粘土質シルト
- 5. N4/ 灰 粘土質シルト
- 6. 5Y8/3 淡黄 極細砂 ブロック状 シルトブロック少量含む
- 7. 5Y8/6 灰白 極細砂 ブロック状
- 8. 10Y7/2 灰白 極細砂 ブロック状 加工時形成層
- 9. N5/ 灰 粗砂質シルト
- 10. N6/ 灰 粘土質シルト
- 11. 10G5/1 緑灰 粘土質シルト
- 12. 5BG6/1 青灰 粘土質シルト 粗砂を微量含む
- 13. 5Y8/3 淡黄 粘土質シルト

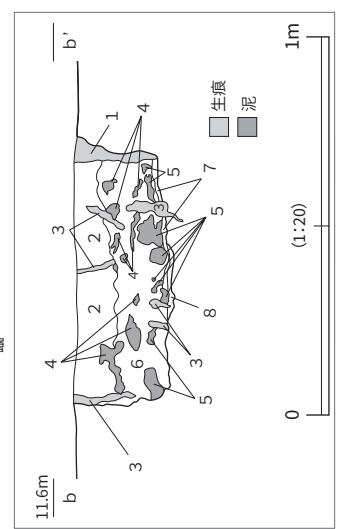
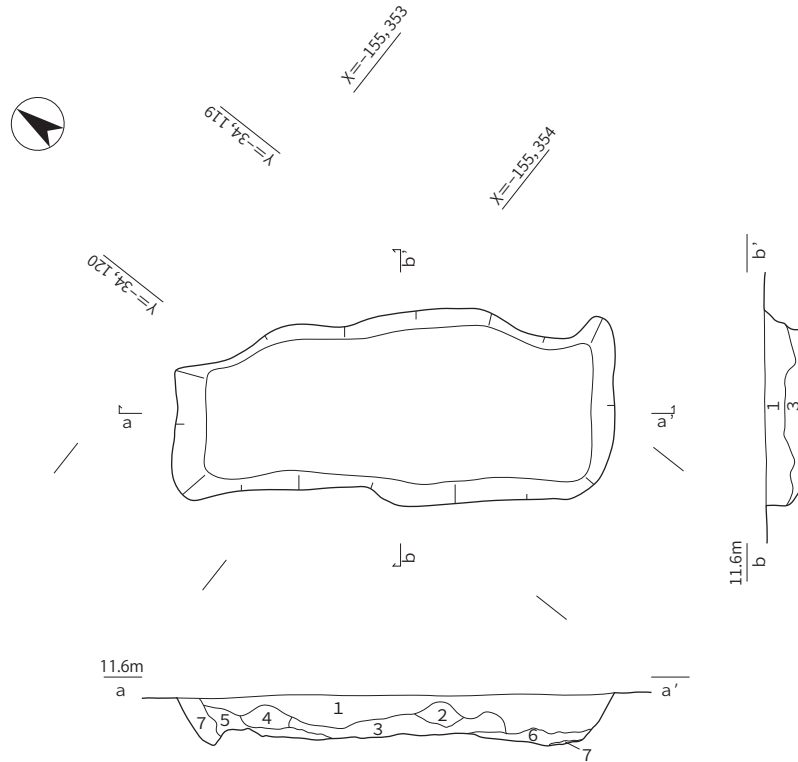


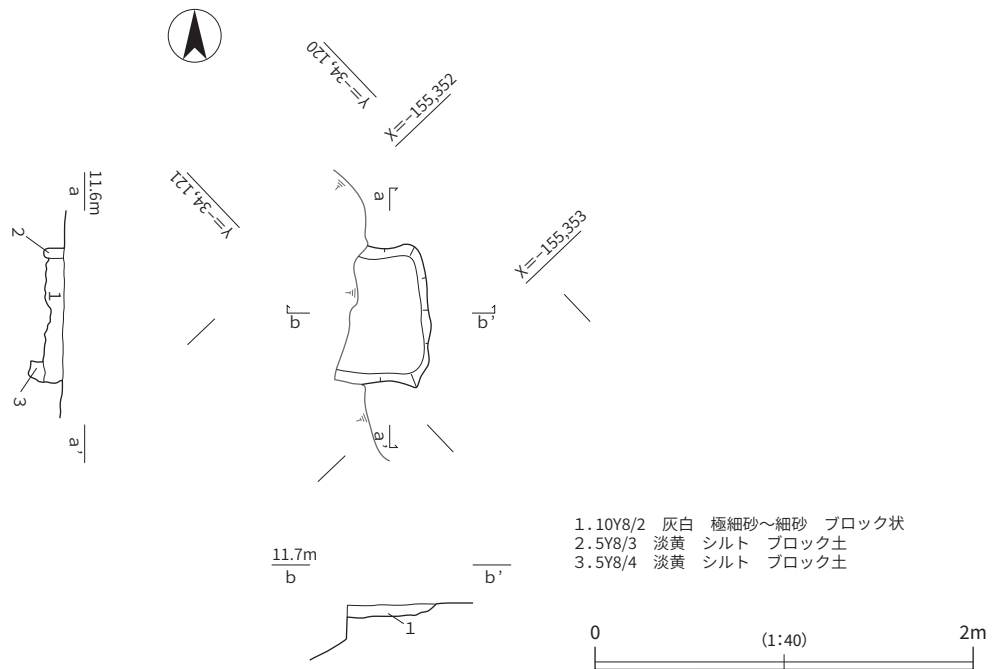
図 41 202・203 埋葬施設平・断面

204埋葬施設



- 1. 5GY8/1 灰白 極細砂質～細砂 ブロック状 粘土質シルトブロックを少量含む
- 2. N5/ 灰 粗砂質シルト
- 3. 10G5/1 緑灰 粘土質シルト 粗砂を微量に含む
- 4. 5BG6/1 青灰 粘土質シルト 細砂を微量に含む
- 5. 5Y8/3 淡黄 極細砂～細砂 ブロック状
- 6. 5BG5/1 青灰 粘土質シルト
- 7. 5Y8/3 淡黄 極細砂～細砂 ブロック状

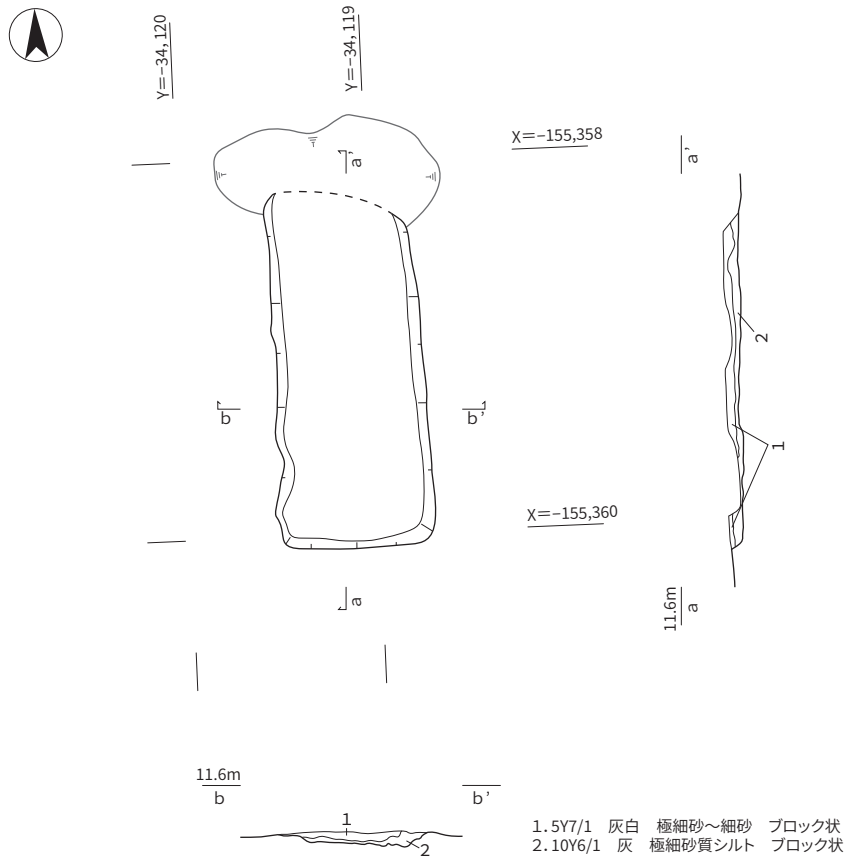
205埋葬施設



- 1. 10Y8/2 灰白 極細砂～細砂 ブロック状
- 2. 5Y8/3 淡黄 シルト ブロック土
- 3. 5Y8/4 淡黄 シルト ブロック土

図 42 204・205 埋葬施設平・断面

206埋葬施設



207埋葬施設

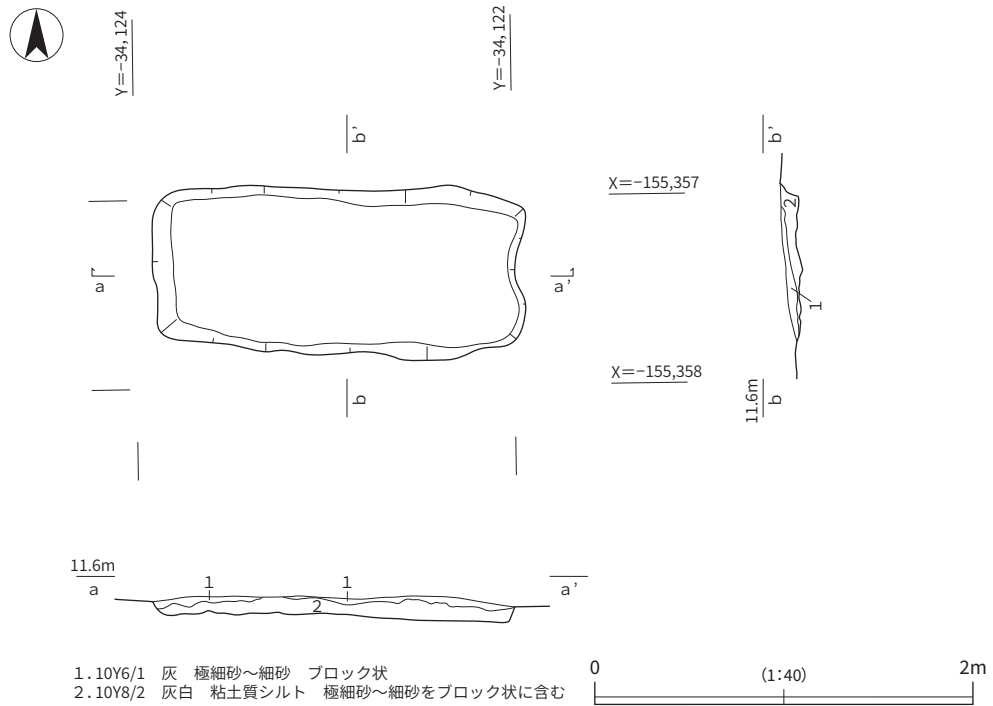
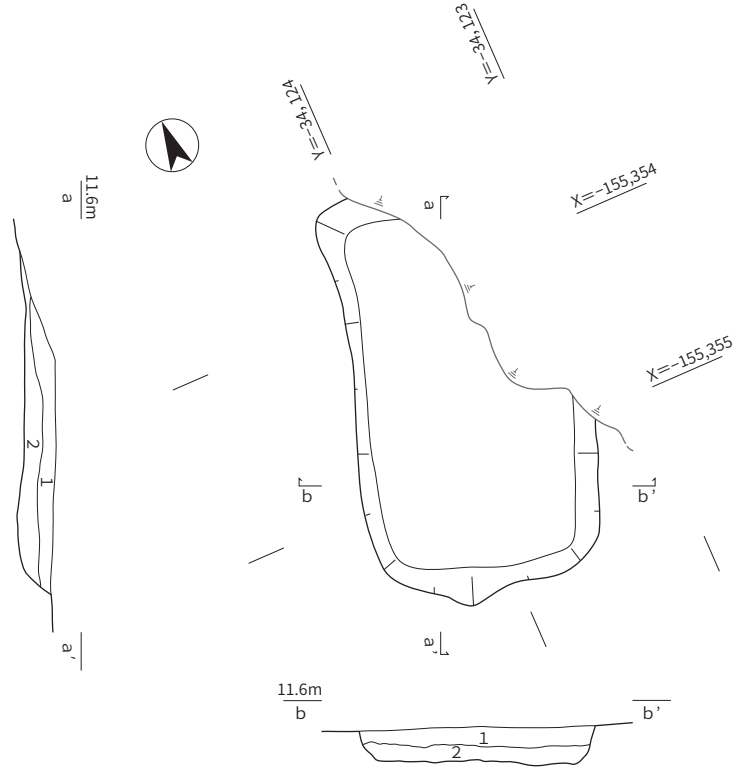


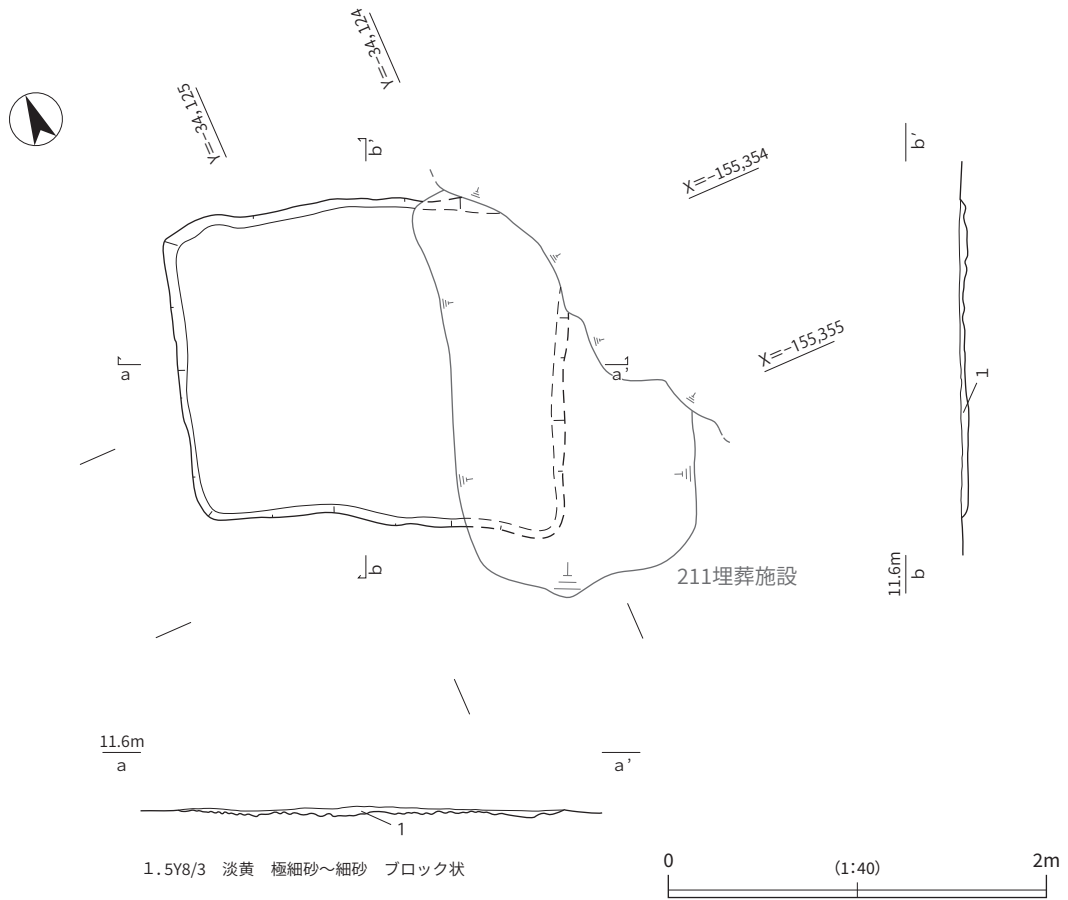
図 43 206・207 埋葬施設平・断面

211埋葬施設



- 1. 2.5Y7/2 灰黄 シルト 極細砂をブロック状に多量含む
- 2. 5B6/1 青灰 粘土質シルト ブロック状

213埋葬施設



- 1. 5Y8/3 淡黄 極細砂～細砂 ブロック状

図 44 211・213 埋葬施設平・断面



図45 6号墓平面(4)

北西側の形状に沿って凹みを確認したが、平面では掘り過ぎたため確認できなかった。遺物は下層資料の混入を除いて、サヌカイト製剥片・チップが20点(7.18g)出土した。

205 埋葬施設(図40・42、図版6)

平面が長方形を指向して掘削されており、長辺0.42 m以上、短辺0.7 m、深さ0.07 mである。埋土はブロック土である。底面は一部で凹みを確認しているが、部分的なもので形状は不明確である。西側は第7 a面32土坑により攪乱を受けており、全容は不明である。遺物は出土しなかった。

206 埋葬施設(図40・43、図版6・14)

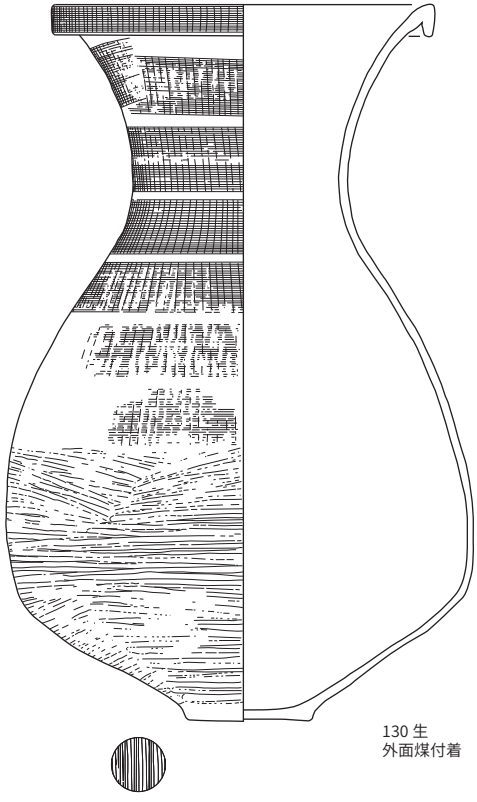
平面が長方形、長辺1.88 m、短辺0.8 m、深さ0.09 mである。埋土はブロック土で、周辺の墳丘盛土との層境が不明確な部分もあった。底面は北側が高い。遺物は下層資料の混入を除いて、サヌカイト製剥片・チップが3点(0.8g)出土した。埋土掘削中には円礫207が出土した(図57)。円礫207は長さ1.3 cm、幅0.5～0.8 cm、表面は平滑で、使用痕等は認められない。

207 埋葬施設(図40・43、図版6)

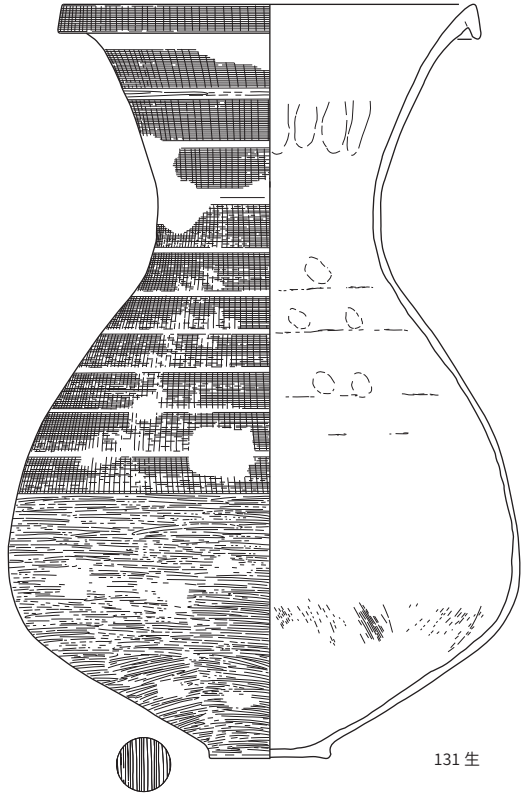
平面が長方形、長辺1.72 m、短辺0.82～0.92 m、深さ0.13 mである。埋土はブロック土である。底面は西が高くなっている。遺物は弥生土器広口壺の底部片になる可能性のあるものが1点、サヌカイト製剥片1点(0.88g)が出土した。

211 埋葬施設(図40・44、図版7)

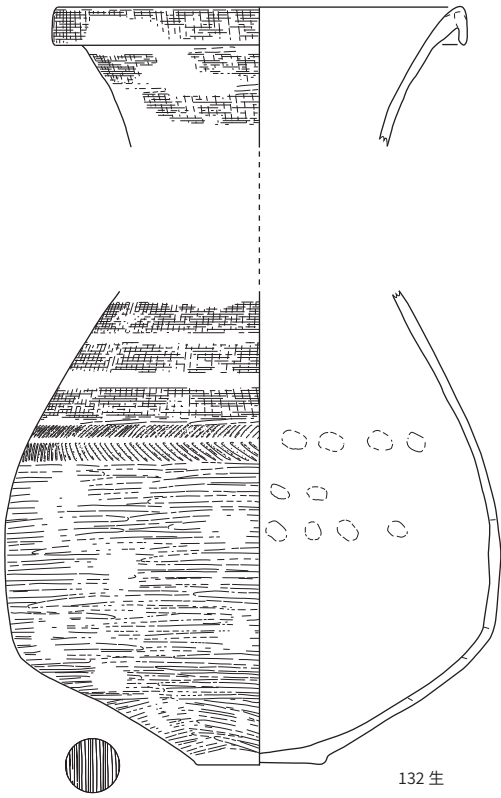
平面が不整な長方形、長辺2.02 m、短辺1.26 m、深さ0.2 mである。埋土はブロック土である。底面は北東側が高い。遺物は下層資料の混入を除いて、サヌカイト製剥片1点(0.26g)が出土した。



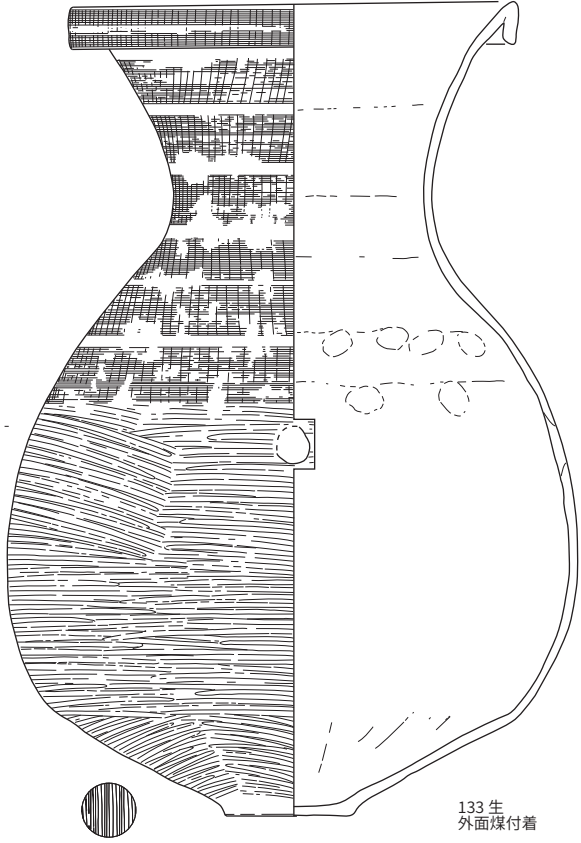
130 生
外面煤附着



131 生



132 生



133 生
外面煤附着

0 (1:4) 10cm

图 46 6号墓出土遗物(1)

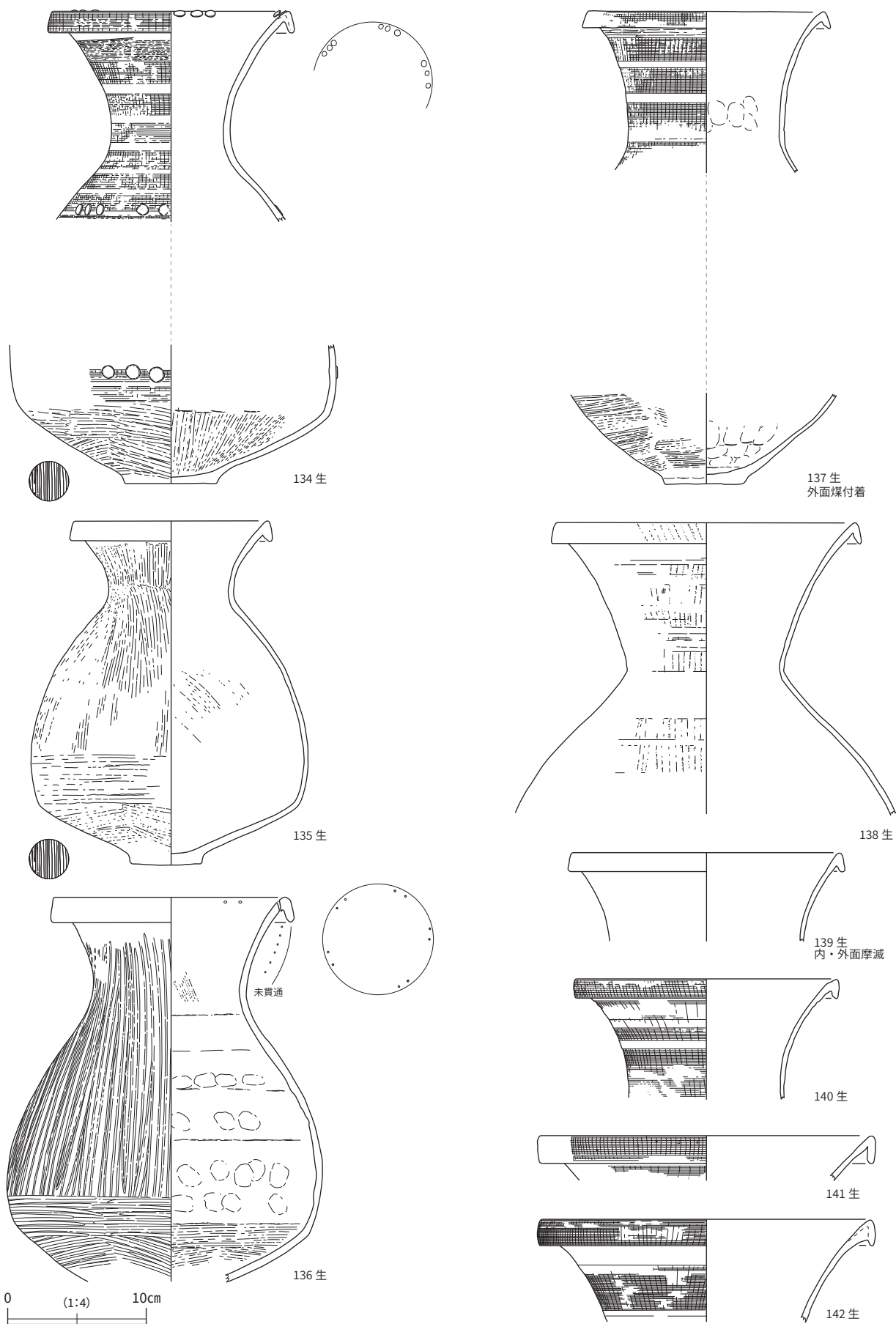


图 47 6号墓出土遺物(2)

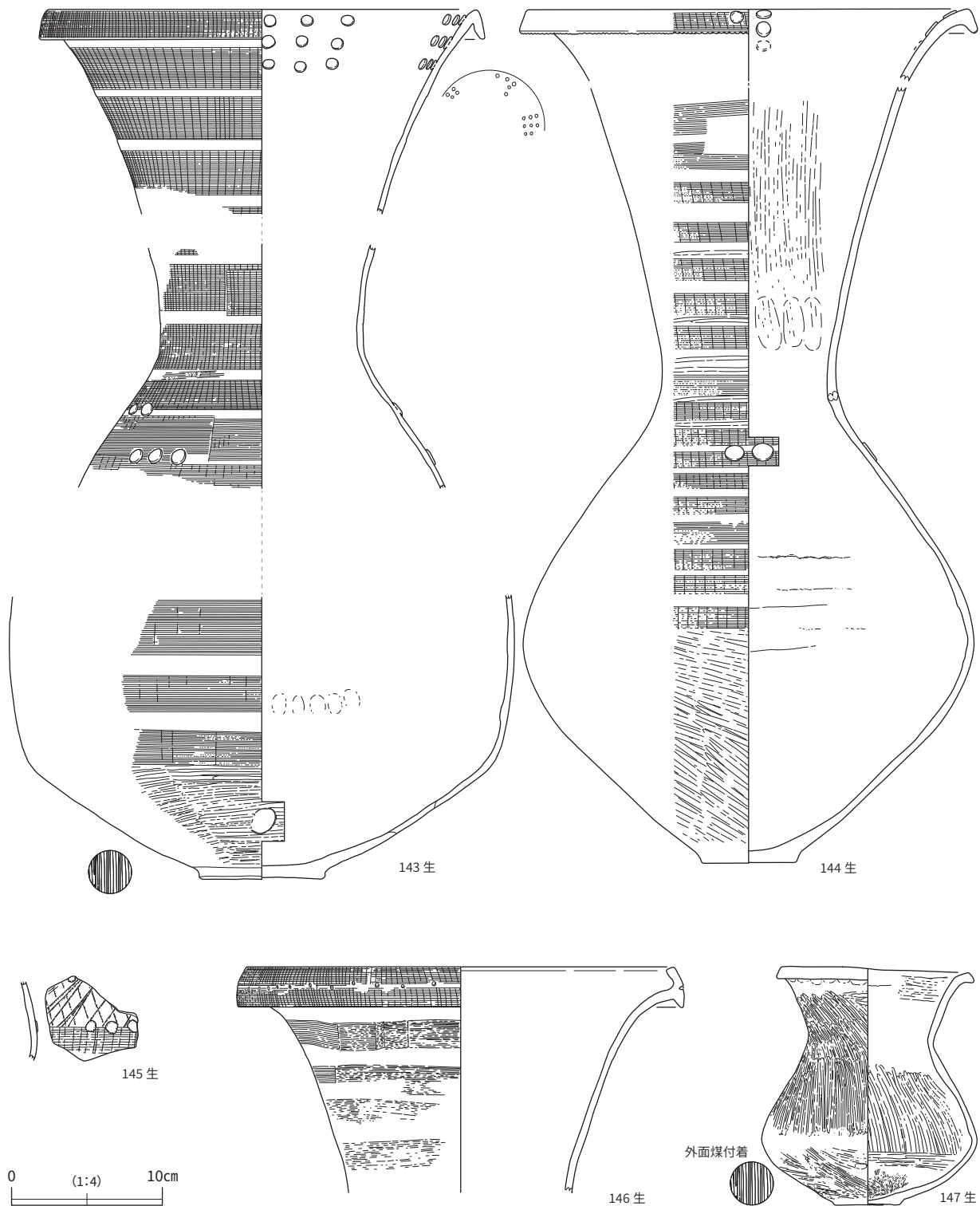


図48 6号墓出土遺物(3)

213 埋葬施設 (図40・44、図版7)

平面が長方形、長辺2.08m、短辺1.72m、深さ0.05mである。埋土はブロック土である。墳丘基底面に近い第4面まで下げて、平面形を検出した。底面の高さは東西・南北方向で顕著な差はない。遺物は下層資料の混入を除いて、サヌカイト製チップ1点(0.14g)が出土した。

213 埋葬施設は第4面で検出しており、213 埋葬施設調査時、211 埋葬施設はすでに完掘しており、埋土が残った状態で両者を平・断面で検討することはできなかった。

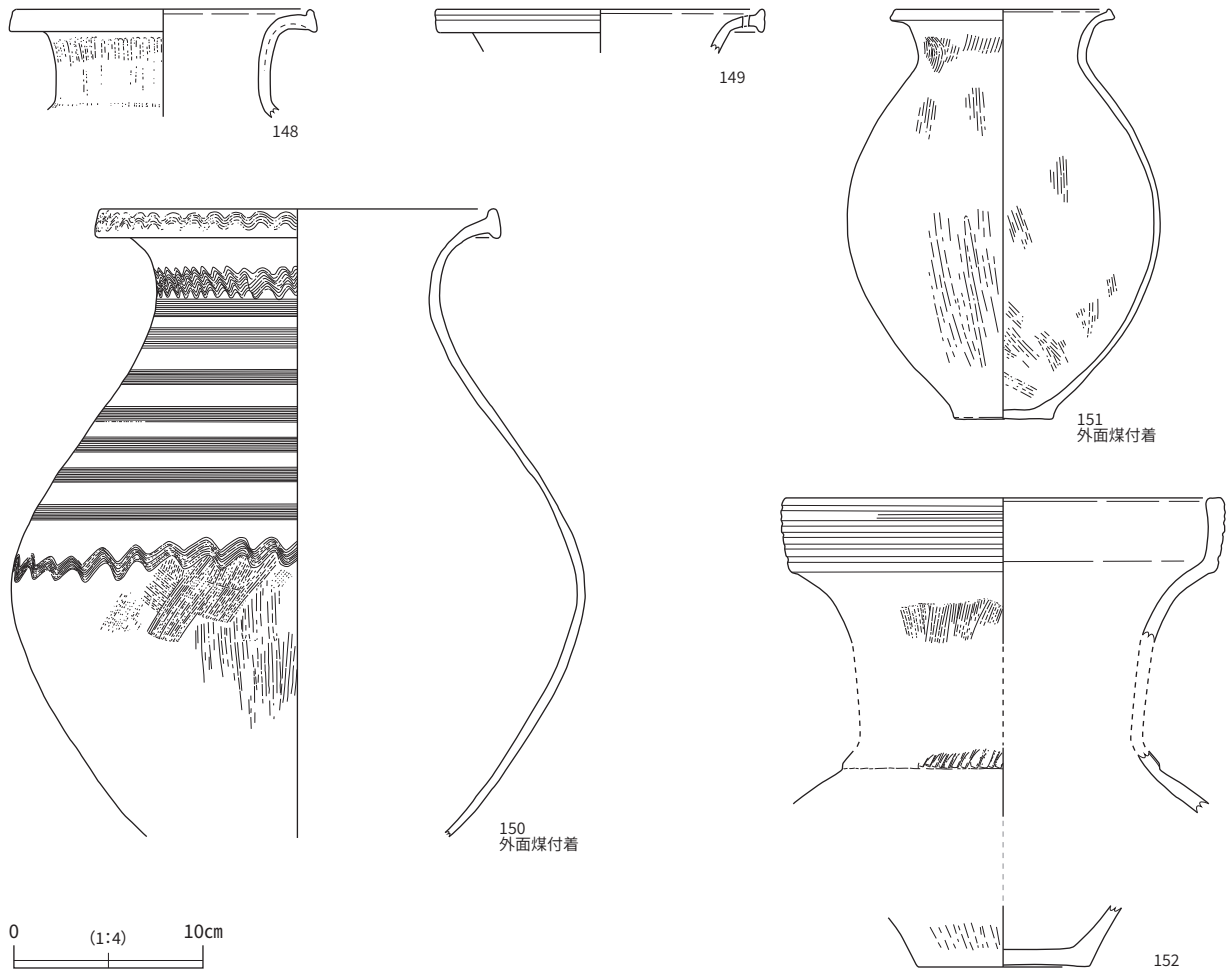


図 49 6号墓出土遺物(4)

d. 第4面〔墳丘盛土中の任意面〕(図45、図版7)

墳丘基底面から2~3cm上で平面精査を行った第4面では、墳丘際から内側に幅1~3mで土手状盛土(ドーナツ状盛土)が平面的に検出された。土手状盛土を構成するブロック土は旧表土に由来し、暗色を呈する。土手状盛土の内側盛土は第13-2a層より下位の地層に由来し、砂質のブロック土である。墳丘盛土では任意面で複数回平面的な精査を行っており、南西側から北東側に向かって盛土されている状況を確認しており、墳丘構築は土手状盛土を行った後、南西側から盛土を行って完成させている。

e. 出土遺物(図46~57、図版10~12、14)

6号墓では、墳丘斜面、135周溝、100溝から弥生土器、石器、石製品が出土した。

弥生土器は広口壺、長頸壺、細頸壺、高杯、台付鉢、甕、ミニチュア土器が出土した。器種の中では広口壺、甕、高杯の割合が多い。口縁部を中心とした分類で、生駒西麓産の割合が84%になる。器種の内、水差形土器は鉢と分類不可な微小な細片の中に、口縁部になる可能性のあるものが含まれる。

広口壺130~138・140~142は精緻な櫛描簾状文を施したものである。櫛描簾状文の施文後に、横方向にヘラミガキを施して、上下の櫛描簾状文を明確に区分する。櫛描簾状文の施文は長頸壺144と比較すると幅広である。口縁部は折り返しか、粘土を一部貼り足して垂下させており、外面に櫛描簾状文を施す。広口壺の形状は底部まで遺存するものは、体部下位に屈曲部をもち、屈曲部ないし屈曲部より上でヘラミガキの方向が異なっている。133は焼成後の穿孔が体部上半に1箇所穿たれている。134は口縁端部内側と外面体部上半に円形浮文を貼り付ける。139は体部片も出土しているが、全体に摩滅し

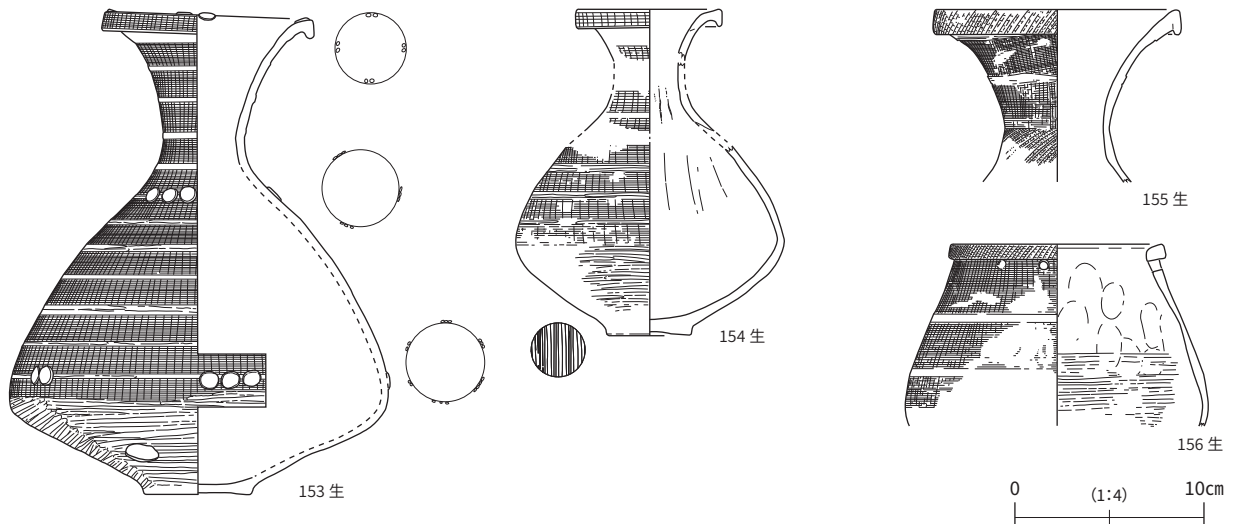


図50 6号墓出土遺物(5)

ており、文様の有無を判別できなかった。

広口壺 135・136は無文、体部外面をヘラミガキしたものである。口縁端部外面はヨコナデによって仕上げられたもので、文様は施さない。135は口縁部が完存し、断面で口縁部の成形を確認できないのだが、外方向に折り返された口縁部は他の広口壺と比べると分厚い。136は口縁部に2個セットの孔を5箇所穿孔しており、口縁屈曲部を裏側から貫通孔を開けたものと同じ工具を用いて連続的に穴を開けている。屈曲部の接合を補強するためのものか。内面は指頭圧痕と粘土接合痕の痕跡が明瞭、器壁が分厚くなっており、河内V様式の広口壺の製作技法につながる要素を持っている。

長頸壺 143・144は円形浮文を口縁部内面と体部上半外面に貼り付ける。櫛描簾状文は144の方が幅狭である。体部の屈曲は、143が下位にあるのに対し、144は中位にある。143は屈曲部より下位に焼成後の穿孔を行っている。広口壺体部片の145は沈線によって斜格子文を施したもので、今回の調査で出土したものでは唯一のものである。斜線が二重になっている部分があり、粗雑な施文である。口縁部を上下に拡張した広口壺146は頸部に櫛描直線文を施したもので、口縁端部外面には櫛描簾状文と刺突文が施される。小型の壺147は端部を外面下側から指押えを行って成形し、口縁部には歪みがある。頸部は太く、内外面はヘラミガキ調整する。壺148～152は生駒西麓産以外の胎土の土器である。広口壺148は頸部外面に縦方向のヘラミガキを施し、内面は摩滅する。広口壺149は赤褐色を呈する胎土で、台付鉢177の胎土に似る。口縁部に穿孔を施す。広口壺151は外面をハケとヘラミガキ、内面をハケで仕上げる。広口壺150は上下に拡張気味の口縁部をもつもので、外面上半に波状文と櫛描直線文、下半にヘラミガキとハケを施す。櫛描文は原体を器壁に強く押し当てて施文されており明瞭である。広口壺152は外面に6条の凹線を施したものである。162溝から出土したものと接合した。凹線は沈線状に近いものがある。灰白色を呈し、2～3mmの長石・石英を含有する。直接接合しなかったが、底部と断定できたものを図示した。亀井遺跡S D 27と城山遺跡7号方形周溝墓に類例がある。

細頸壺153は優美な櫛描簾状文が施された完形品である。屈曲部より下位に焼成後の穿孔を施す。細頸壺154は細片となって出土したもので、図50では図上復元を行っている。内面に頸部成形時の絞り痕が残る。焼成不良で、全体に暗褐色を呈する。細頸壺155は櫛描列点文と櫛描簾状文を施す。櫛描簾状文は幅が広く、頸部に二段施している。上段の櫛描簾状文は始点と終点が上下にずれている。口縁端部に向かって分厚くなっていく器壁を折り曲げて、端部の形状を成形しているため、断面は三角形に

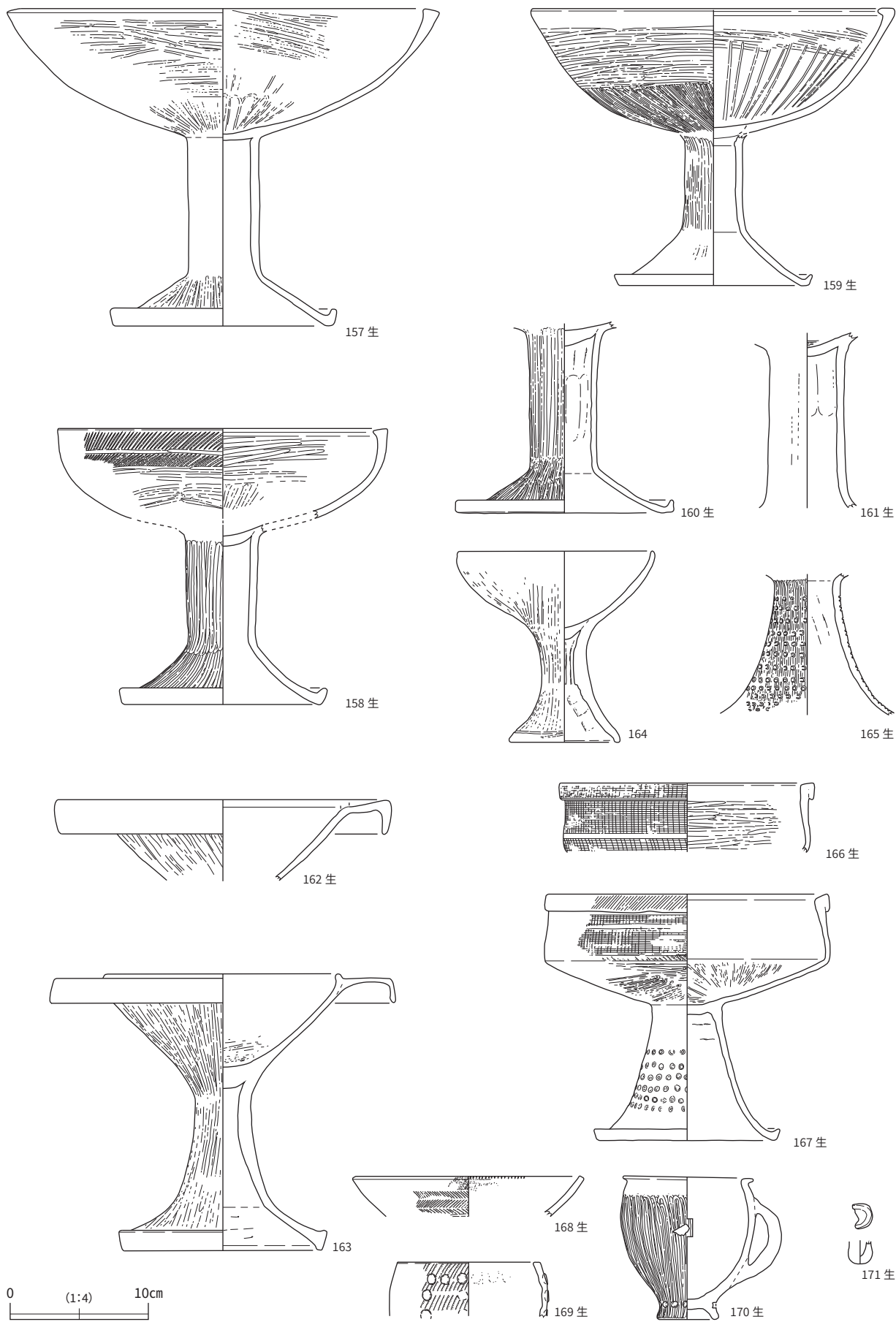
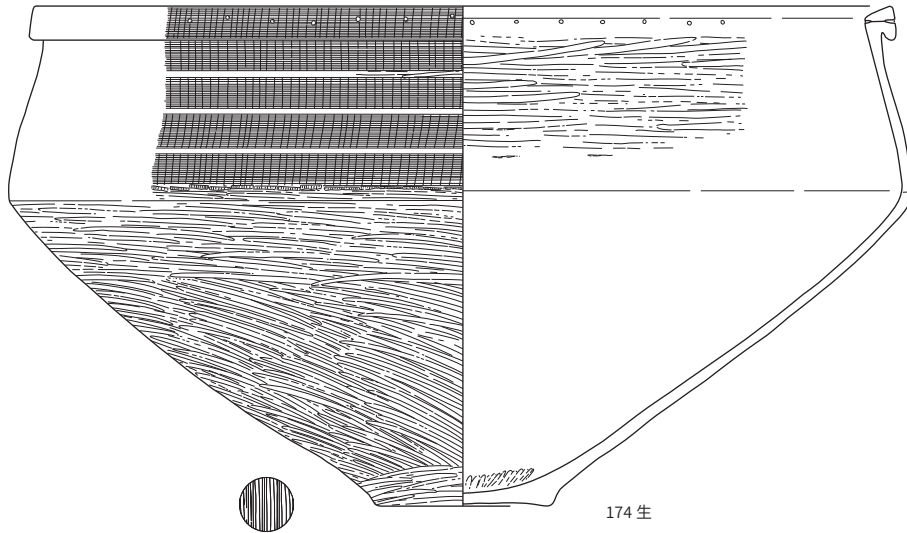
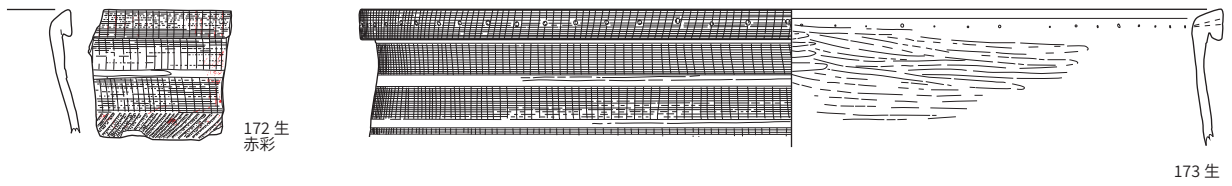
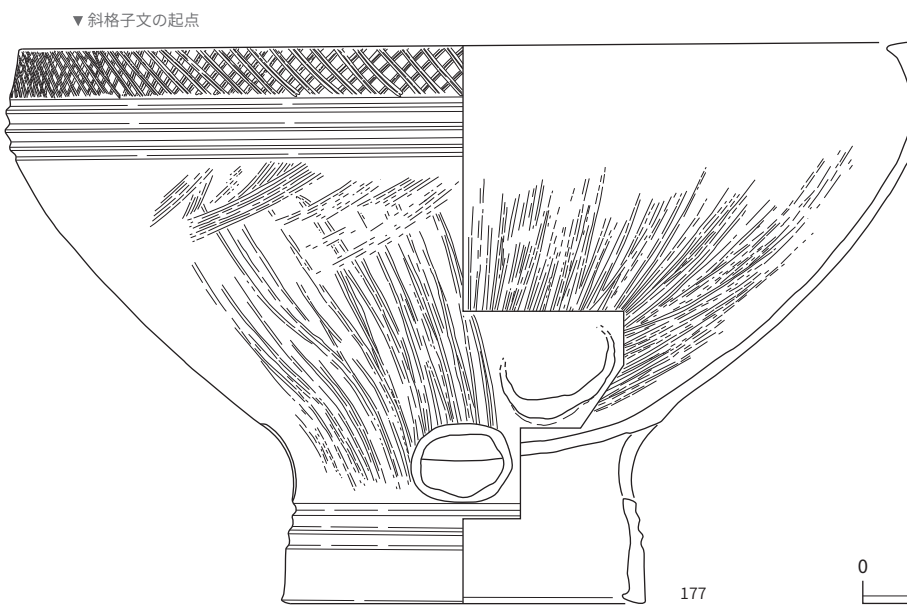


图 51 6号墓出土遗物(6)



177 と胎土同じ
6号墓東側第10a層出土



▼斜格子文の起点

図52 6号墓出土遺物(7)

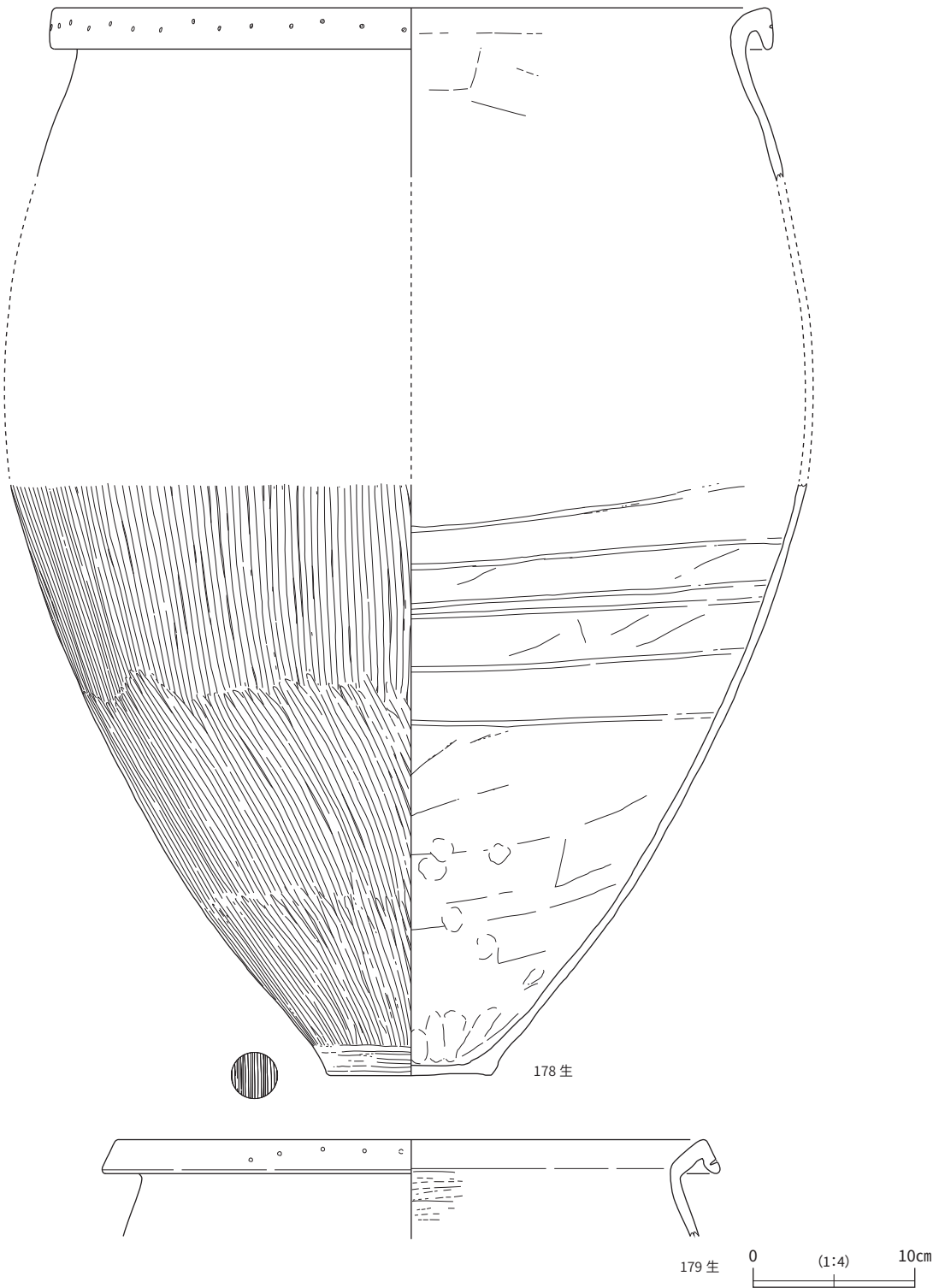


図 53 6号墓出土遺物(8)

近い印象を与える。無頸壺 156 は口縁部直下に穿孔を施したもので、櫛描列点文と櫛描簾状文を施す。櫛描簾状文は幅が広く、施文後にヘラミガキを施している。太頸壺 169 は外面に櫛描列点文を施した後、円形浮文を貼り付ける。内面には円形浮文を貼り付け時の押圧でできた隆起がある。

高杯 157・158・159 は口縁部の端面と内面を指で挟みながらヨコナデしており、端面は内側に拡張した形状を呈する。157 と 158 は内外面をヘラミガキ、158 は杯部外面に二段の櫛描列点文を施す。脚部は粘土円板を充填して杯部と接合する。高杯 164 は椀形の杯部から脚部にかけて外面に連続的にヘラミ

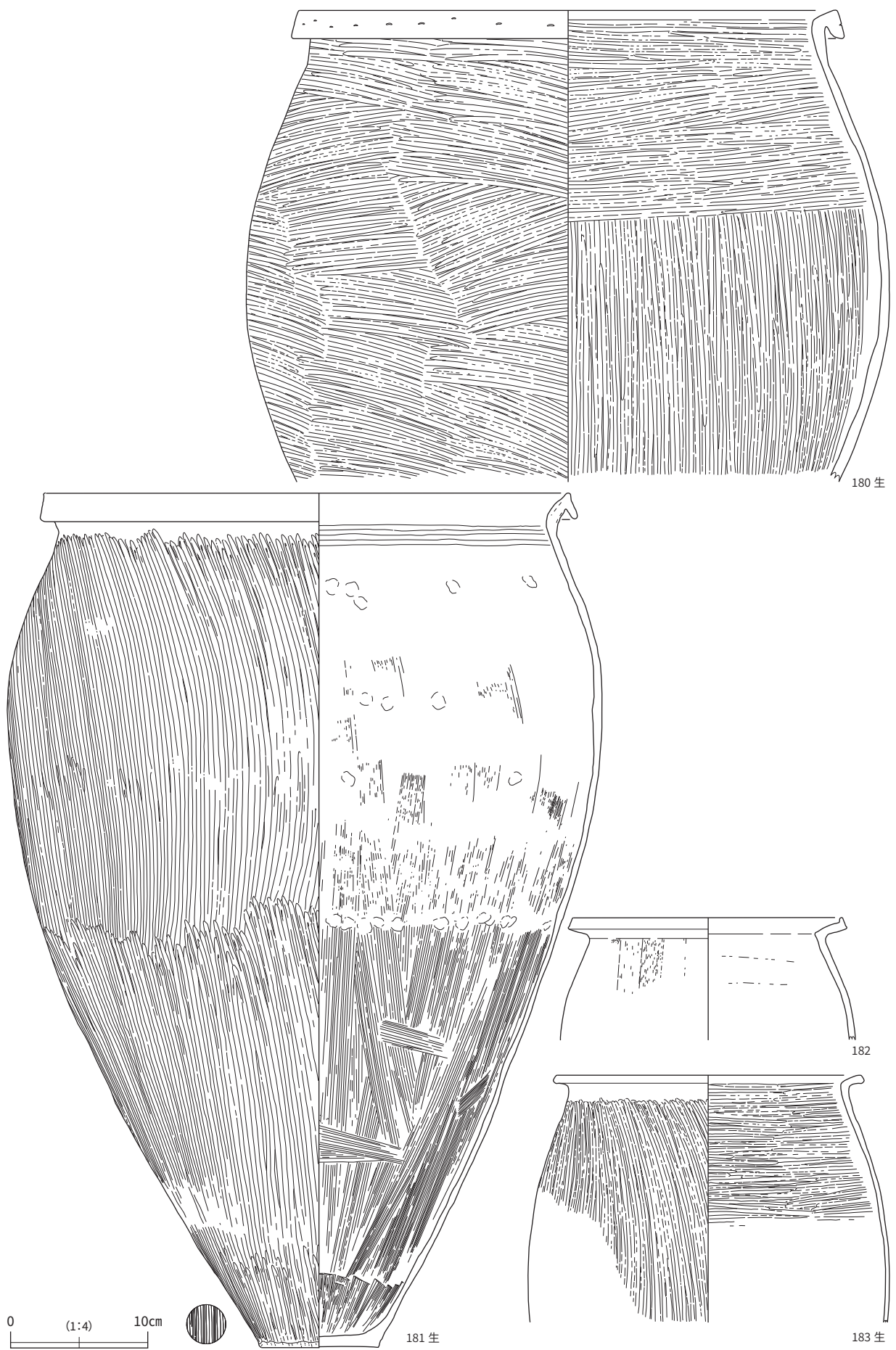


图 54 6号墓出土遗物(9)

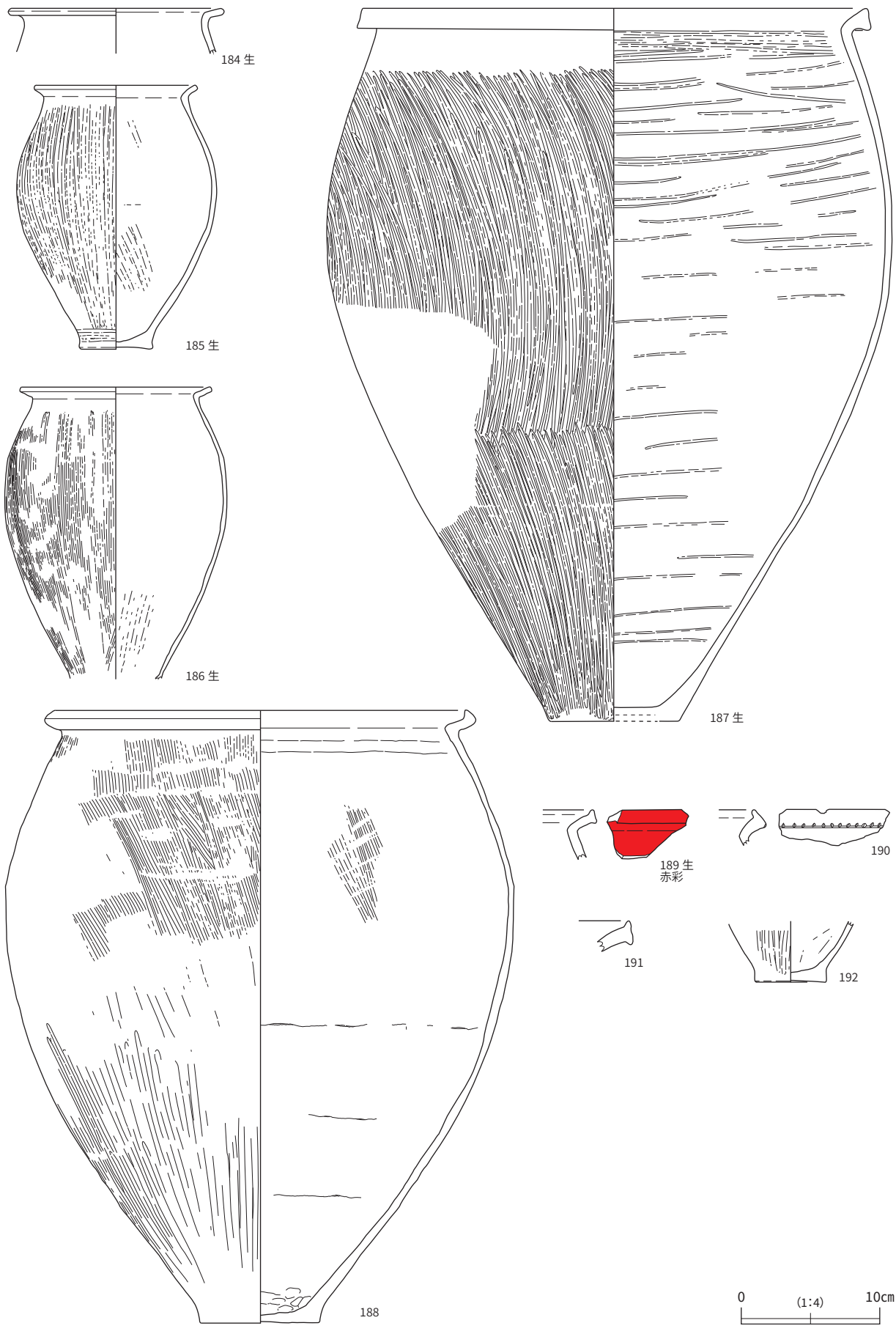


图 55 6号墓出土遗物 (10)

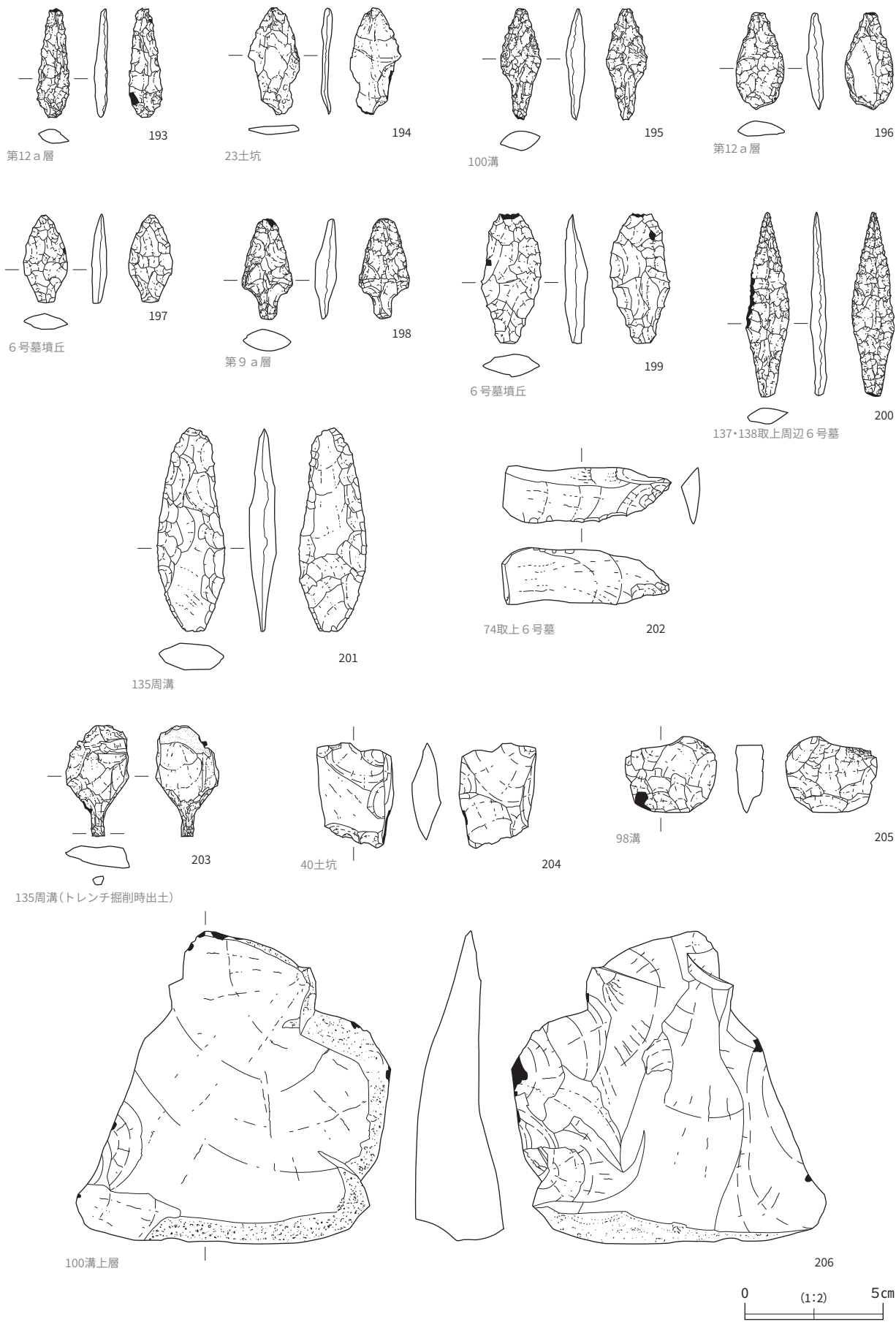


图 56 1区出土石器

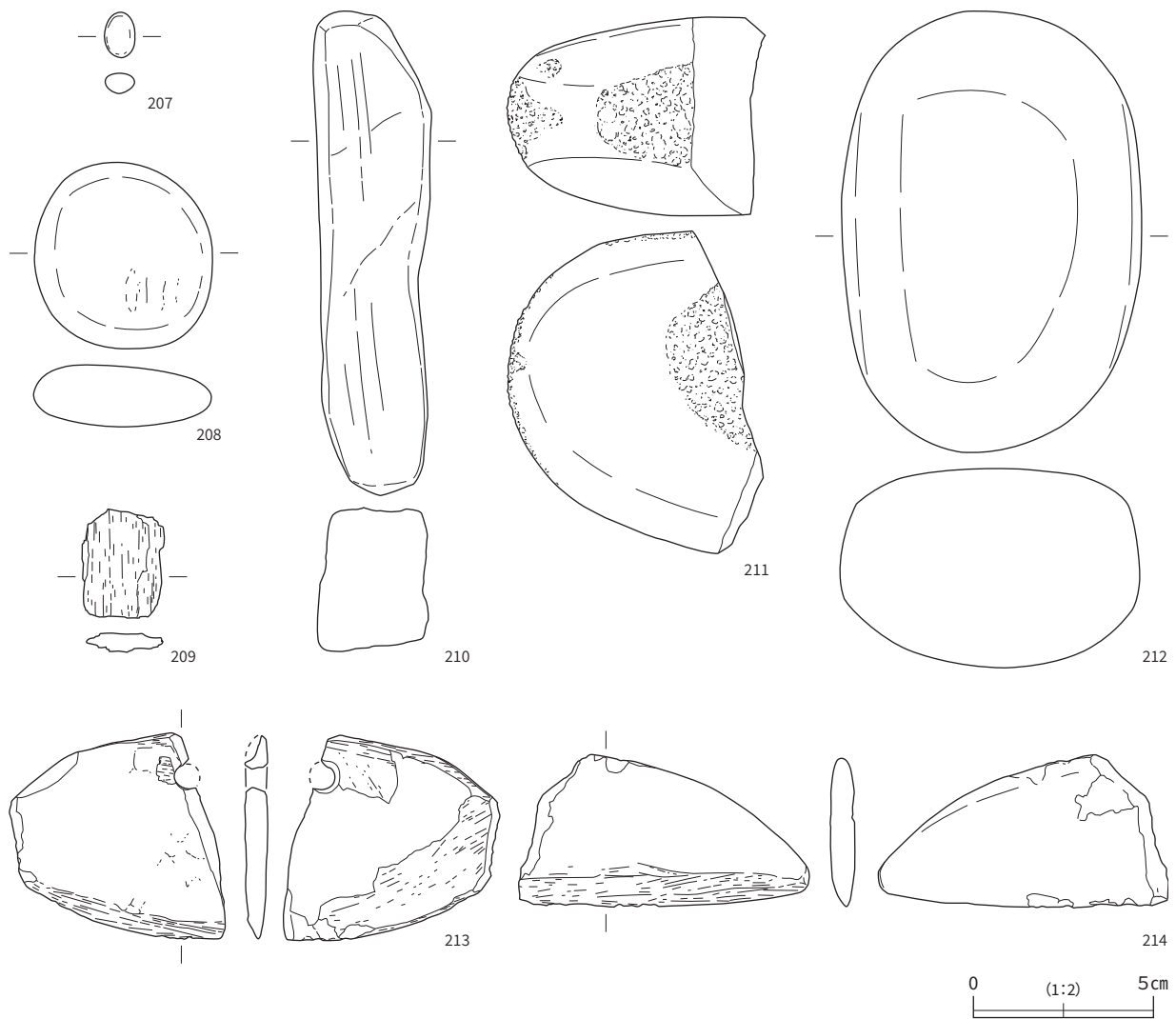
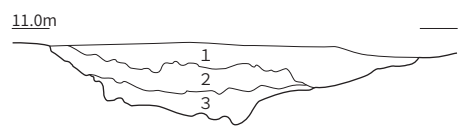
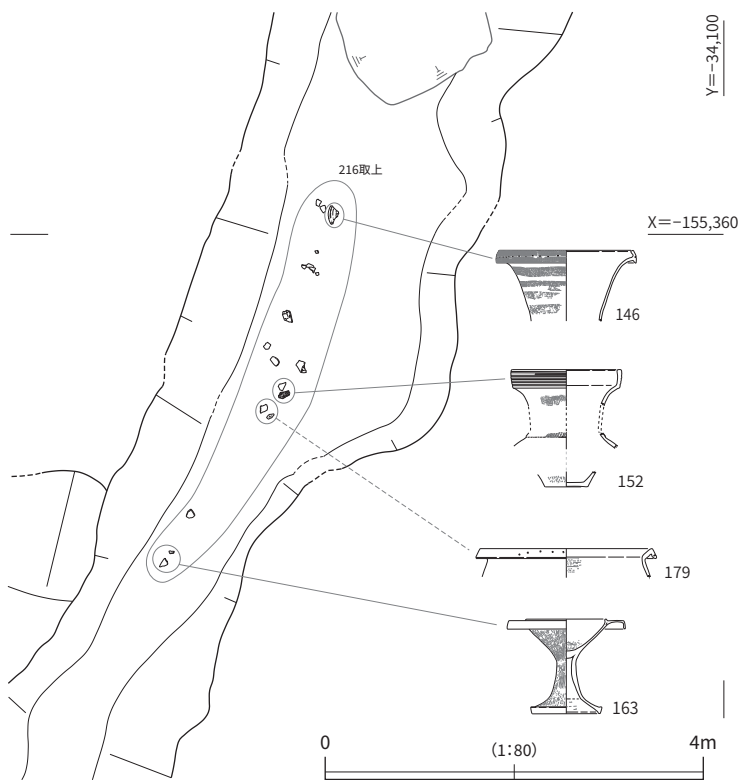


図 57 1区出土石製品

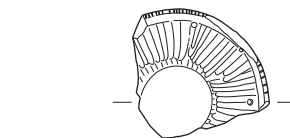
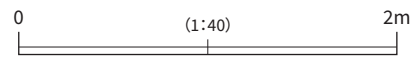
ガキを施したものである。杯部内面は摩滅している。胎土は広口壺 152 と同じである。水平口縁の高杯 162・163 は 162 が生駒西麓産、163 が灰褐色系の胎土を用いたものである。外面はヘラミガキしており、内面は 162 が摩滅、163 が底面にヘラミガキが残る。図示していない細片で、水平口縁高杯は生駒西麓産が 1 点、163 に似た胎土と同じものが 2 点出土している。

台付鉢 165 は 6 号墓の 100 溝の底面から浮いた状態で出土したものである。外面は地文風にハケを施した後、竹管文を施す。台付鉢 166 は外面に櫛描簾状文を施した後、ヘラミガキしており、櫛描簾状文の単位幅は広い。台付鉢 167 は外面に櫛描列点文と櫛描簾状文を施しており、鉢 174 と同様に外面の屈曲部に櫛描列点文がある。台付鉢 168 は大県（その 8）で検出された 2 号墓で同様のものが出土しており、2 号墓で出土したものはナデで成形された把手が付く。外面は櫛描列点文、内面は口縁端部に刻目、摩滅により不鮮明だが櫛描列点文を施す。

把手付鉢 170 はナデによって成形された把手が付くもので、ハの字形に開く脚部が付く。外面はヘラミガキし、鉢と脚部の接点に竹管文を施す。竹管文は円柱状の工具を押し当てて、垂直方向に引き抜いて施したもので、深さは 3mm に達する。体部中央には焼成後に穿孔した可能性がある孔が認められるが、調査時に傷付けたものか現状では不明になっている。ミニチュア土器 171 は壺体部の形状に成形されたもので、口縁部は欠損している。



- 1. 5Y6/1 灰 極細砂質シルト
- 2. 5Y8/1 灰白 粗砂～極粗砂 シルトを少量含む 水成層
- 3. 10Y6/1 灰 粘土質シルト 粗砂～極粗砂を少量含む



実207
162溝
弥生土器高坏

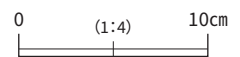
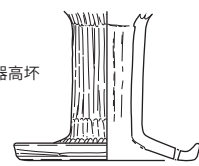


图 58 6号墓平面 (4)

鉢 172 は精緻な櫛描簾状文と櫛描列点文を施したもので、外面には赤彩が残る。他の器種と比較しても、櫛描文様が丁寧に施されたもので、細頸壺 153 と同様、出土品中の優品である。鉢 173・174 は屈曲部より上位の外面に櫛描簾状文を施したもので、口縁端部には櫛描簾状文と内面まで貫通した刺突文を施す。174 は屈曲部直上に横向きに櫛描列点文を施す。鉢 176 は 6 号墓東側に堆積した第 10 a 層から出土したもので、台付鉢 177 と胎土が同じである。細片で、摩滅が顕著、外面に凹線が 3 条認められる。大形の台付鉢 177 は口縁部外面に斜格子文と凹線を施す。斜格子文は 2 本の竹管状工具を束ねて施文した沈線で表現したもので、施文時に間隔が合わなくなった部分は沈線を重ねたり沈線の傾きを変えたりして文様を完成させている。脚部には円形の透孔を入れており、鉢部下位に焼成後に穿孔を行っている。

甕 178 ～ 181・187 は大形のもので、口縁端部に刺突文を施すものと施さないものがある。刺突文は 178・179 が円形、180 が横長の扁平なもので、口縁端部にジグザク状に施される。188・189・191 は口縁部形状が内側上方に先細りしたものである。189 は外面を赤彩する。甕 178 とともに出土したもので、大形品と思われるが、他に同一個体は確認できなかった。190・191 は白褐色系の胎土で、他にも口縁部の形状が同じだが別個体のものが細片で出土している。192 は胎土が赤褐色系で、台付鉢 177 と製作地が共通する可能性が高い。

サヌカイト製石器は石鏃 193 ～ 201、搔器 202、石錐 203、楔形石器 204・205、石核 206 が出土した。サヌカイトはすべて二上山産のものである。石鏃の内、194 は基部周辺の剥離と裏面剥離面の厚みが極端に薄くなっており、石器製作途中の失敗品の可能性があると考えている。

円礫 207 は 206 埋葬施設、円礫 208 は墳丘盛土（旧表土直上）から出土した。周辺の地層に含まれる礫と形状が異なっていることから図示している。使用痕は認められない。209 は石鋸、片岩製である。高杯 162・甕 187 とともに出土した。台石 210 は表面に筋状の使用痕が残るもので、158 取上として回収したものである。叩石 211 は表面と側面に敲打痕が残るもので、100 溝から出土した。石庖丁 213 は 101 高まり周辺を精査時、214 は 100 溝底面から出土したもので、刀部に横方向の擦過痕が残る。

f. 第 5 面〔6 号墓加工面〕（図 31・58、図版 7）

162 溝の完掘状況と墳丘基底面を構成する第 13 - 2 a 層上面を第 5 面とした。調査時、162 溝は第 13 - 2 a 層（旧表土）との新旧の関係が不明瞭であったことや溝底面に縄文土器が出土していたため、6 号墓構築前に機能した溝を想定していた。162 溝の掘削を進めたところ、出土遺物に弥生時代中期後葉の弥生土器が混じり、弥生土器の内 3 点は第 1 面墳丘南西側から出土したものと接合することが判明した。第 2 面 135 溝は土壌化の影響による溝肩部と墳丘、墳丘の斜面堆積物と溝埋土の区別が不明瞭な場合があり、162 溝についても同様の事象が起こっていたと判断するに至っている。

162 溝（図 58、図版 7）

幅 1.5 ～ 4.5 m、深さ 0.4 m、埋土は中層が粗砂から極粗砂の水成層、下層が湿性の堆積物である。遺物は弥生土器広口壺 146・152、高杯 163・215、甕 179 が出土した。高杯 215 以外は、6 号墓第 1 面墳丘斜面から出土したものと接合している。

162 溝は、① 162 溝から出土した土器が高い確率で 6 号墓第 1 面の遺物と接合していること、② 98 溝と層的に検出面が異なること、③ 6 号墓第 1 面の墳丘南西辺で出土した土器が埋没後の 162 溝直上から出土していることから 6 号墓に伴う時期があったと考えている。6 号墓第 1 面で出土した弥生土器の内、162 溝と接合した土器は第 1 面が形成される以前に使用した可能性が高いと考えられる。

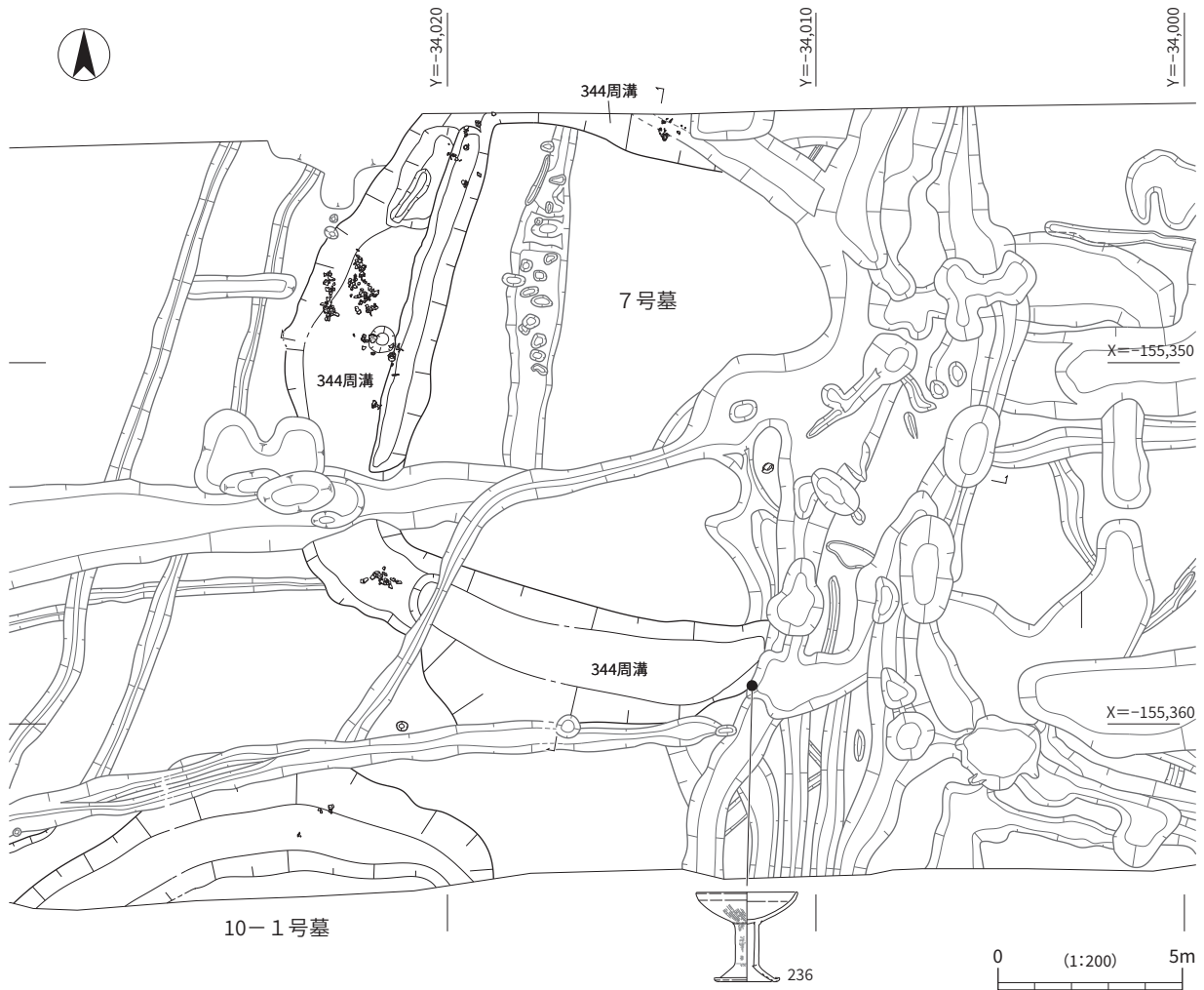


図 59 7号墓平面

7号墓（図 21・59～65、巻頭図版 2、原色図版 3・4）

墳形は長方形、長辺 13.0 m、短辺 9.0～10.0 mである。北東側は調査区外になっているが、調査区内に墳丘北西隅が入っており、墳丘の全容が判明している墳墓である。墳丘の東側は 2 区（東側）溝・土坑群の開削により攪乱を受けている。2 区（東側）溝・土坑群は 7 号墓南東側の周溝に重なるように掘削されており、7 号墓の周溝が埋没しきらずに凹みになっていた部分を加工したものと考えている。

7 号墓周辺は墳形と 344 周溝を検出した段階で第 14 b 層が露出した状態になっていた。墳丘上面で 381 溝が検出されていることから、古墳時代中期中葉から後葉以降には墳丘が削平された可能性を想定している。墳丘上面では平安時代中期以降の 359 耕作痕や第 11・12 a 層の堆積を確認しており、墳丘基底面の第 13-2 a 層（旧表土）も著しく削平を受けていた。墳丘上面では、一部で第 14 b 層が露出していることも確認しており、墳丘盛土は確認されなかった。このような状況が影響して、7 号墓では埋葬施設は確認されなかった。7 号墓の築造は河内地域で複数の埋葬施設（複数埋葬）をもつ方形周溝墓が築造されていた時期に当たり、墳丘規模と長方形の墳形を考慮すると、複数埋葬が採用されていた可能性が高いと考えている。

遺物は周溝から多量の弥生土器が出土した。7 号墓北東側、北西隅、北西側、南西隅に弥生土器が集中する（図 61）。弥生土器は、北東側と南西隅が底面、北西隅が墳丘斜面、北西側が墳丘肩部から底面から出土している。北西隅の弥生土器は 451 取上①・②・⑦が底面、③～⑥が底面より浮いた状態で出



図 60 7号墓東西(27・28トレンチ)断面



图 61 7号墓遗物出土状况平面

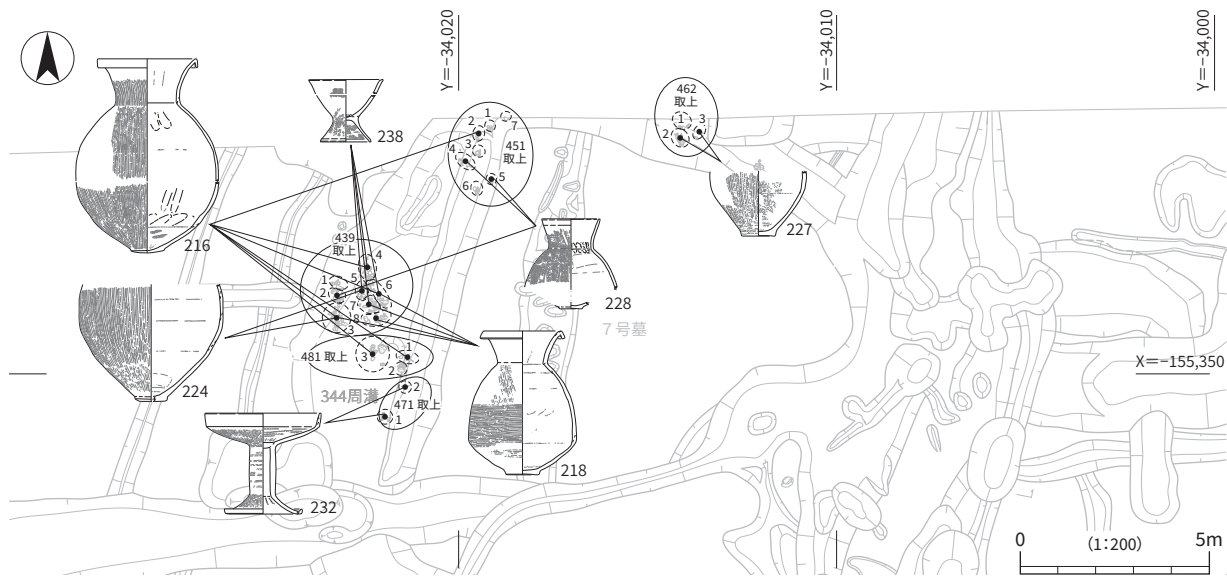


図 62 7号墓出土遺物接合関係

土している。北西側から出土したものは、周溝の肩部から底面にかけて弥生土器の破片が帯状に集中しており、1箇所にとまどめて投棄されたような状況で出土した（以下、土器集中部）。個体の接合関係を保っているものがあるが、元の形に近い状態を保ったまま出土したものは皆無であった。

周溝内から出土した土器は墳丘中央か墳丘のコーナーに近い場所から出土しており、方形周溝墓での土器の使用状況を反映している可能性がある。器種別に出土状況を見ると、広口壺は南西側の土器集中部から大半が出土しており、広口壺 217 のみ南西隅から出土している。取上の単位内で接合するものが大半であったが、広口壺 216 は離れた場所から出土したものが接合している。直口壺 228 は広口壺 216 と同様に北西隅と南西側のものが接合した。216 の大半の部位は北西隅にあったものである。台付鉢 238 や無頸壺 229 は南西側の土器集中部から出土しており、近接して出土したものが接合している。

344 周溝（図 59～61）

幅 4.2 m、深さ 0.54 m である。北西側の周溝底面は墳丘際を深く掘り込んで一段低い。埋土は下層から加工時形成層のブロック土、機能時形成層の粘土質シルト（弥生時代後期）とその上部に土壌化した粘土質シルト（古墳時代前期）の順に堆積する。底面は北西隅、南西隅、南東隅がそれぞれ高くなっていた。北東隅は 2 区（東側）溝・土坑群によって攪乱されており、基盤層上面の高さに明確な差異は無かった。北東隅については不明な部分が残ったものの、墳丘の四隅が周溝の掘り残しによって高くなっている。6号墓のような陸橋の存在は調査した範囲で確認されなかった。南東側は 2 区（東側）溝・土坑群の攪乱により陸橋の有無は検証することはできなかった。ただし、408 溝（古墳時代前期）は墳丘を破壊して南東辺中央に接続しており、2 区（東側）溝・土坑群が 7号墓の周溝の凹みを利用したという前提に立てば、陸橋があった場所に 408 溝を掘削したとは考えにくいと考えている。墳丘の四隅は周溝外と高低差が小さく、通路として利用していた可能性がある。

北西側の周溝では墳丘際が一段深く加工されており、中央部では 483 土坑を検出した。483 土坑は平面が不整な円形、直径 0.65 m、深さ 0.25 m、埋土は湿性の粘土質シルトである。483 土坑は 344 周溝と切り合い関係が無く、土坑の上部に周溝内の弥生土器が落ち込んでいるような状況で出土している。周溝機能時に凹んでいたと考えており、水を溜めるような施設であったと考えている。

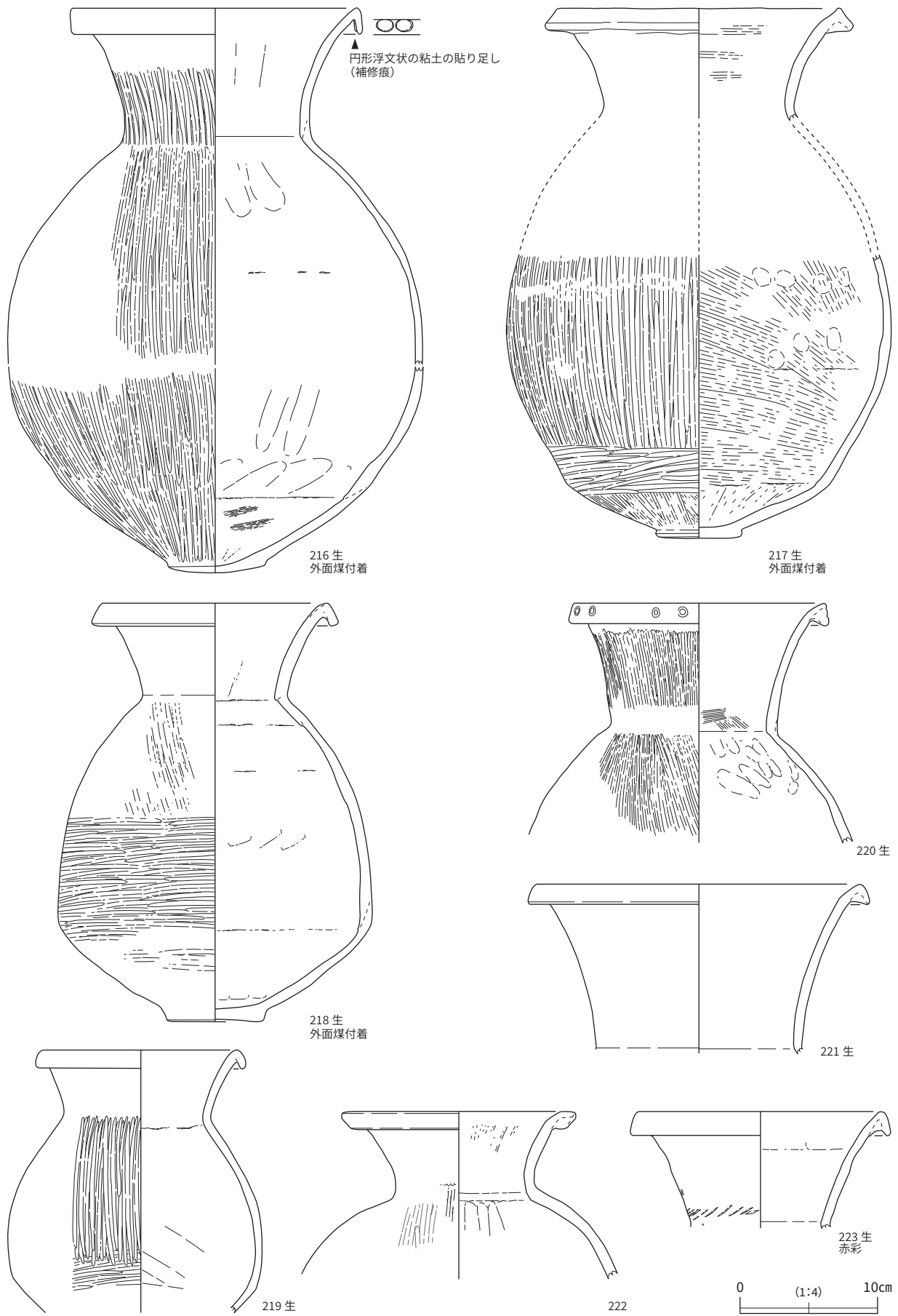


図 63 7号墓出土遺物(1)

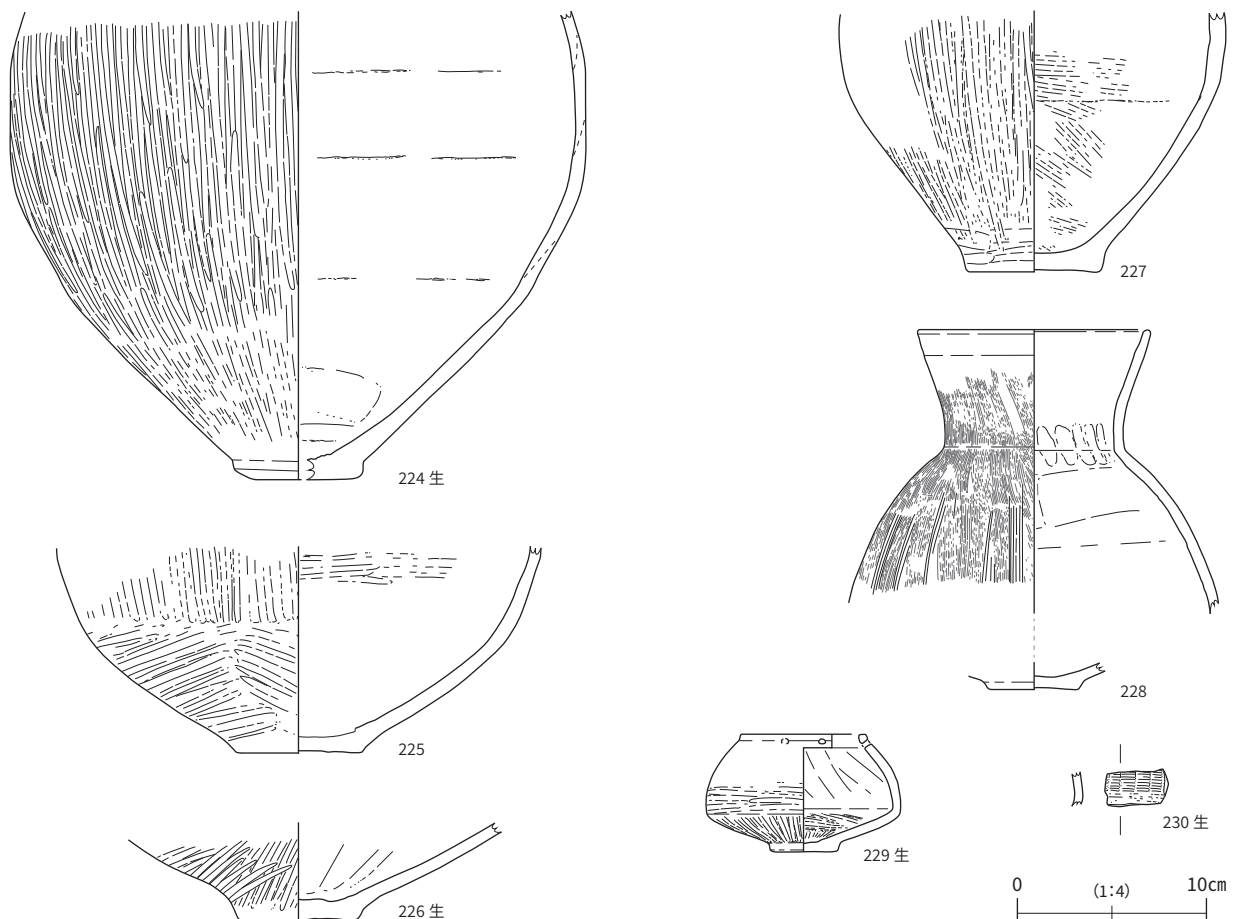


図 64 7号墓出土遺物（2）

出土遺物（図 63～65、図版 13）

6号墓と比較すると弥生土器の出土量は少ない。出土時は細片になっているものが多く、個体毎にまとまりをもつものや、完形品に復元されるものもあったが、復元した際半分以上が失われているものが多かった。一部の土器は、7号墓周辺に堆積する地層や古墳時代前期の溝から出土したものと接合するのがあった。器種別の割合は広口壺が多い。

広口壺 216 は垂下口縁の内側で、土器製作時の破損部に円形浮文状の粘土を貼り足す。頸部から底部にかけて縦方向にヘラミガキを施す。広口壺 217 は体部の屈曲部が下にあるもので、屈曲部より下位はハケ、屈曲部直上は横方向のヘラミガキ、体部上半は縦方向のヘラミガキを施す。広口壺 218 は体部の中位まで横方向にヘラミガキを施す。広口壺 220 は口縁端部に竹管文を施しており、7号墓と2区東側では弥生時代中期末から後期初頭のものとしては唯一のものである。外面はヘラミガキ、内面は指ナデを施す。広口壺 221・222・223 の口縁部は、端部を折り返して下側に粘土を貼り足して成形したものである。223 は頸部に斜めに工具を押し当てて文様を施文したものである。櫛歯状工具の先端を用いたものではなく、爪痕の可能性がある。東部瀬戸内系の土器の影響を受けたものか。壺 224 は外面を縦方向にヘラミガキし、煤が付着する。壺 225 は明瞭な屈曲部をもたないものだが、下位には斜め方向にヘラミガキを施している。壺 226 は 225 と同様に斜め方向にヘラミガキを施すものである。

甕 227 は外面を縦方向にヘラミガキしており、内面にはハケメが残る。胎土が茶褐色を呈するが、角閃石や雲母を含んでおらず、生駒西麓産のものではないと判断している。

直口壺 228 は外面に細密なハケ調整の後、条線が太く粗いハケを縦方向に施す。内面は器壁の粘土を

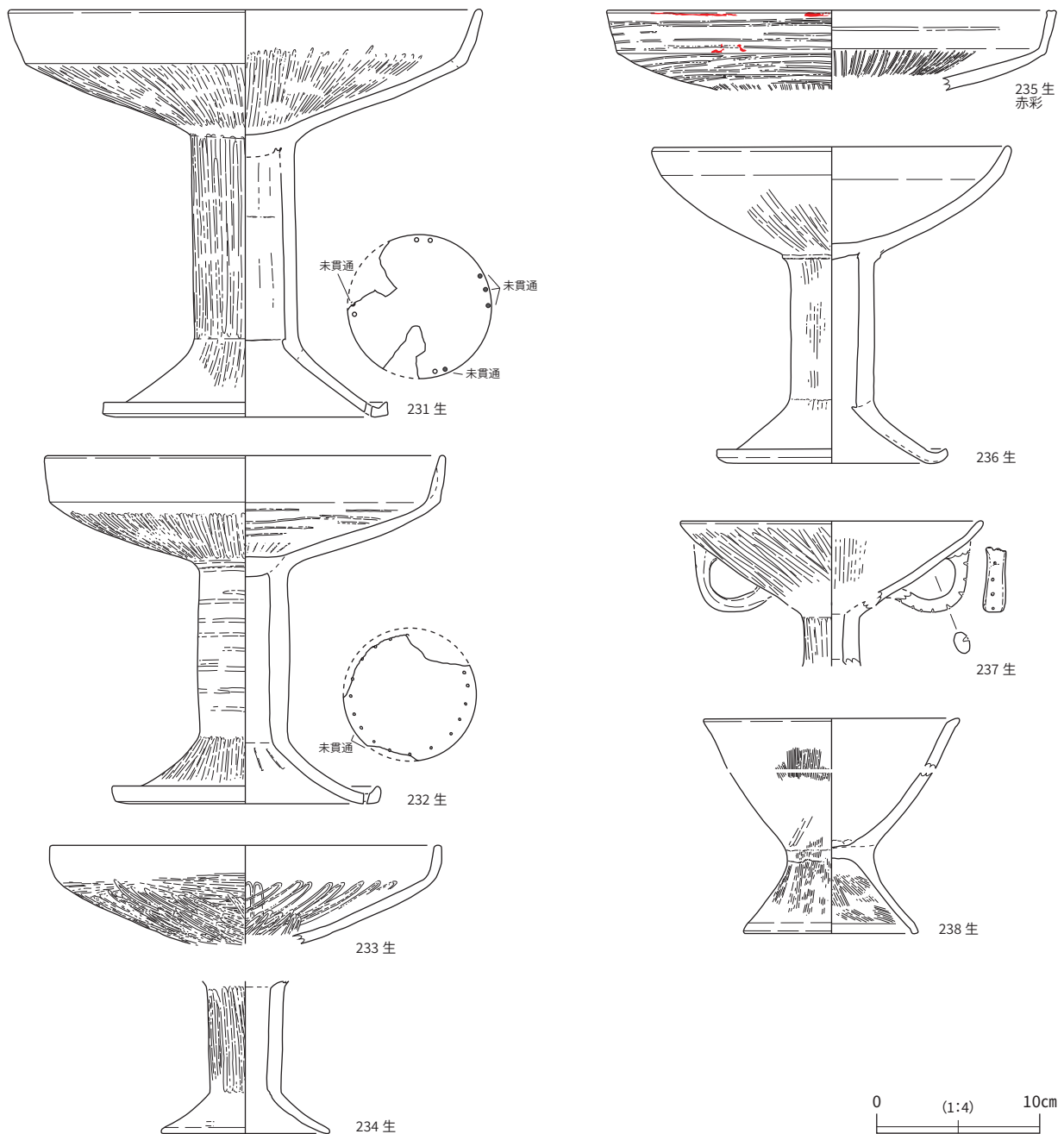


図 65 7号墓出土遺物(3)

掻き取るようなナデを施している。赤褐色系の特徴的な胎土である。無頸壺 229 は半個体分が出土した。外面はヘラミガキ、内面は屈曲部より上位にナデ、下位にヘラミガキを施す。

広口壺 230 は体部の屈曲部に相当する部分が出土しており、外面に櫛描簾状文を施す。344 周溝から出土したもので櫛描簾状文を施したものは他には出土していない。

有段口縁の高杯 231・232・235 は杯部内外面をヘラミガキする。脚部が残る 231 と 232 はヘラミガキの方向がそれぞれ異なっている。235 は口縁端面から外面に赤彩が遺存する。高杯脚部の 234 は 233 と同一個体の可能性がある。高杯 236 は脚部が 344 周溝上層、杯部は古墳時代前期の 448 土坑から出土したものと接合した。胎土には 2~3mm 大の長石が多量に含まれており、他の生駒西麓産の土器とは異質である。台付鉢 237 は刺突文を施した把手が付く。内外面はヘラミガキする。台付鉢 238 は外面にハケ、鉢部内面にナデ、脚部内面にハケを施す。

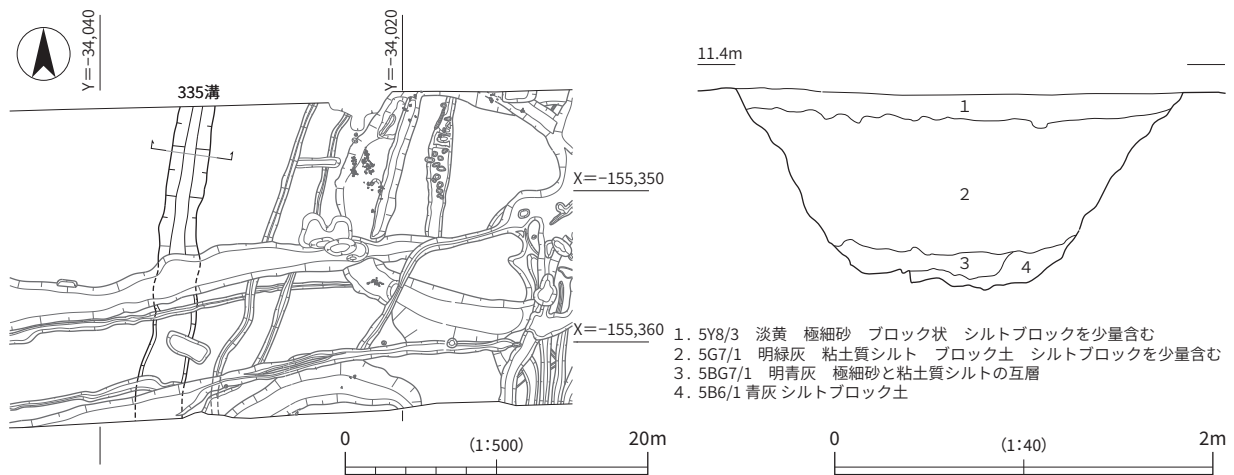


図 66 335 溝断面

335 溝 (図 66)

断面はV字形からU字形を呈し、幅 2.4 m、深さ 1.0 m である。埋土はシルトブロック土主体で、機能時の堆積物は認められなかった。短期間で埋め戻されたためか、浚渫が行われて維持管理がなされて空濠のように機能したためと考えている。遺物は出土しなかった。大県（その 8）の調査では弥生時代中期の遺物が出土している。大県（その 8）で検出された 1 号墓、大県（その 9）で検出された 3・4 号墓は 335 溝を埋め戻してから構築されている。

(12) 第 14 b 面〔縄文時代晩期～弥生時代前期〕(図 21、図版 8)

第 13 - 2 a 層を除去して検出した遺構面で、溝・土坑・谷地形を検出した。主として、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構・遺物を確認している。1 区（西側）溝群は第 13 - 2 a 層を除去して検出した溝を図 21 では図示しているが、時期は弥生時代中期以降を想定している。

縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構・遺物は、1 区 170 谷地形周辺と 2 区東端に分布域が分かれる。大県（その 10）の調査では、主として縄文時代晩期の遺構・遺物が多数確認されており、2 区東端の分布域は大県（その 10）の分布域の北端を示すものである。一方、1 区 170 谷地形周辺では弥生時代前期の遺構・遺物が相対的に増加しており、異なる様相を示している。

97 土坑 (図 21・67、図版 8・14)

平面が不整形、長軸 3.6 m、短軸 2.3 m、深さ 0.2 m、埋土は粘土質シルトで、炭化物が埋土全体に含まれる。東側はトレンチを設定した場所に当たり、全容は不明である。平面形は不明瞭で、肩部は底面に向かって緩やかに低くなっており、底面の凹凸が顕著である。人為的に掘削されたものではなく、浅い凹みであった可能性がある。

遺物は縄文土器深鉢 243～247、弥生土器甕 239～242、凹石 248 が出土した。炭化物は土器周辺にやや濃集する傾向が認められた。縄文土器と弥生土器は混在するような状況で出土しており、出土時の高さに顕著な差異はなかった。浅い凹みになっていた場所に縄文土器や弥生土器を廃棄したと考えている。縄文土器深鉢 243 は今回出土した深鉢の中では最も遺存状態が良好なものである。外面に 2 条の突帯を貼り付け、突帯に小 D 字刻目を施す。底部は失われており、97 土坑内から出土しなかった。深鉢 244・245 は突帯に小 O 字形刻目を施したものである。深鉢 246 は無刻目の突帯を貼り付ける。

弥生土器甕 239 は口縁端部に刻目を施し、体部は 2 条のヘラ描き沈線の間へラを用いた刺突文を施す。体部は球胴化が進んだものである。凹石 248 は破断面以外のすべての面が凹んでいる。岩質は砂岩。

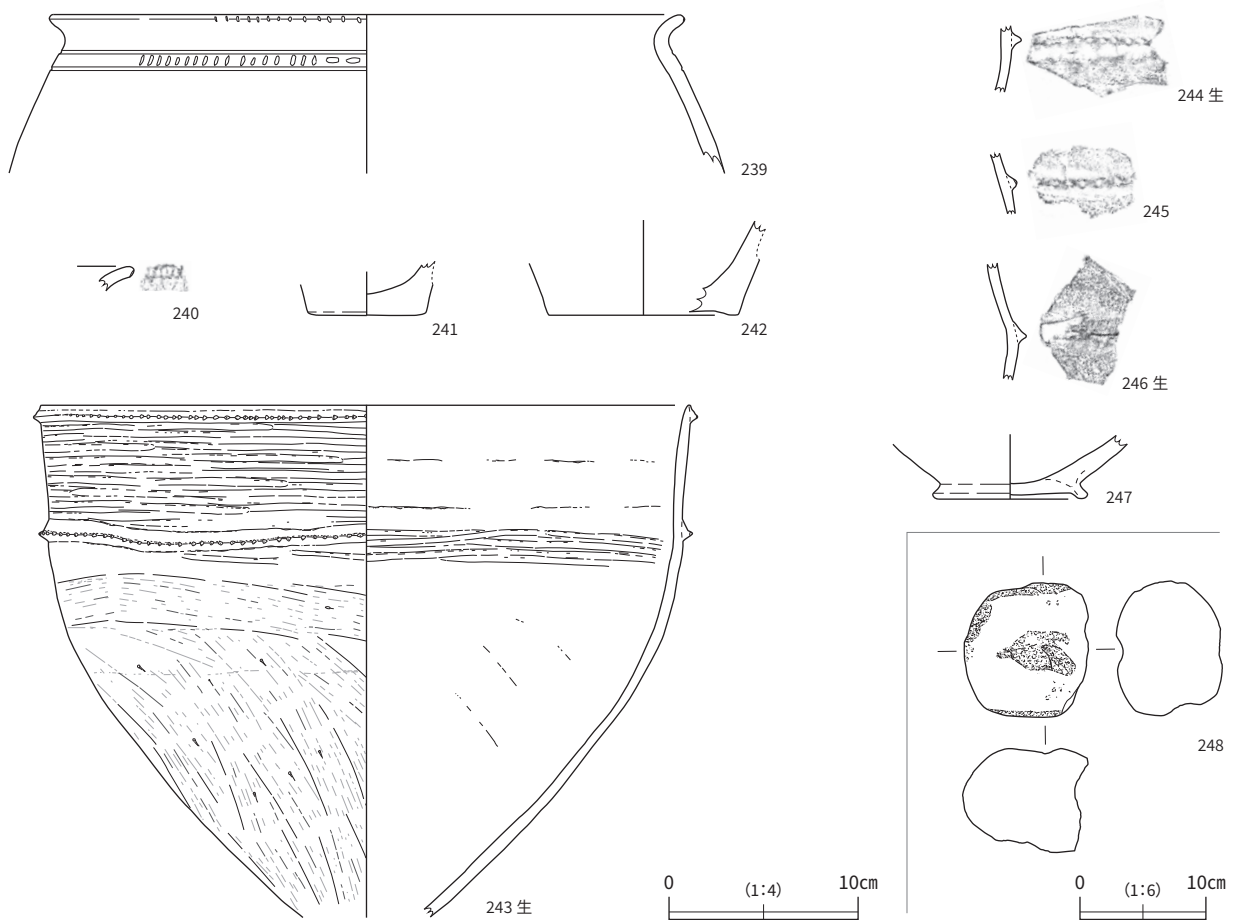
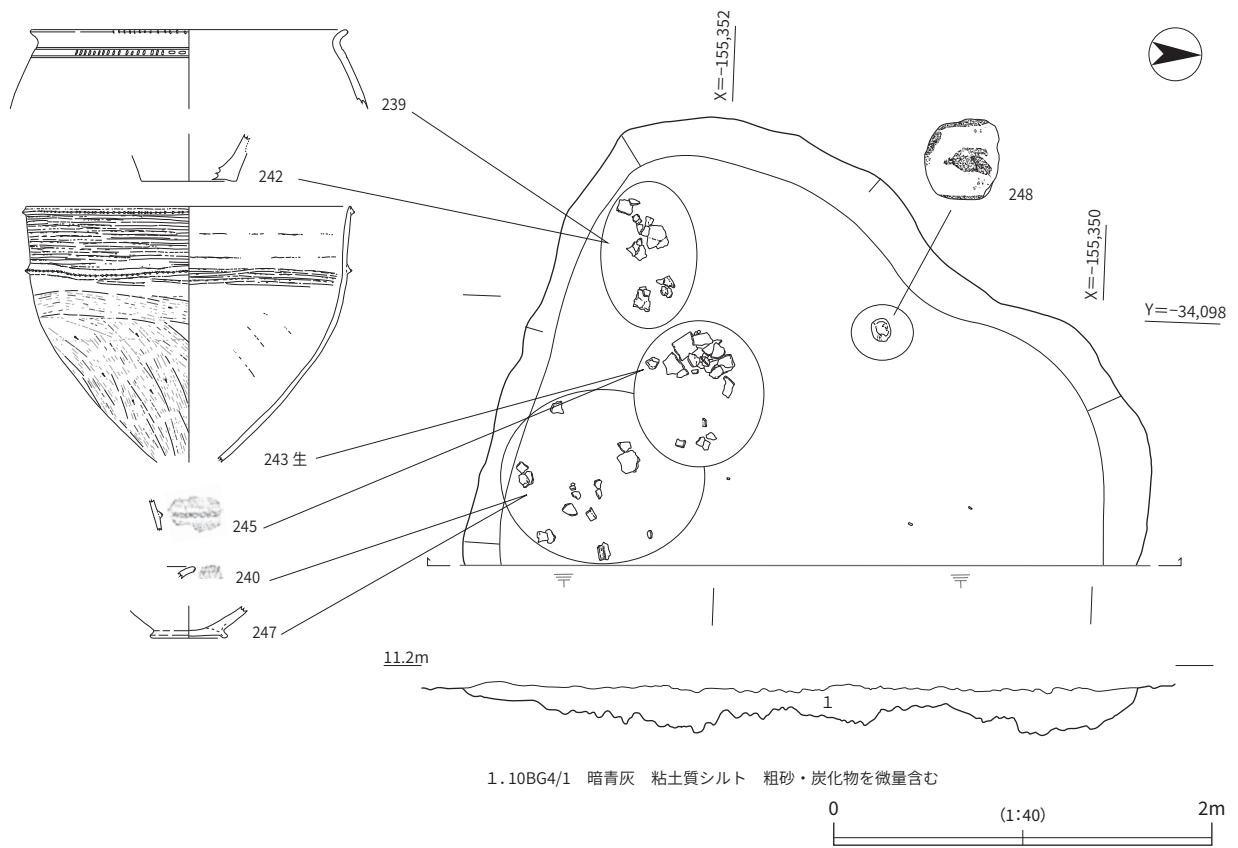


图 67 97 土坑他平・断面、出土遺物

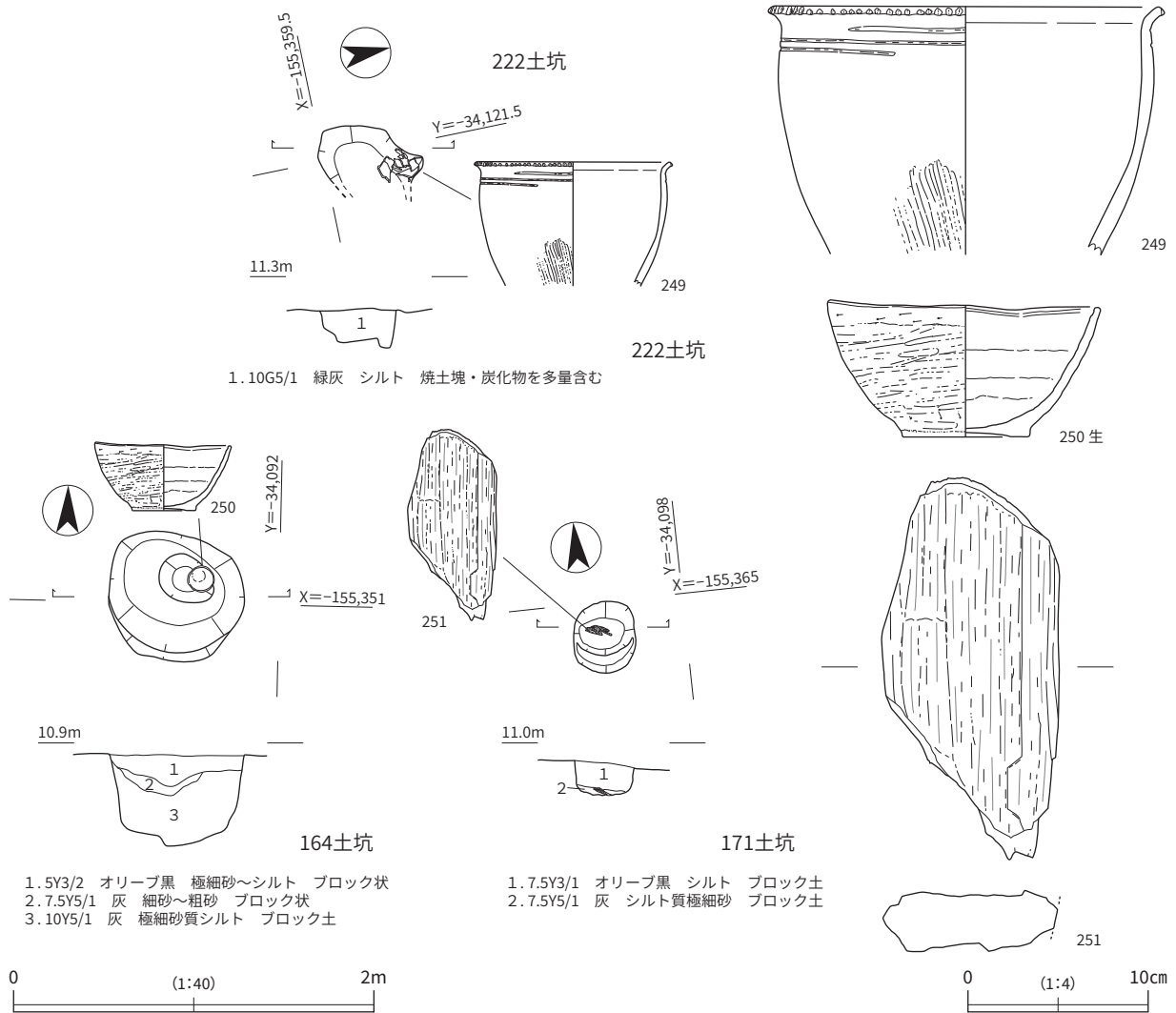


図 68 222 土坑他平・断面、出土遺物

215 土坑 (図 21・70、図版 14)

平面が不整形、長軸 2.6 m、短軸 2.7 m、深さ 0.6 m、埋土は粘土質シルトである。162 溝に上部を攪乱されている。遺物は縄文土器深鉢 280 が出土した。口縁部が外反し、突帯に小 D 字刻目を施す。

222 土坑 (図 21・68、図版 8・14)

平面が不整形、長軸 0.4 m 以上、短軸 0.4 m、深さ 0.2 m である。埋土はシルトで、焼土塊や炭化物を多量に含んでいる。東側はトレンチを設定した場所に当たり、全容は不明である。焼土塊は 1 cm 大のものが多数集まって塊状になって出土した。竪穴建物の炉跡になる可能性を考慮して調査を行ったが、222 土坑に付随する施設は確認されなかった。222 土坑の肩部や底面に被熱した痕跡は無く、焼土塊を廃棄した土坑と考えている。遺物は弥生土器甕 249 が出土した。甕 249 は体部にヘラ描き沈線を施すもので、沈線は上下にずれて施されている。

164 土坑 (図 21・68、図版 8・14)

平面が不整な楕円形、長軸 0.8 m、短軸 0.7 m、深さ 0.5 m である。埋土はブロック状の細砂からシルトで、周辺の基盤層に由来する土で埋め戻されている。遺物は完形品の縄文土器浅鉢 250 が出土した。外面はヘラミガキ、内面はナデで粘土接合痕が明瞭、口縁端部に沈線をめぐらす。弥生時代前期壺の体部から底部の形状に似ている。

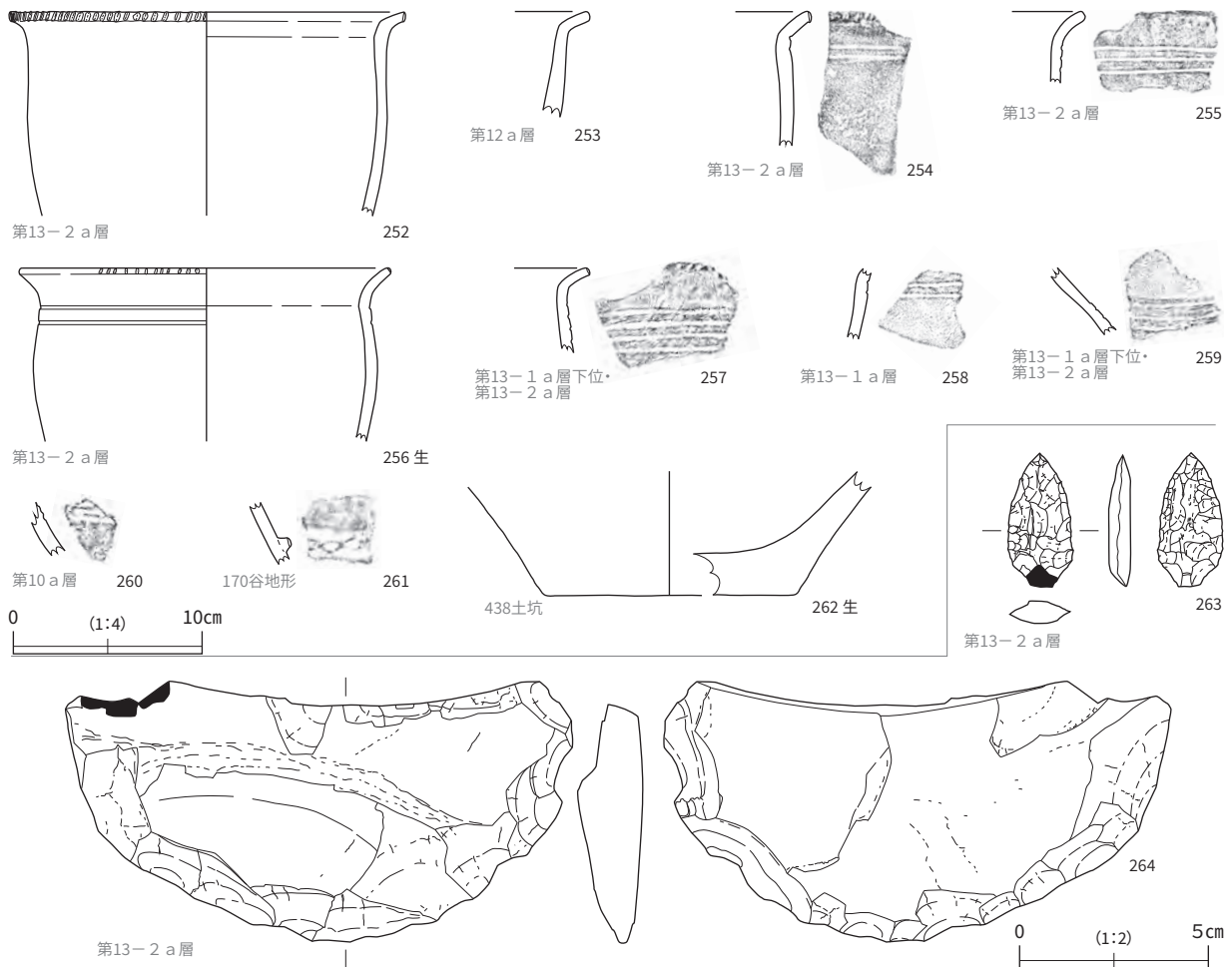


図 69 1・2区弥生時代前期出土遺物

171 土坑 (図 21・68、図版 8・14)

平面が不整な楕円形、長軸 0.4 m、短軸 0.35 m、深さ 0.2 m である。埋土はブロック土である。遺物は石棒 251 が出土した。出土時個体のまとまりをもっていたが、調査の過程で、節理で分離している。石棒 251 は底面から横向きの状態で出土した。岩質は結晶片岩。

170 谷地形 (図 21・69～71、図版 8・14)

検出長 21.0 m、幅 9.0～13.0 m、深さ 0.9 m である。土壌化が顕著な泥質の堆積物で埋没する。遺物は土偶 293、縄文土器深鉢 269・276・278、弥生土器壺 261 が出土した。

土偶頭部 293 は 170 谷地形を掘削した際の排土から出土したものである。大県 (その 10) で調査された 130 土坑から出土した胴部と接合した。頭部と胴部の出土地点間の距離は 85 m である。

土偶の頭部は、頭頂部に当たる上端を欠損する。顔面は断面三角形の粘土帯を貼り付けて上下が縁取りされており、中央には鼻梁が表現される。鼻梁の粘土帯は下端部の一部が剥離している。粘土帯で囲まれた範囲はミガキ様に平滑に仕上げられて、肉眼で彩色は認められない。上部の粘土帯が眼窩、下部の粘土帯が下顎部を表現したものか。両耳は円孔で表現し、下側の粘土帯は円孔の上部でナデ付けられて途切れる。

胴部は頸部から腹部を表現し、腹部には正中線を表す沈線を施す。沈線は 2 条の条線になっている部分があり、棒状のものを複数束ねて施文した可能性がある。腕部は棒状の粘土を肩部から腹部に接合して表現されており、両脇の孔の下部は棒状工具を用いて整えている。表面は右肩部から左腹部にかけて

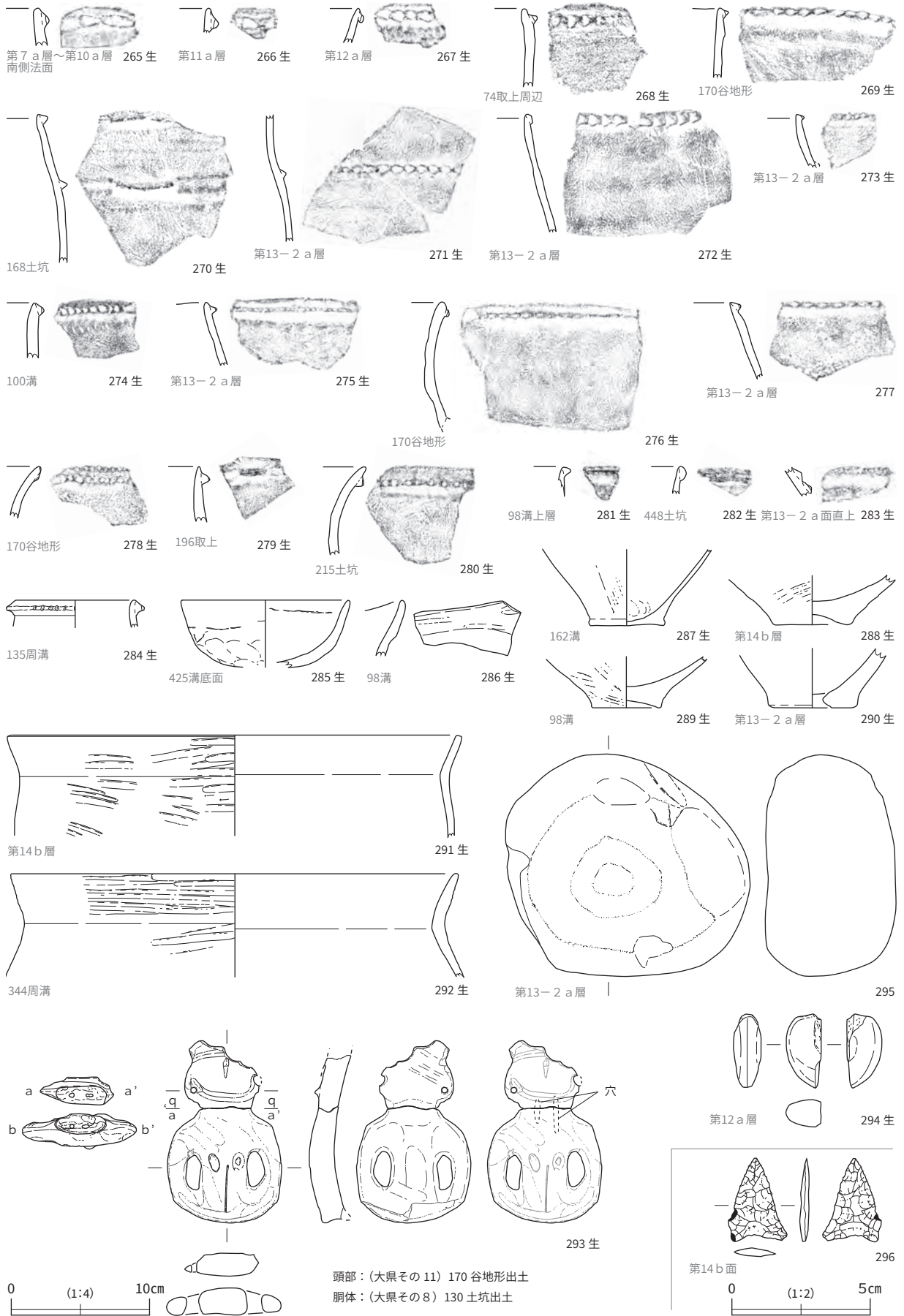


図70 1・2区縄文時代出土遺物

斜め方向にナデを施す。正中線の両側には粘土を貼り付けて乳房を表現しているが、右側の乳房は粘土が剥離し、左側乳房は先端が破損する。裏面は腕部外周にナデ、腕部に空いた穴の間は強いナデを施して背中に当たる部分を表現する。底面は横方向に強いナデを施して内湾する。

土偶は頸部で折損しており、破断面に2箇所穴が穿たれる。右側の穴は不整な円形状を呈し、直径3mm、深さは頭部と胴部合わせて1.8cm、左側の穴は2つの穴がつながっているような形状をしており、長軸3mm、短軸1mm、深さは頭部と胴部合わせて2.7cmである。焼成前に頭部と胴部の接合を補強するために草木の軸を入れていたと考えており、左側の穴の状況から2本以上を単位とした草木を束ねて軸として用いていた可能性がある。

耳を表現した孔と両脇の孔に紐擦れ痕はなく、土偶は懸垂して用いられたものでないと考えられる。また、底面は丸みを帯びており、土偶単体で自立するように造形されていないため、後屈する姿勢の土偶を正面に向けて立てようとする、傾斜するものに立てかけたことが想定できる。

深鉢269は口縁端部に接して突帯が貼り付けられたもので、突帯に大D字刻目を施す。深鉢276は口縁端部から下がった位置に突帯を貼り付けるもので、突帯に小O字刻目を施す。深鉢278は口縁部に接して突帯を貼り付けたもので、口縁端部と突帯に小O字刻目を施す。170谷地形から出土した突帯文土器の時期は長原式中～新段階のものである。弥生土器壺261は貼付突帯に棒状のものを押し当てて刻目を施す。

170谷地形は隣接する調査地の大泉（その8）で検出された放棄流路（61＝224＝236落ち込み）につながるものである。大泉（その8）の出土遺物は今回の調査とほぼ同じ内容で、大泉（その8）では上層から弥生時代前期末から中期前葉の初頭とする多条沈線を施した壺が出土している（図21）。170谷地形に近接して検出された97・222土坑出土の弥生土器甕も球胴化が進んだものが出土しているが、170谷地形周辺では弥生時代中期前葉以降のものは出土していない。

その他の弥生時代前期の遺物（図版14）

1区東側、2区東側を中心に弥生時代前期の遺物が出土した。遺物量は1区170谷地形周辺が多く、弥生時代前期の遺構も2区東側では確認されていない。弥生土器甕252は無文のものである。甕253は外面が摩滅、内面がナデ調整、無文のものである。第12a層から出土した。甕254は外面にヘラ描き沈線を2条施し、口縁端部に刻目を施す。170谷地形の直上に堆積する第13-2a層から出土した。甕255は外面にヘラ描き沈線を3条施したもので、第13-2a層から出土した。甕256は外面にヘラ描き沈線2条施し、口縁端部に刻目を施す。甕257は外面にヘラ描き沈線を4条施し、口縁端部に刻目を施す。258は口縁端部を欠損しているが、胎土や厚み等から鉢の可能性はある。

壺259は外面に段とヘラ描き沈線3条以上を施したものである。壺260は外面に沈線3条以上を施したものである。252・256～260は170谷地形上部に堆積する第13-2a層から出土した。甕262は内外面がナデ、438土坑から出土した。石鏃263はサヌカイト製で、茎部が欠損する。石庖丁264は刀部に粗い調整剥離が残っており、未製品と考えられる。岩質は蛇紋岩かアプライト。

その他の縄文時代の遺物（図70、図版14）

1区東側、2区東側を中心に縄文時代晩期末の遺物が出土した。大泉（その10）の調査成果と合わせると、遺構・遺物量は2区東側が多い。縄文時代晩期中葉以前の土器は第14b層か、各遺構・地層に混じって出土した。大泉（その1）の調査では今回の調査区の直下に堆積する砂礫（第14b層）と連続する可能性がある堆積物から縄文時代晩期中葉の遺物がまとまって出土している。

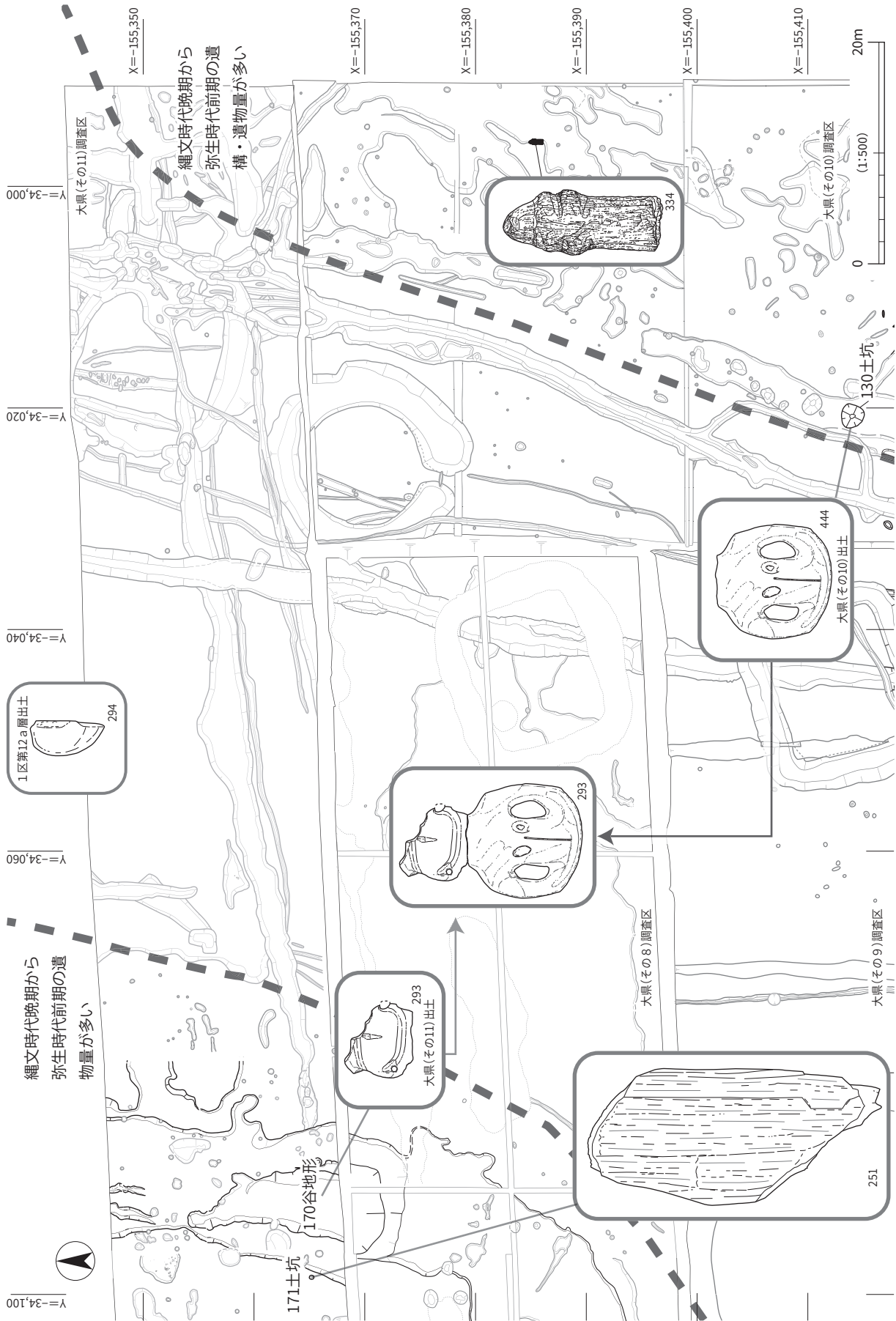


図 71 土偶出土地点

深鉢 265 は口縁端部に丸みを帯びた面があり、突帯を端部から下がった位置に貼り付ける。突帯には大 O 字形刻目を施す。調査区南側の断面整形時に出土したものである。深鉢 266 は口縁端部が丸みを持ち、突帯を端部から下がった位置に貼り付ける。突帯には大 O 字形刻目を施し、265 と胎土はよく似る。第 11 a 層から出土した。深鉢 267 は口縁端部が丸みを持ち、端部からやや下がった位置に突帯を貼り付ける。丸みを帯びた突帯には大 D 字形刻目を施す。深鉢 268 は口縁端部が丸みを持ち、端部より下がった位置に突帯を貼り付ける。断面三角形の突帯には大 D 字形刻目を施す。6 号墓 74 取上の弥生土器に混じって出土した土器である。深鉢 270 は口縁端部と胴部に突帯を貼り付けたもので、突帯に刻目を施していない。石棒が出土した 171 土坑の北側で検出した 168 土坑から出土した。

深鉢 271 は断面三角形の突帯を貼り付けたもので、突帯に大 D 字刻目を施す。深鉢 272 は口縁部に接して突帯を貼り付けたもので、突帯に大 D 字刻目を施す。深鉢 273 は口縁端部に接して突帯を貼り付けたもので、突帯に小 D 字刻目を施す。深鉢 275 は口縁端部から下がった位置に突帯を貼り付けたもので、突帯に小 O 字刻目を施す。271 ～ 273・275 は 170 谷地形の上部に堆積する第 13 - 2 a 層から出土した。深鉢 274 は口縁端部に接して突帯を貼り付けたもので、突帯に小 D 字刻目を施す。体部外面には列点状の工具痕が付く。100 溝から出土した。深鉢 279 は口縁から下がった位置に突帯を貼り付けたものである。突帯は無刻目か、一部凹むところがあるため小 O 字刻目を施した可能性がある。6 号墓 169 取上から出土した（図 37）。深鉢 281 は口縁部に接して突帯を貼り付けており、突帯は無刻目である。98 溝上層から出土した。深鉢 282 は無刻目の突帯で、形状が他のものと異質である。448 土坑から出土した。283 は 2 条の突帯に線状の刻目を施したもので、突帯間の間隔は狭い。器種は壺になる可能性がある。粗い胎土を用いており、縄文土器に分類した。

壺 284 は口縁端部に接して突帯を貼り付けたもので、突帯に小 D 字刻目を施す。135 周溝から出土した。浅鉢 285 は内外面にナデを施したもので、2 区（東側）溝・土坑群中、425 溝底面から出土した（図 24）。浅鉢 286 は内外面を丁寧にヘラミガキしたもので、98 溝底面から出土した。98 溝の底面を掘り過ぎた部分から出土しており、第 14 b 層に帰属する可能性がある。深鉢 287 ～ 290 は底部片で、時期は 287・289・290 が縄文時代晩期末、288 が縄文時代晩期中葉頃のものである。深鉢 291・292 は外面に巻貝条痕を施したもので、時期は縄文時代晩期中葉頃のものである。

土偶 294 は細片で、肩部を表現したものか。上端と片側の側縁は欠損する。表裏面とも、指圧痕を残しながらナデを施す。上端には屈曲部が認められ、頸部で折損したものと考えている。第 12 a 層から出土した（図 5 地区割 2 I 4 f から出土）。

台石 295 は表面中央に凹みをもつもので、170 谷地形肩部に堆積する第 13 - 2 a 層から出土したものである。石鏃 296 はサヌカイト製で、170 谷地形肩部を精査している際に出土したものである。

註

（註 1）昆虫のクロヒメゴモクムシは初宿成彦氏に同定していただいた。

第5章 自然科学分析

第1節 分析の概要と目的

今回の発掘調査及び遺物整理では、大型植物遺体同定（種実同定）を行った。種実同定は6号墓の周溝内や6号墓から出土した土器内の埋土から出土した種実・材を中心に、遺跡周辺の古環境と方形周溝墓における祭祀の復元を目的として同定を行った。

第2節 大型植物遺体同定

1. 分析資料（図72）

今回の分析資料は、1区で検出した弥生時代中期後葉の方形周溝墓の2号墓と6号墓周辺で出土した種実・材である。

2. 種実・樹種同定

a. 種実同定

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

b. 樹種同定

試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

C. 同定結果（表2・3）

種実は、樹木4、草本9の計13分類群が同定された。樹種は針葉樹、コナラ属クヌギ節に同定された。針葉樹は細片のうえ保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であったため、針葉樹の同定に留まっている。

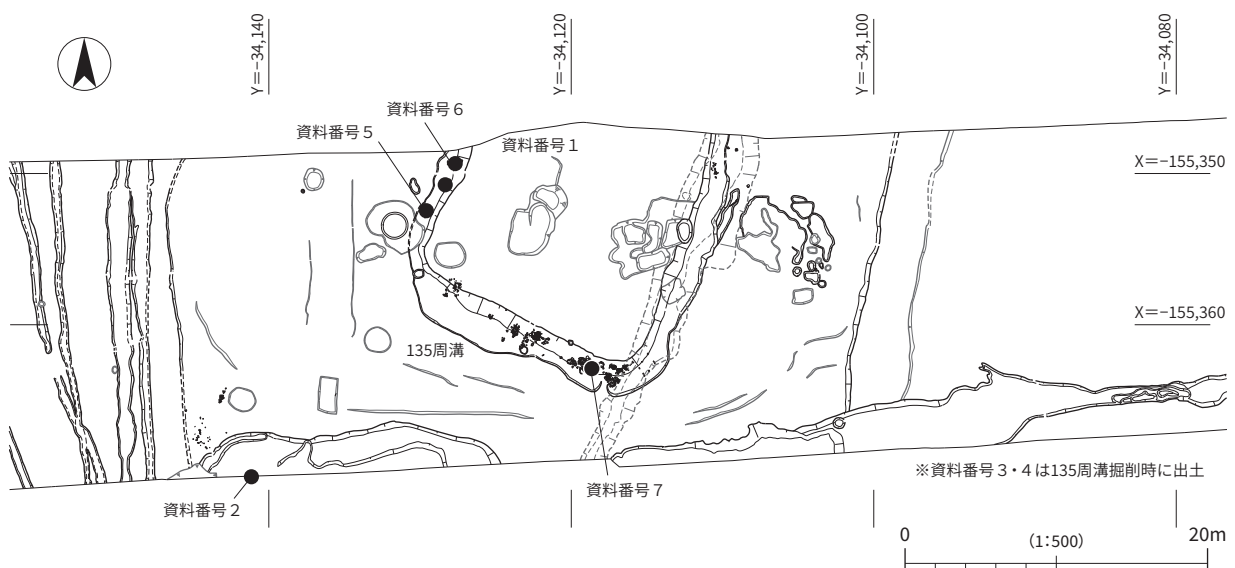


図72 同定資料採集位置

3. 種実からみた植物利用と周辺環境

2号墓広口壺128周辺では草本のコムギ、ホタルイ属が同定されたが、土器の中に入っていたか、周辺で生育し堆積物とともに流入したと考えられる。コムギは主要な食物であるため、土器の中に入れていた可能性がある。

6号墓135周溝から出土した土器内では樹木のカジノキ、アカメガシワ、クマノミズキ、草本のハギ属が、他に炭化材の針葉樹が同定された。二次林種のアカメガシワが多く、他も二次林種であり、土器内に流入したとみるのが妥当と考えられる。針葉樹の炭化材片も細片で同様に土器内に入り込んだとみられる。

6号墓135周溝埋土では、カジノキ、ノブドウ、草本のイネ、ホタルイ属、スゲ属、オオムギ、タデ属、タデ属サナエタデ節、ハギ属、ベニバナの種実、コナラ属クヌギ節の炭化材が同定された。周辺の山野にはコナラ属クヌギ節、カジノキ、ノブドウの二次林種ないし人里に多い樹木が生育し、水田雑草のホタルイ属、スゲ属や畑作雑草のタデ属、タデ属サナエタデ節、ハギ属が生育していたと考えられる。栽培植物で食用ないし有用なイネ、オオムギ、ベニバナは、共伴する植物が耕地雑草であることから、6号墓周辺で栽培されていたものが含まれた可能性と、方形周溝墓の祭祀に関連して埋納された可能性もある。

参考文献

- 笠原安夫 1985 『日本雑草図説』
 笠原安夫 1988 『作物および田畑雑草種類 弥生文化の研究第2巻生業』
 南木睦彦 1991 『栽培植物 古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ』
 南木睦彦 1993 『葉・果実・種子 日本第四紀学会編 第四紀試料分析法』
 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ』 木材研究・資料 第31号
 伊東隆夫・山田昌久 2012 『木の考古学』
 佐伯浩・原田浩 1985 『針葉樹材の細胞 木材の構造』
 島地謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』
 島地謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』

表2 大県郡条里遺跡出土種実

資料番号	出土遺構・地層	分類名	出土部位	個数
1	6号墓137取上土器内	カジノキ	種子	3
		アカメガシワ	種子	81
			種子破片	8
		クマノミズキ	核	1
2	2号墓広口壺128周辺	ハギ属	子葉	1
		コムギ	果実	1
3	6号墓135周溝埋土 (第13-1a層より下位)	ホタルイ属	果実	2
		カジノキ	種子	1
		ノブドウ	種子	1
		イネ	果実	1
		ホタルイ属	果実	9
4	6号墓135周溝埋土 (第13-1a層より下位)	タデ属	果実	3
		ベニバナ	果実	1
		オオムギ	果実	3
		ホタルイ属	果実	13
		スゲ属	果実	8
			果実破片	3
		タデ属サナエタデ節	果実	2
		ハギ属	種子	1
			子葉	2
		5	6号墓105取上土器内	アカメガシワ
種子破片	3			
クマノミズキ	核			1
6	6号墓138取上土器内	アカメガシワ	種子	158
			種子	12
7	6号墓110・111取上土器内	アカメガシワ	種子	2

表3 大県郡条里遺跡出土木材

資料番号	遺構	分類名	個数
4	6号墓135周溝埋土	コナラ属クヌギ節	1
7	6号墓110・111取上土器内	針葉樹	1

第6章 総括

第1節 出土遺物

今回の調査では縄文時代から中世に至る多種多様な遺物が出土した。この内、弥生時代の方形周溝墓の遺物、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物、サヌカイト製石器について、以下にまとめる。

1. 6・7号墓の弥生土器（図73）

a：個体分類

出土した弥生土器は、接合前と個体分類後に土器の点数カウントをそれぞれ行った。6・7号墓に係する土器について、個体分類後に口縁部の数量を元にした器種別の割合を出した。6・7号墓に確実に伴うものと判断した地層等から出土した資料は集計に含めた。また、土器の胎土は生駒西麓産とそれ以外のもの（非生駒西麓産）について割合を出している。

b：6号墓の弥生土器

6号墓では広口壺、長頸壺、無頸壺、高杯、台付鉢、鉢、甕、ミニチュア土器が出土した。器種別にみると広口壺、甕、高杯の順に割合が多い。広口壺の中には外面に煤が付着し、煮沸具として用いられたと考えられるものがある。また、広口壺では広口壺135のように無文で、端部が断面三角形状で分厚く成形されたものが含まれる。

土器の胎土は生駒西麓産のものが8割を超える。甕は生駒西麓産ではないものが一定量出土しており、形状にバリエーションがあることが判明したため、非生駒西麓産の土器の割合は接合前に行った集計（11.3%）より高くなっている。

非生駒西麓産の甕（摂津系、甕70・190・191等）は器形が大きいもので占められるが、口縁部の細片のみが出土しており、大半は失われている。広口壺は個体数が多く、器壁が薄いため、破片数の数量で集計を行えば、生駒西麓産の割合は95%を超えるものとなる。

6号墓から出土した土器は墳丘斜面と135周溝内から出土したものが多数を占め、大半は6号墓の廃絶時に伴うものである。第2面の135周溝の加工面と135周溝埋め戻し土から出土したものは少なく、6号墓構築当初に用いられた可能性がある土器は135周溝埋め戻し土（図33－28層）から出土した高杯157・163のみで、周溝の南西隅に遺存した135周溝の機能時形成層から土器は出土していない。ただし、この高杯157・163も埋め戻し土に確実に帰属する状況が確認できておらず、墳丘の斜面堆積物に含まれていた可能性がある。

6号墓に係する土器は墳丘盛土内から出土しなかった。207埋葬施設で広口壺底部の可能性のある細片が墳丘内から出土した唯一のものである。墳丘基底面を構成する第13－2a層（旧表土）では縄文時代晩期から弥生時代前期の土器が出土しているが、6号墓の時期の上限を示すようなものは出土しなかった。

6号墓から出土した弥生土器は河内地域の編年でIV－3～4型式に位置付けられるものと考えている。この内、長頸壺や細頸壺には河内IV－2型式以前と考えられる土器が含まれる。6号墓が複数埋葬であったことを考慮すれば、6号墓の構築から廃絶時の期間は短期間ではなく、一定程度の期間があったとするのが妥当と考えている。

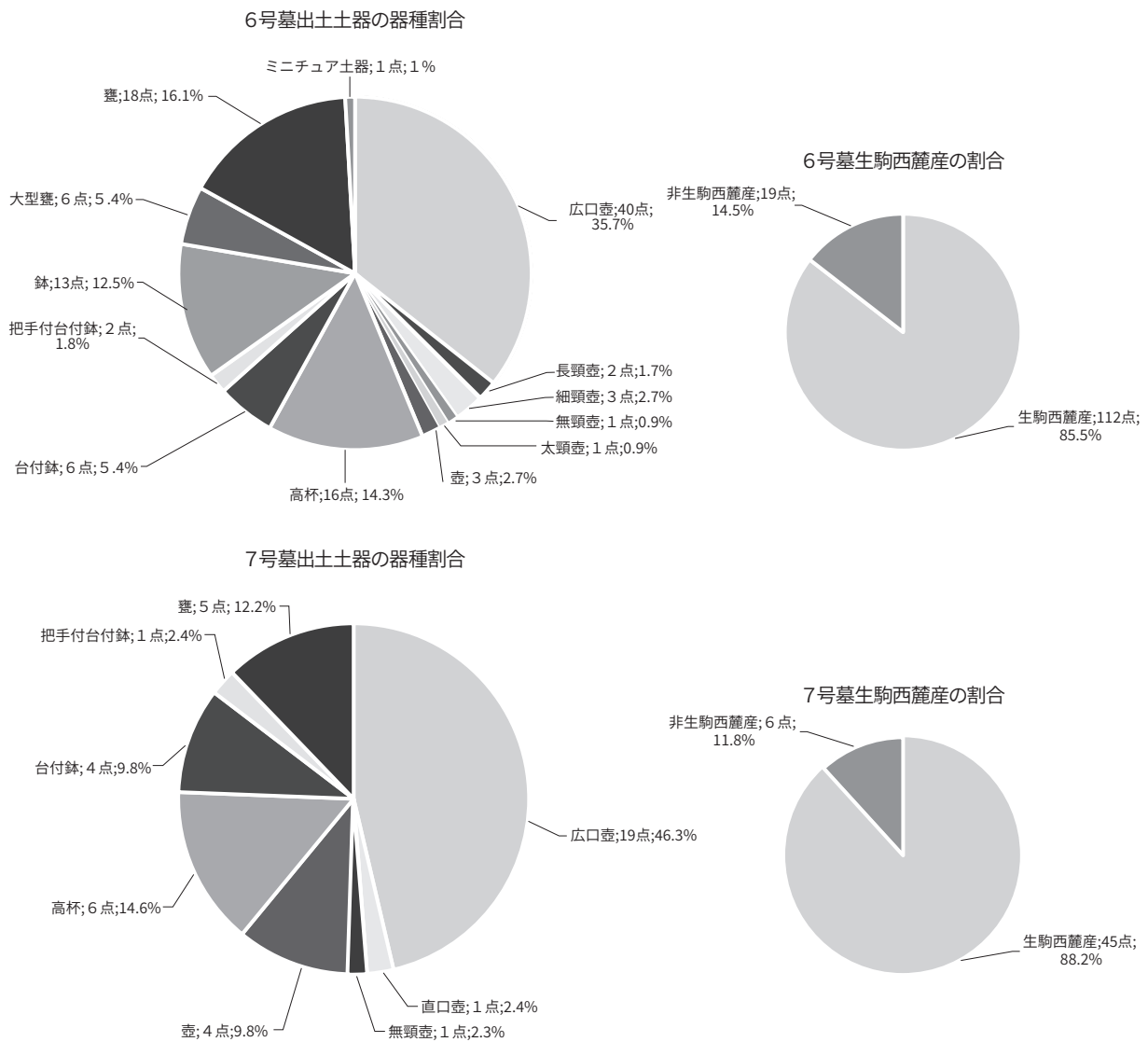


図 73 6・7号墓出土遺物集計

c : 7号墓の弥生土器

7号墓では広口壺、直口壺、無頸壺、高杯、台付鉢、甕が出土した。器種別にみると広口壺、甕、高杯の順に割合が多い。6号墓同様、広口壺の中には外面に煤が付着し、煮沸具として用いられたと考えられるものが含まれる。甕の口縁部は直接的には344周溝内から出土していない。6号墓から出土した弥生土器と明らかな違いをみせており、方形周溝墓で使用した土器の器種構成が変化している。土器の胎土は生駒西麓産のものが9割に近く、直口壺228のような摂津系のものが出土している。

7号墓の出土土器は344周溝から出土したものが大半であるが、墳丘の東側に掘削された古墳時代前期初頭の溝や7号墓周辺に堆積する地層から出土したのも多数あった。時期を判定して7号墓に関連付けたものもあるが、高い割合で344周溝から出土したものと接合したのがあり、7号墓廃絶以降の開発の影響を示す結果となっている。墳丘では墳丘基底面を構成する第13-2a層(旧表土)が部分的に遺存していたが、7号墓の築造時期の上限を示すような遺物は出土していない。

7号墓から出土した弥生土器は河内地域の編年でV-0型式に位置付けられるものと考えている。西ノ辻N地点と亀井遺跡SD3008・06他・SX03等から出土した弥生土器の特徴をもつ、弥生時代中期末から後期初頭の過渡期に当たる土器である。竹管文を施した広口壺220が出土していることや、高杯で

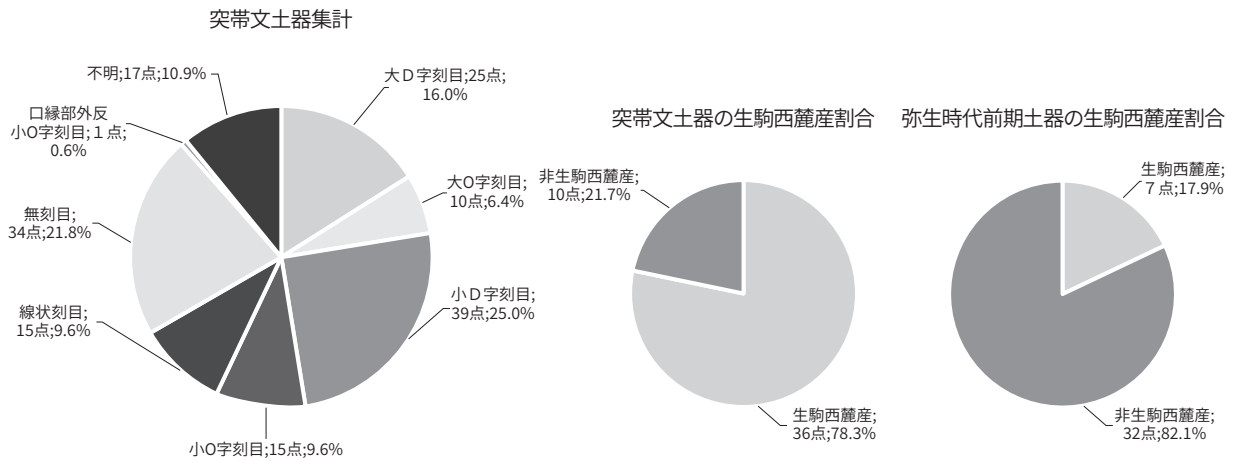


図 74 弥生時代前期から縄文時代晩期の出土遺物集計

は赤彩を施した有段口縁（皿状）の高杯が出土していること等から後期初頭に比重が高い土器の内容になっている。

2. 縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器（図 74）

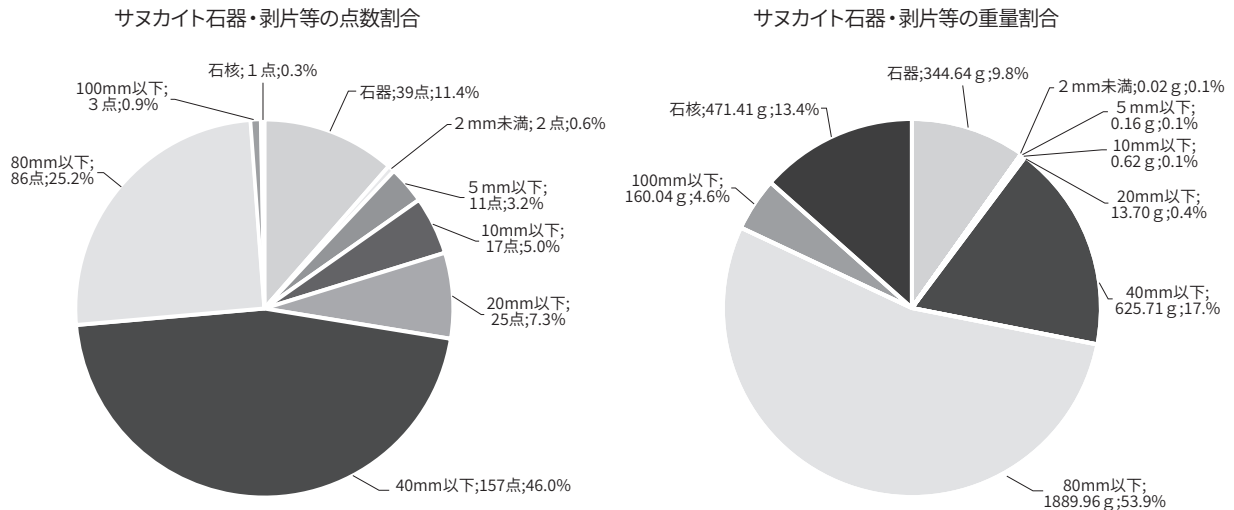
170 谷地形周辺と 2 区東側では、縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器が多数出土しており、この時期の遺構・遺物の分布域は大きく二つに分かれる。量的には縄文時代晩期末の土器が弥生時代前期より多い。2 区東側に隣接する大県（その 10）の調査区においても縄文時代晩期末から弥生時代前期の遺構・遺物が確認されており、2 区東側は分布域の北限である。遺物量は縄文時代晩期末で 2 区東側から大県（その 10）の調査区が多く、弥生時代前期は 170 谷地形周辺の方が多。

縄文時代晩期末では突帯文土器の深鉢が多数出土した。97 土坑から出土した深鉢 243 のように全体の形が復元できるようなものも含まれるが、大半は細片である。突帯の貼付位置は口縁端部より下がった位置に貼り付けるものもあるが、大半は口縁端部と接するか、端部と一体で成形したものである。突帯に施された刻目は小 D 字刻目と小 O 字刻目で全体の 34.9% を占める。線状刻目と無刻目を含めると長原式新段階に位置付けられるものが大半である。胎土は生駒西麓産のものが 86% で大半を占め、生駒西麓産以外のものは長原式古段階の 265・266 等、出土したものの中では古いものに多く含まれている。なお、今回の調査区の北西側に隣接する大県（その 2）では船橋式に位置付けられる突帯文土器が一定量出土しており、様相が異なる。

弥生時代前期では甕が器種の大半を占め、39 点出土した。他に、壺 5 点と鉢かと思われるもの 1 点が出土している。胎土は生駒西麓産以外のものが 82% 以上を占め、突帯文土器と大きく異なっている。弥生時代前期の甕は沈線が 4 条以上のものが多く、体部も II 様式の甕にみられるような胴部が張って球胴化したものが含まれる。今回出土した弥生時代前期の土器については河内地域の編年で I - 3 ~ 4 型式におさまるものと考えている。

3. サヌカイト製石器・剥片他（図 75）

6 号墓で検出した各埋葬施設の埋土を洗浄したところ、サヌカイト製の剥片・チップが出土した。今回の調査ではこれ以外にもサヌカイト製石器・剥片等が多数出土しており、総数は 339 点である。サヌカイト製石器には石鏃、石錐、搔器、楔形石器が出土しており、楔形石器とした 204 は石剣か石槍の可能性のあるものである。サヌカイト製剥片（残核の可能性のあるものを含む）とチップは長軸方向で計測を行い点数と重量を集計した。点数は 40 mm 以下から 2 mm 未満の合計で全体の 62.1%、20 mm 以下から



※サヌカイトの産地は、1点金山産の可能性のあるものが含まれるが、それ以外はすべて二上山産

図 75 1・2区石器集計

2mm未満の合計で全体の16.1%になる。石鏃を中心とした小形品を製作した際に産生した剥片やチップと考えられる。重量は40～80mmものが全体の50%を超えているが、石器製作に際し再加工ができない剥片・残核を当地にて廃棄したためと考えている。石器が破損して産生した剥片やチップが紛れ込んだものではないことが出土量から読み取ることができ、サヌカイト製剥片やチップは当地で石器製作を行っていた痕跡と考えている。石器製作は6号墓の埋葬施設から剥片・チップが出土していることから墳丘構築前（弥生時代中期後葉以前）に行われていたことが想定される。また、6号墓の100溝から石核206や剥片・チップが出土していることから、今回の調査区周辺で石器製作が小規模ながら継続していた可能性を考えている。

第2節 遺構の変遷

以下に、時期別に調査成果をまとめる。

1. 古代から中世

平安時代中期から中世末は耕作地として土地利用され、条里型地割の耕作地に関する遺構を各遺構面で検出した。条里型地割に関する遺構は畦畔や溝を検出しており、条里型地割が従前の調査で示されているとおりの平安時代中期から後期頃まで遡ることが確かめられた。

第4a面では東西方向の地割が第5a面から北側に移動したことを確認しており、旧恩智川の変遷に関する地割の変更が中世末から近世初頭にあったと想定される。

2. 古墳時代 (図 76)

7号墓東側では古墳時代前期の溝・土坑群を検出した。溝は既往の調査でも確認されており、東西方向と南北方向に走る溝は各調査区を縦貫するように検出されている。2区（東側）溝・土坑群の性格については当該期の集落が現在までのところ調査地周辺で検出されていないことや、複数検出された各溝からの出土遺物が少ないことから、生産域に関する灌漑水路の可能性が高いと想定している。

大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡では地震による変形の影響が各地層に及んでおり、高さが低い畦畔の検出が困難な理由の一つとなっているが、今後生産域に関する遺構が確認できれば当該期の土地利用がより具体的なものになると考えている。

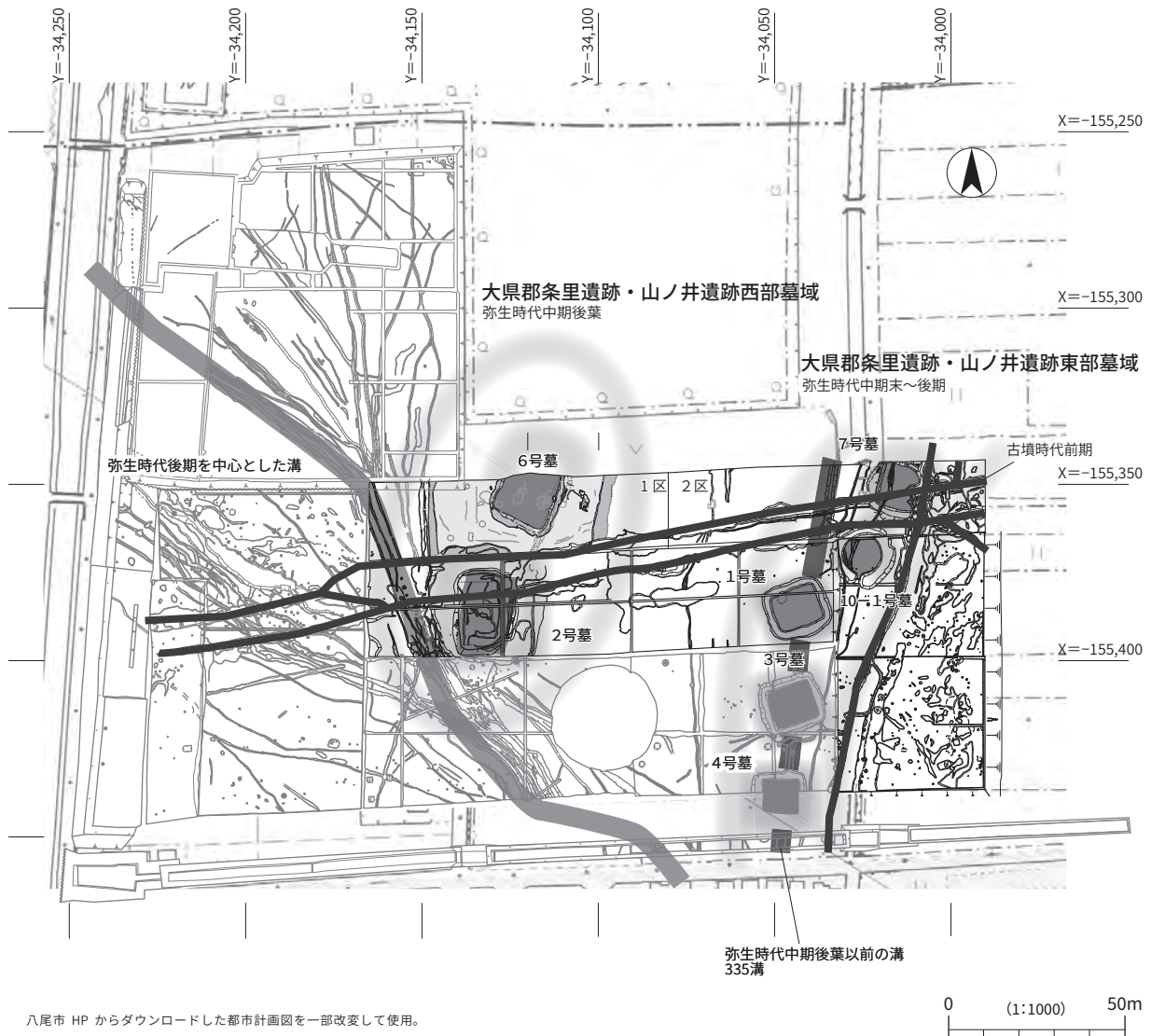


図 76 大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡既往調査区平面

3. 弥生時代中期から後期 (図 76、表 4)

大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡では今回の調査を含めて合計 7 基の周溝墓が確認されている。弥生時代中期後葉を中心とした大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡西部墓域、弥生時代中期末から後期を中心とした大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡東部墓域に分かれており、各墓域の造墓期間は異なっている。ただし、東部墓域では弥生時代中期後葉の弥生土器が古墳時代の溝・土坑から少量ながら出土しており、東部から西部に連続して周溝墓を構築したものと考えている。

各墓域の周溝墓の築造順は、西部墓域では出土遺物から 6 号墓→2 号墓を想定している。東部墓域では 7 号墓を除いて出土遺物が少なく限定的に評価せざるを得ないが、各周溝から出土した弥生土器から 7 号墓から南側に向かって造墓されていたことを想定している。1 区 (西側) 溝群では出土遺物から弥生時代中期以前の溝を特定することはできなかったが、層位的に弥生時代後期を遡ると考えられる溝が含まれていることが注目される。また、1・3・4 号墓が築造される以前に埋め戻された 335 溝 (弥生時代中期後葉以前) は空濠のように機能していたものと考えられ、同じ時期に成立した大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡西部墓域と関係する可能性がある。大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡 2・6 号墓は大阪市加美遺跡 Y 1・Y 2 号墓とほぼ同じ時期に築造された大形の方形周溝墓で、河内地域の方形周溝墓の変遷

表4 大県郡条里遺跡・山ノ井遺跡墳墓一覧

	時期	墳形	埋葬施設	長辺	短辺	高さ	出土遺物・備考
1号墓	古墳時代前期以前 弥生時代後期中葉か	長方形		13.0 m	10.0～10.5 m	削平	加工面直上から壺（口縁部外面に粘土帯貼付による双渦文あり）・鉢（ミニチュア土器）、二重口縁壺・広口壺・甕（庄内式期後半～布留式期初頭、埋土上層）
2号墓古段階	弥生時代中期後葉	長方形		22.4 m	14.8 m	0.8～1.0 m	甕（墳丘再構築時の盛土内）
2号墓新段階	弥生時代中期後葉	長方形		24.7 m	17.9 m	0.8～1.0 m	広口壺、高杯、把手付台付鉢、甕、木製高杯
3号墓	弥生時代後期後葉	長方形		13.0 m	11.6 m	削平	広口壺、鉢
4号墓	弥生時代後期後葉	長方形		10.7 m	3.7 m以上	削平	高杯（弥生時代後期）、二重口縁壺、直口壺（庄内式期、埋土上位）
10-1号墓	弥生時代後期後葉以前	円形		11.5 m （直径）		0.1～0.15 m	壺（弥生時代後期、櫛描文とへら描き沈線文の文様をもつものあり）、甕（庄内式期、周溝底より上）、直口壺（布留式、埋土上層）、陸橋あり
6号墓	弥生時代中期後葉	長方形	8基	17.0 m以上	16.0 m	0.5 m	広口壺、長頸壺、太頸壺、高杯、把手付台付鉢、台付鉢（赤彩あり）、鉢、甕、石鏃
7号墓	弥生時代中期末～後期初頭	長方形		13.0 m	9.0～10.0 m	削平	広口壺、無頸壺、把手付台付鉢、台付鉢、高杯（赤彩あり）

を考える上で、加美遺跡と比較対象となりうるだけでなく、当地域の墓制を考察する上で重要な動態を示すものである。

4. 縄文時代から弥生時代前期

縄文時代晩期末から弥生時代前期の遺構・遺物が170谷地形周辺と2区東側に分布している状況を確認した。170谷地形から出土した土偶頭部は、大県（その10）で出土した土偶胴部と接合することが確かめられており、全身が確認された事例としては宮ノ下遺跡に次いで2例目である。同タイプの土偶の府下出土例としては他に西ノ辻遺跡、鬼塚遺跡、久宝寺遺跡、長原遺跡、鬼虎川遺跡等がある。宮ノ下遺跡から出土した土偶も頭頂部が破損しており、今回出土した土偶と共通する。頭頂部が脆弱なためか、意図的な破損かは不明である。また、今回の調査では石棒が土坑内に廃棄されたような状況で出土した。大県（その10）の石棒以外にも、大県（その6）で約40cm大のものが出土している。

遺構・遺物が集中する大県（その10）と2区東側から以東は生駒山地に向かって地形が高くなっていくと想定され、当該期の集落が広がる可能性が高い。また、第14b層から縄文時代晩期中葉に位置付けられる縄文土器が少量ながら出土した。2区では土壌化した泥層から当該期の縄文土器が出土しており、今後近接する場所でこの時期の活動痕跡が確認される可能性がある。

参考文献

- 大阪市文化財協会 1982 『長原遺跡発掘調査報告2』
- 大阪市文化財協会 1983 『長原遺跡発掘調査報告3』
- 公益財団法人大阪市博物館協会・大阪文化財研究所 『加美遺跡発掘調査報告V』
- 財団法人大阪府文化財センター 1980 『亀井・城山』
- 財団法人大阪府文化財センター 1983 『亀井』
- 財団法人大阪府文化財センター 2007 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VII』
- 財団法人東大阪市文化財協会 1996 『宮ノ下遺跡第1次調査報告書』
- 財団法人東大阪市文化財協会 2000 『西の辻遺跡第5次発掘調査報告書』
- 財団法人東大阪市文化財協会 2000 『鬼虎川遺跡第42次発掘調査報告書』
- 濱田延充 2001 「畿内第IV様式の実像—西ノ辻N地点出土土器の再検討—」 『ヒストリア』 第174号
- 濱田延充 2014 「弥生土器の変化の持つ意味—畿内第V様式に成立をめぐる—」 『市大日本史』 第17号
- 東大阪市教育委員会 2016 『鬼塚遺跡第31次発掘調査報告』

遺物観察表

報告 図版	種類・ 器形	遺構・ 地層	接合・ 同一個体	口径・ 長cm	器高・ 幅cm 厚cm	外色調	残存率 (全体)	残存率 (口・底)	生駒 西麓産	焼成	調整	備考
1	土師器杯	16井戸 (現代)		(11.4)	3.6	2.5YR5/6 明赤褐	20%	25%		良	外：指押え 内：ナデか	全体摩滅
2	土師器杯	16井戸 (現代)		(10.4)	3.5	5YR6/6 橙	30%	30%		良	外：ヘラケズリか 内：ナデか	全体摩滅
3	土師器皿	第5a層		11.1	(1.7)	10YR6/3 にぶい 黄橙		15%		良	外：二段ナデ 内：ナデ	
4	瓦器搥鉢	第5a層			(6.0)	N4/ 灰		5%以下		良	外：ヘラケズリ 内：ハケのちヨコナデ・摺目	
5	弥生土器 広口壺	第5a層			(1.6)	10YR6/2 灰黄褐		5%以下		良	外・内：ヨコナデ・垂下する 口縁端部に刻目	茶褐色、摂津系
6	土師器皿	第6a層		10.9	(1.4)	2.5Y6/2 灰黄		10%		良	外：指押え 内：ナデ	ての字形皿、白色系
7	瓦器皿	第6a層		9.1	(1.6)	N4/ 灰		10%		良	外：指押え 内：ナデ・ヘラミガキ	見込みに平行線状暗文
8	9 弥生～庄 内広口壺	第6a層	第12a層		(2.2)	7.5YR7/3 にぶい 橙		5%以下			外・内：ヨコナデ・口縁端部 に竹筥文	
9	土師器皿	40土坑		(13.0)	(3.0)	10YR5/1 褐灰		15%		良	外・内：ナデ	
10	土師器皿	第7a層		(9.4)	1.1	7.5YR4/1 褐灰	30%	30%		良	外・内：指押えのちナデ	灯明皿、粘土接合による成形
11	瓦器皿	第7a層		9.0	(2.3)	N4/ 灰	45%	45%		良	外：指押え 内：ナデ	見込みにジグザグ状暗文
12	瓦器椀	第7a層		(10.6)	(2.8)	N4/ 灰	30%	15%		良	外：ナデ 内：ナデ	見込みに連結輪状暗文
13	白磁碗	第7a層		15.2	(3.4)	5Y6/3 オリーブ 黄		10%		良	外・内：施釉・ハケ状工具に よる施文	
14	銭貨	第7a層		直径2.4								嘉祐通寶、初鑄年 1056 年
15	瓦器椀	27畦畔の 芯		(15.4)	(4.7)	N8/ 灰白	30%	40%		良	外：指押えのちヘラミガキ 内：ヘラミガキ	和泉型、見込みに平行線状暗文
16	土師器皿	第8a層		(11.8)	(2.0)	5YR6/4 にぶい橙		25%		良	外・内：ナデ	
17	土師器皿	第8a層		(14.8)	(4.0)	2.5Y6/2 灰黄		15%		良	外：指押え 内：ナデ	
18	瓦器椀	第8a層		底径 (7.4)	(1.3)	10YR6/1 褐灰		50%		良	外：ナデ 内：ヘラミガキ(太)	
19	瓦器椀	第8a層		底径 (6.0)	(2.7)	N2/ 黒	25%	50%		良	外：ヘラミガキ・指押えのち ナデ 内：ヘラミガキ	見込みに斜格子暗文
20	白磁碗	第8a層		底径7.4	(2.5)	5Y8/1 灰白		100%		良	外・内：施釉	
21	土師器皿	第9a層		9.3	(1.7)	7.5YR8/4 浅黄橙		10%		良	外・内：ナデ	ての字形皿
22	土師器皿	第9a層		14.2	(2.6)	2.5Y6/2 灰黄		10%		良	外・内：ナデ	全体に煤付着
23	黒色土器 A類椀	第9a層		底径 (7.2)	(2.3)	7.5YR6/4 にぶい 橙		50%		良		見込みに太いヘラミガキを密 に施す
24	弥生～庄 内鉢か	第9a層		底径3.6	(3.2)	5Y6/2 灰オリーブ		100%		良	外：ナデ	
25	弥生土器 台付鉢	第9a層			(4.6)	7.5YR5/3 にぶい 褐		5%以下		良	外：ナデ 内：櫛描列点文・ヘラミガキ	茶褐色、生駒西麓産か
26	弥生土器 鉢	第9a層	第10a層、 第12a層、 61畦畔		(4.4)	10YR5/2 灰黄褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外・内：摩滅・凹線あり	
27	弥生土器 器台	第9a層		底径 (29.8)	(4.7)	10YR5/3 にぶい 黄褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外・内：指押えのちナデ	内側煤付着、粗雑な調整
28	土師器皿	第10a層		(9.0)	(1.4)	7.5YR8/3 浅黄橙	20%	30%		良	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ	ての字形皿
29	土師器皿	第10a層		12.9	(3.1)	10YR8/3 浅黄橙		15%		良	外：指押え 内：ナデ	
30	瓦器椀	第10a層		底径 (7.0)	(1.6)	N4/ 灰		25%		良		見込みに太いヘラミガキを密 に施す
31	瓦器椀	第10a層		底径 (6.0)	(1.5)	N2/ 黒		50%		良		見込みに平行線状暗文
32	瓦器椀	第10a層		底径5.4	(1.3)	N4/ 灰		100%		良		見込みに斜格子暗文
33	瓦器椀	第10a層		底径5.6	(1.0)	N3/ 暗灰		100%		良		見込みに斜格子暗文
34	須恵器壺 蓋	第10a層		(10.0)	1.9	N7/ 灰白	20%	15%		良	外：回転ナデ	穿孔あり
35	黒色土器 A類椀	第10a層		(15.8)	5.1	2.5YR5/4 にぶい 赤褐	10%	25%		良	外・内：ヘラミガキ	
36	弥生土器 高杯	第10a層	第11a層		(4.3)	10YR6/3 にぶい 黄橙		5%以下		良	外：ヘラミガキ 内：ヨコナデ	胎土は茶褐色、非在地
37	9 平瓦	第10a層		長(8.0)	幅 (9.0)	2.5Y7/1 灰白		5% 以下		良	凹：模骨痕・布目痕	布目縷痕あり
38	平瓦	第10a層		(7.2)	(10.1)	2.1 7.5YR7/4 にぶい 橙		5% 以下		不良	凹：模骨痕・布目痕 凸：格子目タタキ	
39	銭貨	第10a層		直径2.5								和同開珎、初鑄 708 年
40	14 玉髓剥片	305坪境畦 畔の芯		(4.0)	(3.1)	(1.3)						重量 14.13g
41	須恵器蓋	第11a層		15.0	(4.4)	N7/ 灰白	25%	25%		良	外：回転ナデ・回転ヘラケズ リ・ナデ 内：ナデ	
42	須恵器蓋	第11a層			(1.9)	N7/ 灰白	10%			良	外・内：回転ナデ	輪状つまみ、稜碗の蓋
43	須恵器 杯蓋	第11a層		14.1	(2.6)	N6/ 灰	10%	15%		良	外・内：回転ナデ・ナデ	
44	須恵器 杯蓋	第11a層		(13.0)	(1.4)	N6/ 灰	10%	10%		良	外・内：回転ナデ	碗に転用(内面墨付着)
45	須恵器 杯身	第11a層		底径 (10.9)	(2.5)	N5/ 灰	10%	25%		良	外：回転ナデ・ナデ 内：回転ナデ	
46	須恵器杯	第11a層		底径 13.6	(3.4)	N7/ 灰白		30%		良	外：回転ナデ・ナデ 内：回転ナデ	
47	須恵器壺	第11a層		底径8.1	(5.2)	N7/ 灰白		70%		良	外：回転ナデ・ナデ 内：回転ナデ	
48	土師器壺	第11a層		19.8	(7.5)	10YR7/4 にぶい 黄橙		10%		良	外・内：ナデ	

報告 図版	種類・ 器形	遺構・ 地層	接合・ 同一個体	口径・ 長cm	器高・ 幅cm	厚cm	外色調	残存率 (全体)	残存率 (口・底)	生駒 西麓産	焼成	調整	備考
49	9 土師器碗	第11a層		底径6.0	(1.6)		7.5YR6/4 にぶい 橙		100%		良	外：ナデ 内：摩滅	高台内側に墨書「西」、 黒色土器A類検か
50	黒色土器 碗	第11a層		底径 (6.4)	(1.45)		5YR6/4 にぶい橙	5%	40%		良	外：ナデ 内：ヘラミガキ	摩滅により黒化確認できず
51	弥生土器 壺か鉢	第11a層			(4.6)		10YR4/2 灰黄か		5%以下	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・凹線 内：ナデか	
52	銭貨	第11a層		直径 2.10									貞観永寶、皇朝十二銭、 初鑄貞観 12 (870) 年
53	銭貨	第11a層		直径2.5									神功開寶、皇朝十二銭、 初鑄天平神護元 (765) 年
54	銭貨	第11a層		直径2.5									和同開珎、初鑄和同元 (708) 年
55	銭貨	第11a層		直径2.5									和同開珎、初鑄和同元 (708) 年
56	9 鉄鍬	第11a層		12.2	2.7	0.9							有差平根方頭式、重量 20.6g
57	台石	第11a層		13.6	(9.9)	8.2							表面に煤が付着する、側面に 敲打痕あり、重量 1.62g
58	14 円礫	第11a層		3.1	2.7	1.3							石英、重量 16.5g
59	弥生土器 広口壺	359耕作痕		(19.6)	(6.2)		7.5YR5/3 にぶい 褐		25%	生駒 西麓産	良	外：板ナデ 内：ヘラミガキ	
60	9 須恵器 杯身	第12a層		12.2	(3.8)		N6/ 灰	75%	70%		良	外：回転ナデ・回転ヘラケズ リ 内：回転ヘラケズリ	
61	須恵器杯 身	第12a層		(14.8)	(4.2)		5PB5/1 青灰	10%	10%		良	外・内：回転ナデ	
62	須恵器 杯身	第12a層		10.6	(2.6)		N7/ 灰白		10%		良	外：回転ナデ・ナデ 内：回転ナデ	
63	須恵器 有蓋高杯	第12a層		14.4	(4.3)		N7/ 灰白		12%		良	外：回転ナデ・回転ヘラケズ リ・ナデ 内：回転ナデ・ナデ	透孔加工時の切り込みの痕跡 あり
64	須恵器壺	第12a層		底径 (10.0)	(3.5)		N4/ 灰		30%		良	外：回転ヘラケズリ 内：ナデ	
65	須恵器壺	第12a層		底径 (13.4)	(3.7)		N5/ 灰	30%	30%		良	外：ナデ・回転ナデ 内：回転ナデ	
66	須恵器壺	第12a層		底径4.2	(1.8)		5PB4/1 明青灰		50%		不良	外：回転ヘラケズリ・回転ナ デ 内：回転ナデ	
67	弥生土器 広口壺	第12a層			(4.1)		7.5YR3/3 暗褐	5%以下		生駒 西麓産	良	外：指押え・ナデ 内：ナデ	外面赤彩の可能性あり
68	弥生土器 台付鉢	第12a層	75取上 6号墓	(16.6)	(3.0)		7.5YR5/3 にぶい 褐	5%以下		生駒 西麓産	良	外：櫛描列点文	
69	弥生土器 台付鉢	第12a層		(26.0)	(5.7)		7.5YR4/2 灰褐		10%	生駒 西麓産	良	外：櫛描列点文・櫛描簾状文・ ヘラミガキ 内：摩滅	
70	弥生土器 甕	第12a層			(2.6)		7.5YR7/3 にぶい 橙	5%以下			良		摂津系
71	金具	第12a層		5.1	1.6	0.6							重量 5.1g
72	土師器小 型丸底壺	トレンチ			(2.2)		5YR7/4 にぶい橙	5%以下			不良	内・外：摩滅	搬入品、中・四国系
73	弥生土器 鉢	135周溝ト レンチ			(3.6)		7.5YR4/2 灰褐	5%以下		生駒 西麓産	良	外：ヨコナデ・口縁端部凹線 内：ヨコナデ	
74	弥生土器 器台か	47墳丘上 の攪乱			(2.8)		5YR6/2 灰褐	5%以下		生駒 西麓産	不良	外・内：ヨコナデ	
75	須恵器 杯蓋	381溝		11.2	4.4		N4/ 灰	10%	10%		良	外：回転ヘラケズリ・回転ナ デ 内：回転ナデ	
76	土師器甕	406耕作痕	410・414溝	18.4	(3.9)		2.5Y6/3 にぶい 黄		15%		良	外：ハケ 内：ハケ・ヘラケズリ	
77	土師器甕	406耕作痕		(16.2)	(2.5)		10YR7/2 にぶい 黄橙		15%		良	外：ヨコナデ 内：ハケ	
78	土師器小 形丸底壺	406耕作痕		(7.8)	(7.0)		10YR6/2 にぶい 黄橙		15%		良	外：ハケ 内：板ナデ	
79	土師甕	第13-1a層			(1.9)		10YR5/2 灰黄褐	5%以下			良	外・内：ヨコナデ	
80	土師甕	第13-1a層			(7.0)		5Y8/3 淡黄	5%以下			良	外・内：ヨコナデ	
81	土師器甕	第13-1a層		(14.6)	(1.9)		5YR4/3 にぶい赤 褐	5%以下		生駒 西麓産	良	内・外：摩滅	100 溝 47 墳丘南東側
82	土師器甕	第13-1a層		(15.4)	(3.5)		10YR5/2 灰黄褐	5% 以下	5%以下	生駒 西麓産	良	外・内：摩滅	
83	9 土師器 パレス壺	147取上 6号墓周 辺の 第13-1a層 2区(東 側)溝・ 土坑群 最上層	100溝、135周 溝、49取上周 辺、146取上		(5.8)		10YR7/3 にぶい 黄橙	10%			不良	外：ハケ・ヘラミガキ 内：ナデ・ハケ	東海系
84	9 土師器甕	第13-1a層			(3.4)		10YR7/2 にぶい 黄橙	5%以下			良	外：ヨコナデ・擬凹線 内：ヨコナデ	北陸系
85	弥生土器 広口壺	47墳丘		(20.0)	(2.3)		10YR4/2 灰黄褐	10%		生駒 西麓産	良	外：口縁部に擬凹線 2 条	
86	弥生土器 高杯	第13-1a層 下位		(20.4)	(3.6)		10YR5/2 灰黄褐	10%		生駒 西麓産	良	外：ハケ	
87	弥生土器 広口壺	第13-1a層		(19.0)	(3.4)		7.5YR4/2 灰褐	50%		生駒 西麓産	良	外・内：摩滅	
88	弥生土器 甕	第13-1a層 下位			(1.4)		5YR5/4 にぶい赤 褐	5%以下			良	外・内：ヨコナデ・口縁端部 に刻目	摂津系
89	弥生土器 甕	第13-1a層		底径3.4	(1.7)		5YR5/4 にぶい赤 褐	100%			良	外：平行タタキ・ナデ 内：板ナデ	
90	土師器甕	98溝		(13.6)	(2.6)		10YR6/2 灰黄褐	15%			良	外・内：ヨコナデ	
91	土師器甕	98溝		(11.0)	(3.8)		10YR5/2 灰黄褐	10%	40%		良	外・内：摩滅	外面煤付着
92	土師器高 杯	98溝		(17.8)	(5.3)		10YR6/2 灰黄褐	30%	40%		良	外：ハケ 内：ヘラミガキ	
93	弥生土器 甕	98溝		底径5.2	(3.7)		7.5YR5/6 明褐	100%		生駒 西麓産	良	外：タタキ・ナデ 内：板ナデ	

報告	図版	種類・器形	遺構・地層	接合・同一個体	口径・長cm	器高・幅cm	厚cm	外色調	残存率(全体)	残存率(口・底)	生駒西麓産	焼成	調整	備考
94	9	弥生土器 長頸壺	177溝		13.2	28.0		10YR6/6 明黄褐	70%	90%		良	外：ヘラミガキ・竹管文3箇所 内：ハケ・ナデ	
95	9	土師器鉢	308溝			(5.4)		10YR7/2 にぶい黄橙		5%以下		良	外：ハケ 内：ハケ・ナデ	
96		土師器甕	323溝		(12.6)	(4.2)		5YR6/4 にぶい橙		15%		良	外：摩滅 内：ヘラケズリ	
97		土師器甕	384溝上層			(3.6)		7.5YR6/2 灰褐		5%以下		良	外・内：摩滅	外面煤付着
98		土師器甕	384溝			(3.3)		2.5YR6/6 橙		5%以下		良	外・内：摩滅	
99		弥生土器 壺	386溝			(2.3)		5YR8/1 灰白		5%以下		良	外：櫛描直線文	
100	9	弥生土器 壺	393・386溝			(4.1)		7.5YR6/3 にぶい褐		5%以下	生駒西麓産	良	外：ハケ・線刻 内：ナデか	線刻の文様は不明
101		土師器甕	395溝	430溝		(3.4)		10YR7/2 にぶい黄橙		5%以下		良	外・内：ヨコナデ	
102		弥生土器 壺	395溝			(4.3)		10YR4/1 褐灰		5%以下	生駒西麓産	良	外：ヘラミガキ・円形浮文 内：ナデ	
103		土師器甕	400溝			(3.4)		5Y8/1 灰白		5%以下		良	外・内：ヨコナデ	
104		弥生土器 壺	401溝			(4.7)		7.5YR4/2 灰褐		5%以下	生駒西麓産	良	外：ハケのち櫛描波状文 内：ナデ	外面赤彩あり、118 と同一個体の可能性あり
105		土師器甕	404溝			3.0		5YR4/1 褐白		5%以下	生駒西麓産	良	内：ヘラケズリ	
106		弥生土器 甕	404溝			(2.0)		7.5YR3/2 黒褐		5%以下	生駒西麓産	良	外・内：ヨコナデ	
107	9	土師器甕	404溝		(15.2)	(14.0)		7.5YR6/3 にぶい褐	15%	10%以下		良	外：ハケ一部残る 内：ヘラケズリのちナデ	
108		弥生土器 台付鉢	404溝		(19.8)	(7.0)		7.5YR5/2 灰褐		10%	生駒西麓産	良	外：櫛描列点文・櫛描簾状文・ヘラミガキ・櫛描直線文・刻目のある棒状浮文貼付 内：ヘラミガキ・ナデ	
109		土師器甕	405溝			(1.3)		10YR5/2 灰黄褐		5%以下	生駒西麓産	良	外・内：ヨコナデ	
110		石鏃	386・420溝		(4.8)	1.4	0.7							サヌカイト製、重量 3.6g
111		石鏃	405溝		5.0	2.0	0.5							サヌカイト製、重量 4.0g
112		土師器甕 407 落ち込み	407 落ち込み		7.4	(4.8)		7.5YR6/4 にぶい橙		25%		良	外：ヨコナデ	
113		土師器 直口壺 407 落ち込み	407 落ち込み		(18.4)	(6.4)		10YR6/2 灰黄褐		25%		良	外・内：ハケ	
114		弥生～庄 内土器甕 407 落ち込み	407 落ち込み		13.0	(4.8)		2.5Y7/2 灰黄		10%	生駒西麓産	良	外：タタキ 内：ナデ	
115		弥生～庄 内土器 鉢か	421土坑		底径 4.5	(3.8)		10YR7/2 にぶい黄橙		100%		良	外：ナデ 内：ハケ	
116		弥生土器 広口壺	408溝		(21.4)	(3.5)		7.5YR5/2 灰褐		15%	生駒西麓産	良	外：櫛描簾状文・刺突文・ヘラミガキ・ナデ 内：ヨコナデ	
117		弥生土器 壺	422溝			(4.3)		10YR5/3 にぶい黄褐		5%以下	生駒西麓産	良	外：櫛描簾状文・ヘラミガキ 内：ナデ	
118		弥生土器 広口壺	422溝		(15.0)	(4.5)		7.5YR5/3 にぶい褐		25%	生駒西麓産	良	外：ヨコナデ 内：櫛描波状文・ナデ	内面赤彩あり、106 と同一個体の可能性あり
119		弥生土器 広口壺	427溝			(1.5)		7.5YR7/2 明褐灰		5%以下		不良	外・内：摩滅・口縁端部に刻目	摂津系
120		土師器甕	429溝			(1.2)		7.5YR6/2 灰褐		6%以下		良	外・内：ヨコナデ	
121		弥生土器 壺	429溝			(13.6)		5YR3/1 黒褐	20%		生駒西麓産	良	外：ハケのちナデ 内：ナデ	同一個体の可能性がある折り返し口の縁部あり
122		土師器甕	443溝		(17.2)	(3.5)		10YR4/2 灰黄褐		20%	生駒西麓産	良	外：ヨコナデ 内：ハケ・ヘラケズリ	
123	9	弥生土器 広口壺	404溝	386溝、393溝、443溝、437土坑、第13-2a層	(15.4)	(8.9)		7.5YR6/4 にぶい橙		50%	生駒西麓産	良	外：櫛描波状文・櫛描直線文・口縁端部に沈線・円形浮文 内：櫛描波状文・ナデ	
124		弥生土器 壺か手焙 型土器	445溝			(2.6)		5YR8/1 灰白		5%以下		良	外：貼付突帯に刻目 内：ナデか	
125		弥生土器 台付鉢	449溝			(3.8)		5YR5/2 灰褐		5%以下	生駒西麓産	良	外：櫛描列点文 内：ナデ	
126		弥生土器 甕	448土坑		15.1	(4.4)		2.5Y4/2 暗灰黄		10%	生駒西麓産	良	外：摩滅 内：ナデ	
127		弥生土器 高杯	448土坑		底径 17.0	(2.1)		7.5YR5/3 にぶい褐		5%以下	生駒西麓産	良	外・内：ナデ	
128	11	弥生土器 広口壺	115周溝 2号墓		21.0	(32.1)		7.5YR6/3 にぶい褐			生駒西麓産	良	外：櫛描簾状文・刺突文・ヘラミガキ 内：指押え・指ナデ	
129	9	土師器 直口壺	478取上② 10-1号墓		18.0	(7.4)		10YR8/3 浅黄橙	70%	30%	生駒西麓産	良	外・内：ヨコナデ	周溝上層
130	11	弥生土器 広口壺	150取上① 6号墓		20.3	37.8		7.5YR4/4 褐	90%	100%	生駒西麓産	良	外：櫛描簾状文・ヘラミガキ、 底面ヘラミガキ 内：ハケ・ナデ	
131		弥生土器 広口壺	49取上 6号墓	144取上	21.8	(39.9)		7.2YR5/3 にぶい褐	60%	90%	生駒西麓産	良	外：櫛描簾状文・ヘラミガキ、 底面ヘラミガキ 内：指押えのちナデ・ハケ	
132		弥生土器 広口壺	114取上 6号墓	112取上	(21.4)	(40.1)		10YR5/3 にぶい黄褐	50%	25%	生駒西麓産	良	外：櫛描簾状文のちヘラミガキ・櫛描簾状文・ヘラミガキ・櫛描列点文、底面ヘラミガキ 内：ナデ・指押えのちナデ	焼成後穿孔の可能性ある欠けあり
133		弥生土器 広口壺	110取上 6号墓		23.4	42.8		7.5YR3/2 黒褐	90%	100%	生駒西麓産	良	外：櫛描簾状文・ヘラミガキ、 底面ヘラミガキ 内：指押えのちナデ・板ナデ	焼成後穿孔あり

報告 図版	種類・ 器形	遺構・ 地層	接合・ 同一個体	口径・ 長cm	器高・ 幅cm	厚cm	外色調	残存率 (全体)	残存率 (口・底)	生駒 西麓産	焼成	調整	備考
134	弥生土器 広口壺	103取上 6号墓		(17.0)	(39.3)		7.5YR5/4 にぶい 褐		60%	生駒 西麓産	良	外：櫛描直線文・ヘラミガキ・ 櫛描簾状文・円形浮文、 底面ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・円形浮文	焼成後穿孔の可能性ある割 れあり
135	弥生土器 壺	160取上 6号墓	74取上周辺	14.1	24.8		10YR4/3 にぶい 黄褐	60%	100%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ、底面ヘラミ ガキ 内：板ナデ	
136	11 弥生土器 広口壺	111取上 6号墓	157取上	16.6	(27.7)		7.5YR3/3 暗褐	90%	100%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ 内：ハケのちナデ・指押えの ちナデ・ハケ	口縁部に焼成前穿孔あり、内 側に粘土を貼り足した後穿孔 する、穿孔は貫通していない もの多数あり
137	弥生土器 広口壺	143取上① 6号墓		17.1			10YR4/3 にぶい 黄褐		80%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・ヘラミガキ、 底面ナデ 内：ナデ・指押え	
138	弥生土器 広口壺	138取上⑤ 6号墓	100溝上層、 137・138取上 周辺	(21.7)	(21.0)		5YR5/6 明赤褐		50%	生駒 西麓産	良	外：櫛描列点文・櫛描簾状文 内：摩滅	
139	弥生土器 広口壺	144取上 6号墓		(19.2)	(6.4)		5YR4/6 赤褐	10%	40%	生駒 西麓産	不良	外・内：摩滅	
140	弥生土器 広口壺	109取上② 6号墓	109取上、 196取上	(18.8)	(8.7)		10YR4/2 灰黄褐	10%	65%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・ヘラミガキ 内：ナデ	
141	弥生土器 広口壺	74取上 6号墓		24.2	(3.3)		10YR5/3 にぶい 黄褐		15%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・刺突文・ナ デ 内：ナデ	
142	弥生土器 広口壺	196取上 6号墓		(23.7)	(7.4)		10YR4/2 灰黄褐	10%	50%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文 内：ナデ	
143	弥生土器 壺	148取上 6号墓	113取上周辺	28.4	(57.7)		10YR5/3 にぶい 黄褐		60%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・ヘラミガキ・ 円形浮文、底面ヘラミガ キ 内：ナデ・指押え・円形浮文	焼成後穿孔あり
144	弥生土器 長頸壺	113取上 6号墓	100溝、109取 上、112取上、 113・114取上 周辺	(29.4)	(56.5)		7.5YR5/4 にぶい 褐	50%	40%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・ヘラミガキ か・櫛描直線文・櫛描簾 状文・円形浮文・口縁端 部に刻目、底面摩滅 内：ハケのちナデ・ナデのち ヘラミガキか・円形浮文	
145	弥生土器 広口壺	109取上① 6号墓			(7.2)		5YR5/3 にぶい赤 褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：斜格子文・櫛描簾状文 内：ナデ	外面に煤付着
146	弥生土器 壺	144取上 6号墓	145取上① ②、147取 上、216取上 162溝	(28.2)	(15.0)		10YR5/3 にぶい 黄褐	10%	20%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・刺突文・櫛 描直線文	有段口縁
147	11 弥生土器 壺	143取上② 6号墓		12.5	15.8		10YR5/3 にぶい 黄褐	60%	30%	生駒 西麓産	良	外：指押え・ヘラミガキ、底 面ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ヘラミガキ・ ハケ	小型、穿孔の可能性のある孔 あり
148	弥生土器 広口壺	135周溝	第10a層、 第11a層	15.8	(5.7)		10YR7/4 にぶい 黄橙		25%		良	外：ヘラミガキ 内：摩滅	搬入品
149	弥生土器 広口壺	100溝		(17.2)	(2.3)		2.5Y6/6 橙		10%		良	外・内：摩滅・口縁端部凹線	摂津系
150	11 弥生土器 広口壺	103取上 6号墓	100溝、113・ 114取上周辺	21.0	(33.3)		7.5YR7/4 にぶい 橙		80%		良	外：櫛描波状文・櫛描直線文・ ハケ・ヘラミガキ 内：ナデ	摂津系
151	弥生土器 広口壺	137取上③ 6号墓	137取上②	11.4	(21.7)		2.5Y7/4 浅黄		25%		良	外：ハケ・ヘラミガキ、底面 ナデ 内：ハケ	外面煤付着、被熱、白褐色系、 摂津系
152	12 弥生土器 広口壺	145取上① 6号墓	100溝、135 周溝、49取上 周辺、109取 上、113取上 周辺、145取 上②、148取 上、216取上 162溝、 第9a層	(23.0)	(7.7)		7.5YR7/4 にぶい 橙	10%以下	25%		良	外：ハケ・凹線あり・頸部に 刻目のある貼付突帯、刻 目はヘラ状工具による、 底摩滅、 内：ヨコナデ、ナデ	2区第9a層出土のものに同一 個体と思われるものあり、摂 津系
153	11 弥生土器 細頸壺	154取上 6号墓		11.0	25.5		10YR 5/4 にぶい 黄褐	100%	100%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・ヘラミガ キ・円形浮文、底面摩滅 内：ヨコナデ	穿孔あり
154	弥生土器 細頸壺	113取上 6号墓		7.6	(17.3)		10YR6/3 にぶい 黄橙	30%	100%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・櫛描簾状文・ ヘラミガキ、底面ヘラミ ガキ 内：ナデか・板ナデ	頸部内面に絞痕あり
155	弥生土器 細頸壺	109取上① 6号墓	100溝上位	(12.9)	(9.2)		10YR5/2 灰黄褐	10%	45%	生駒 西麓産	良	外：櫛描列点文・ミガキ・櫛 描簾状文 内：指ナデのちナデ	
156	12 弥生土器 無頸壺	196取上 6号墓	103取上、 第8a層以下 の地層	(11.0)	(9.6)		10YR5/3 にぶい 黄褐	10%	35%	生駒 西麓産	良	外：櫛描列点文・櫛描簾状文・ ヘラミガキ 内：指押え・ヘラミガキ	口縁部に紐孔の穿孔あり
157	10 弥生土器 高杯	152取上 6号墓	135周溝下 層、103取上 周辺	31.4	23.0		7.5YR5/4 にぶい 褐	70%	55%	生駒 西麓産	良	外・内：ヘラミガキ	
158	10 弥生土器 高杯	150取上① 6号墓	100溝、103取 上周辺、113・ 114取上周辺、 150取上 ②、51取上	(23.6)	(18.1)		10YR5/3 黄褐		100%	生駒 西麓産	良	外：櫛描列点文・ヘラミガキ・ ナデ 内：ナデ・ヘラミガキ	
159	弥生土器 高杯	196取上 6号墓	109取上①②	底径 (13.6)	(19.8)		10YR5/3 にぶい 黄褐	30%	70%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ 内：指押えのちナデ・ヘラミ ガキ	
160	弥生土器 高杯	138取上② 6号墓	137・138取上 周辺	底径 15.7	(13.7)		10YR5/4 にぶい 黄褐	50%		生駒 西麓産	良	外ヘラミガキ 内：ナデ	
161	弥生土器 高杯	138取上④ 6号墓			(12.7)		10YR5/4 にぶい 黄褐	10%		生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ 内：ナデ	他の個体と接合せず

報告	図版	種類・ 器形	遺構・ 地層	接合・ 同一個体	口径・ 長cm	器高・ 幅cm	厚cm	外色調	残存率 (全体)	残存率 (口・底)	生駒 西麓産	焼成	調整	備考	
162		弥生土器 高杯	109取上② 6号墓		(24.0)	(5.9)		10YR5/2 灰黄褐	20%	50%	生駒 西麓産	良	外：ハケもしくは板ナデ・ヘ ラミガキ 内：摩滅	水平口縁	
163	10	弥生土器 高杯	141取上 6号墓	135周溝下 層、103取上 周辺、162溝	24.5	(20.0)		10YR7/4 にぶい 黄橙		30%		良	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ナデ・ヘラ ケズリ	摂津系、水平口縁	
164	10	弥生土器 高杯	196取上 6号墓		14.3	13.8		10YR7/3 にぶい 黄橙	100%	100%		良	外：ヘラミガキ 内：工具によるナデ	摂津系	
165	10	弥生土器 台付鉢 脚部	100溝上層			(10.2)		10YR5/2 灰黄褐	10%		生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・竹管文 内：ナデ		
166		弥生土器 鉢	160取上 周辺 6号墓		(18.2)	(5.0)		10YR3/2 黒褐		40%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・ヘラミガキ 内：ヘラミガキ		
167	10	弥生土器 台付鉢	138取上③ 6号墓	138取上⑤	20.2	17.8		7.5YR5/4 にぶい 褐	40%	30%	生駒 西麓産	良	外：櫛描列点文・櫛描簾状文・ ヘラミガキ・ナデ・脚部 竹管文 内：ナデ・ヘラミガキ		
168		弥生土器 台付鉢	100溝		(16.2)	(2.9)		5YR4/4 にぶい赤 褐		10%	生駒 西麓産	良	外：櫛描列点文・ヘラミガキ 内：櫛描列点文・ヘラミガキ・ 口縁端部刻目	2号墓で類別あり	
169		弥生土器 太頸壺	137取上① 6号墓	112取上	(10.2)	(4.0)		7.5YR5/4 にぶい 褐		10%	生駒 西麓産	良	外：櫛描列点文・ナデ・円形 浮文 内：ナデ		
170	10	弥生土器 把手付鉢	138取上① 6号墓		9.5	10.4		7.5YR5/6 明褐	100%	100%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・竹管文・ナ デ、底面ナデ 内：ナデ・底面に爪痕のよう な節状の痕跡	焼成後穿孔の可能性のある孔 あり	
171		弥生土器 ミニチュ ア土器	109取上 6号墓			(1.7)		10YR6/3 にぶい 黄橙	60%		生駒 西麓産	良	外・内：ナデ		
172	10	弥生土器 鉢	墳丘 南西隅 6号墓	100溝上層		(6.9)		10YR5/3 にぶい 黄褐	3% 以下	3%以下	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・ヘラミガキ・ 櫛描列点文	文様精緻、赤彩あり	
173	10	弥生土器 鉢	113・114 取上周辺 6号墓	49取上周辺、 145取上②	(45.4)	(7.3)		10YR5/3 にぶい 黄褐	5%	20%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・刺突文（内 面まで穿孔）・ナデ・ヘ ラミガキ 内：ヘラミガキ		
174	12	弥生土器 鉢	145取上① 6号墓	100溝上層、 49取上周辺、 113・114取上 周辺、 145取上②	(45.2)	26.5		5YR4/6 赤褐	80%	50%	生駒 西麓産	良	外：刺突文（内面まで穿孔）・ 櫛描簾状文・ヘラミガキ・ 底面ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ナデないし 板ナデ		
175		弥生土器 鉢	74取上 6号墓	第10a層、 第12a層	(48.2)	(8.8)		2.5Y4/2 暗灰黄		10%	生駒 西麓産	良	外：櫛描簾状文・刺突文・ヘ ラミガキ 内：ナデ		
176		弥生土器 鉢	第10a層			(2.8)		5YR6/4 にぶい橙		5%以下		良	外・内：摩滅・外面凹線	摂津・播磨系	
177	12	弥生土器 台付鉢	113取上 6号墓	159・113取上	47.5	29.5		7.5YR7/6 橙	100%			良	外：斜格子沈線文・凹線・ハ ケ・ヘラミガキ・ナデ 内：ヘラミガキ・ナデ	摂津系、焼成後穿孔あり	
178		弥生土器 甕	74取上 6号墓	第9a層、 第10a層、 第12a層	44.8	(66.0)		10YR5/3 にぶい 黄褐		25%	生駒 西麓産	良	外：刺突文・ヘラミガキ・ナ デ、底面ヘラミガキ 内：一部ヘラミガキ・板ナデ・ ナデ		
179		弥生土器 甕	146取上 6号墓	100溝47墳丘 南東側、156 取上、75取上 ③④、162溝	(36.0)	(6.0)		7.5YR5/3 にぶい 褐	10%	20%	生駒 西麓産	良	外：刺突文 内：ヘラミガキ		
180		弥生土器 甕	155取上 6号墓	第11a層、 116溝直上	(39.0)	(34.5)		7.5YR3/3 暗褐		30%	生駒 西麓産	良	外：刺突文・ヘラミガキ 内：ヘラミガキ		
181	12	弥生土器 甕	112取上 6号墓	114取上、 154取上	38.0	62.4		10YR4/2 灰黄褐	90%	90%	生駒 西麓産	良	外：ナデ・ヘラミガキ、底面 ヘラミガキ 内：ナデ・ハケ・ヘラミガキ		
182		弥生土器 甕	141取上 6号墓	100溝、 143取上②、 147取上	19.8	(8.9)		10YR7/4 にぶい 黄橙		16%		良	外：ハケ 内：ナデ	外面に煤付着、摂津～東瀬戸 内系	
183		弥生土器 甕	150取上① 6号墓	196取上、 109取上	22.2	(18.0)		10YR5/3 にぶい 黄褐		65%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ナデ		
184		弥生土器 甕	160取上 周辺 6号墓		(15.0)	(3.3)		7.5YR4/4 褐		5%	生駒 西麓産	良	外・内：摩滅		
185		弥生土器 甕	196取上 6号墓	109取上	(11.6)	19.0		10YR5/3 にぶい 黄褐	30%	10%	生駒 西麓産	良	外・内：ヘラミガキ、外底面 ヘラミガキ	割れか焼成後穿孔の可能性が ある部分あり	
186	12	弥生土器 甕	196取上 6号墓		(13.8)	(21.0)		7.5YR6/3 にぶい 褐	50%	50%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ 内：ナデ・ヘラミガキ		
187		弥生土器 甕	109取上② 6号墓		36.4	51.5		5YR4/4 にぶい赤 褐	60%	100%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ、底面摩滅 内：ヘラミガキ・ナデのちヘ ラミガキ・ナデ	内面煤付着	
188	12	弥生土器 甕	105取上 6号墓		(29.7)	44.2		10YR7/2 にぶい 黄橙	60%	70%		良	外：ハケ・ヘラミガキ、底面 摩滅 内：摩滅・ハケ残る		
189		弥生土器 甕	74取上 6号墓			(3.6)		10YR5/3 にぶい 黄褐	3% 以下	3%以下	生駒 西麓産	良	外：口縁部直下に円弧状の庄 痕・ナデ 内：ナデ	赤彩あり	
190		弥生土器 甕	74取上 6号墓	84高まり西 側、119溝		(2.6)		7.5YR7/6 橙	3% 以下	3%以下		良	外：ヨコナデ・口縁端部に刻 目 内：ナデ	摂津系	
191		弥生土器 甕	141取上 6号墓	103取上		(2.2)		10YR7/3 にぶい 黄橙		5%以下		良	外・内：ヨコナデ・口縁端部 凹線	摂津系	
192		弥生土器 甕	196取上 6号墓		底径5.0	(4.4)		10YR3/6/3 にぶ い黄橙		100%		良	外：ヘラミガキ・ナデ、底面 ナデ 内：板ナデか・ナデ	摂津系	
193		石鏃	第12a層		(3.9)	1.1	0.5							鏃身部先端折損	重量 2.0g
194		石鏃	23土坑		(3.8)	(1.9)	0.3							石鏃の失敗品の可能性あり	重量 2.1g

報告 図版	種類・ 器形	遺構・ 地層	接合・ 同一個体	口径・ 長cm	器高・ 幅cm	厚cm	外色調	残存率 (全体)	残存率 (口・底)	生駒 西麓産	焼成	調整	備考
195	石鏃	100溝		(4.0)	1.5	0.7						茎部折損	重量 2.8g、 1区法面側掘削時出土
196	石鏃	第12a層		(3.5)	1.7	0.6						鏃身部先端折損	重量 3.3g
197	石鏃	6号墓 墳丘		3.2	1.6	0.6							サヌカイト製、検出面から2 cm掘り下げて出土、重量 2.6g
198	石鏃	第9a層		(3.7)	1.8	0.8						鏃身部先端折損	重量 3.8g
199	石鏃	6号墓 墳丘		(4.7)	2.5	0.8		90%					サヌカイト製、成形が粗雑、 重量 3.8 g
200	石鏃	137・138 取上周辺 6号墓		(6.7)	1.5	0.6						茎部折損	重量 4.7g
201	石鏃	135周溝		(7.3)	2.4	1.0							サヌカイト製、重量 17.5g
202	搔器	74取上 6号墓		6.0	2.1	0.7							サヌカイト製、重量 8.5g
203	石錐	135周溝		(4.0)	2.3	0.7						錐部折損	重量 6.9g、トレンチ掘削時出 土
204	楔形石器	40土坑		3.8	2.8	1.1							サヌカイト製、重量 12.1g、 石剣・石鏃の可能性あり
205	楔形石器	98溝		2.7	3.3	1.0							重量 10.7g
206	石核	100溝上層		11.3	11.4	3.2							サヌカイト製、重量 471.4g
207	14 円礫	206 埋葬施設		1.3	0.5~ 0.8								重量 0.7g
208	14 円礫	6号墓 墳丘盛土		5.1	4.9	1.6						表面に凹みあり	重量 62.7g
209	14 石鋸	109取上 6号墓		(3.0)	(2.3)	(0.5)							片岩製、重量 5.4g
210	台石	158取上 6号墓		13.5	3.2	4.0						表面に筋状の使用痕あり	重量 325.8g
211	14 叩石	100溝		(7.1)	(9.0)	5.5						表面と側面に敲打痕あり	重量 440g
212	磨石	第13-1a層 の低位		8.3	12.2	5.5						表面が平滑	重量 865g
213	14 石庖丁	第13-1a層 の細分		(5.7)	(6.0)	0.6						刃部に使用時の擦過痕あり	重量 30.9g、 調査時 13-1-2a層として取上
214	14 石庖丁	100溝内		(4.2)	(8.0)	0.7						刃部に使用時の擦過痕あり	重量 34.6g
215	弥生土器 高杯	162溝		底径 (9.2)	(7.9)		5YR5/4 にぶい赤 褐	40%	30%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・穿孔・脚端 部に刻目 内：ナデ	
216	弥生土器 広口壺	481取上① 7号墓	344周溝、439 取上③④⑥、 451取上②、 481取上③	20.7	41.0		7.5YR4/3 褐	30%	95%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・ナデ・垂下 口縁の裏側に円形浮文、 底面ナデで焼成前に圧着 して潰れる 内：板ナデないしハケのちナ デ・指押えのちナデ	
217	弥生土器 広口壺	466取上 7号墓		(20.4)	(38.5)		2.5Y4/2 明灰黄	30%	30%	生駒 西麓産	良	外：ナデ・ヘラミガキ・ハケ、 底面摩滅 内：板ナデ・ハケ	
218	弥生土器 広口壺	439取上⑥ 7号墓	344周溝、439 取上③⑦⑧	(16.4)	30.5		2.5Y5/2 暗灰黄	80%		生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・ナデ、底面 ナデ 内：板ナデのちナデ・ヘラミ ガキか	
219	弥生土器 広口壺	344周溝		14.1	(19.1)		7.5YR4/2 灰褐	70%	100%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ 内：ナデ	
220	弥生土器 広口壺	481取上② 7号墓		18.2	(14.2)		2.5Y6/2 灰黄	30%	40%	生駒 西麓産	良	外：竹管文・ヘラミガキ 内：ナデ・指押えのちナデ	2区大県・山ノ井東部墓域では 弥生後期初頭で竹管文を施し たものはこの遺物のみ
221	弥生土器 広口壺	344周溝		(23.4)	(12.3)		2.5Y5/2 暗灰黄	10%	80%	生駒 西麓産	良	外・内：ナデ	
222	弥生土器 広口壺	451取上③ 7号墓		(17.0)	(12.2)		2.5Y7/2 灰黄	10%	20%	生駒 西麓産	良	外：ハケのちヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ナデ	摂津系
223	弥生土器 広口壺	344周溝		(17.8)	(8.5)		10YR4/2 灰黄褐	5%	25%	生駒 西麓産	良	外：斜線状の文様(爪痕か) 内：ナデ	赤彩あり、西部瀬戸内系の影 響を受けたものか
224	弥生土器 壺	439取上③ 7号墓	344周溝、 439取上⑤	底径6.8	(24.7)		10YR5/2 灰黄褐	30%		生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ、底面焼成前 に圧着で潰れる 内：ナデ	外面煤付着
225	弥生土器 壺	439取上④ 7号墓		底径6.6	(10.9)		10Y7/2 灰白	30%	100%	生駒 西麓産	良	外・内：ヘラミガキ、底面摩 滅	
226	弥生土器 広口壺	439取上⑧ 7号墓		6.0	(5.2)		7.5YR4/2 灰褐	20%		生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ 内：ナデ	
227	弥生土器 甕	462取上② 7号墓	462取上③	底径6.9	(13.8)		5YR5/4 にぶい赤 褐	20%		生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・底部近くは ケズリ、底面平滑にナデ 内：ハケ	外面煤付着、底面のナデはヘ ラミガキに近い
228	13 弥生土器 直口壺	451取上⑤ 7号墓	439取上②、 451取上④	(12.2)	(15.0)		5YR6/6 橙	50%	40%	生駒 西麓産	不良	外：ハケ(細)のち縦方向の ハケ(粗・文様として施 す)、底面摩滅 内：指押えのちナデ・ナデ	摂津系
229	13 弥生土器 無頸壺	481取上 7号墓		(6.6)	6.2		10YR4/2 灰黄褐	40%	50%	生駒 西麓産	良	外・内：ヘラミガキ・ナデ、 外底面ナデ	外面煤付着、半個体分
230	弥生土器 広口壺	344周溝			(1.8)		10YR2/1 黒	5%以下		生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・櫛形文 内：ヘラミガキ	344周溝内から櫛形文土器はこ の一点のみ、体部屈曲部
231	13 弥生土器 高杯	439取上① 7号墓	344周溝内	(28.8)	24.9		10YR3/2 黒褐	60%	60%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ナデ・板ナ デ	脚部穿孔は貫通していないも のあり
232	13 弥生土器 高杯	471取上① 7号墓	471取上②	(24.2)	21.3		7.5YR5/3 にぶい 褐	70%	50%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ 内：工具を用いたナデ・板ナ デ	脚部穿孔あり
233	弥生土器 高杯	462取上 7号墓		23.9	6.5		2.5Y6/2 灰黄		30%	生駒 西麓産	良	外・内：ヘラミガキ	234と同一個体の可能性あり
234	弥生土器 高杯	344周溝		底径 (10.2)	(9.4)		10YR5/2 灰黄褐	20%	30%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・ナデ 内：ナデ	233と同一個体の可能性あり

報告 図版	種類・ 器形	遺構・ 地層	接合・ 同一個体	口径・ 長cm	器高・ 幅cm	厚cm	外色調	残存率 (全体)	残存率 (口・底)	生駒 西麓産	焼成	調整	備考
235	弥生土器 高杯	471取上② 344周溝 7号墓		(27.4)	(4.9)		2.5YR3/3 暗オリ ー褐	20%	80%	生駒 西麓産	良	外・内：ヘラミガキ	外面に赤彩あり
236	弥生土器 高杯	372取上 7号墓	448土坑、404 溝、449溝、 407落ち込 み、437墳丘、 451取上	底径 (11.6)	(19.4)		10YR5/2 灰黄褐	40%	10%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ 内：ナデ	杯部内面は平滑
237	13 弥生土器 台付鉢	439取上③ ④7号墓	12a層	(18.4)	(8.7)		5YR5/2 灰褐	40%	50%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	把手に刺突文あり
238	弥生土器 台付鉢	439取上 ④⑤⑥⑦ 7号墓		底径 (10.6)	(13.2)		2.5Y4/1 黄灰	30%	60%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・ハケ 内：ナデ・指押え・ハケ	
239	弥生土器 甕	97土坑①	97土坑③	(33.0)	(8.4)		5YR4/6 赤褐	10%	30%		良	外：ヘラ描き沈線・列点文・ 口縁端部に刻目 内：ナデ	
240	弥生土器 甕	97土坑③			(1.3)		7.5YR3/1 黒褐		5%以下		良	外：口縁端部に刻目	
241	弥生土器 甕	97土坑		底径 (8.2)	(2.3)		10YR6/2 灰黄褐		30%		良	外・内面：摩滅	
242	弥生土器 甕	97土坑①	97土坑②	底径 (10.0)	(5.0)		7.5YR4/2 灰褐	5% 以下	40%		良	内：ナデ	
243	14 縄文土器 深鉢	97土坑②		(34.2)	(27.2)		10YR3/1 黒褐	10%	15%		良	外：貝殻条痕・擦過痕・突帯 に小D字刻目 内：貝殻条痕	
244	縄文土器 深鉢	97土坑			(6.2)		5YR4/2 灰褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：ナデ・突帯に小O字刻目 内：ナデ	
245	縄文土器 深鉢	97土坑②			(3.2)		7.5YR6/3 にぶい 褐		5%以下		良	外：条痕・突帯に小D字刻目 内：ナデ	
246	縄文土器 深鉢	97土坑					10YR6/2 灰黄褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：ナデ・突帯は無刻目 内：ナデ	
247	縄文土器 深鉢	97土坑③		底径 (7.7)	(3.4)		10YR5/2 灰黄褐		45%		良	外：摩滅 内：平滑・ナデ	胎土は弥生土器甕に似る
248		凹石	97土坑⑤	(9.8)	11.7	8.4						表・裏面と側面計4面凹む	重量 1.30g
249	14 弥生土器 甕	222土坑		(21.2)	(13.8)		10R5/6 赤	20%	50%		良	外：ヘラ描き沈線2～3条・ ナデ・ヘラミガキ・口縁 端部に刻目 内：ナデ	
250	14 縄文土器 浅鉢	164土坑		15.2	7.6		2.5Y3/1 黒褐	100%	100%	生駒 西麓産	良	外：口縁部ケズリのち横方向 ナデ・ヘラミガキ・底部 縦方向ケズリのちヘラミ ガキ・ナデ 内：ナデ・沈線	
251	14 石棒	171土坑		(10.6)	(4.9)	1.6							片岩製、重量 105.5g
252	弥生土器 甕	第13-2a層		(20.8)	(10.8)		7.5YR3/1 黒褐	10%	20%		良	外：ナデ・口縁端部に刻目 内：ナデ	外面コゲ付着
253	弥生土器 甕	第12a層			(5.6)		7.5YR7/4 にぶい 橙		5%以下		良	外：摩滅・無文 内：ナデ	
254	14 弥生土器 甕	第13-2a層			(7.1)		7.5YR3/1 黒褐		5%以下		良	外：ヘラ描き沈線2条・口縁端 部に刻目あり、底面ヘラ ミガキ 内：ナデ	
255	弥生土器 甕	第13-2a層			(3.8)		7.5YR3/3 暗褐		5%以下		良	外：ヨコナデ・ヘラ描き沈線 3条	
256	弥生土器 甕	第13-2a層		(19.4)	(9.2)		7.5YR3/2 黒褐	10%	15%	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・ヘラ描き沈 線2条	口縁端部に刻目あり
257	弥生土器 甕	第13-1a層 下位・ 第13-2a層			(4.5)		10YR3/2 黒褐		5%以下		良	外：ヘラ描き沈線4条以上	
258	弥生土器 鉢	第13-1a層			(3.8)		7.5YR3/1 黒褐		5%以下		良	外：ヘラ描き沈線2条	
259	弥生土器 広口壺	第13-1a層 下位・ 第13-2a層			(3.6)		10YR7/2 にぶい 黄橙		5%以下		良	外：段+ヘラ描き沈線3条以 上	
260	弥生土器 壺	第10a層			(2.9)		10YR5/1 褐灰		5%以下		良	外：ヘラ描き沈線3条以上	
261	弥生土器 壺	170谷地形			(3.3)		7.5YR6/3 にぶい 褐		5%以下		良	外：ヘラミガキ・貼付突帯に 刻目 内：ヘラミガキ	
262	弥生土器 甕	438土坑		底径 13.2	(6.5)		10YR5/3 にぶい 黄褐		25%	生駒 西麓産	良	外・内：ナデ	
263		石鏃	第13-2a層	(3.5)	1.7	0.6							サヌカイト製、重量 3.8g
264	14 石甕丁未 製品	第13-2a層		(6.9)	(13.4)	1.7							蛇紋岩かアブライト、 重量 155.3g
265	縄文土器 深鉢	第7a層～ 第10a層 南側法面	100溝		(2.7)		7.5YR4/3 褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：突帯に大O字刻目 内：ナデか	口縁端部に丸みを帯びた面あり
266	縄文土器 深鉢	第11a層			(1.7)		7.5YR5/2 灰褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：突帯に大O字刻目	
267	縄文土器 深鉢	第12a層			(2.5)		5YR5/2 灰褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：ナデ・突帯に大D字刻目	
268	縄文土器 深鉢	74取上 周辺 6号墓			(5.7)		10YR6/3 にぶい 黄橙	3% 以下	3%以下	生駒 西麓産	良	外：突帯に大D字刻目 内：ナデ	
269	縄文土器 深鉢	170谷地形			(5.0)		7.5YR2/1 黒		5%以下	生駒 西麓産	良	外：擦過痕・突帯に大D字刻 目 内：摩滅	
270	縄文土器 深鉢	168土坑			(10.7)		7.5YR4/2 灰褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：条痕・突帯は無刻目	
271	縄文土器 深鉢	第13-2a層			(9.2)		10YR5/3 にぶい 黄褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：ナデ・突帯に大D字刻目 内：貝殻条痕	
272	縄文土器 深鉢	第13-2a層			(8.6)		7.5YR4/2 灰褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：ナデ・突帯に大D字刻目 内：ナデ	

報告 図版	種類・ 器形	遺構・ 地層	接合・ 同一個体	口径・ 長cm	器高・ 幅cm	厚cm	外色調	残存率 (全体)	残存率 (口・底)	生駒 西麓産	焼成	調整	備考
273	縄文土器 深鉢	第13-2a層			(3.9)		7.5YR4/2 灰褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：擦過痕か・突帯の小D字 刻目 内：ナデ	
274	縄文土器 深鉢	100溝			(4.0)		7.5YR4/2 灰褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：摩滅・突帯に小D字刻目・ 列点状の工具痕 内：指押え・ナデ	
275	縄文土器 深鉢	第13-2a層			(4.6)		10YR4/2 灰黄褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：ナデ・突帯に小O刻目 内：ナデ	
276	縄文土器 深鉢	170谷地形			(9.1)		10YR5/2 灰黄褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：ヘラミガキ・突帯に 小O字刻目 内：ナデ	
277	縄文土器 深鉢	第13-2a層			(5.5)		2.5Y3/1 黒褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外・内：摩滅・突帯に横長の O字刻目	生駒西麓産か
278	縄文土器 深鉢	170谷地形			(3.8)		7.5YR2/2 黒褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：口縁端部に線状刻目・突 帯に小O字刻目	
279	縄文土器 深鉢	196取上 6号墓			(4.0)		10YR5/2 灰黄褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外・内：ナデ、突帯は無刻目 か小O字刻目	
280	14 縄文土器 深鉢	215土坑			(6.4)		7.5YR5/4 にぶい 褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：内：摩滅・突帯に小O字 刻目	
281	縄文土器 深鉢	98溝上層			(2.2)		7.5YR3/3 暗褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：ナデ・突帯は無刻目 内：ナデ	
282	縄文土器 深鉢	448土坑			(2.0)		10YR5/2 灰黄褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外・内：ナデ	異形の突帯文土器
283	縄文土器 壺か	第13-2a面 直上			(2.1)		5YR4/3 にぶい赤 褐		5%以下	生駒 西麓産	良	外：突帯に線状刻目 内：ナデ	
284	縄文土器 壺	135周溝 下層		(8.6)	(2.0)		5YR5/3 にぶい赤 褐		10%	生駒 西麓産	良	外・内：ナデ・突帯に小D字 刻目	
285	縄文土器 浅鉢	425溝底面		12.2	(4.9)		2.5Y4/2 暗灰黄	30%	45%	生駒 西麓産	良	外・内：ナデ	
286	縄文土器 浅鉢	98溝			(4.0)		7.5YR5/2 灰褐		50%	生駒 西麓産	良	外・内：ヘラミガキ	
287	縄文土器 深鉢	162溝		底径 5.3	(5.5)		10YR4/3 にぶい 黄褐			生駒 西麓産	良	外：条痕 内：摩滅	
288	縄文土器 深鉢	第14b層		底径 5.7	(3.6)		2.5Y5/2 暗灰黄			生駒 西麓産	良	外：巻貝条痕・ナデ 内：摩滅	
289	縄文土器 深鉢	98溝		底径 5.2	(3.7)		7.5YR5/6 明褐			生駒 西麓産	良	外：条痕 内：ナデ	
290	縄文土器 深鉢	第13-2a層		底径 (5.6)	(4.3)		5YR4/4 にぶい赤 褐		30%	生駒 西麓産	良	外・内：摩滅	底部に穿孔あり
291	縄文土器 深鉢	第14b層		(32.0)	(7.4)		7.5YR3/2 黒褐	10%以下	10%	生駒 西麓産	良	外：ヘラケズリのち貝殻条痕 か 内：ナデ	
292	縄文土器 深鉢	344周溝		(32.2)	(7.5)		7.5YR4/3 褐	5%	10%	生駒 西麓産	良	外：貝殻条痕 内：ナデ	
293	14 土偶	170谷地形	大泉 (その10) 130土坑	(13.2)	8.3	1.8	7.5YR5/3 にぶい 褐			生駒 西麓産	良	表・裏：顔面は鼻梁一部剥落・ 顔面は砂粒を沈め平 滑に仕上げられてい る、裏面は指ナデ痕 跡と筋状の痕跡あり	170 谷地形掘削土から出土、 頭部上端は欠損する
294	14 土偶	第12a層		5.3	(2.5)	2.0	7.5YR2/1 黒			生駒 西麓産	良	表・裏：ナデ	
295	台石	第13-2a層		16.1	(17.6)	19.4							重量 3.95g
296	石鏃	第14b面		3.0	2.1	0.3							サヌカイト製、重量 1.6g

※遺構・地層の項目にある「取上」は調査時の遺物取上の単位のこと、6号墓は図36～38、7号墓は図61に表記している。

写真図版



2区調査地遠景（西から）



1.1区6号墓遺物出土状況1（南東から）



2.1区6号墓遺物出土状況2（北西から）



1.1区6号墓遺物出土状況3（西から）



2.1区6号墓遺物出土状況4（南から）



4.1区6号墓周溝断面（南西から）



3.1区6号墓遺物出土状況5（南から）



5.1区6号墓周溝断面（南東から）



1.2区7号墓検出状況（東から）



2.2区7号墓土器出土状況1（南から）



1. 2区7号墓土器出土状況2 (南から)



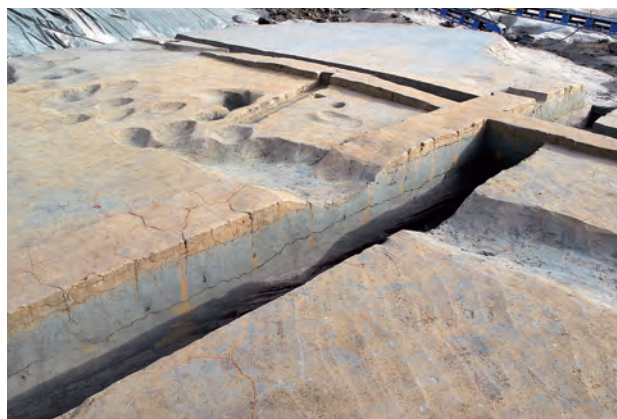
2. 2区7号墓土器出土状況3 (東から)



4. 2区7号墓344周溝断面 (東から)



3. 2区7号墓土器出土状況4 (南東から)



5. 2区7号墓墳丘直下基盤層断面 (南西から)



1.1区第4 a面全景（東から）



5.1区40土坑（東から）



2.1区第5 a面全景（東から）



6.1区40土坑断面（南東から）



3.1区第6 a面坪境周辺（北西から）



7.1区第8 a面46畦畔検出状況（北から）



4.1区第7 a面坪境周辺（南から）



8.1区第9 a面坪境周辺（南から）

図版2 遺構



1.1区第10 a面坪境周辺 (南から)



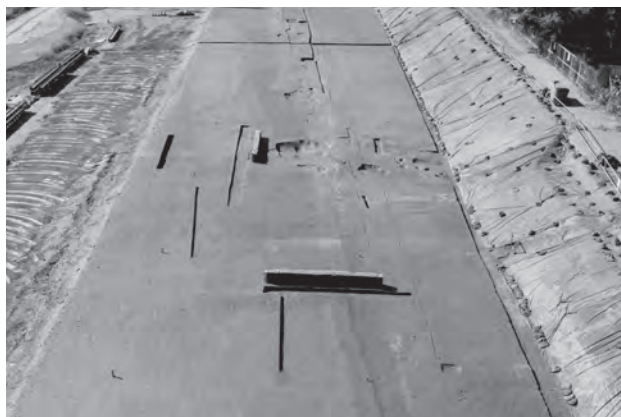
5.2区359耕作痕完掘状況 (北東から)



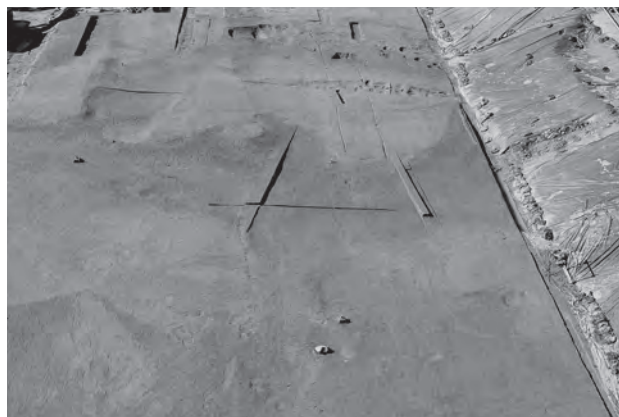
2.1区第11 a面検出状況 (北西から)



6.1区島1・2検出状況 (北から)



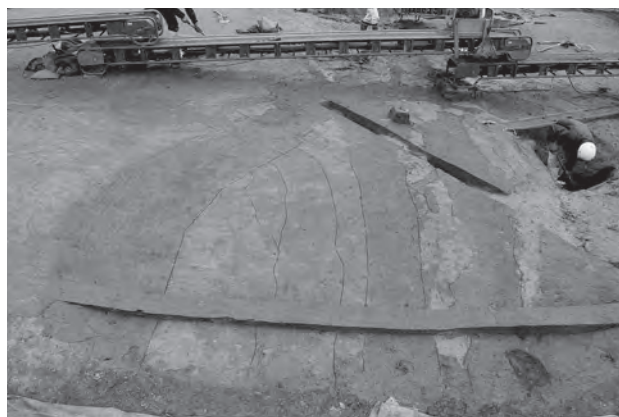
3.2区第12 a面全景 (東から)



7.2区第13-2 a面検出状況 (東から)



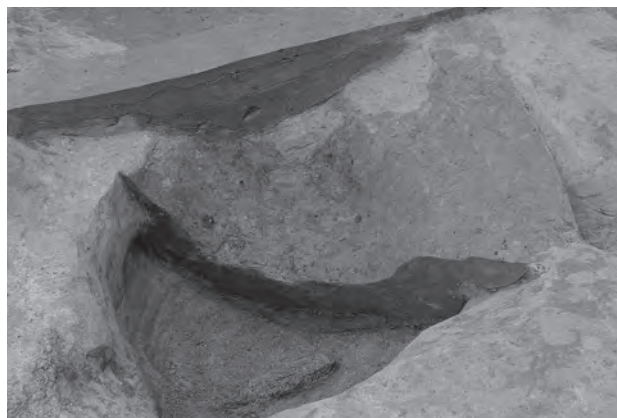
4.2区島4検出状況 (南から)



8.2区425～429溝検出状況 (南から)



1. 2区 448 土坑断面（北から）



3. 2区 421 土坑断面（南から）



2. 2区 437 土坑断面（南から）



4. 2区 404 溝遺物出土状況（南東から）



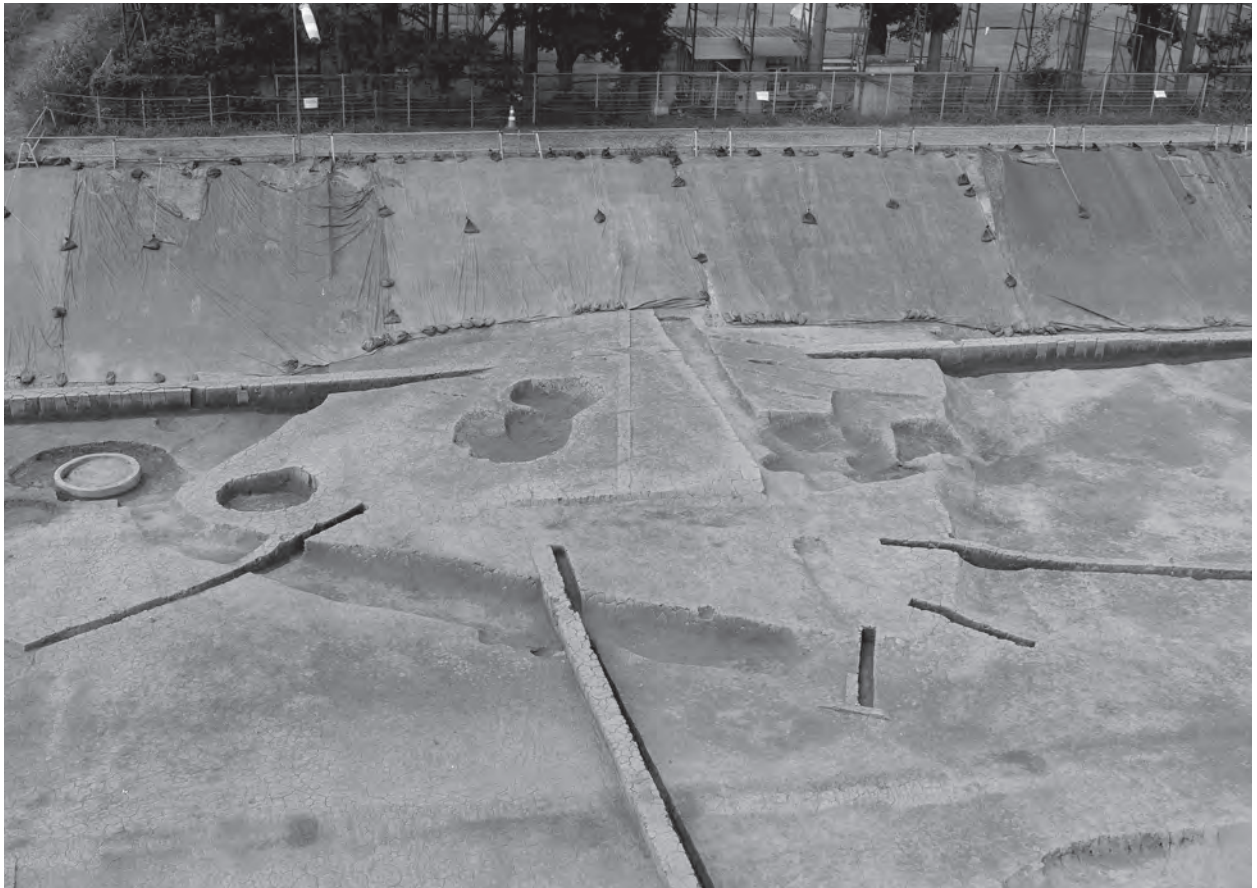
5. 2区 425 溝他検出状況（南西から）



1. 1区6号墓検出状況（北東から）



2. 1区6号墓周溝断面（南東から）



1.1区6号墓135溝完掘状況(南から)

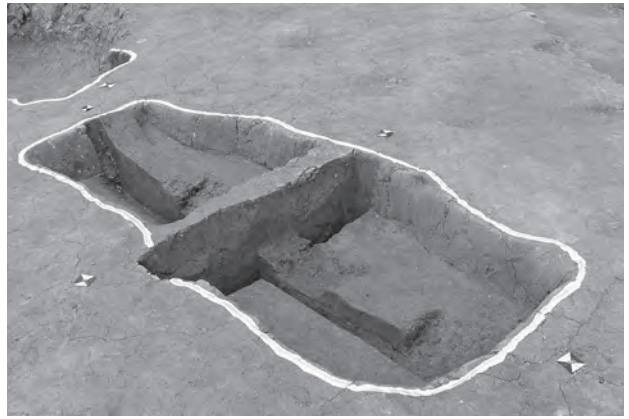


2.1区6号墓埋葬施設検出状況(南西から)

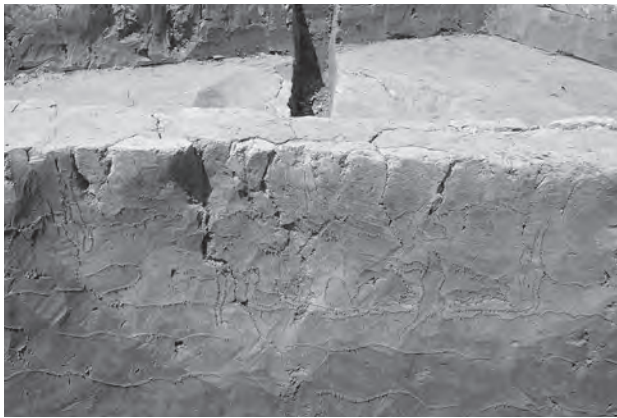
図版6 遺構



1.1区 202 埋葬施設断面（南東から）



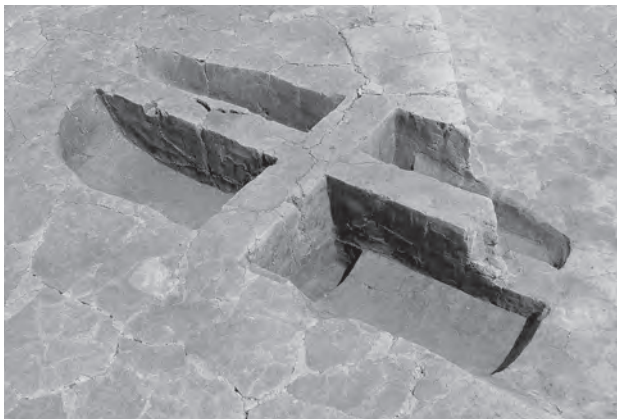
5.1区 204 埋葬施設断面（南から）



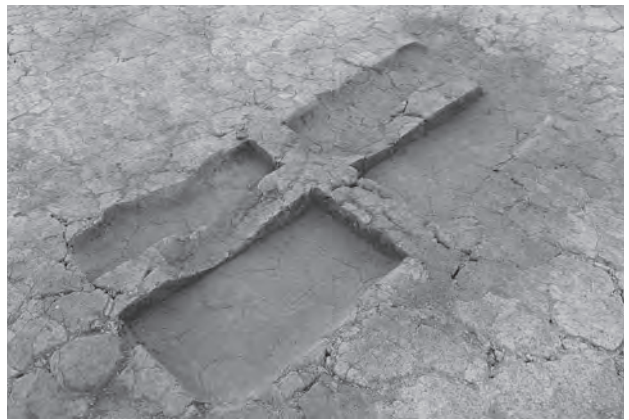
2.1区 203 埋葬施設断面（南東から）



6.1区 205 埋葬施設断面（北西から）



3.1区 203 埋葬施設断面（南から）



7.1区 206 埋葬施設断面（南東から）



4.1区 204 埋葬施設断面（南東から）



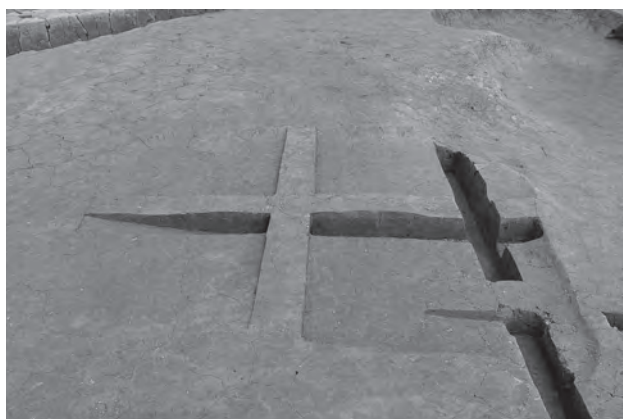
8.1区 207 埋葬施設断面（南東から）



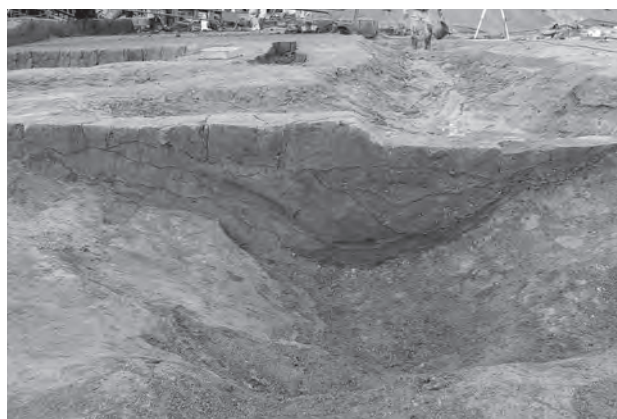
1.1区 211 埋葬施設断面（北西から）



5.1区 6号墓墳丘直下基盤層断面（南西から）



2.1区 213 埋葬施設断面（北西から）



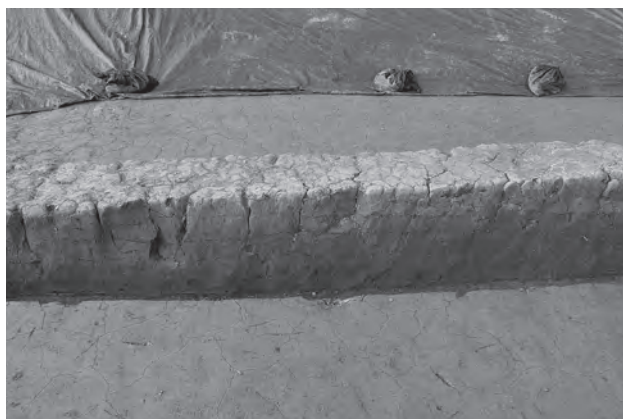
6. 162 溝断面（南西から）



3.1区 6号墓土手状盛土検出状況（南東から）



7.1区 162 溝遺物出土状況（南東から）



4.1区 6号墓土手状盛土断面（南から）



8.1区 162 溝完掘状況（南東から）



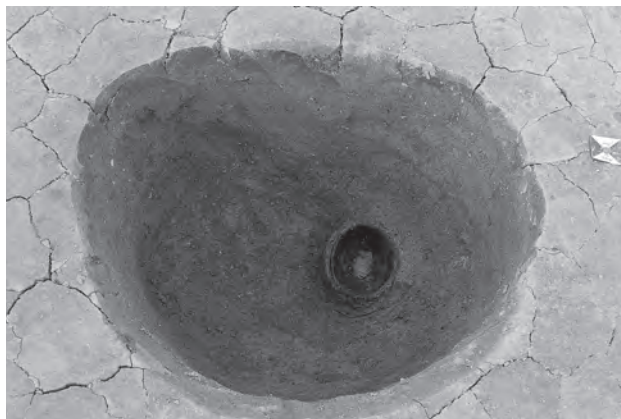
1.1区 170 谷地形検出状況（北から）



2.1区 97 土坑遺物出土状況（東から）



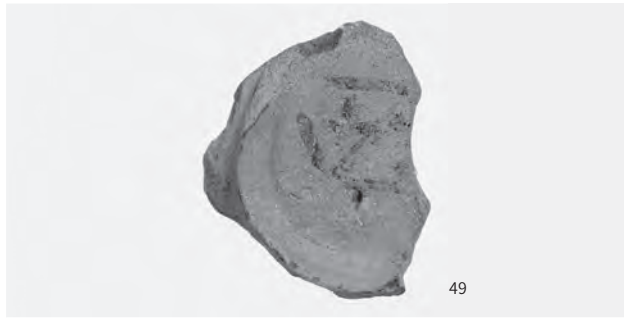
4.1区 222 土坑遺物出土状況（東から）



3.1区 164 土坑遺物出土状況（南から）

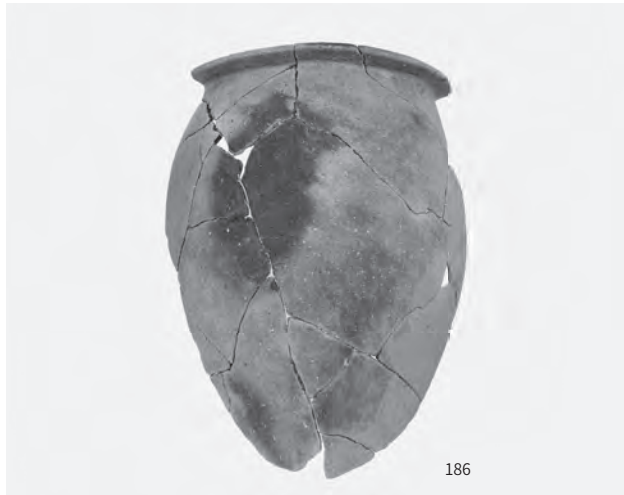


5.1区 171 土坑遺物出土状況（南から）

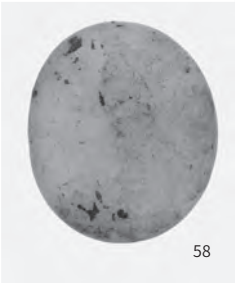
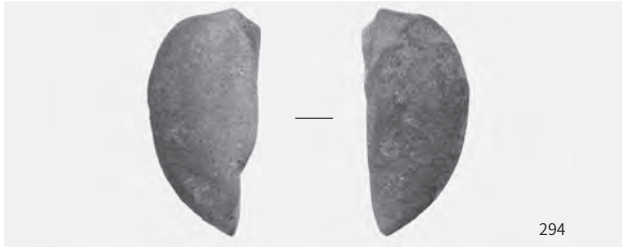












報告書抄録

ふりがな	おおがたぐんじょうりいせき 11・やまのいいせき 5						
書名	大県郡条里遺跡 11・山ノ井遺跡 5						
副書名	寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第 334 集						
編著者名	後川恵太郎（編）						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590 - 0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL072 - 299 - 8791						
発行年月日	2024 年（令和 6 年）9 月 30 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
おおがたぐんじょうり 大県郡条里 いせき 遺跡・ やまのいいせき 山ノ井遺跡	かしわらしほうぜんじ 柏原市法善寺 4 丁目地内	27221	69・86	北緯 34° 35' 56" 東経 135° 37' 42"	2023.01.04 ～ 2023.12.28	3,882 m ²	寝屋川水系改良事業 （一級河川恩智川 法善寺多目的遊水地）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
大県郡条里 遺跡・ 山ノ井遺跡	集落	古代～中世	畦畔・溝・土坑	土師器・須恵器・陶磁器・瓦・金属製品		坪境畦畔を検出した。	
	生産	古墳時代前期～後期	溝・土坑	土師器・須恵器		古墳時代前期の土師器 には、搬入品（東海系、 中・四国系）が出土し た。	
	集落	弥生時代中期～後期	方形周溝墓・溝	弥生土器・石器・石製品		方形周溝墓は 2 基検 出。2 基の周溝から多 数の弥生土器が出土し た。	
	集落	縄文時代晩期～ 弥生時代前期	溝・土坑	縄文土器・弥生土器・土偶・石器・石製品		土偶は 2 点出土、石製 品は石棒が出土した。 土偶は大県（その 10） から出土したものと接 合した。	
要約	縄文時代晩期から中世の複合遺跡。弥生時代中期後葉の方形周溝墓（6号墓）は大形の墳丘で、埋葬施設を 8 基検出した。埋葬施設では、木棺及び歯牙は検出しなかった。周溝内から大量の弥生土器が出土した。弥生時代中期末から後期初頭の方形周溝墓（7号墓）は、後世の削平を受け墳丘は消失していたが、周溝内から大量の弥生土器が出土した。弥生時代中期末から後期初頭の過渡期の土器である。また、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構・遺物が多数確認された。土偶は谷地形から出土した頭部が 80 m 以上離れた土坑から出土した胴部と接合した。						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第 334 集

大県郡条里遺跡 11・山ノ井遺跡 5

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2024 年 9 月 30 日

編 集 公益財団法人 大阪府文化財センター

発 行 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

印刷・製本 株式会社 明新社
奈良市南京終町 3 丁目 464 番地